山田風太郎傑作大全16

旅人（たびにん）国定龍次

下

山田風太郎



廣済堂文庫

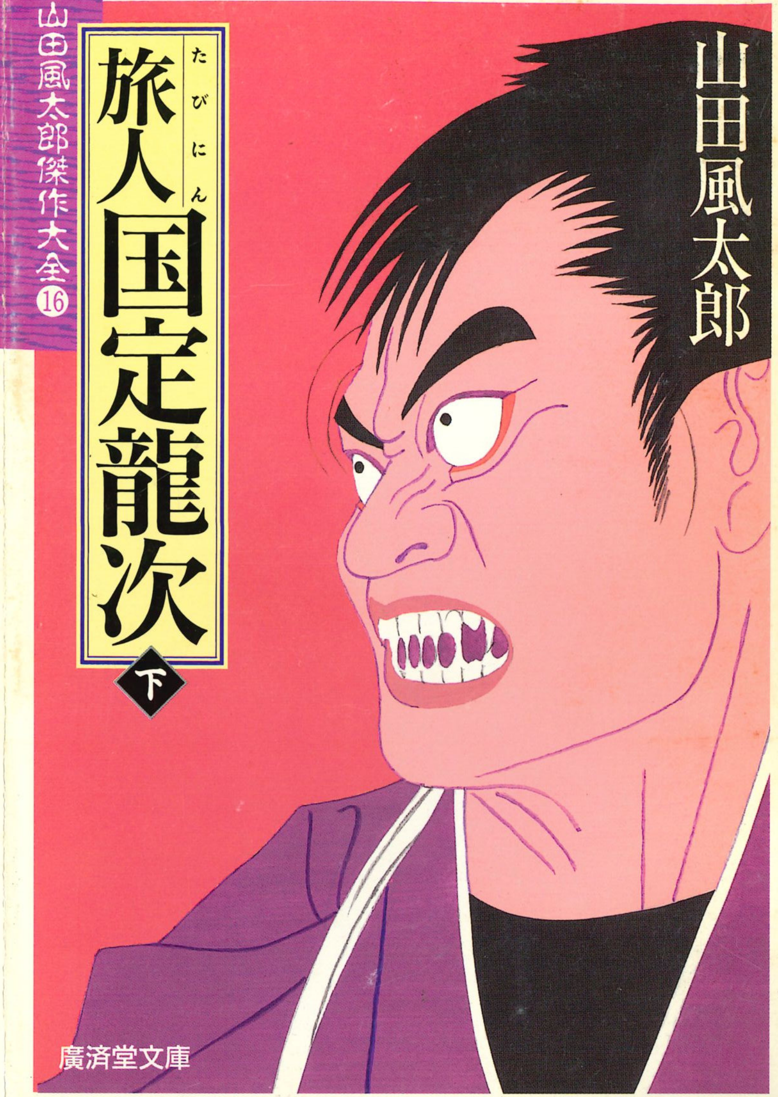
廣済堂文庫絶賛発売中！

カバーイラスト＝安里英晴
カバーデザイン＝原田幸生

山田風太郎傑作大全⑯

旅人（たびにん）国定龍次 ㊦

山田風太郎



廣済堂文庫

607
や7-16
667

山田風太郎 旅人（たびにん） 国定龍次㊦ 山田風太郎傑作大全⑯

廣済堂文庫

特選時代小説

ISBN4-331-60608-2
C0193 ¥667E
9784331606087
1920193006674
定価 本体667円＋税

勢州桑名の黒田屋一家の荒神山をめぐる縄張り争いの内紛に巻きこまれた龍次。秘薬マキスイを用いて蛇の大群をあやつる香具師赤蛙の凶兵衛と死闘を展開。一時生死の境を彷徨った龍次は、ヒゲ万に請われて京は伏見の薩摩屋敷へ。おりしも京は勤王佐幕の暗闘の真っただ中。ヒゲ万の頼みに応え、天朝の助っ人として任侠を貫こうとする龍次だが、その行動の果てに思いもよらぬ悲劇が……。長脇差小松五郎義兼危うし。

特選時代小説
廣済堂文庫

山田風太郎
やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「達磨峠の事件」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第2回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

旅人 国定龍次㊦
定価 本体667円＋税
平成9年10月1日 初 版
平成10年10月30日 2 刷
著 者 山田風太郎
発行所 廣済堂出版

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 16

旅人 国定龍次(下)

山田風太郎

廣済堂文庫

特選
時代小説

山田風太郎

旅人 国定龍次(下)

廣済堂文庫

特選
時代小説

2230①

廣済堂文庫注文カード

書店・取次店

部数

700

<607>や—7—16

旅人（たびにん）国定龍次（下）

山田風太郎傑作大全 16

廣済堂出版

山田風太郎

定価 本体667円＋税

ISBN4-331-60608-2 C0193 ¥667E

特選時代小説

廣済堂文庫売上カード

廣済堂文庫	山田風太郎

山田風太郎傑作大全 16

旅人（たびにん）国定龍次（下）

607 や—7—16

☆本カード一〇〇枚を一口として貴店様印を押し、小社までお送り下さい。貴店様の売上資料にさせて頂きます。

廣済堂出版
〒105 東京都港区芝3-4-12
営業 03(5445)1202
関西支社 06(444)5911

ISBN4-331-60608-2 C0193 ¥667E

山田風太郎傑作大全

好評発売中!!

妖異金瓶梅
十三角関係
修羅維新牢
誰にもできる殺人
売色使徒行伝
天国荘奇譚
叛旗兵
夜よりほかに聴くものもなし
剣鬼と遊女
青春探偵団
切腹禁止令
赤い蠟人形
いだ天百里
長脇差枯野抄

廣済堂文庫

特選時代小説

山田風太郎

手甲、脚絆に三度笠、腰に長脇差ぶちこんで
渡世人修行に旅立つ遊俠国定龍次の晴れ姿!!

特選時代小説　廣済堂文庫

山田風太郎　旅人　国定龍次㊦

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 16

旅人 国定龍次(下)

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

旅人（たびにん） 国定龍次（くにさだりゅうじ）

(下)

駿・遠・参（承前）

十四

次郎長一家は、また山道をたどって、石松の故郷森を経て掛川へ、それから東海道を東へ、清水港に帰る。
別れるとき、
「何かあったら、清水へ急使をたてろ」
と、次郎長は仁吉にいった。
仁吉と長吉とお勢は、四、五人の乾分を連れ、龍次とヒゲ万先生を伴って、浜松に出る道をゆく。そこから西へ、吉良に帰るのだ。
途中、一団からちょっとおくれて、龍次と二人だけになったとき、ヒゲ万先生がいった。
「いや、毎度の感想でごわすが、渡世人の世界も虚々実々でごわすな」
「な、何が？」
「神戸の長吉の親分は、清水一家が乗り出してきて、荒神山を乗っとられるのを警戒しちょるらしか」

「ふうん」
「片や、清水一家のほうは――特に軍師格の大政どんなどは、いまや東海一となった清水一家の勢力をこんどは伊勢にひろげようと、虎視たんたんとうかがっちょるようで」
「へへえ」
「それを、神戸の親分はこわがっちょる。のどから手の出るほど助ッ人が欲しいにかかわらず、でごわすな。一方、吉良の仁吉どんに対しちゃ、荒神山をとり返したらお勢さんと祝言をあげる、とかいっちょったが、ひょっとすると、祝言をエサに荒神山を釣りあげるように、仁吉どんの尻をたたいてるのかも知れもさんぞ」
「ふはーっ」
「たんげいすべからざるのは次郎長親分で、決してムリをしようとはせん。長坂橋で十万の敵をにらみすくめた三国志の張飛のごとき一面を持つ一方、ひくときはひく――ありゃ、みかけによらず、老獪なひとでごわすな」
「ははん」
「思い出す、富士の裾野でおいと刀を合わせたとき、相手の刀の手応えが柔らかけりゃ逃げるといいもしたが、あのムリをせん剣法を、やくざ同士のかけひきにも使っちょるらしか。これも次郎長どんが東海一の大親分になったゆえんでごわしょうな。龍次親分、よく見て、将来の参考になさるがよか」
「そ、そんなことは、いっさいがっさいこっちとは関係ねえ。おれはただ助ッ人にゆくんだ」

龍次の頬は活気の血に燃えている。

「先生、そ、その蛇使いの香具師（やし）と、あの祐天仙之助がつるんで歩いてたというと——祐天も敵の中にいるね」

「あ、そげなことになりもすな」

「な、なんだか、いよいよ面白くなりそうだ」

「頼んだおひとが、あげな美人でごわすしな、あははは」

「そうよ、こ、こりゃ一肌ぬがずにゃいられねえ」

「そげなこと、おりん坊にきかれたら、ぶじではすみもさんぞ」

——おりんとは、甲州の猿屋楼以来会っていない。あのときおりんは、神官の娘お雪をみごとにつれ出してくれたが、そのあとみずから姿を消してしまったという——。

龍次は首をすくめて、

「あいつ、いまごろ、ど、どこにいるのかな？」

「ひょっとしたら、秋葉山へもきてたかも知れもさんぞ」

ヒゲ万の声は冗談まじりのものであったが、何気なくぐるりと見まわした龍次が、

「あ！」

と、驚きの声をあげた。

「先生、いま通ってきた村の、ほれ、あの水車小屋の向こうに——ちらっと見えてかくれちまったが、あ、ありゃたしかにおりんだったようですぜ！」

「そりゃ」

ヒゲ万先生も驚いた顔で、二、三歩、足をかえした。

「ま、待っておくんなさい、いま会ってもどうしようもねえ」

龍次はとめた。

「それよりこっちは、これから吉良の助ッ人だい」

「吉良の付け人とは、あんまりエンギがよかごわせんな」

と、ヒゲ万先生は、足をもとにもどしながら、大笑した。

十五

吉良の付け人とはエンギでもない——と、ヒゲ万先生が笑ったときは、ただ言葉の上の連想からであったが、三河の吉良の庄にいってみて、そこが元禄の昔、ほんとうに吉良上野介の所領であったときいて、二人はめんくらった。

それどころか、土地の人々は、いまなお頑固に、あの事件は浅野のほうが悪い、吉良上野介さまは悪くないと信じて、ここでは旅芝居でも忠臣蔵はやらせないという。——

何にしても、吉良は、小さいが美しい港の村であった。

ここで龍次たちは年を越した。

「先生、ヤットー、お強いんだってねえ」

ここにきてからまもなく、仁吉がいった。

「大政のあにいからききやしたよ、どうか乾分に稽古をつけてやっておくんなせえ」
その乾分は、まだ十人くらいしかいないらしかった。
稽古をつけてやってくれ、といったが、その乾分たちはほとんど家にいない。みんな外を出歩いている。
仁吉自身がそうだ。
彼らは、新しい助ッ人を求めて、近郷をまわっているのであった。
伊勢の穴太の徳次郎からはその後何もいってこないが、それでこちらは太平楽をきめこんではいられない。ことしの四月八日は荒神山の祭りだ。それまでに荒神山はとり返さなければならない。
それには、なぐりこみのほかはない。
で、仁吉たちは味方を狩り集めるのに大わらわになっているのであった。だから、むろん龍次たちも簡単にここをおさらばするわけにはゆかない。
しかし、いまのところ、ほかにやることがないので、二人は毎日のように、海に釣りに出かける。
このあたりは黒鯛の名所だそうだが、鯛はおろかイワシもめったにかからない。どうも二人は釣りに不向きらしい。
「ひねもすのたりのたりかな、の季節になりもしたな」
と、磯から竿を出したヒゲ万先生が、海のかなたを眺めていう。

渥美半島と知多半島にかこまれた大きな入り江は、碧い油をながしたようで、ほんとうに、のたりのたりという音をたてていた。
海がぬるみはじめたのもむりはない。三月の末だ。
「こげなのどかなところに住んで、わざわざなぐりこみの支度に血まなこになっちょるとは、正気の沙汰じゃなかようでごわすな」
「渡世人の世界は、け、景色たァ無縁だよ」
龍次も釣り糸をたれたままで、
「それでもこのごろ、よ、四人も御浪人を連れてきたしさ。ほかに、いざ出陣となったら近くからかけつけて助ッ人になってくれるのが、十人くれえ出来たらしいぜ」
「ふむ、あの浪人衆、街道から拾ってきたっちゅう話でごわすが、それにしても拾い方がうまか。――あの中で、少なくとも二人はなかなか出来もすぞ」
「そうですか、そ、そりゃよかった」
「じゃが、ひとの縄張りをとり返してやるのに、仁吉どんも御苦労なことでごわすな」
「あはは、早くお勢さんと祝言をあげてえんだろ」
「いや、おいははじめ、長吉どんがお勢さんをエサに仁吉どんを釣ってると見ておりもしたが」
ヒゲ万も笑いながら、
「それもまちがいなかことと思いもすが、長吉どんもさることながら、あのお勢さん自身が、

荒神山をとり戻すのにいっしょけんめいでごわすな。それに仁吉どんが煽（あお）られちょるらしか」

「ありゃ、みかけによらず気丈な女だな」

と、龍次はいった。

「しかし桑名の黒田屋勇蔵親分の娘として、こ、荒神山をとり返さずにゃおかねえと考えるのも当然さ」

「とり返して、めでたく夫婦になっても、仁吉どんはきっと尻にしかれもすぞ」

「その心ぺえは、おれンとこと、おんなじだなあ。……」

うっかりつぶやいて、ヒゲ万先生が大声で笑い出したので、大あわてで、

「しかし、に、仁吉あにいは、ありゃ気のいいひとですぜ。と、とにかくこっちも、荒神山のとり返しにゃ、ち、力になってやらなけりゃならねえ」

と、いって龍次は竿を大きくあげた。

何か、かかったと思ったのだが、波の上にはねた糸の先にはエサもなかった。

「あはは、だめでござんすねえ」

と、うしろから、ふいに声がかかった。

驚いてふりかえると、頬かぶりしたやくざ風の若い男が一人立って、笑っていた。

「それじゃ、魚が食いついてくれるわけがありませんや。だいいち竿の持ちかたからして、なってねえ」

と、近づいてきて、

「ちょっと貸してみなせえ」

龍次の釣り竿をひったくって、海にさしのばした。

——と、煙草を一服のむかのまないかに、その竿はみごとな黒鯛を一匹、高だかと空中に躍らせていた。

その鯛を惜しげもなく海へ投げて、「それ、こうやって、こういう風に」と、その男は手に手をとって、龍次に竿のにぎりかたから教える。

「どれどれ、おいにも教えてくれ」

ヒゲ万先生も、身をのり出して指導を請う。

やがて、その通りにやって、まず龍次が、ついでヒゲ万先生が、それぞれりっぱな黒鯛を釣りあげて——あらためて感嘆の眼をその男に投げて、

「はてな、おはん、この近くのおひとじゃなかな」

と、はじめて気がついて、ヒゲ万先生がしげしげと相手の男を眺めた。三ヵ月以上もこの小さい港に暮らしていれば、それくらいのことはわかる。

龍次が小声できいた。

「吉良のあにいのとこに、す、助ッ人にきてくれたひとかい？」

「えへへ、まあ、そんなところで……ま、あとでお目にかかりやしょう」

と、男は笑って、そのままスタスタと村のほうへ帰っていった。

「何だか、へんなやつだな」

ヒゲ万先生が見送って、首をかしげてつぶやいた。

「ところで、先生」

と、龍次が竿をおいていった。

「助ッ人で思い出したが、ここんところしばらく刀をふりまわさねえんで、腕が、ナ、ナマクラになっちまったようで——さいわい、だれもいねえ、ここでひとつ、例の、け、稽古をつけてくれませんかね」

しばらくのち、龍次とヒゲ万先生は海辺で相対していた。例によって、龍次は小松五郎の長脇差(ながどす)、ヒゲ万は近くでひろった櫂(かい)の折れだ。

「そういえば、何やら虫が知らせる。龍次親分がその刀をふるうときが近づいているような気がしもす。おいをほんとに斬る気で——ええかっ」

海光を背に、龍次の影がおどり、ヒゲ万先生がなぎさによろめいたように見えた。

が、そのあとつんのめっていって、モンドリ打って砂に這ったのは、やっぱり龍次のほうであった。刀をほうり出し、片手で右腕をかかえてうめいている。

「や、打ったか」

片足、波に洗わせていたヒゲ万先生が、心配そうに近寄った。

「いや、すんでのことで、こっちがほんとにやられるところじゃった。手ごころなど加える余裕はなか。——ゆるして下され、親分」

「な、なに、何でもねえ」

龍次は元気よくはね起きたが、まだ打たれた右の肘(ひじ)の下をおさえたまま、

「畜生、なんどやってもだめだ！」

と、天をあおいで長嘆した。

ヒゲ万先生が、笑いながらなぐさめる。

「ま、おいに勝つ必要はごわすまいが」

「そ、そりゃ、まあ、そうだが」

やがて二人は、春風の中を、ぶらぶらと吉良の仁吉の家に帰る。

すると、仁吉の家は騒然としていた。

十六

「ど、どうしたんでござんすえ？」

と、龍次がきくと、仁吉は朱色に染まった顔で、

「とうとう、向こうからきやがった！」

と、いった。

「何が？」

「穴太徳(あのとく)からのケンカ状よ、宛名は神戸(かんべ)の長吉だが」

「虫の知らせが、あたりもしたな」

ヒゲ万先生が、龍次を横目で見ていった。

仁吉は手に白い書状を持っている。

部屋の隅っこに、神戸の長吉はお勢とならんで坐っていた。

長吉は胡瓜(きゅうり)みたいに長くて青い顔をしていたし、お勢も白蠟のような頬をして、じっとその書状のほうに眼をむけていた。

「そうか、やっぱり、きやがったか。——」

そのケンカ状をおしつけられて、龍次は首をふった。

「いや、おいら、よく読めねえ。な、何ていってきたんですえ？」

「おれも、その御浪人に読んでもらったんだが、こう書いてあるそうだ」

と、仁吉は、壁際にならんでいる、新規やといの四人の浪人のほうにあごをしゃくって、

「ここに神戸のがかくれていると承知の上でいう。第一に、いつぞや神戸のがたたきつけてきたケンカ状はどうした。ケンカ状を送ったきり、自分のほうで逃げだすたァ、なんてえ腰ぬけ、渡世人の風上にもおけねえやつだ。——そんなやつに、黒田屋秘蔵の荒神山の縄張りは渡せねえ。ただし、いつぞや申してやった黒田屋の娘お勢さんを送り返してくればべつだ。降参して、よこす気になったら、四月七日までにこっちによこせ、とある」

「なるほど」

「第二に、よこさねえか、頬かぶりするなら、手切れだ。四月六日からの四日間、荒神山のタカマチはこっちで仕切る。そうすりゃ、荒神山は穴太(あのう)の縄張りだと、天下の渡世人が認めるだろう。それが不承知なら、当日、そっちからなぐりこみをかけてこい。真正面から相手になっ

てやる。ただし、穴太の総勢は百三十人だ。そっちがそれに見合うだけの助ッ人(すけっと)を連れてくるのァかまわねえ。荒神山で大渡世人の名をかけた勝負をしようじゃあねえか、と——」

「へーっ」

龍次は眼をまるくして、

「ひゃ、百三十人」

と、いったが、その大きな眼玉がキラキラ光り出して、

「相手にとって不足はねえ。——そ、そりゃあ、大デイリだ！」

ヒゲ万先生がきいた。

「それで、味方は何人かな」

「おれと、神戸のと——用心棒の先生四人、乾分(こぶん)が十人——それから、あんた方、むろん助ッ人になってくれるでしょうね」

「十八人じゃな」

と、ヒゲ万先生が指を折る。

「ほかに、いざとなったら助ッ人にかけつけてくれる衆が十人ばかり」

「二十八人か」

「助ッ人といや……さっき浜で妙なやつに会ったが」

龍次がふと思い出したが、だれもとり合う者がない。

「こりゃ、やっぱり——清水一家に援軍を求めるよりほかはなかな」

と、ヒゲ万先生が仁吉を見やった。
「おっしゃる通りでござんす。おい、神戸の、向こうがこう出てきた上は、いくらおめえさんでも、もう清水の加勢にそっぽをむく気はねえだろう？」
「しかし……こういう話で、清水の衆がほんとにきてくれるかね？」
と、神戸の長吉がいった。どうもこの男には、活気がない。
「それに、よし清水三十六人衆がみんなきてくれたって――何人になるか。次郎長どんを加えても六十五人か。ちょうど敵の半分だぜ。……」
「そんなことをいったってしょうがねえ。とにかく、こっちの手勢だけじゃ、話にならねえ。それじゃ、清水に使者をやるぜ！」
仁吉は、きっとしてふりむいて、
「おいっ、雁三郎、すぐに清水に飛んでくれ！」
「合点だ！」
乾分の一人が身支度して、すぐに飛び出していった。――
つづいて、ほかの乾分も、近郷の助ッ人を呼びに、四方にかけ出す。
急にこの家に殺気が渦巻き出したようで、
「よし！」
龍次もりきんで、そのとたん、
「イテテ！」

と、顔をしかめた。浜辺でヒゲ万先生の櫂に打たれた右肘の下に痛みが走ったのだ。
袖をまくってのぞきこんでいる龍次に、ヒゲ万先生も顔をよせる。
そこへ、
「どうしたの？」
お勢が立ちあがって、これものぞきにきた。
「いや、なに、さっき浜で、もののはずみで船にぶっつけたんでさあ」
と、龍次はごまかした。
「ただの打ち身でござんす。すぐになおりまさあ」
「でも、ひどい――紫色になってますよ」
お勢はうなずき、奥へはいっていったが、すぐに出てきて、
「これは暮に、秋葉山で買ってきた打ち身の薬よ」
と、いって、はまぐりにはいっているこう薬をぬってくれた。いっしょに持ってきた白いさらしを、ヒゲ万先生が受けとって、肘の下にキリキリと巻いてやった。

十七

――その夜だ。
「お！」
ただならぬヒゲ万先生の声に、龍次が眼をあけた刹那（せつな）、右の手くびに、きりりっと熱い痛みを

おぼえ、これまた、
「あっ」
と、さけんで、はね起きた。
と、あんどんの光も暗いたたみの上に、シューッと何やらがすべるような音が遠ざかっていった。
「なんだ、先生――痛てっ」
「どげんした？」
「手くびに、痛みが――」
「おはんもやられもしたか、おいもやられた」
ヒゲ万先生も起きなおっている。そればかりか、一刀をひきぬいているのさえ見て、龍次はぎょっとした。
ヒゲ万先生が、片手であんどんを持ちあげた。灯の輪が、たたみを這う。
何かを探しているようであったが、
「――これか！」
と、うめいた。
ヒゲ万先生の夜具の向こうに横たわっているものを見て、龍次は息をのんだ。
それは両断された一匹の蛇であった。三寸ばかりの胴をつけた蛇の首は、なおチロッ、チロッと舌を吐いているようだ。

「夢中で……文字通り、夢中で斬ったが、マムシじゃな」
龍次をふりかえったヒゲ万先生が、ふと龍次の頭上を見て、
「もう一匹いたか！」
さけんで、片ひざ立てて、宙をなぎはらった。
天井から落ちてきた、というより飛びかかってきたもう一匹の蛇が、これまた両断されて、龍次の夜具の両側に落ちた。
飛び散った黒い血潮の中に、二つになったその蛇は、これもウネウネとのた打っている。
こわさ知らずの龍次も、この妖変には全身ぬらっと汗のにじみ出る思いで、しばらく声も出ない。
が、ヒゲ万先生があんどんを提げたまま、部屋じゅう、びょうぶのかげから天井の隅まで調べ出したので、龍次も眼をこらして探し歩いた。
蛇はいまの二匹だけであったらしい。
いったいそんなものが、どこからはいってきたのか？――と、疑問をいだく余地はない。もともと障子のあちこちは破れほうだいの部屋だ。
「ふむ、蛇の出る季節になったのじゃな」
と、ヒゲ万先生が感心したようにいった。
三月の末といえば、後の暦で四月の末だから、蛇が出てきてもふしぎではないが、家の中に出るのはむろんただごとではない。

「せ、先生、だれが――」

と、口走ったものの、龍次の頭には一つの影が浮かんでいる。まだ見たことはないが、秋葉山にいたという蛇使いの香具師だ。

「やられた、やられた！　いつか神戸の長吉どん一家の用心棒三人が、大デイリの前夜に蛇にやられたっちゅうが、その手をこっちもやられた！」

と、ヒゲ万先生が自分の手くびをのぞきこんだ。

龍次もあわてて自分の手くびを見る。右腕をしばった布の下に、小さいがたしかに何かのかみ傷らしいものがあるようだ。

前にのべたように、股旅の渡世人は、一枚のふとんで柏餅になって眠る。龍次はむろんヒゲ万もその旅にん作法をまもって寝ていたのだが、一枚のふとんを折っているのだから、あたたかくなればどうしても一方から手や足が出る。それで龍次は、手くびをかまれたらしいのだ。

「ち、畜生、そ、その香具師野郎があらわれやがったか！」

龍次は長脇差をひっつかんでかけ出そうとしたが、ヒゲ万先生は、

「もうおそか。それにこの夜ではつかまえられるもんじゃなか」

と、とめて、

「はて、きょうきたっちゅう穴太徳の使者が香具師だったとは聞かなんだが……それじゃその香具師も、べつについてきておったものと見える」

と、いい、さらに、はっとしたように、

「おう、あのひるま浜で会った男――あれもその香具師の一味じゃなかか！」

と、さけんだ。

龍次は眼をむいた。

「な、なんだと？」

「おいも右の手くびをかまれたが、その手は柏ぶとんのひらき口のほうにあったとはいえ、外に出していたおぼえはなか。それを蛇が、かま首をさしこんでかんだ。――ひょっとすると？」

宙に眼をあげて、ヒゲ万先生がいう。

「おいはもともと、神戸の用心棒たちが蛇にかまれたっちゅう話をきいたとき、闇の中で、めざす人間だけにかみつく蛇がこの世におるもんじゃろうか、と首をひねっちょった。ひょっとすると、あの浜辺の男、はじめからおいたちを狙ってきて、釣り竿の持ち方を教えると見せかけて、おいや龍次親分の手くびに、何か蛇の好むものをなすりつけたんじゃなかか。――」

「そ、そりゃ、ほんとか！」

龍次は仰天して、また手くびをのぞきこんだが、暗い光によく見えない。

「そうとしか考えられんでごわす。――神戸の用心棒たちも、ひるま何かの法で、それを手や頸になすりつけられたんじゃなかか。――」

「そ、それでマムシにやられた用心棒はどうなったといってたっけ？」

「たしか、腕とか頸とかが腫れあがり、痛んで熱を出して、一人は朝のうちにもがき死をした。

あと二人で、これは死にゃしなかったが、とうていケンカ場へゆけん状態になった、とか、いっておりもしたが。――」

「ひ、ひ、卑怯な手をつかいやがるもんだなあ」

朝がきた。

そして、果たせるかな、ヒゲ万先生の右手くびは暗紫色に腫れあがり、高熱を発して、かすかなけいれんさえ起こし、やがてウトウト眠ったままになってしまったのだ。

龍次にも同じような症状が起こった。しかし、ヒゲ万先生にくらべれば軽かった。ただ、痛いことは痛い。

眠りにおちる前に、ヒゲ万先生が、しかめっつらで笑って龍次にいった。

「思うにそっちはその腕を、布でしばっておったのがよかったのでごわすよ」

さて、眠ってしまったヒゲ万先生に、龍次が狼狽(ろうばい)し、重態におちいった父親に対する幼児のような恐怖にとらわれたことはいうまでもない。実際に、神戸の用心棒の一人は死んだというのだから当然だ。

狼狽と恐怖に襲われたのは、龍次ばかりではない。吉良の仁吉一家も同様だ。

十八

その夜のうちに、新規にやとった四人の用心棒のうち、二人の姿が見えなくなった。――逃亡したのである。

三日目には、助ッ人(すけっと)になってくれるはずの近郷のやくざが、あてにしていた十人のうち、きてくれたのは四人だけだということが明らかになった。蛇のことは知らないはずだから、あと六人は、いざなぐりこみということになって、おじけをふるったのだ。

七日目には、乾分(こぶん)の雁三郎が呼びにいった清水一家の援軍が到着した。――それがなんと、大政、小政、増川の仙右衛門、樋屋の鬼吉、法印の大五郎、追分の三五郎らをふくんでいるが、総計十三人なのである。親分の次郎長の姿はない。

「折悪しく親分は、十日ばかり前、鞠子からもらったトロロ汁を食いすぎて、ひでえ腹下りになって、まだ床から立てねえありさまで」

と、大政がケロリとした顔でいった。

「結局、味方は――」

と、神戸の長吉が悲しげなさけびをあげた。

「みな、かき集めて三十三人か！」

「そ、その中に、草堂(そうどう)先生がはいってますかね」

と、龍次がきき、長吉がうなずくと、

「そいつはだめだ。先生は、なんとかいのちはとりとめたようだが、まだフラフラだ」

と、龍次は首をふった。彼もまだ腕に痛みが残っているほどだ。

「すると、三十二人。――敵は、百三十人、こっちは四分の一にも足りねえ。おい、大政どん、穴太方(あのう)は百三十人だってことは次郎長どんもきいたろうね」

「へえ、たしかにききやした。しかし親分のおっしゃるには、敵が百何十人いようと、そのうちめぼしいのを三十人ほどぶった斬りゃ、あとはケシ飛んじまわあ、それにはおめえら十三人でたくさんだ、といいやした」

「三十人ほどぶった斬るったって、その前にこっちの三十何人があぶねえ」

長吉の長い顔は、絶望にのびちぢみしていた。まあ、四対一ではそう考えるのが常識かも知れない。

「吉良の――」

長吉が思いあぐねた表情でそういい出したのは、その翌朝、土間に面する大広間で一同が朝飯を食いおえたころであった。

「いろいろ考えたんだが、こんどのデイリ、やっぱり勝負にならねえ」

彼は飯に手もつけていなかった。――仁吉がきいた。

「それでどうしようってんだ」

「せっかくおめえなどに助けてもらって、こんなことをいうのは申しわけねえが……こんどのケンカはあきらめて、穴太のと手打ちするよりほかはねえ」

「手打ち、というと？」

「つまり、その、なんだ、向こうのつけてきた条々の第一――お勢さんをよこせ、という言い分をきいてやるよりほかはねえと思う」

「なに？」

「お勢さんが穴太のものになりゃ、荒神山はお勢さんに返す、とケンカ状に書いてある。それを信用するよりほかはねえ」

「神戸の！」

仁吉は顔色を変えて、

「それじゃあおめえは、お勢さんを穴太徳(あのとく)の妾にしろってえのか！」

「荒神山を返してもらうにゃ、そ、それよりほかに……」

「この腰ぬけ野郎！　そんなことはおめえが承知しても、おれが承知できねえ」

仁吉が長脇差(ながどす)をカタカタ鳴らしながらうめくと、龍次もわれを忘れて身をのり出し、

「お、お、おれも不承知だい！」

と、どなった。

大政がにが笑いして、

「神戸の親分、いっそこのケンカ、清水一家が買って出やしょうか」

と、口をさしはさむと、長吉は下唇をつき出すようにして、

「清水ははじめからそのつもりだろう、お義理だけの人数を出して、あわよくば荒神山の縄張りを乗っとろうという下心があるんじゃねえか。おれはそれも気にかかって、それよりゃ穴太ととりひきしようと考えたんだ」

「なんだと？」

と、小政が気色(けしき)ばむと、

「おれたちがお義理の助ッ人だと？」
「それで荒神山を乗っとろうという下心があると？」
「な、何いってやがる、疑ぐりぶけえにもほどがある――」
樋屋の鬼吉、法印の大五郎、増川の仙右衛門らが険悪な顔でつめよった。
「おやめ！」
と、女の声がかかった。
「ケンカ状もらって、何もしないうちから仲間割れして、どうするのさ？」
お勢であった。
「でも、ねえ、長吉おじさんのいうことも、もっともだと思うわ。……これじゃいよいよ、穴太方とケンカになっても勝てっこないわ」
「お言葉だが、お勢さん、勝とうが負けようが、渡世人としてあのケンカ状は受けて立つよりほかに道はねえ」
と、仁吉が歯をかみ鳴らしていった。
「いや、ケンカ状をもらってはじめて決心したことじゃあねえ。去年おめえさん方がおれんとこを頼ってきてくれたときからそう思ってんだ。そのためにいろいろ支度してきたことは、おめえさんも見て知ってるはずじゃあねえか」
「知ってるわ。ほんとうにありがとう。でもね、長吉おじさんは、見ての通り、よくいえば苦労人、悪くいえば気迷いが多すぎて……どうせこんなことになるだろう、と、あたしも決心し

ていたの」
「なにを？」
「穴太のところへゆこうと」
「ば、ば、馬鹿な！」
仁吉がのけぞり返ったのみならず、みんなどよめいた。
「お勢さん、おめえ……穴太徳の妾になろうってえのか！　おれとの約束はどうした？」
「仁吉にいさんとの約束は守りたいけれど、その前にあたしのしなくちゃならないことがあるわ」
そのとき、突然、龍次が、あっと大声をあげた。
龍次の眼がむき出されて、戸口のほうを眺めている。いま、そこからのぞいて、こちらのただならぬ雰囲気を見てびっくりしたらしく、ちらっと隠れた影があったのだ。

十九

「おりん坊じゃあねえか！」
呼ばれて、旅姿のおりんがあらわれた。おりんがどうしてここへ？　と驚く前に、龍次はあわてて叱りつけた。
「き、きちゃあならねえ、おりん坊、ここはとりこみ中だ！」
すると、

「はいって下さい！　おりんさん！」
と、お勢が声をかけた。
数瞬、ためらったのち、おりんは編笠の赤い緒をといてぬぎ、元気のいい足どりで土間にはいってきて、あがりがまちの前で、三歩進んで半歩さがり、いちど両手をひざにあてて、腰をかがめ、片手をつき出して、
「おひけえなすって、おひけえなすって」
と、仁義を切り出した。
「さっそくおひけえ下すってありがとうござんす。御当家の親分さん、おあねえさん、かげながらおゆるしをこうむります。従いまして手前、生国は上州にござんす。上州といっても広うござんす。上州は勢多ごおり大前田村でござんす。……」
「おりん坊、よしてくれ！」
龍次は呆れ返り、あわてふためいて、
「こ、こっちはいま、でえじな、でえじな談合中なんだ。……」
「すみません、おりんさん、せっかくおいでになったのに、いまほんとうに大事なお話をしてるところで……」
と、お勢は申しわけなさそうに頭を下げ、
「あなたも、そこできいていて下さいな」
と、いった。

おりんは、あがりがまちに腰をかける。――はて、この娘は何者だろう？　と、仁吉をはじめ吉良一家、清水一家が首をひねったのはもとより、おりんが秋葉山にいたことを知っている龍次も、彼女がお勢と相まみえたことがあるらしいことをはじめて知って、めんくらっている。
それもさることながら、それより、一同は、
「あたし、穴太徳（あのとく）のところにゆくわ」
改めてくり返したお勢の言葉に耳をもどした。
「ただし、お妾になるためじゃなく、穴太徳を殺（や）るために、さ」
「あ！」
と、仁吉はさけんだ。
「おめえさんが、穴太徳を――」
「どげんしてな？」
口を出したのはヒゲ万先生だ。
どうやらマムシの毒から命びろいはしたらしい。けさ久しぶりに朝飯の席にあらわれたのだが、まだ蒼い顔をして、黙然といままでの話に耳をかたむけていたのである。
お勢は、帯にはさんだ匕首（あいくち）に手をあてた。
「これでただ一刺し。……女一人なら、向こうもゆだんするでしょう」
「女一人？」
仁吉が、しゃっくりみたいな声をたてた。

「あたし一人が、四日市にゆくの。……しかも穴太徳の家に一人でいっちゃ、あっちも変に思うでしょうから、はじめから花嫁衣裳をつけて」

お勢は蒼白い笑みを浮かべて、

「穴太徳はあたしをお妾にするつもりらしいけれど、あたしは三々九度の盃をあげてくれと申しこみます。そうすると、面白がって、穴太徳はそれをやってくれるでしょう。その席で、あの男を刺し殺すの」

「そ、そんな馬鹿なまねはできねえ」

仁吉はさけんだ。

「そんなまねは、こっちがさせねえ！　それじゃおれの出番がねえじゃあねえか！」

「三十何人かが百三十人とケンカして、勝てるわけがないじゃありませんか。それに……このことはあなたに頼んでさせてもらうんじゃありません。桑名の貸元、黒田屋勇蔵の娘として、あたしが勝手にやるんです」

お勢はいった。

仁吉は気圧(けお)された顔で、

「しかし、そんなことをしたら、おめえさんは殺されるにきまってる……」

「それは覚悟の上です。それに、殺されるかどうかはわからない。親分が殺(や)られたら、乾分たちは降参するかも知れないわ。あたしは穴太徳親分のそのまた親分の娘なんですよ。もし殺されなかったら、そのときに仁吉にいさんと祝言(しゅうげん)をあげましょう」

にこっと笑われ、その凄艶さに魂をうばわれて、吉良の仁吉はそれ以上、声も出ない。

「恐れいった！」

と、ヒゲ万先生が、はじめて大声をあげた。

「男ども、顔色(がんしょく)なかな。……じゃがな、花嫁だけ一人乗りこむ、というのはおかしか。やはり何人かの――できれば御婦人もふくめて――つきそいが欲しか」

「そうだ、それなら――かりにおめえさんの言い分を通すとして――そのお供として、おれがゆこうじゃあねえか」

と、仁吉がいうと、

「おれたちもお供にゆく」

と、清水一家がみな身をのり出した。

「いけない。そんなことをしたら、むこうはそらなぐりこみにきたと思うじゃありませんか」

お勢は首をふって、

「それじゃあ、穴太方に知られてない――近所のおじさん、おばさんたち三、四人頼もうかしら」

「そ、その中に、是非、おれだけはいれておくんなさい。おいらはよそからきた風来坊だ」

と、龍次がいった。

すると、いままで黙ってきいていたおりんが声をかけた。

「女のお供は、あたしにさせて」

二十

みんな、そっちを見た。
突然はいってきたこの旅の娘が、どうやらお勢と知り合いらしいことをだれもがふしぎに思っていたが——その娘が、つづいてまたいった。
「お勢さん、それより、その花嫁に、あたしがなったらどうかしら？」
「えっ」
お勢は眼をまろくした。
「あなたが？——だって、顔がちがうじゃあありませんか」
「でも花嫁って、綿ぼうしなどかぶるのでしょう」
「たとえ、そうしたって——」
「いえ、あなたがあちらへ——四日市といいましたね——いって、どこかお茶屋にでも休んでいざむこうのうちへ乗りこむ前に、あたしが花嫁姿になるんです」
「そして、どうするの？」
「あなたのやることを、あたしがやるの」
おりんは、にっこりして、
「でも、荒神山を返してもらえりゃ、穴太徳（あのとく）って人を殺さなくてもすむんでしょう」
お勢はしばらく判断力を失った表情で相手を見まもっていたが、

「そんなことを、あなたにしてもらういわれがないわ」
と、いった。おりんは答えた。
「いえ、あるの」
「どうして？」
「さっきからうかがっていて、あなたがいっそう好きになったから」
「おりんちゃん、そんなことをすると……花嫁があたしじゃないとわかったとき、あなた、殺されちまうわ」
「いえ、殺されはしません」
「なぜ？」
おりんは答えず、ただ笑っている。
「お勢さん……ありゃ、いったいだれだい？」
と、たまりかねて仁吉がお勢の耳に口をよせてきいた。
そのときおりんは、ふところに手をいれて、一枚の紙をとり出し、ひろげて見せた。
例のお守りだ。

「これをもつものは
おれの娘おりん
よろしくたのむぜ

上州　大前田の栄五郎」

いっせいにどよめきがあがった。おりんが大前田の栄五郎の養女であることはとっくに承知の上の龍次もヒゲ万先生も、彼女がそんなものを持っていようとは知らなかったので、口をアングリあけた。

「謎が、とけもしたな」

と、ヒゲ万先生が龍次にささやいた。

「いつか九十九里浜で、飯岡勢が逃げ散ったことも――おりん坊が女の一人旅で無事であったことも――路銀（ろぎん）に不足しなかったことも」

「あ、あんなものを持っていやがったのか。……」

と、龍次はつぶやいた。

おりんがいった。

「あたしがお勢さんの役を買って出たわけも、それでも大丈夫だってわけも、これでわかって下すったでしょう」

一同、声もなかったが、ただ一息おいて龍次がいった。

「いや、それでも大丈夫とはいえねえ。何しろ、穴太徳を殺（や）ろうってんだろ。……おりん坊、お供の中においらをいれてくれ」

ヒゲ万先生が、何かいいかけた。

龍次が敵方に知られていないことはない。げんに龍次も自分も、先日敵の中の蛇使いの香具（や）師（し）にやられたのだ。あれは、特に自分たちを狙ってやったことにきまっている。――

が、ヒゲ万先生は口を出すことをやめた。

さて、あらためてお勢が、おりんと吉良一家をおたがいにひき合わせ、これからのことについて談合した。

まずお勢が、近所の漁師の老人やおかみさん四、五人をお供に頼んで、かごで出かける。そのあとを、龍次とおりんが追う。尾張の宮から四日市まで船で、いわゆる十里の渡しだ。穴太（あのう）の徳次郎の家は四日市にある。

そして、ひとまず町の茶屋に寄り、穴太徳に使いを立てて、穴太徳からつきつけられた条件の前段、すなわちお勢の身柄を穴太徳にまかせることにしたむね、伝える。ただし、黒田屋の娘としての面目もあるから、花嫁姿でゆくことを認めさせる。

それから、おりんが綿ぼうしをふかくかぶった花嫁姿で乗りこむのだ。この場合、龍次だけがそばを離れない。

それは、むろん、ばれるだろう。が、例の護符をかかげたとき、穴太徳が恐れいるか、恐れいらないか――凪（なぎ）か嵐かは、いまのところわからない。

嵐となった場合、どうするか。

ここではじめて、吉良一家、清水一家がかけつける。

同じ船でいって、同時に四日市で下船しては万事ぶちこわしになるから、この一団はひと船

遅らせてゆく。そして、穴太徳の家にどんな異変が起こったかを探り、もしそれが嵐であることが判明した場合、はじめてなぐりこみをかける。――

　この軍略を、吉良の仁吉も神戸の長吉も、そして清水一家も了承しないわけにはゆかなかった。

　さて、もう一人、ヒゲ万先生はどうするか。

「相すまんが、おいどんは今回のお役に立たんな」

　憮然として、ひげをなでていった。

　吉良の仁吉のやとった用心棒の侍のうち二人は逐電してしまったが、そのたぐいでないことはわかっている。ヒゲ万先生がなお食欲なく、ふらふらして、まだ病相のあることはだれの眼にも明らかであった。

　この作戦会議が四月三日のこと。

勢州

一

お勢を供物(くもつ)にするなら、七日に四日市に来いとは、穴太徳(あのとく)の口上だ。

四日、吉良からは、前日の軍略にもとづいて、各グループが――お勢たちは朝、龍次たちは昼、仁吉たちは夜にはいってから――次々に旅立った。

東海道岡崎に出て、西へ約八里で熱田。当時ここを宮といった。

　宮からは船が出る。いわゆる八里の渡しで桑名へわたるのがふつうだが、べつに一駅先の四日市まで十里の渡しもある。

　この四日市ゆきの船にお勢たちが乗り、客にまぎれて龍次とおりんも別に離れて乗りこんだ。六日の昼前だ。

　大きな船だが、客でいっぱいだ。荒神山の祭りめあての客が半分らしいが、そのほかにどうやらお伊勢さまへのおかげ参りの客も少なくないらしい。船の中でも、ことしになって、どういうわけかばかにおかげ参りがふえた、というような話をしている者があった。

「ああ、おりん坊、おめえ、お、お伊勢参りに国を出たといってたっけが」

お勢一行は船のともの間のほうに乗りこんだようだが、こちらはへさきのほうのさじきに坐って、龍次はからかった。
「ほ、ほんとにお伊勢さまにお参りにいったらどうだい？」
「あ、そうね」
と、うなずいてから、おりんは、
「もし命があったらね」
と、いった。
伊勢の国へ渡るにちがいないが、これから――あすにも待ち受けている運命は容易なものではない。
「だ、大丈夫だい、おいらがついてらあ」
と、龍次はいった。
カラ元気ではない。大きな眼が、キラキラかがやいている。女一人を護って敵中に乗りこむという行為が、うれしくってたまらないのだ。
「そうね、それにあのお護りもあるしね。元親分さんの娘さんをオメカケにしようなんて、渡世人の道にはずれたやつが、あの大前田の栄五郎の足型を見りゃ腰をぬかすわね」
おりんは、ニッコリした。龍次の無鉄砲を見張るために歩いているおりんだが、彼女自身、相当無鉄砲なところがある。
「そんなものァいらねえ。む、向こうが降参して、手打ちなんかになっちゃつまらねえ。その

前に穴太徳はおれが、た、た、たたッ斬る」
龍次は、あぐらの間に抱いた小松五郎の鍔（つば）をカタカタいわせた。
「それにしても、股旅に出てから、かれこれもう一年になるけど」
と、おりんはいいかけて、
「あ、ほんとに一年になるわ。たしか上州を出たのが去年の四月七日、きょうが四月六日ですもの――」
と、さけんだ。
「ああ、そうなるかね」
「あにさんといっしょに旅をするなんて、はじめてね」
「そうかね、いや、あれ？　こ、甲府の女郎屋でいっしょに泊まったじゃあねえか」
「あんなところ、旅の宿じゃないよ。それに船旅なんて、はじめてよ」
「ふ、船旅といや、そもそもこんな大きな船に乗るのァ、おいらもはじめてだ」
白い帆にからんで、海鳥のむれが舞う。海は碧（あお）く凪（な）いでいる。
いのちをかけた場所へ赴こうとしているのに、そのことも念頭にないかのように、二人はうっとりとして、海のゆくてに眼をやっていた。
海がおだやかであったので、二刻ほど――いまの時間にして四時間ほどで――夕刻前に四日市に着いた。
と、町にはいって、二人はきもをつぶした。

二

四日市は大騒ぎであった。

大通りをうずめて、人々が踊り狂っているのだ。

「ええじゃないか、えじゃないか
おかげ祭りは、えじゃないか
とめてとまらぬ豊年踊り
踊って歩けば、えじゃないか
ええじゃないか、えじゃないか」

そんな歌を、車にのせた太鼓がはやす。肩に鼓をのせて打っている者がある。三味線組がある。横笛を吹いて歩いている者がある。鉦（かね）をたたいている者もある。

踊っている群衆の中には、白い行者風の一団もあるが、大部分は町の人、旅の者らしい。両腕を宙に泳がせ、浮かれ足で大通りを行進している。男、女、老人、若者、子供まで——みんな恍惚（こうこつ）として、みんな酔っぱらったような眼つきになって踊っている。

「な、なんだ、こりゃ」

「四日市はお祭りなのかしら？」

「荒神山の祭りははじまってるはずだが、そ、そのながれかなあ？」

呆れて、立ち話している二人のそばへ、

「踊んな、にいさん、ねえさん、お前方も踊んな」

と、一人、やくざ風の男が笑いながら近づいて来た。

「いっしょに踊んな」

と、手をつかもうとするその手を、龍次はふりはらって、

「よせ、こっちはそれどころじゃあねえんだ！」

と、どなりつけた。男は首をすくめ、踊りながら向こうへいってしまった。

お勢一行もいっしょに船から下りたはずだが、この混雑で、どこへいってしまったのか、見当たらない。——いや、どこへいったかはわかっている。三日前の「軍議」で、たしか四日市中町の那古屋という宿に今夜泊まることになっている。一船おくれて、吉良の仁吉たちは夕方に港に着き、夜になってからその近くのべつの旅籠に泊まるはずだ。

中町の那古屋をさがしあて、龍次たちはお勢とは別の部屋をとってもらった。

例の「ええじゃないか、えじゃないか」の歌声は、なお遠く近く、海鳴りのようにこだましている。

宿の下女にきくと、あれはお祭りではない、この年の明けたころ、お伊勢さまのほうからきた一団が町を踊り出したのがはじまりで、踊りながら誘い、その踊りが面白いので町の人々が加わるようになった。きょうの踊りも、きのうから始まったという。——歌声が静まったのは、日が暮れてからであった。

明くれば、四月七日。

お勢のほうから、供に連れてきた漁師の老人を、四日市浜町の穴太（あのう）の徳次郎の家へ使者にやった。

お申し込みに従って、自分の一身はお前さまにまかせることにした。ただし自分は黒田屋勇蔵の娘である。ただのお妾になるのは、私の意地がゆるさない。せめて最初だけでも花嫁姿ではいることにさせてもらいたい――と、いってやったのだ。

穴太の徳次郎は、それは面白い、是非その姿でおいでになって下せえ、それでは昼過ぎに、こちらから迎えのかごを出すから――という返事であった。

さて、昼過ぎ、町かごは町かごだが、金持ちが乗る上等のかごがやってきた。

それに、綿ぼうしをふかくかぶり、花嫁衣裳をつけたお勢が身をいれた。――実は、おりんだ。

おりんが、その姿で部屋を出るとき、あとに残ったお勢は、

「御無事で」

と、涙をうるませた眼でいい、あとを見送って、両手の指を胸もとで組んで頭を下げた。

この嫁入りのお供の中に、龍次が混じっていた。――とにかく彼は、どんな事態になろうと、おりんのそばを離れない覚悟でいる。

その日も、四日市の町は、ええじゃないかの舞踏集団にどよもしていた。

そして、この小さな花嫁行列は、半強制的にその踊りの渦の中にまきこまれてしまった。

――

三

それから数刻たった夕方だ。中町の那古屋に一人残って、祈るようにおりんたちの首尾を案じていたお勢は、穴太（あのう）の徳次郎親分からお迎えのかごが参りましたが、という下女の知らせをきいて、のけぞり返った。

われを忘れて、表口へ出る。

「おう、お勢さま、このたびは」

かごのそばに立って、頭を下げた三人の乾分（こぶん）は、みんな顔見知りであった。もとは黒田屋の乾分たちで、いまは穴太徳（あのとく）の乾分となった連中だ。

「こんどは、穴太一家のおひとになって下さるそうで」

「あの……花嫁は先にいったはずだけど」

お勢は思わずそう口走った。

相手は首をかしげて、

「花嫁？」

「何をいってなさる、花嫁さまはおめえさまじゃねえですか？」

「おめえさまが花嫁姿でおいでなさるという口上だったが」

お勢は混乱その極に達した。

「まだ花嫁衣裳をおつけじゃなかったのでござんすか。が、そりゃまあ、うちにきてから支度

なすったっていい。せっかくお迎えにきたんだ。このかごに乗って下せえ」

せきたてられて、お勢はふらふらと、そのかごに身をいれた。

いったい、おりんたちはどこへいってしまったのか。さっきの迎えのかごはにせものであったのか。それともいまの乾分たちが嘘をついているのか。

何にしても、こうなったら、みずから進んでも、おりんたちの安否をたしかめにゆかなくてはならない。——

そう思いこんで、夢中でかごに乗りこんだのだが、かごが動き出してから、そうだ、夜になったら吉良一家や清水一家の衆が、四日市にしのびこんでくるはずだ。だったら、もう少し待って、この異変を知らせてからにしたほうがよかったのじゃないか——しまったことをした、と唇をかみしめた。

悔いても、もうおそい。かごは進んでゆく。まわりは依然として「えじゃないか」の踊りの歌声にみちみちている。

お勢はただ、帯にはさんだ匕首のつかに手をあてた。

かごはやがて、めざす家にはいったようだ。

「花嫁さまのお入りーっ」

と、すっとんきょうな声が聞こえた。

たれをあげられて、お勢は出た。

土間につづく広い座敷に、もう灯をいれた行灯をいくつかつらねて、何十人かの男たちが輪

になってならんでいた。浜町の穴太徳の家だ。——みんな、うすきみ悪くニヤニヤして、その正面に穴太徳がいちだんと相好を崩して坐っていた。

穴太の徳次郎、でっぷりとふとった男で、このとし四十四歳。

穴太とは妙な名だが、近江国滋賀郡に大昔帰化人の住んだ穴太村という村があり、そこの出身の男であった。

「お久しぶりでござんす」

と、それでも頭を下げたが、上目づかいで、

「あれれ、何だか花嫁姿でお入りとの口上でござんしたが……みれば、ふつうのお姿、お着替えはこちらでやられるんでござんしょうか？」

と、いったが、笑った眼が何もかも承知であることを示している。

それにはかまわず、お勢はきいた。

「前にきたひとはどうしました？」

「前にきたひと？　はあてね、どなたが？」

「おとぼけでない！」

お勢はさけんだ。

「那古屋からの私の口上で、お前が迎えのかごをよこしたのじゃないかえ？　それに乗っていったひとはどこへいったときいているのです」

「あっしの呼んだのは、あなたでござんすよ。呼ばねえひととは、来たってしょうがねえから、

よそへいってもらいやした」
「どこへ？」
「地獄へ」
乾分たちが、どっと笑った。
穴太徳がいう。
「何にしても、あなたのお身柄はこっちにまかせるという御返答にまちげえはござんすめえね？」
お勢は数瞬つまったが、
「それにまちがいはないけれど、徳次郎、おきき、あたしゃ黒田屋勇蔵の娘だよ、お前はこないだまで黒田屋の乾分だった男じゃないか。それがあたしをお妾にして、街道筋の親分衆がどういう評判をたてなさるか、それを承知の上かえ？」
と、いった。穴太徳はゆっくり首をふった。
「あっしゃあ、何もあなたをお妾にしようなんて、ひとこともいっちゃあいねえ」
「えっ」
「妾とア、あなたのほうで勝手にそう思いこんでいなさるだけだ。こっちはあなたのお身柄をまかしておくんなさるか、と、きいただけでさあ」
お勢はまた絶句した。
「あなたを花嫁にしてえ人間はほかにある。——」

「えっ、だ、だれが？」
「へ、へ、まあ明日になりゃわかることだ。今夜は、安心してここに泊まって下せえ」
穴太徳はうす笑いして、
「その明日だがね。いっしょに荒神山へいってもらいやしょう」
「なんのためにさ？」
「この穴太の徳次郎が、荒神山の縄張りはたしかに黒田屋からもらい受けた、という証（あか）しのためでさあ。きておくんなさるかね？」
明日。——今夜のうちに、神戸の長吉や吉良一家、清水一家がこの四日市にくるはずだ、あの衆が黙ってそれを見のがすことはないだろう、と、お勢は思案して、
「それは、いってもいいけれど——」
「神戸のや吉良のをあてにしていなさるのかね」
穴太徳はこんどは声をたてて笑った。
「それから、清水一家か。へ、へ、吉良港から東海道、宮からの十里の渡し、どこにも物見を出して、みんなお見通しなんだ。あなたに荒神山へいってもらうのも、へっぴり腰のあいつらの尻をたたいて、こっちから呼びよせてやる狙いもあるんだ。きゃつらのなぐりこみを、天下の眼の前で返り討ちにして、堂々と荒神山をいただく。明日、きっぱり始末をつけてやる！」
ふりかえって、
「ねえ、角井（かどい）先生」

と、呼ぶ。
「その通り」
と、乾分たちの中で、口からキセルを離してニヤリとしたのは、人間ばなれして見えるほど筋肉ふしくれだった浪人者だ。
——お勢ははじめてみるが、あれがうわさにきいた穴太徳の用心棒角井門之助にちがいない。
彼はいった。
「縄張り争いは、つまるところ長脇差で決着をつける。やくざの世界は、侍の世界よりいさぎよいところがあるな。へっぴり腰で勢州の縄張りにもちょっかいを出そうとする清水一家に鉄槌を下すいい機会じゃ。明日がたのしみだわえ」
お勢は立ちすくんだ。
——一応作戦は練ったつもりでいて、いちいち完全に裏をかかれ、敵のかけた罠にまんまとはまったことはたしかであった。
こちらは百何十人かいるという。自分のほうは三十何人かに過ぎない。——飛んで火にいる夏の虫となる。
それはともかく、自分の代わりに出かけてくれたおりんと龍次は、天に消えたのか、地に消えたのか。
「それより、先にきたおひとはどこへいったえ？　それをきかなきゃ、あたしはここにいられない。ね、教えておくれ、お願いよ。——」

お勢はついに、半狂乱の声を出した。
「ええ、うるせえ、さるぐつわでもくわせて、おとなしくさせてあっちへ連れてってくれ」
あごをしゃくられて、乾分たちが三、四人立ちあがった。
と、見て、お勢は帯の間の匕首をぬいた。かねてから覚悟していた通り、穴太徳を刺すか、叶わなければ自分を刺すか。——
が、その刹那、お勢は悲鳴をあげて匕首をとり落とした。同時に、一本のキセルもたたみにころがった。
用心棒の角井門之助が、手にもてあそんでいたやつを投げつけたのだ。
手くびをにぎり、痛みに身もだえするお勢の両肩を、乾分たちがおさえつけた。

四

一方、さきに那古屋を出たおりんのかごである。
出るとすぐ、「えじゃないか」の乱舞の中につつまれたことは先に述べた通りだが——やっとその踊りの渦をぬけて——かごはまだ走る。
いっしょについてきたつきそいの者たちは、だれもいない。群衆の中ではぐれてしまったらしい。
二里走ったか、三里走ったか。——
それはいいとして、ゆくてに山影が近くなり、お日さまはそれにさしかかっている。

「あれ？」

かごのそばにくっついて走っていた龍次は、まわりを見まわした。

「浜町ってこっちかい？　よ、四日市の町はよく知らねえが、は、浜町といや海の近くだろ？　なんだか、だんだん西へゆくようじゃあねえか」

「へえ、荒神山のほうへゆきますんで」

と、かごかきの一人が答えた。

「なに、こ、荒神山へ？」

「いえ、荒神山のふもとに赤蛙の池ってえ池があり、そこに親分の別宅があるんでさあ」

「だって、さ、さっきこっちから使いを出したのァ浜町の穴太の親分の家じゃあねえか。こ、このかごはそこからきたんだろ？」

「かごはそこから出たんでごぜえやすが、親分は——きのうからはじまった荒神山のタカマチを仕切るために、そっちへいってなさるんで——もし黒田屋のお嬢さんがきたら、そっちへ回してくれとのことで、浜町に残ってる乾分衆がそうはからいなすったんでござんしょう」

「へえ？」

なんだか、話の筋がはぐらかされたようだが、そういわれればどうしようもない。

それに——「はてな？」と龍次は首をひねった。「赤蛙の池？」——なんだか、きいたことがあるぞ。

そうだ、神戸の長吉が、「荒神山のふもとに、赤蛙の池ってえ池がある。その池に、イモリの腹みてえな色をした蛙がウジャウジャ棲んでるので、そんな名がついたらしい」といった。——それからまた、香具師の道八が、「赤蛙の凶兵衛という蛇使いの香具師がまわりをうろついている」と告げた。——

あ！　吉良でおいらとヒゲ万先生を蛇にかませたのは、その赤蛙の凶兵衛じゃあねえか！

そのおかげで、ヒゲ万先生はとうとうこんどの伊勢への旅に同行できなかったのだ。

穴太徳はその赤蛙の凶兵衛と組んでいるかも知れねえ、という話だった。いや、あれこれのいきさつからみると、そうにちげえねえ。

ひょっとすると、ゆくさきの赤蛙の池に、穴太徳といっしょにその赤蛙の凶兵衛ってえ香具師が待っているかも知れねえぞ。

さすがの龍次も、背にぬらっとうすきみわるい水がながれたような気がした。

が、そう思っても、いまとなっては、やはり逃げ出すわけにはゆかない。

——いや、相手が何者だろうと、どうせこの長脇差に物をいわせなきゃならねえ羽目になるだろう。そいつははじめから覚悟していたことだ。

面白え、鬼でもこい、蛇でもこい、相手になってやろうじゃあねえか！

龍次は武者ぶるいして、小松五郎のつかに手をかけて走った。

新緑の季節だ。山は夕映えに染まって、風までかぐわしい。

その中の道を、ゾロゾロと人の波がながれてくる。荒神山の祭りにいって帰る人々らしい。

と、かごは右にそれて、雑木林の中の細い道にはいった。

まるで緑の壁の中をゆくようだ。日が落ちたのか、それとも深い林のせいか、みるみるまわりが暗くなってきた。

やがて、遠くから異様な声が風にのってきた。

ギャル……ギャル……ギャル……

蛙の声だ。

それが次第に大きくなり、これは何万匹かの蛙の声だと気づいたころ、両側の林が急に緑を失って、枯木ばかりになってきた。四月というのに、まるで冬のように裸木が文字通り林立している。地面が急に毒に変わったとしか思われない。

そのむこうににぶく光る池が見えてきた。

対岸にならぶ七、八軒の家が小さく見えるほどの池であった。池というより、青みどろが浮かんで、沼のようだ。

そして龍次は、池がふくれあがるほどの蛙の声とともに、岸べにイモリの腹みたいな色をした蛙が、無数にはねてとんでいるのを見て、思わず走る足をちぢめた。

いつのまにか風景は、うす暗いひかりをおびた冥府のような世界に変わっている。

「こ、これが赤蛙の池かね？」

「そうでごぜえやす」

「穴太の親分は、ど、どうしてこんなうすっきみわるいところに別宅を作ったんだ」

「荒神山のタカマチに、開帳するのは野天ばくちでござんすが、おりあしく雨がふるときはここでやるためでござんす」

「あ、そうか」

池をまわって走って、小集落についた。

ぜんぶで七、八軒の百姓家だが、ちょっと離れて、高いけやきの木の下に、土蔵を二つくっつけた大きなりっぱな家があった。建ってまだ一、二年と見える新しさだが、土蔵はまだ白壁ではない、土色のあら壁だけだ。

その土蔵の前で、

「花嫁さまのお入りーいっ」

かごかきがすっとんきょうな声をあげると、土蔵の上のほうについていた小さな窓から顔が一つ消え、二つならんだ土蔵の一つの土戸が内側からひらかれて、中から男たちが現れた。

あとから、あとから、あとから——十数人。

五

その中に、なんのためか両手に汚らしい桶をぶら下げて、地面においた者が二人ある。ひときわヒョロリと背の高い男の両側にである。

その男は、投頭巾（なげずきん）をかぶり、たっつけばかまに袖無し羽織といういでたちで、どうも渡世人らしくない。どうやら香具師（やし）らしい。

香具師風の男はまだほかに四、五人いたが、あとはやくざばかりで、しかもその中に、見知

った顔が二つあるのに、龍次は眼を見張った。
祐天仙之助と犬神軍次郎だ。
「やはり、きやがったか」
と、祐天が凄まじい眼色でさけんだ。
「こんどは、こ、こんなところにいやがったか」
と、龍次が白い歯を見せていい、
「しかし、てめえらはあとまわしだ。ほ、ほかに用がある」
と、さらに眼を移して、
「や、約定によって花嫁をとどけにきた。あ、穴太の徳次郎親分はどれだ？」
と、見まわした。
「おれだ」
と、のっぽの男がいった。
「おめえ？……おめえ、や、香具師じゃあねえのか」
「そうよ、香具師の赤蛙の凶兵衛ってんだ」
「やっ……赤蛙の凶兵衛ってえ蛇使いはてめえか！」
龍次はさけんだ。
「てめえが、穴太徳と組んでいることァ知ってる。し、知ってるどころか、こないだ吉良で、おれたちにマムシを使ったのはてめえだな？」

赤蛙の凶兵衛は蠟のような顔で、にやっと笑った。
「おれじゃあねえ、おれの乾分だ」
と、横を見る。
ならんでいる香具師風の男たちの中に、龍次は吉良の浜辺で自分たちに釣りを教えた男の顔を見いだした。
「だから、へまをやりやがって、てめえをむざむざここへ来させたんだ」
「なに？」
と龍次は二人の顔を交互ににらみつけたが、
「しかし、てめえもあとまわしだ。やい、穴太の徳次郎を出せ、お、お勢さんを妾によこせといったのは穴太徳だ。約束通り、そのお勢さんをつれてきたんだ。穴太徳を出せ！」
と、どなった。
「穴太の親分はここにゃいねえ」
「なんだと？　そ、それじゃ約束がちがう」
「約束を破ったのはどっちだ。そのかごに乗ってるのァ、お勢さんじゃなかろう」
龍次は、うっとつまった。赤蛙の凶兵衛はあざ笑った。
「穴太の親分からは改めて迎えのかごがゆき、お勢さんはそれに乗って、いまごろは浜町の親分の家にいってるはずだ。あはは、そっちは約定通りだ」
しゃべりながら、この男は、チロッ、チロッと赤い舌を口から吐く。

「な、何を――」
と、いったが、龍次は心中に仰天して、
「お勢さんが穴太徳のところへいったと？」
と、思わず足を返しかけた。
と、うしろ側には、いつのまにか、犬神軍次郎と祐天仙之助がまわって道をふさいで、早くも刀を抜きはなっている。
「やるかっ」
満身、殺気にあふれて龍次は長脇差を鞘走らせた。
そのとき。――
「ま、待って」
かごの中から声がして、たれをあげて花嫁姿があらわれた。
ふかくかぶった綿帽子を自分の手でひきあげたのは、それが無駄であったと知ったからだが――花嫁らしい化粧までした顔に、おーっというどよめきがあがったのは、その可愛らしさに思わず発せられた嘆声だ。
もっともそれは、おりんをはじめて見る穴太の乾分たちの口からで、赤蛙の凶兵衛や祐天仙之助らはもとより驚いたようすもない。
おりんは、黙って、ふところから、例の紙きれを出した。
ふたたび、乾分たちから声がもれたが、正面の凶兵衛に動揺は見えない。

「そいつか」
と、せせら笑った。
「そいつァ、こっちにききめはねえよ」
舌が、言葉とは無関係にチロッと出て、
「おれは香具師だ！」
と、わめいた。
「この前の秋葉山のときは祐天のあにいがおじけをふるうものだから、ついこっちもつりこまれちまったが、二度は効かねえ。大前田の栄五郎大明神のお守りにゃ、渡世人は知らず香具師は無縁の衆生よ」
「おりん、どけ！」
龍次がさけんだとき、
「おめえさんらのお相手はこれだ！」
凶兵衛が、あごをしゃくった。
と、左右の二人の香具師が、さっき持ち出した二つの桶をとりあげて、一人がその一つのふたをぱっとひらいた。そこから無数の三角形の蛇の頭が現れた。と、みるまにいっせいに外へあふれ出る。あきらかに、マムシだ。
さすがの龍次もおりんも、ぎょっとして眼を見張っているあいだに、もう一人の香具師が――それは吉良の浜で逢った男であったが――桶からひしゃくで中の液体をくみ出して地面に

まきながら、龍次とおりんのまわりに大きな円を描いた。
　すると、蛇たちがその円にうねり寄り、液体の上でのたうちはじめた。それが、苦悶してのたうつのではなく、狂喜乱舞しているとしか見えない頭のふりかたであった。
　しかも——何たることか、その粘液と土にまみれた蛇たちは、おたがいにかみつき出した。それぞれ、円のいたるところで塊を作ってもつれ合い、血まみれになってかみつき合っている。
　すでに薄暮といえる大気の中で、このマムシのむれだけが銀光をはなっているようだ。
　怪異とも凄惨とも、形容を絶するこの異次元の光景に、龍次とおりんは息をのんで立ちすくんだ。
　ギャルル……ギャルル……ギャルル……さっきから聞こえつづけている池の蛙の声が、魔界の音楽のように伴奏した。
「桶の薬は、マキスイという」
　と、うす笑いして、凶兵衛がいった。——この男も、妖しい銀光にふちどられている。
「マキスイとは、蛇を使う香具師または売薬のことだが、おれの場合は、蛇が何より好む薬のことよ。この池に棲む赤蛙をすりつぶして、蛇香苔（じゃこうたい）ってえコケと配合して溶かした水だ。おれが作り出したんだ」
　また細い舌で舌なめずりして、
「かわいても、匂いだけでも効く。蛇同士でさえあの通りだ。そいつを人間になすりつけりゃ、まちがいなく蛇はかみつく。さっきてめえがいったように、おぼえがあるだろう」

「やっ、野郎……」
　死闘というべきか、きちがい踊りというべきか、吐き気をもよおすような蛇のもつれ合いの輪の中に、棒立ちになっていた龍次が、はっとわれに返って刀をとりなおすと、
「陀羅助！」
　と、凶兵衛が命じた。
「ひとつ、あの野郎の前に、ひとひしゃく、まいてやって見せてくれ」
「合点だ」
　うなずくと、マキスイとやらをいれた桶を持ったやつが、ひとすくいして、ぱあっと龍次の前にまいた。
　マキスイは、龍次とおりんの前、五尺あたりに散った。
　と、マムシのむれは吸われるように、そこへウネウネと殺到して、そこで血まみれのもつれ合いを演じはじめた。
「国定龍次とやら、刀を捨てろ」
　と、凶兵衛がいった。
「捨てねえか。捨てねえなら——陀羅助、マキスイをあの花嫁さんにかけてやれ」
　遠くで、その香具師がまたひしゃくを桶にいれたのを見て、
「待ってくれ！」
　と、龍次はのどがひっさけたような声をあげた。

「待て、ちょっと二人で相談する」

「何を悠長なことをいってやがる。陀羅助、やれ！」

「し、しかたがねえ」

龍次はついに抵抗力を失って、

「投げるぞ！」

さけぶと、刀を投げ出した。ただし、地上にではなく、空中高く。——

これは、絶体絶命、やけのやんぱちの行為であったが、刀は蒼味をおびた空へあがって、クルクルとまわりながら落ちてきて、五間あまり離れた裸の大けやきから張り出したふとい枝の一本に、グサリとつき刺さって、とまってしまった。

しかし、彼はこれで武器を——しかも、命より大事な小松五郎義兼を失ったことになる。彼がこれを捨てたのは、自分よりもおりんのいのちのためであった。

「さあ殺せ！」

手ぶらになったこぶしで、龍次は胸をたたいた。

「その代わり、この大前田の栄五郎親分の娘さんだけは助けてやってくれ。……も、もし、万一のことがあったら、てめえら、に、に、日本じゅうの渡世人を敵にすることになるぞ」

「おめえたちがここにきたことはだれも知らねえ」

と、うしろで祐天仙之助があざ笑った。

龍次はふりむいて、

「いや、おれたちが穴太徳からの迎えのかごで出たこたァわかってる。し、清水一家があとで知ることになるだろう」

「その清水一家は、あしたにもみな殺しだい」

と、凶兵衛がいった。

「伊勢へ来るのが、清水一家たった十三四、しかも次郎長がこねえのは残念だが、それはまたの日にする、きたやつらは、あした荒神山でみな殺しにしてやる。あにきのかたきだ！」

「そして、てめえたちも、おれのかたきだ」

祐天がいった。

「よくも三井の親分を斬りゃがったな。——願いどおり、ここでいまたたッ斬ってやりてえところだが、赤蛙のあにいに考えがあるそうで、きょうのところはかんべんしてやる。やい、おとなしくして、あの蔵にはいれ」

と、刀をあげて土蔵をさした。

「蔵へ？」

首をかしげる龍次のところへ、四、五人の香具師たちが蛇の輪を飛び越えて近づいて、その両腕をとった。この香具師たちはみな蛇を使うと見えて、マムシも苦にしないらしい。別の香具師二人が、おりんの手もとらえた。

六

「やい、歩け」
蔵の戸口から、まず赤蛙の凶兵衛がはいる。
はいると、彼は口笛を吹いた。こがらしの音に似た口笛であった。
龍次たちは連れこまれた。つづいて、ほかの香具師、祐天やその他のやくざたちも、ぞろぞろとはいってくる。入り口からさす夕方の光の範囲外は暗々としているが、最初からここにいたらしい連中は、勝手を知っていると見えて、スタスタと奥へ歩いてゆく。
「ここで待っておれ」
二人の手をおさえていた最後の連中が、手をはなして、これまた奥へ去った。
鼻孔には、吐気のするような青臭い湿気がまつわりつく。
どうやら奥のほうに、階段があるらしい、と気づいたのは、そのあたりの天井に、ぼうと赤い灯影がさしてからだ。二階で、あんどんに灯をいれたらしい。――そして、明らかに階段、というよりふといはしごが、すうっと天井に吸いこまれるのが見えた。
そして、天井にひらいたその四角な穴から、あんどんが突き出され、その上に、頬に虫のようなあざのある祐天の顔が逆さにのぞいて、
「やい、まわりを見ろ」
と、歯をむき出して笑った。

見まわして、おりんは悲鳴をあげ――さしもの龍次も息をのんだ。
さっきから、異様な物音を耳にはしていた。――それは檻にいれられた蛇の大群であった。人の背丈ほどある四角な檻が両側にズラリとならんでいる。檻といっても竹を編んだ粗末なもので、そのすきまから、それぞれの中で、もつれ合い、うねり合っている蛇の姿がありありと見える。その数、何百匹か、何千匹か。――
見えるのみならず、蛇でも小さいものは充分通りぬけるらしく、いま自分たちが立っているまんなかの通路にも、十数匹ウネウネとはいまわっている。
「あっ……」
その二、三匹が近づいてくるのを見て、龍次は夢中で、近くに落ちていた細い折れ竹と、縄の一片をひろいあげて、その蛇をたたき、縄をおりんにわたした。
「よしたほうがいい」
天井で祐天が嘲笑した。
「何もしねえ人間に、マムシのほうからとびかかってきやしねえ。害をすると見ると、とびかかるもんだ。――とはいえ、何しろ蛇のことだから、どういう気になるかわかったもんじゃあねえがね。――それによ」
あんどんを大きくふって、
「見ろ、檻の中を――蛇が、へんな風に集まってるだろ？」
龍次たちはまた竹檻のほうへ眼をやって――改めて奇怪な光景を見た。

どの檻にも、上からまるい西瓜（すいか）のようなものがいくつかぶら下がって、よくみると、その表面がヌラヌラと波動しているのだ。——それは、蛇のかたまりであった。

「あれは、蛇香苔（じゃこうたい）ってえ苔を玉にして、マキスイをしみこませたもんだ。マムシが気のちがうほどの大好物だから、あの通り集まってとりついている。——が、てめえら、へたに騒ぐと、ここからマキスイをあびせてやるぞ。そうすりゃ、てめえらもあの苔のかたまりみてえになる」

だれか、ひしゃくをつき出したやつがある。

それが、ただのおどしでないことは、さっき外で見せられたおぞましい蛇の狂乱ぶりからも認めないわけにはゆかない。

「ま、しばらくはそこに立って、マムシとケンカしてやがれ。あははは」

あんどんが、ひっこんだ。

周囲は暗くなり、ただ数千の蛇の這うざわめきだけが迫ってきた。

二階も、しかし何やら騒然としている。何か、談合しているらしい。酒でも飲んでいるような高笑いの声もする。

そして、半刻ばかりすると、またそこからはしごが下りてきて、さっき上っていった人数の——あとから考えると、三分の二くらいが、ぞろぞろと下りてきた。四、五人、ちょうちんをぶら下げている。

ちょうちんのみならず、その赤い灯に、数本、抜身をひからせているやつもある。

——きやがったか！

龍次は髪の毛を逆立てて、細い竹の棒をとりなおした。

「やい」

声をかけたのは、赤蛙の凶兵衛であった。

なんとその肩から首へかけて、何匹かの蛇がまといつき、そのうち二匹ばかりは、投頭巾の上に、ニョロニョロとかまくびをもたげている。——魔神さながらの姿だ。

「これから、ちょっと出かける。——もう清水一家の連中は、四日市にはいっているだろう。あしたは荒神山で大デイリとなるはずだ。夕方までにはカタをつけて、ここへ戻ってくる。それまでここで、マムシと遊んでろ」

「なにっ」

おどりかかろうとする龍次の前に、ぐいと白刃がつきつけられた。——犬神軍次郎だ。彼はもう右腕を布で吊ってはいない。

「いずれ、相手になってやる。何なら、お前の刀を拾ってきてやってもいいぞ」

「あした帰ってきたらな、その花嫁が蛇にまといつかれて、のたうちまわるところを、たっぷり見物させてもらうぜ。てめえをたたッ斬るのはそのあとだ」

祐天が顔をつき出して、

「おれたちゃ一晩留守にするが、あと二階にゃ留守番の連中も残ってるからな。——おい、こいつらが苦しまぎれにへんなまねをしたら、かまうことァねえ、そこからマキスイをかけてや

れ」

と、天井の穴をふりあおぐと、

「合点だ！」

と、そこから二つ三つ出た首がさけんだ。

そして、はしごはまた、すうっと二階にひきあげられてしまった。二階がある以上、この蔵にもともと階段がとりつけられていたのだろうが、それをとりはらってはしごに変えたものらしい。いうまでもなく、蛇が上らないようにするためにちがいない。

赤蛙の凶兵衛が、また口笛を吹いた。すると、ざわめいていた蛇たちが、ぴたっと動きをとめた。

――どうやら凶兵衛は、口笛で蛇を使うらしい。

そのまま彼らはぞろぞろ歩いていって、土戸をあけた。外はもうまったくの夜となっているようだ。そして、とじられた土戸に、外からかきがねをかける音がした。

それまで手ぶらの龍次は、歯がみしながらも彼らの抜身に制圧されて、どうすることもできなかった。――

二階の穴からぼうと灯影はさしているが、身のまわりは闇黒にもどった。そしてまた蛇がざわめき出した。

「すみません、龍次あにさん……」

あえぐように、おりんがいった。

「あたしが、とんだおせっかいをしたばかりに、こんな目にあって……」

おりんが、お勢の身代わりになって、こんどの行為にのり出したことをいっているのだ。

「そ、そんなことがあるもんか。おいらが護り手としてついていながら、手もなくこんなところへ連れこまれたのが、お、おおまぬけだ」

龍次はまた歯がみした。彼は、おりんの思いつきが、ただ「俠」の一文字によるものであることを知っている。

「しかし、そ、それにしても、うまく罠にかかったもんだなあ。……」

それは、穴太徳の家で、敵に裏をかかれてまんまと罠にはまったことを知って、お勢が身もだえしたのとほぼ同時刻であったかも知れない。――

「それにさっき、お勢さんがあたしたちのあとで、穴太徳のところへ連れ出されたとか何とかいってたわ。あたしたちのやったこと、何にもならなかったんだよ」

おりんは龍次にすがりついた。

「いいえ、何もしなかったより、まだ悪いことになっちまった。――あたし、死んじまいたい！」

「ば、ばかいっちゃいけねえ」

龍次は、怒りのために胴ぶるいした。

「死ぬのァいいが、マ、マムシにかまれて死ぬのァいただけねえよ。――あした、あいつら帰ってくるといったな。そ、そのときまで待て。――おれが、あいつらをみな殺しにしてや

る！」
しかし、そのときどうなるかは別として、そのときまで耐えられるのか。
「ただしかし、おれの気にかかるのは、あ、あした荒神山で大デイリとなるらしいが――こ、このままじゃ、それにおいらが出られねえことだ！」
「やいやい、何をわめいてやがる？」
天井の穴から、またあんどんがつき出されて、一人ではない声がふってきた。
「少しマキスイをひっかけて、蛇踊りをやらせてやろうか？」
「てめえたちもだぞ、あははは！」
――龍次やおりんはどこへいった、というお勢の問いに、穴太徳はうす笑いして、「地獄へ」と答えたが、それは冗談ではなく、まさしくここは身の毛もよだつ人外の地獄であった。
龍次はうめいた。
「しかし、あの赤蛙の凶兵衛って野郎は、へんなやつだなあ。あんな化け物がこの世にいようたァ考えたこともなかったぜ！」

七

――赤蛙の凶兵衛は、穴太徳の乾分たち、自分の配下の香具師、それに祐天仙之助や犬神軍次郎までつれて、赤蛙の鳴きわめく赤蛙の池をあとに、闇の中をいそぎ足で歩いていた。四日市へ向かってだ。

――彼は三河の横須賀の貸元都田の吉兵衛の弟であった。本名を留吉という。
七年ほど前まで、都田一家は横須賀かいわいはもとより、飛び地の秋葉山のタカマチまでも縄張りとするほど羽ぶりがよく、長兄の吉兵衛、次兄の常吉とともに「都田の三兄弟」と呼ばれたくらいだから、彼もやくざ渡世の手伝いをしたことはいうまでもないが、そのほかに彼は特別の趣味を持っていた。
生まれついての爬虫類好きなのだ。特に、蛇が好きだ。
背こそ高いが、ヒョロリと痩せていて、蠟のような顔色をして、「都田の三兄弟」とは呼ばれるものの、やくざとしては影のような存在であったが――六年前、彼らが清水一家の森の石松という男を闇討ちにして、その翌年、親分の次郎長たちに吉兵衛と常吉を殺されてから、一念発起した。仕返しである。
といって、長脇差をもって、ではない。そのころから、めきめきと強大さを増した清水一家に対して、そのほうでは自信がない。
彼が思いついたのは、マムシを武器とすることであった。
もともと都田一家は遠州の都田の生まれだ。その昔、三方ケ原でせっかく信玄が家康を破りながら、惜しや死病を得て軍をとめてしまったのが都田川のほとりだが、その信玄の陣の跡と伝えられる場所に、少年時代留吉は、おびただしいマムシが棲息しているのを発見し、それはそこだけにいるイモリの腹のような色をした蛙を好むせいであることを知った。
兄たちが殺されたあと、彼は逃亡して香具師の仲間にはいった。

それまで影のような存在であったために、次郎長たちはこれを見のがし、そのうち忘れてしまった。

遠州都田は、秋葉山とともに、すでに次郎長の息のかかった吉良の仁吉の縄張りにはいっていたが、留吉は香具師として漂泊中、偶然この勢州四日市に近い荒神山のふもとに赤蛙の池という池があり、そこに都田川と同じ赤蛙と、やはりそれを好むマムシがおびただしく棲息していることを知った。

で、ここで苦心の「大研究」をして、その赤蛙を材料にマムシを狂乱させるマキスイなる秘薬を作り出し、これを餌にしてマムシをあやつる芸を体得したのである。

彼はみずから「赤蛙の凶兵衛」と名を改めた。凶兵衛とは、殺された兄の吉兵衛の恨みを忘れぬために、その名を裏返しにしたのだ。

欲すれば彼は、マムシを使って、呪う相手に危害を加え、殺すことさえできる。――これを彼は、なんどか香具師仲間に適用した。

右のような由来はだれも知らなかったが、凶兵衛をただの蛇使いではない、何ともおっかないやつだ、といううわさは香具師たちの間でささやかれ、彼を敬遠する連中が多かったが、中には彼にくっついて乾分となる香具師も何人かできた。

凶兵衛の狙いは、清水一家への復讐と、ゆくゆくは香具師の世界の制覇だ。

そのために彼は、さしあたって伊勢の新興の貸元穴太（あのう）の徳次郎と組んだ。

香具師とばくち打ちが組むことは、どっちからもそっぽをむかれるのが常道だが、この場合、

凶兵衛は、荒神山のふもとの赤蛙の池のそばに「研究所」を作る必要から、穴太徳（あのとく）の庇護の下にあることが得策だと認めたのだ。

一方、穴太の徳次郎のほうは、いちおうライバルの神戸（かんべ）の長吉を追い出したものの、どうせその兄弟分の吉良の仁吉、さらにそのうしろにいる清水一家と遠からず決戦せずにすまされないし、とくに次郎長を相手にする以上、なみの法をもってしては対抗できないと考えたのだ。

両者の敵は清水の次郎長だということで話は一致した。

そのために穴太徳は、去年の夏、凶兵衛のためにひそかに赤蛙の池のほとりに蛇を飼う土蔵二つまで作ってやった。

凶兵衛が、赤蛙と蛇香苔（じゃこうたい）をすりつぶして水で溶かし、そのうわずみか、またはそれをかわかした粉をめざす人間になすりつけてマムシをはなつと、マムシはきっとそこにかみつく、という秘法を完成したのが、去年の秋のことだ。

で、ちょうどそのとき、穴太徳と神戸の長吉の間であわやはじまろうとする大デイリの前夜、ためしにこれを神戸方の用心棒の侍三人に――前の日、居酒屋でそれとなく塗りつけて、夜マムシをはなったところ、その夜一人は悶死し、二人は行動力を失ってしまい、そのために長吉はケンカを捨てて逃亡するのをやむなきに至った。

――思えば、あとでその話をきいたヒゲ万先生の推理はあたっていたのである。

さて、その後だが、冬場にはいると蛇が冬眠にはいるので、いかな凶兵衛もどうすることもできない。師走の秋葉山の祭りなどは、ちょいとのぞきにいったが、まあ待機といった状態で

過ごして、さてこの春になってうごき出した。彼がなんどか「春になれば……」と、つぶやいたゆえんだ。

穴太徳が、神戸の長吉をかくまう吉良の仁吉に、こんどふたたびケンカ状を送ったのはそのためだ。

それがただのケンカ状ではなく、お勢をよこすならケンカはやめる、という条件をつけたのは、もし吉良方がそれを受けいれるなら、穴太徳が前親分の娘を手中にして荒神山を正式に乗っとる旗にしたいという目的とともに、赤蛙の凶兵衛の異常な望みからであった。

この男が、お勢を欲したのだ。

彼はただ蛇を愛するのみならず、蛇にまといつかれてもだえ苦しむ女を見たいという願望の持ち主であった。

で、これまでにも、ちょいちょいそれを試みたことがある。そして、それは女が美しいのみならず、その女があるいは気丈であり、あるいは才たけており、あるいは清純であればあるほど、こちらのたのしみもまた深い、ということを知った。

もっとも、侍の娘などは、凶兵衛の育ちからしても望みの圏外にある。

こうして、なんどか見たお勢という女人が、さしあたっての彼の標的となったのだ。

ここでも、穴太徳の望みと一致したわけだ。

さて、こんどまず手に入れたのはお勢ではなく、思いもかけなかった飛び入りのおりんという娘だが——これはこれで悪くないと思う。

凄艶と野性美と、美しさの性質は異なるけれど、大前田の栄五郎の娘だということ、いつか秋葉山で見た——またこんどのことで見た彼女の気丈さ、など、充分条件に合う。

しかも、その娘がすでに手中にはいったというのに、本来のお勢もまた穴太徳の家にとらえられたのだ。両手に花、とはこのことだ。

が、その二つの花を地獄に咲かせるたのしみは、まあ、あさって以後のこととして、その前にやらなければならないことがある。

あしたの荒神山のデイリだ。助ッ人(すけと)の清水一家をみな殺しにして、兄たちのかたき討ちをすることだ。

次郎長自身が来ず、ただ十三人の乾分をよこしたというのは残念だが、いずれそのうち次郎長もやっつけてやる。いまはただその十三人を仕止めることに全力をあげるよりほかはない。

そのための手は、ちゃんと打ってある。

今夜、四日市にはいる吉良や清水の連中に、このごろ町を騒がせている例の「えじゃないか踊り」にまぎれて、あのマキスイをできるだけ彼らにこすりつけることを乾分に命じてあるのだ。

——実は、同じことをあの国定龍次にも試みて、これはうまくゆかなかったらしいが、あいつはどうせ赤蛙の池へ連れこまれることになっていたのだから、それはまあいい。

まさに、魔風をひく、という感じで、赤蛙の凶兵衛とその配下は四日市へ急行した。

ついでにいえば、祐天仙之助と犬神軍次郎は、凶兵衛が都田の留吉といったころからの顔見

知りで、彼らが穴太徳のところでわらじをぬいでいるうち、荒神山をめぐる一件を知り、国定龍次がお勢の用心棒となっていることを知り――かつは、赤蛙の凶兵衛の怖るべき術を知って、いまは穴太徳より凶兵衛のほうの乾分、よくいって客分となったものだ。

八

四日市にはいったのは、夜もだいぶふけてからであった。

ここ数日――きょうも例の奇妙な集団舞踏に波打った町も、さすがに人通りは絶えてしんかんとしている。

吉良一家や清水一家が、納屋町のいわし屋というはたごに泊まることも事前に探っていた。

そこへ近づくと、大きな天水桶のかげから三つの影が現れた。凶兵衛の乾分(こぶん)たちだ。

彼らは、敵の一行が夕方いわし屋にはいったことを告げ、それまで路上をうずめる例の踊りにまぎれて、かねて命じられていた通り、できるだけマキスイを塗りつけてやることに努力したが、清水一家のやつらは、大政という野郎がばかに用心深くギロギロと眼をひからせていて近づきにくく、その作業が思うようにゆかなかった、と報告した。

乾分の香具師(やし)たちはまた、いわし屋に泊まってから敵の数人は、中町の那古屋をのぞきにいったり、浜町の穴太(あのう)の家を探りにいったりしたようだが、結局要領を得なかったらしい、と笑いながら報告した。

「そうか。……なに、今夜みんなマムシでやっつけちゃあかえって都合が悪い。どうしてもあしたのデイリでたたきつけるのを、天下の渡世人に見せてやらなけりゃならねえんだ」

と、凶兵衛はうなずき、

「ま、それにしてもできるだけ痛めつけておいてやろう。いわし屋はどこだ?」

と、いった。――

それからしばらくして、いわし屋の中から、怖ろしいさわぎが持ちあがった。「蛇だ蛇だ!」「マムシだぞ!」というさけびが聞こえた。

その混乱の物音をあとに、ニヤリと一笑して凶兵衛一行は浜町の穴太の徳次郎の家に向かう。

大戸も雨戸も閉じ切って、表には灯ももらさず、しかし奥のいくつかの座敷をぶちぬいて、そこでは穴太一家のおもだった連中が、長脇差(ながどす)の目釘(めくぎ)をたしかめたり、竹槍をけずりなおしたり、明日の大デイリの支度に余念もなかった。中に、おどろいたことに、油布で鉄砲をみがいているやつさえある。

むろん、酒をのんでいる連中もあって、

「おう、犬神先生、ここへござれ」

大盃をあげ、まっ赤な顔で呼んだのは、穴太の用心棒角井(かどい)門之助だ。

彼らはすでに知り合い、おたがいの手並みを認め合っていたのである。

「いや、事前に赤蛙のあにいなど、敵の戦力を減殺(げんさい)すべくいろいろ御苦心のことだが、拙者は、まあ、いらざる手間ひまだと考えておる。敵は三十何人かというではないか。こっちは百三十人、勝負にならんじゃないか」

犬神もどっかと坐って、盃に酒を受けながら、
「同感じゃ、渡世人三十何人など、あんたとおれだけでも大丈夫じゃないか、わははは！」
と、大笑した。
赤蛙の凶兵衛は穴太徳（あのとく）に、赤蛙の池でのいきさつ、また先刻、いわし屋にしかけた始末など報告したあと、眼をひからせて、
「ところで、おれの花嫁御寮はどうしましたえ？」
と、きいた。
「あっちだ」
と穴太徳はあごを振り、乾分に案内を命じたあと、
「いくらなんでも、今夜はいけねえぜ」
と、釘をさした。ちょっとふきげんな表情をしていたのは、さすがの彼も、こんな化け物野郎にあの娘をゆだねるのか、というくやしさがきざしたからにちがいない。
「まさか……しかし、あしたの大デイリの決着がついたあと、すぐに赤蛙のほうへ連れてってようござんしょうね？」
と、凶兵衛はニヤリとした。
乾分に、さらに奥座敷に案内させる。
そこの隅に、別の乾分二人に見張られて、うなだれてお勢は坐っていた。凶兵衛がはいっていっても、頭をあげようともしない。

「お嬢さん……香具師の凶兵衛でござんす」
彼はその前にしゃがみこんで、
「おめえさんを花嫁にもらうのは、実はあっしでござんすよ。おききなすったかえ？」
と、いって、相手のあごに手をかけて、あおのかせた。
魂のない女のように首をたれていたお勢は、近ぢかと寄せられた凶兵衛の顔を見て、さっと頬を紅潮させると、
「けがらわしい！　おさわりでない！」
さけぶと、白い手がしなって、ピシャリと凶兵衛の頬が鳴った。
「何するんだ」
さけんだのは、凶兵衛ではない。あわててあがろうとした見張りの乾分だ。
「まあ、いいってことよ」
赤蛙の凶兵衛は、細い舌をチロッと出して笑った。
「こういうおきゃんな女を、蛇責めにしてみてえってのが、おいらのウズウズするほどの望みなんだ。えへへへへ……」

九

その夜が明けても、納屋町のはたご、いわし屋はなお大騒動であった。
泊まりこんでいた吉良一家――仁吉も神戸（かんべ）の長吉もふくめて――十八人のうち、三人が死に、

五人が重態となり、助ッ人の清水一家十三人のうち、法印の大五郎がフラフラの状態となっていた。

「またやられた！　蛇を使ったのァ、あの赤蛙の凶兵衛にちげえねえ！」

と、長吉は悲鳴をあげた。

「それを知っていながら、またやられたとァ、とんだドジだなあ！」

清水の大政も長嘆する。

吉良の仁吉も、呆然自失といったていだ。特に彼を打ちのめしたのは、用心棒にやとった二人の浪人が――はじめ四人いたのが、事前に二人逃亡した――逃げずに同行してくれただけあって、腕もたしかだとヒゲ万先生が保証してくれたが、それが一人死に、一人は痛みにまだうなりつづけというていたらくになってしまったことであった。

そのヒゲ万先生は同行していない。

威勢のいい国定龍次は、天に消えたのか、地に消えたか。――

――その龍次とおりんの消息が、さあわからない。どうやら計画通り、二人は穴太徳（あのとく）のところへ乗りこんだらしいが、それからどうなったか不明だ。いっしょについていったあとのつきそいたちを、中町の那古屋に訪ねて問いただしたが、途中、町の踊りの中にはぐれて空しく帰ってきたというばかりで、要領を得ない。

おまけに、そのあとお勢も穴太徳からの迎えのかごに乗っていったという。

いちおう穴太徳のほうを探ってみたが、その家は黒々としずまりかえっているし、近所の人

にそれとなくきいてみたが、何の異変も起きたようすはない。

おりんの計画では、お勢に化けて乗り込み、例の大前田の栄五郎の足型でおどすか、事と次第では穴太徳を刺すということであったが、あのあばれん坊の国定龍次もついているはずなのに、池に投げこんだ石ほどの波も立った気配（けはい）はない。

然るべき騒ぎがあったのなら、そのままただちになぐりこみをかけるつもりだったのだが、おりんや龍次、またお勢の安否がかいもく不明なので、とっさにどんな手を打っていいのか、見当もつかない。

で、狐につままれたような思いで、ともかく寝について――さて、この惨害に襲われたのだ。

あらためて、仁吉がうめいた。

「ひ、卑怯なまねをしやがる！」

「ぶじなのは、こっちが十人、清水の衆が十二人、合わせて二十二人……百三十がん首をならべてるってえ穴太方（あのう）に、三十人くれえの人数で立ち向かうってえのが、そもそもムチャだと思ってたのに、それが二十二人になっちまったじゃあねえか！」

と、長吉も声をふりしぼった。

「これじゃ、どうにもならねえ。大政のあにい、どう思う？」

「どう思うって、お前さんはどう思いなさるんだ」

さしもの大政も、少なからず気勢をそがれた顔だ。

「だからよ、まことにくやしいが、ここはいちおうひきあげる……」

「お勢さんを向こうにとられたままでか？」

仁吉は血相変えて、

「ば、ばかな！　そんなまねができるか。おい、神戸の——そもそもこんどのケンカのこっちの名目人はおめえさんだぜ。そのおめえさんが弱音を吐いちゃどうにもならねえじゃあねえか。助ッ人のおれだって、ここで逃げ帰ったら、渡世人の世界に二度とつらは出せねえ」

それはその通りだが、彼としてはもうなかば恋女房のつもりでいるお勢への思いもあったろう。

「大政どん、おめえさんたちだって……清水一家の顔もつぶれるだろうが」

「つぶれる、つぶれる！」

「逃げるなんて、まっぴらだ！」

声をそろえてさけんだのは、小政と追分の三五郎だ。

「穴太方だけならまだしも、おれァ敵に香具師(やし)がからんでるのが気にかかるな」

と、大政は首をひねった。

「その赤蛙の凶兵衛ってえやつが、香具師のどれほどの人数とからんでるか、そこをたしかめねえと。……」

大政がこんなことをいったのは、実は彼はこのさい清水一家の勢力を伊勢までひろげる絶好の機会だと見たのだが、東海道一円の貸元たちの眼をはばかる次郎長がまだ気乗りうすで、こんどこのことに十三人しか助ッ人を出さなかったのはそのためだ。この十三人は大政に賛成の

連中で、大張り切りであったが、清水を出るとき次郎長から、ただ向こうに香具師が大々的にからんでいるようなら、すぐにひきあげろ、と強くいわれてきたのだ。

「勝ち目のねえケンカを買って出るのァとんまだよ。あらためて出なおしたっていいと思うんだが……」

と、大政がつづけ、

「それじゃあお勢さんを見殺しにしろってえのか！」

と、仁吉が顔を真っ赤にしてさけんだとき、遠い外で、

「やい、吉良、清水の野郎ども——」

と、呼ばわる声が聞こえた。

「御当所穴太の徳次郎からの口上だ。きいてるか？」

「おうっ」

みんな、われにかえり、はね上がり、戸口に殺到した。

十

声だけがとどくずっと向こうの往来に、四、五人の男の影がならんで、

「きょうが荒神山のケンカの日だってえことは知ってるな？」

と、その一人がいった。みんな向こう鉢巻、なわだすき、手甲(てっこう)きゃはんに長脇差(ながどす)をぶちこんだケンカ支度だ。

「知ってらい！」
と、小政がどなり返し、そのうしろから、
「知ってるが――」
と、大政が顔を出した。
「黒田屋の娘さんはどうした。それをさらっておいてケンカとァ、約定がちがうじゃあねえか？」
「約定を破ったのァどっちだ」
べつの声がわめき返した。
「はじめにニセの花嫁をよこしゃがったのァそっちじゃあねえか！」
とっさには、グーの音も出なかったが、そうはならじと、
「おうっ……そのニセの花嫁はどうした？」
「約束破りだから、たたっ殺した」
「なにっ？」
「それより、こっちの口上をきけ！」
相手は呼ばわった。
「きょうも荒神山は祭りだ。祭り見物にきた衆をケンカにまきこんじゃいけねえ。荒神山の裏手にもう一つ名無しの小山がある。この中腹に五本、大きな杉が生えている。そこに当方は前親分の娘お勢を旗として待つ。それをとり返されたらこっちの負け、護りぬいたら荒神山の縄

張りは穴太のものだ。勝つも負けるも、祭りにきた衆みんなの眼の前の大デイリだ。時刻は午の刻。――」
正午だ。
「わかったな？」
「わかったっ」
往来の向こうの男たちは、身をひるがえしてかけ去った。
しばらく、みんな、しんとしていた。
「わかったって……やっぱり、やるつもりかえ？」
と、長吉が胡瓜みたいな顔をむけた。
「やる！」
と、大政がうなずいた。さっき慎重論をのべた大政だが、別人みたいにサバサバした顔をしている。
「あれまでの口上をきいた上は、清水一家としてひっこんじゃあいられねえ。それにな、あの大前田の栄五郎の娘さんと国定の龍次どんが殺られたという。いよいよもってこのまま逃げ帰るわけにゃゆかねえ」
「そうだ、そうだ！」
と、桶屋の鬼吉と増川の仙右衛門が武者ぶるいすると、
「大政のあにいともあろうお人が、いまごろ何いってるんだ。そんなことァはじめからきまっ

てるじゃあねえか！」
と、小政が吐き出すようにいい、マムシにかまれた痛みで、坊主頭に鉢巻をして壁にグッタりもたれかかっていた法印の大五郎までが、
「おいっ……ゆくなら、おれもゆくぜ！　おれをおいてけぼりにすると、承知しねえぞ！」
と、向こうから声をかけた。
　さて、吉良の仁吉がかいた荒神山一帯の地図をかこんで、地形のあんばいをきく。あらためてこのデイリの大体の作戦を練る。
　敵は百三十人という。そこに二十二人はせ向かうのだから作戦もへちまもないが、とにかく敵の大将穴太徳（あのとく）には、神戸（かんべ）の長吉と吉良の仁吉がかかる。そして仁吉は、敵が——旗にするといったが、ほんとうは人質にちがいない——お勢を救出する。
　穴太徳方はいちばん頼りにしているのは、用心棒の角井（かどい）門之助と思われるが、これには大政が相手となる。
　穴太（あのう）勢一般には吉良一家と清水一家がかかるが、万一敵に香具師（やし）が加わるときは、手として清水一家がこれを処理することになる。
「殺すなよ、香具師とはやりたくねえ、というのが次郎長親分の御意向だ」
　大政はくりかえして釘を刺し、
「が、なんたってこの大デイリのこっちの大将は、神戸の——あんたですよ」
と、長吉の背をどんとたたいて、

「しっかり、頼んますぜ」
　長吉は眼を白黒させて、
「し、しかし、そう陣くばりしたって、そ、そんなにうまくゆくかねえ？」
「いや、みんな死にますね」
　大政は平然としていう。
　長吉は悲鳴のように、
「みんな死んじまったら……勝負は負けということになるじゃあねえか」
「なに、そうなれば清水から、次郎長親分が乗り出してくれるでしょう。次郎長親分が必ずかたきをとっておくんなさる。そこは心残りなく成仏（じょうぶつ）して下せえ」
「そ、そんなことをいったって……それじゃあ、なんのために荒神山を……」
　小政がどなりつけた。
「もうツベコベいってる場合じゃあねえ。さあ、みんな支度にかかれ！」
　これまたみんな、向こう鉢巻に縄だすき、長脇差に、大政のごときは、鞘（さや）こそはめているものの槍をひっかかえて立ちいでる。
　外はもう、きょうも例の、えじゃないか、えじゃないか踊りがはじまっている。
「ええじゃないか、えじゃないか
　穴があいても、えじゃないか
　おかげ参りは、穴あけ参り

あけば紙貼りゃ、えじゃないか
ええじゃないか、えじゃないか」

町をゆく殺気みなぎる長脇差集団も眼中にないかのように、酔っぱらったように手を泳がせ、足を泳がせて踊り狂っている。

「へんなものがはやり出したもんだ」

と、この場合に、呆れたように小政が舌打ちした。

「何でも、お伊勢さまのほうからはやり出したらしいってえことだ」

と、大政がいった。宿の者にきいたらしい。

「お伊勢さまのほうからやってきたにしちゃ、ふざけた文句じゃあねえか」

「いや、面白え歌だ」

と、笑ったのは桶屋の鬼吉と大瀬の半五郎で、

「けんどよう、同じおてんとさまの下で、踊りまくってるやつがありゃ、殺し合いにゆくやつもある。なんだか世の中狂ってるねえ」

と、哲学をのべたのは、右の両人に両側から抱きかかえられている坊主頭の法印の大五郎だ。

こんな太平楽な問答をかわしながら行くこの一団の中で、鉛色の顔をしてだまりこんでいるのは、きょうのデイリの名目人のはずの神戸の長吉一人であった。

すぐに四日市の町を離れたが、人波と踊りの行列は絶えない。人波のほうは、ゆくての荒神山がお祭りだからだろうが、えじゃないか踊りは、きょうはそっちにもぐりこむつもりらしい。

それでも、

「やっ、デイリだ！」

「渡世人のデイリだ！」

と、踊りとは別のこの異風の一行を認めて、ようやくざわめきが高くなった。町のほうに戻る連中で、またそっちへひき返して走るむれもある。

やがて踊りの連中もひき離して、西へ、西へ、西へ。——

彼らが荒神山の麓についたのは、おひる前であった。

参道の両側には幟（のぼり）がはためき、香具師の見世々々がならんでいる。これなのに、ふしぎにここは人影もまばらだ。見世はほうったらかしで、売り手のいない見世もある。

その参道を、さすがにここに来て、眼をつりあげた吉良一家、清水一家ははせのぼった。

十一

この日、慶応二年四月八日。

「来たっ」

「来た来たっ」

「ケンカの相手がきたぞっ」

山に、どよめきがあがった。

参道はおろか、山頂にある日本武尊を祭る神社の境内一帯にも、ほとんど人影がなかったの

もむりはない。お祭りに来た連中は、みんな山の裏手をスタンドにして、これからはじまるやくざのチャンバラ・ゲームを観戦するつもりでいるのだ。

それも道理、山の裏側を下りると、向こうにまた一つ小高い山があり、その間の両側は、つつじの群落を散らしたなだらかな斜面になっている。四月八日といえば、のちの暦で五月はじめだから、つつじはいま盛りで、いたるところ燃えあがる炎のようであった。

その中に、すでに白刃をぬきつれた渡世人がケンカ支度で雲集し、ゆくての山の中腹に、ひときわ高い杉の木が五本そびえている。そこが待ちかまえているやくざの本陣だと――四日市の親分、穴太の徳次郎の本陣だと、それまでの展開の経過から、見物人たちはもう知っている。

その敵を、荒神山の上から、吉良一家、清水一家あわせて二十二人は見下ろした。――なるほど敵の百三十人は嘘ではないらしい。

「ゆくぞ！」

と、大政が大音声で呼ばわった。

「おうっ」

けだもののさけびをあげ、大政を先頭にこちらの一団は山をはせ下った。

こうしていわゆる荒神山の血戦の幕があがった。

信心篤い人々にとって、四月八日は花祭りの日だが、このやくざの世界では血の花祭りの日。

吉良・清水方は、そのまま狼群のように向こうの山へはせ上ろうとする。その両側から、穴太方が、これもけだものの咆哮をあげてつっこんできた。

たちまち斬り合いがはじまる。

大政の下知で、こちらは最初バラバラになることを極力避けた。吉良組、清水組と大ざっぱには分かれたが、それぞれ集団を作って、車輪のごとく前へつき進む。それが、いやその強いこと。――

つつじの花をひとつかみにひっつかんで投げたように、山の斜面に鮮血がふりまかれるが、それはほとんど穴太方であった。

それは個々の強弱というより、覚悟のせいであったろう。吉良・清水がはじめから決死であるのに対し、なまじ二十二対百三十という大差があるだけに、穴太方はその人数をたのみにした連中が多かったのだ。

「それゆけっ、丈八……藤五郎っ」

杉の中からの穴太徳の号令に、つつじの中から第二陣がむらがり立つ。

「そらまたあらわれたぞっ」

「同じ人数でやれっ」

「卑怯っ、卑怯だぞ、穴太徳っ」

わめいたのは、吉良・清水方ではない。荒神山から鈴なりになって見下ろしている見物の連中だ。彼らはみんな、人数の少ないほうに判官びいきになっていた。

天下の眼の前で、吉良・清水方を撃滅する、というのが穴太徳の方針で、こちらの人数も事前に通告してある。敵が少ないのは向こうの勝手だ、と思っていたが、いざこの場になって、

天下の眼の前で六倍ぐらいの人数でみな殺しにすることに気がさして、吉良・清水方とあまり変わらぬ数でまずかからせたのだが、その第一陣が惨敗したのに大いにうろたえ、第二陣に下知を下したのだが。——

が、血の旋風が渦まいたのち、これまたさんざんに斬り散らされた。——

むろん、みながみな斬り殺されたわけではない。屍体はいままで四つ五つころがっているだけだが、十数人、重傷軽傷を受け、さらに残りの連中は吉良・清水方の猛気に浮足だって、へっぴり腰で遠巻きにして、ただわめいているありさまになったのだ。

「さあ、ゆこうぜ！　穴太徳退治に——」

と、吉良の仁吉はさけんだ。

「待った……おい、神戸のがいねえぞ」

と、大政がまわりを見まわした。

「なに、神戸のが？」

なるほど、一息いれている吉良組、清水組の中に、神戸の長吉の胡瓜みたいに長い顔はどこにも見えない。

小政がいった。

「あれれ、さっき、荒神山のてっぺんにはいたが——」

「こっちの名目人がいねえんじゃしかたがねえ。おい、そのへんのつつじの蔭にでも倒れていねえか、探してみな」

「いや……そういわれてみりゃ、さっきからの斬り合いでも、どうも見かけなかったようだぜ」

「ははあん？」

首をひねっている大政に、仁吉はいらだった顔で、

「もう神戸なんかいてもいなくってもおんなじだ。これァおれのケンカだ。あそこにお勢さんがいるはずだ！」

と、血走った眼を前方の杉木立へ投げて、

「みんな、ゆかなきゃ、おれ一人でもゆくぜ！」

と、長脇差をとりなおした。彼の何よりの気がかりはそれなのであった。

十二

「待て待て」

大政はなおとめて、

「ちょっと向こうもひるんでるようだ。この間にこっちの手負いも手当てして、それからまたとりかかろう」

実際、味方も血みどろであった。血闘のひぶたを切ってから、かれこれ半刻ちかく経過していた。

大政の配慮で、陣中こうやくなんてものも持参していた。それで手当てしていると、

「おういっ、何してる？」
「こういう勝負事はやくはじめねえか！　早くやれっ」
と、荒神山の見物席から声がかかる。
すると桶屋の鬼吉が、どなりかえした。
「よう、そっちにムスビか何か持ってるやつァいねえか。腹がへったよっ」
四日市のはたごを立つ前、飯は食ったが、それからここへ急行し、さらに半刻ちかくあばれまわったので、そういわれるとみんないささか空腹になっていた。
「よしきたっ」
「待ってろっ」
そんな声が返ってくると、しばらくして四、五人の男が山をかけ下りてきて――さすがにそばまでやってこない。七、八間はなれたところから、おっかなびっくり竹の皮包みやら、ひょうたんやらをいくつか投げて、また一目散に逃げもどっていった。お祭りでは弁当持参の人々も少なくなかったらしい。
まもなく、こんどは女の声がながれてきた。
「みなさま、これよりお昼休みといたします。おそれいりますが、しばらくお待ち下さいまし。――」
ウグイス嬢も出現したと見える。

――こちらの杉木立の中では、
「あんなところで飯を食うたァ、人を喰ったやつらだなあ！」
床几に腰をかけた穴太徳が、蟹みたいに顔を真っ赤にして、わけのわからない対句のような言葉を、泡といっしょにかみ出した。
「それにしても、味方もダラシのねえ野郎どもだ！」
にくにくしげに左右をふりむいて、
「そろいもそろってよ！」
と、うめいた。
左手には、用心棒の角井門之助が立っている。あっちこっち、用心棒をして流れ歩いているが、どこでも怖ろしく腕が立つといって評判の男だ。
右手の杉木立のやや奥には、赤蛙の凶兵衛以下十数人の香具師たち、その客分の祐天仙之助や犬神軍次郎がひかえている。
それから――下からはちょっと見えないが、杉の木の上では鉄砲をかまえているやつが三人いるはずだ。
香具師たちは円陣を作って、その中の杉落ち葉の上に、首うなだれて坐っているのはお勢であった。
最初、単身自分が乗り込んで穴太徳を刺す、などといい出した勇ましいお勢だが、それがこんどのケンカのこちらの名目人にされて、どうすることもできないのだから、まったく悲劇的

だ。それどころか彼女は、自分自身の発意から、おりん龍次を殺してしまい、この破滅的な大デイリを迎えることになってしまったと思いこんで、いまなお半失神状態にあった。
さて、先刻吉良・清水方が向かいの荒神山の裏手をかけ下ってきたとき、手に唾してすぐにそれに向かおうとした角井門之助を、
「先生、ちょいと待っておくんなさい」
と、とめたのは穴太徳自身であった。
「味方はこれだけの人数だ。お侍の手をかりなくったって、何とか始末がつくでござんしょう」
その自信もあったが、この角井門之助は、その腕前こそ評判は高いが、それでいてあちこち流れ歩いたというのも、あまりの強欲と凶暴さを、みな持てあましたからであった。ここで手柄を一人占めにされては、あとの手当てが怖ろしい。
その穴太徳の心事を見ぬいたか、角井はうすら笑いを浮かべて、
「わかった。それじゃしばらく穴太一家の手並みを拝見しよう」
と、うなずいた。——
そしていま、味方の大難戦を見ても、ふところ手の手を出そうともしない。
「先生。……」
この間、二、三度、哀願的な眼をむけたが、それには風馬牛で、
「なるほど、さすがは清水一家のめんめんだ。一騎当千だな。とはいえ、みなメチャクチャのやくざ剣法だが、ただ一人、槍を持ったやつ、あれが大政だろう。あれは大した腕だぞ」
と、元プロの解説者のような批評をもらし、
「それにしても、元禄のむかし話は知らず、吉良の助ッ人の清水一家クが穴太浪士を負かすとは面白い」
と、この男にしては秀逸な諧謔を口にした。
「あっ、とうとう弁当を食っちまいやがった。さあ、こっちへ来ますぜ……先生！」
穴太徳は悲鳴のような声をあげた。
「先生、ひとつ手並みを見せておくんなさい！」
「よしっ」
角井門之助は、はじめて大刀のつかをたたいた。
「では、やるか」
「角井さん、手伝おうか」
と、犬神軍次郎が声をかけた。
「いや、一人でたくさん」
昨夜は角井に、「渡世人三十何人など、あんたとおれだけでも大丈夫じゃないか」と豪語した犬神だが、
「しかし……あっちは、ともかくあれだけおるのでござるぞ」
と、いちおう注意を喚起した。角井門之助は一笑した。

「なに、あの大政さえ仕止めれば、あとは有象無象じゃ」
「そりゃ、まあそうだ」
「ところで、親分」
角井は首をまわして、
「大政をたおしたら、ほうび五百両ではいかがかな？」
「なに五百両……だって、あんたにゃ、ちゃんと用心棒代が……」
「いや、この場合は特別でござるよ。ほうっておくとあの槍一本で、少なくとも十人以上はやられる——」
やっぱり、きやがった。——穴太徳は蟹が酢をなめたような顔で、
「五百両、承知した」
「では」
角井門之助は肩をゆすって、のっしのっしと杉林の中を出ていった。
——鉢巻、たすきをしめなおし、長脇差の目釘をしめした吉良・清水方は、ゆくてからたった一人の浪人者が歩いてくるのを見て、眼をこらし、たちまち仁吉がさけんだ。
「ありゃ、角井だ。角井門之助だ！」
その門之助が呼びかけてきた。
「清水の大政——出てこい」
「おうっ」

と、大政が立ちあがった。
「おれと一騎打ちだ、よいかっ」
「合点だ！」
ふりむいて、
「みな、手を出すな！」
一喝しておいて大政は、槍をとりなおして飛び出していった。
両者は、三間ばかりをおいて、相対した。
これが、一方は用心棒として上方一円に聞こえた剛の者、一方は渡世人として珍しい槍の使い手とは、双方のやくざたちは承知しているから、息をのんで見まもったのは当然だが、そんなことは知らない一般観客席も、いっせいにしいんと静まりかえったのは、これがただならぬ勝負であることを感得したのに相違ない。
突然、凄まじい咆哮をあげて、角井門之助は突進した。
その刀がひらめいた。——彼は、相手の槍をなぎはらい、敵のふところにとびこんで斬り伏せるつもりであった。
大政の槍が短くなった。電光のごとく手を持ちかえ、槍をひいたのだ。おのれの剣技に絶対の自信を持っていただけに、空を打ってわずかに横へよろめいた角井へ、びゅーっと槍がのびて、その肩から胸へ、穂先のなかばまでメリこんだと見るまに、それをひきぬいた。
奔騰するおのれの血潮の中へ、角井門之助は苦鳴をあげながらころがっていた。

血まみれの槍を大きくふって、
「さあ、ゆこう――ゆけっ」
と、大政が下知(げじ)した。

十三

吉良・清水組は再進撃を開始した。
おめきさけぶその口からのどぼとけまで見える距離まで迫られて、穴太徳(あのとく)は狼狽(ろうばい)その極に達し、
「おういっ、みんな出ろ！」
と、さけんだ。
「総がかりでかかれっ」
残りの穴太(あのう)方、それにいままでやった連中も、みんな殺されたわけではないから、百人以上もの人数が、黒山のように殺到した。
「輪を崩すな！　散るな、散っちゃいけねえ！」
小政が絶叫した。さっきからの味方の剣輪を解くなといったのだ。
が、むらがるおびただしい敵に、いつしかその輪はバラバラになり、一人一人が数人の穴太方と斬り合うことになるのをどうすることもできない。
大いなる春の雲の影が這う山の斜面は、文字通り屍山血河と化した。

混戦状態の中から、大政、小政、吉良の仁吉が、あたるをさいわい突き伏せ、斬り伏せながらかけ出してきた。
清水港(みなと)は鬼よりこわい、と、うたわれた大政小政の強いことはいうまでもないが、仁吉の奮戦ぶりもなかなかのものであった。以前草相撲の横綱を張ったこともあるという体格もさることながら、彼をふるい立たせているのは、その血走った眼にも見えるお勢の姿であった。
「お勢さん、待ってろ、いまゆくぞ！」
ふりまわすその長脇差(ながどす)の下に、二、三人の穴太方がもんどり打つ。
「鉄砲、鉄砲っ」
と、穴太徳が上を見あげてさけんだ。
もう世の中には最新式の西洋銃が出回っている時代であったが、さすがにこれは猟師の使う旧式の火縄銃ながら、とにかく鉄砲組は用意したものの、これだけの見物の前でそれを使うのに気がひけて、合図するまで撃つなと命じてあったのが、ついにたまりかねたのである。
「撃てっ、あの二人を撃てっ」
命令したが、銃声はなかなかあがらない。
「何してるんだ、撃たねえか！」
「へっ、それが味方とこんがらがってるんで、へたすると味方を撃ちそうで――」
いよいようろたえて、上下左右を見まわす穴太徳の眼に、奥にかたまっている香具師(やし)や祐天、犬神の姿がうつると、

「やい、てめえたちも何してやがるんだ。ここまできて、頬かむりして見てる気か！」
と、わめいた。
「まさか、こんな大デイリにニョロニョロの蛇なんか使えねえ」
赤蛙の凶兵衛は、首を横にふった。この場合に、片頬ににが笑いが浮かんでいる。
「それに、渡世人同士のケンカに香具師が加勢したといわれちゃ、穴太の親分の名にかかわりましょう」
「いまさら何をぬかしゃがる。いままでだって蛇を使って加勢してくれたじゃあねえか」
「その通り、事前にあっしらがあれだけ敵を痛めつけてやったせいで、きょうのいくさがだいぶらくになったはずで――こちらはたしかに親分との約束は守ったつもりですがね」
「おいっ、仁吉が来る！　つべこべいわねえで、早くなんとかしてくれ！」
穴太徳は悲鳴をあげた。
「祐天、犬神先生、おまはんたちもただのカカシか！」
実は、祐天仙之助と犬神軍次郎は、敵の勢いに気をのまれていたのだ。とくに犬神は、自分ができるだけに、さっき角井をたおした大政の槍の凄味に心胆を寒くしていた。それに彼らは、まだほかに片づけなければならないやつ――三井の卯吉親分のかたき国定龍次という若僧がある。
が、穴太徳にそう叱咤され、かつ、いましも地ひびきたてて突進してきた吉良の仁吉に、
「よしっ、きゃつはおれが」

といって、犬神軍次郎は大刀の鞘をはらうと、そちらへ駈けた。
「じゃまするなっ」
こわさ知らずで、猛然と斬りこむ長脇差が空で受けとめられたと見るまに、この草相撲の横綱をやった男が、鞠みたいにはね飛ばされて草の上にころがっていた。
「あっ、仁吉さん！」
香具師たちに手をとられて、身もだえしながらお勢がさけんだ。
あおむけにたおれた仁吉へ、跳躍してとどめの一撃を見舞おうとした犬神は、嵐のようにかけ寄ってきた大政を認めて、思わず飛びずさって、これまたあおむけに転がった。
「野郎！」
はね起きた仁吉が、長脇差をとりなおし、こんどは逆にそっちへ躍りかかろうとする。――その刹那、ダダン、ダダンと二発銃声がつづいて、彼はふたたびのけぞった。
「仁吉さん！　仁吉さん！」
狂気のようにさけぶお勢をじろっと見て、
「それじゃ、ここらでひとつ、こっちもお手伝いしようか」
と、凶兵衛がうなずいた。
彼としても、このケンカの相手清水方には――次郎長が来ていないのが不満だが――一人も生かしては帰したくない遺恨がある。
「やれ」

あごをしゃくると、数人の乾分が、そこにならべられた数個の桶と樽のふたをはねのけて、まず二人ほどが桶からひしゃくで何やらまきながら、犬神と仁吉の間を切って走り、ついで、四、五人が樽を横にころがして走った。

「吉良の――」

「しっかりしろ！」

仁吉のそばへかけ寄った大政と小政が、そっちをふりむいて、さすがにぎょっと眼を見張った。

十四

そこに蛇の川が出来ていた。――

何十四とも知れぬ蛇のむれが、帯状にうねり、もつれ合い、かまくびをふりたてて乱舞しているのだ。

「親分、あぶねえから、ひきさがっておくんなせえ」

と、うす笑いして凶兵衛は、穴太徳に、

「これからあいつらとマムシの大デイリを、それこそ高みの見物をしていて下せえ」

と、いった。

蛇の川をへだてて、大政らにむかって、

「やい大政小政、おぼえているか？　おれはてめえらに殺された都田の吉兵衛の弟留吉だ。そ

ういや、この荒神山のデイリにおれが一肌ぬいだわけがわかるだろう。さあ、来い、てめえらにこのマキスイをひっかけて、蛇踊りさせてやる」

チロッ、チロッと細い舌を吐きながら凶兵衛はあざけった。

「こわいと思ったら逃げやがれ。そうすりゃ荒神山のデイリは清水方の負けになる。それがいやなら、さあ、かかって来い！」

「いけねえ」

大政が小政に小声でいい、首ふった。

「小政、ひきあげよう」

「何を、ばかな！」

「とうとう香具師が出てきやがった。――香具師とケンカするなとァ、親分のかたいお申しつけだ」

「香具師といったって、あいつァもとやくざの都田の留吉じゃあねえか」

「いや、一人じゃあねえ、あとにまだぞろりと香具師のむれがいる」

「よしや相手が何者だろうと、あれまで言われて逃げ出しちゃあ、清水一家の名折れだ！」

「それに、名目人の神戸のははじめからいねえ。ここで清水一家がひきあげても、清水一家の恥にゃならねえ。それよりみな殺しになったほうがよっぽど恥だ。もういちど親分のおさしずを仰いで出直そう」

「仁吉はどうするんだ」

「いま見たが、まだ死んじゃあいねえ。あれを殺しちゃいけねえ。そうだ、かついでゆこう。仁吉を助けるためにもひきあげるんだ」

また銃声がした。弾は二人の間を通りぬけたらしく、うしろでぱっと土をはねあげた。

さすがの小政も、ここに至って辟易（へきえき）したらしく、

「と、飛道具まで使うたァ、どこまで卑怯なやつらだろう。――しかし、それじゃ一応、ひきあげるとするか」

と、いった。

大政は仁吉のそばにしゃがみこむと、仁吉の帯に槍を通し、

「そら、かつぐぞ。おめえがあと棒だ」

と、小政にあごをしゃくった。

二人で、槍の間に大きな仁吉をいのししみたいにぶら下げて、長脇差（ながどす）を息杖にして山を駈け下りるのにかかる。

なるほど仁吉はまだ生きていたと見えて、われにかえって悲壮なさけびをはりあげた。

「何するんだ、お勢さんをあのままにして逃げようってえのか？　おいっ、大政のあにい下ろしてくれ！」

「こら、あばれると槍が折れる。しばらく、おとなしくしていてくれ、そっちも両手で槍をにぎってくれ！」

そこへ、味方の一団がはせ寄って、彼らをとりまいた。

全員、まるで朱をあびたような凄まじさだ。それは返り血だけではない。例外なく傷を受けていて、中には手首のないやつ、耳の落ちたやつ、目玉が一つ飛び出したやつも見える。

「きょうの勝負はこれまでだ。一応ひきあげるが、怪我人は一人も残すなよ」

と、大政が下知（げじ）した。

吉良・清水方がひきあげにかかったと知って――かつ、大政の槍が仁吉運搬用にあてられたと見て、穴太（あのう）方は急に勢いを盛りかえし、総追撃にかかった。

ほんものの戦争でも、撤退戦は攻撃よりむずかしい。――こりゃ、ひきあげることにしたのはおれの失敗だったかな、と大政自身が考えたほどの難戦死闘であった。

ここに至って、穴太の徳次郎みずから出てきて、配下を指揮した。

――ついでにいうと、穴太徳が本陣からかけ出したあと、

「やっと勝負の目鼻がついたようだ」

と、赤蛙の凶兵衛は笑い、

「それではこっちもひきあげるとするか」

と、左右をかえりみた。

「えっ、デイリの途中でひきあげるのか」

と、祐天仙之助が眼をまろくすると、

「いやなに、香具師のあっしたちが、やくざのケンカの一方に加担したと、大っぴらに世間に知られちゃやはりまずいんでね。……それにケンカに勝ったあとじゃあ、あの穴太の親分が何

をいい出すかわかったもんじゃあねえ。それより早いとこ、約束の花嫁さまをいただいてゆくとしやしょう」

といって、さっき仁吉が鉄砲で撃たれたのを見た刹那から、足もとに崩折れて、気を失ったままのお勢を見下ろし、

「さ、今夜はたのしみだぜ」

と、例の長い舌をチロチロッと吐いた。

杉木立の向こうに、あらかじめ一挺のかごが置かれてあった。それにお勢をいれる。口笛をふいて蛇を集め、もとの樽に収容する。

やがて彼らは杉木立の中から、妖々と消えてしまった。

あわてて祐天と犬神も、そのあとを追う。――ゆくさきはあの赤蛙の池にきまっている。彼らには、そこに残してきた国定龍次の始末という別の目的がある。

十五

さて、そのあとの荒神山だ。

ここで思いがけずめざましい働きをしたのは法印の大五郎で、彼は前夜マムシにかまれて、まだフラフラの状態で、これがいちばんしんがりになったのだが、

「アビラウンケンソワカ――アビラウンケンソワカ――」

と、彼出身の山伏の呪文をとなえながら、めちゃくちゃに長脇差をふりまわす。

その刀自体の有効性は別として――きものはもとより、坊主頭から腕、足、どこもズタズタの、まるで血にひたしたボロキレのかたまりが浮遊しているようで、もうこの世に生きている人間とは思われないが、これがどうしてもひっくりかえらない。

「この化け物野郎!」

「いいかげんに成仏しねえか!」

また左右から斬りつけられ、ぱあっと盛大に血が散ったが、まだたおれない。

それどころか大五郎は、敵中に穴太徳を認めて、

「そこにいたか、穴太徳――清水一家三十六人衆の法印の大五郎だ。昔とったきねづかでおれが引導をわたしてやるぞ!」

と、泳ぐようにそっちへひき返した。

「やるな!」

竹槍が三本、背後から放射状につき出され、大五郎の胴を串刺しにした。

その竹槍を突き立てたまま大五郎はのけぞり、やっと絶命したようだ。あまりの物凄さに、刺したやつらが手を離したので、彼は三本の竹を足とした人間かがり火のように、宙にななめにかたむいたまま、大目玉をむいて動かなくなった。

吉良の乾分では、安城の幸太郎という男が討死していた。六倍の敵を相手に、前後して三時間近い血戦で死人がこれだけとは勇猛のかぎりだが、かすり傷の大政小政をのぞき、ほとんどが重傷といっていい怪我をしている。

いや、血戦はまだ終わっていない。——

さっき述べたように、退きの態勢に移ったのはまちがいだったかも知れねえ、といっとき大政がほぞをかんだくらいである。

荒神山を裏手からよろめきのぼる吉良・清水方を、なだれを打って穴太方は追撃してきた。穴太方の死人、怪我人は、角井門之助以下おびただしいものであったが、なお雲霞のごとき人数だ。

この危機をいっとき救ってくれたのは、さっきから荒神山で観戦していた見物人たちであった。

「おういっ、早くこい、こっちだ、こっちだ！」

「戸板はねえか。戸板を探してこい！」

と、吉良・清水方をさしまねき、気つけの水をさし出し、足ずりして声援し、次におしのぼってくる穴太方へ、

「馬鹿、阿呆っ」

「その人数でそのざまか！　のろま、鈍つく、とうへんぼく！」

「鉄砲なんか使いやがって、何だ、卑怯者っ」

と、悪罵の雨をふらせ、中には逆上のあまり、上半身はだかになり、天びん棒や丸太ン棒をふりまわして、両者の中に割ってはいる連中もあった。むろん穴太方が近づくと逃げもどるのだが、それでいよいよ混乱を増し、荒神山そのものが鳴動せんばかりになった。

荒神山を越えて、参道から四日市へむけて、なお吉良・清水方はのがれようとする。それを穴太方は追った。群衆にじゃまだてされたが、なお数倍の人数であった。

追手の中から、穴太徳はのどぼとけをふりしぼっていた。

「一匹ものがすな、みな殺しにしろ！」

吉良・清水方は、荒神山で与えられた三枚の戸板に、仁吉をはじめ重傷者をのせている。その運搬者に十人前後とられ、防戦者はさらにへった。

槍をとりもどした大政、狼のようにせいかんな小政の血戦は凄まじかったが、しょせん四日市までのがれられようとは見えなかった。

十六

すると、そのとき前方に、踊りのむれが現れた。と見るまに、みるみるこっちに近づいてきた。

例の、えじゃないか踊りだ。

こちらの血まみれの集団を見て、ちょっと立ちどまったように見えたが、何やら指図する声が聞こえると、すぐにまた進んできて——逃げる吉良・清水一家をすっぽりつつんでしまったのである。

正確にいうと、左右に分かれて、彼らを通したのだが、彼らを通すと、また道いっぱいにひろがって、踊りながら進む。

「ええじゃないか、えじゃないか
ききんになっても、えじゃないか
米屋の米をとればよい
ええじゃないか、えじゃないか
ええじゃないか、えじゃないか」

みんな、手をヒラヒラさせ、泳ぐように踊り歩く。

朝からこの、えじゃないか踊りは、十人、二十人と、荒神山の参道や境内にも現れていたが、これは何百人とも知れぬ大群だ。

それが顔に墨や紅をつけ、般若やオタフクのお面をかぶり、男で女のかいどりを羽織ったやつ、女でカミシモをつけたやつ。じゅばんにふんどしだけの男があれば、腰巻き一枚の女もある。いやもうメチャクチャの百鬼昼行だ。

ひとりとしてまともな身なりをした者のない大群が、怒濤のごとくへし合い、もみ合い、踊ってくる。

ここ数日の四日市の、えじゃないか踊りはよく知っている穴太(あのう)一家のやくざたちも、この狂乱したとしか思われない群衆には気圧(けお)されて、しばらく立ちすくんだが、すぐに穴太徳(あのとく)はわれにかえって、

「いや、清水一家をにがしちゃならねえ。船に乗せちゃならねえ」

と、首をふり、

「踊りの衆っ、あっしゃ四日市の渡世人穴太の徳次郎ってえもんだ。渡世人同士のケンカの最中でござんす。申しわけねえが、中を通らしてもらいますよ。ゆけっ」

と、乾分(こぶん)に手をふった。

「どけどけっ」

「じゃますると、血を見るぜ！」

刀をふりまわしてかけ出す先頭、三人ばかりの前に、おそろしくくのっぽの真っ赤な天狗が立ちふさがった。

いや、白衣に天狗のお面をかぶって踊っていた男だが、長身の上に五寸くらいの高足駄をはいていて、

「こら、乱暴はよせ」

と、高いところから見下ろして、叱りつけた。

「お伊勢さまをほめそやす踊りだぞ。いかに無知モウマイのやくざ者とて、伊勢に住んでお伊勢さまの御威光を知らぬはずはなかろうが」

穴太徳はじだんだ踏んで、

「そんなふざけた天狗など、ぶったおせ！」

「どきゃがれ、天狗野郎！」

飛びかかる三人のやくざの前で、天狗の背が短くなった。高足駄から飛び下りたのである。

と、見るや、その下駄を両手につかんで、空を打たされてもつれ合う三人の頭を、鼓みたいないい音をたててなぐりつけた。

「わっ」

鼻血をふいて、左右につんのめる乾分に、穴太徳は逆上その極に達し、

「えい、もう遠慮は無用だ。みんな、つっ込めえ！」

と、帝国陸軍みたいに怒号した。

すると、踊りのむれの中から、もう一人、こんどは白丁を着て、ひょっとこのお面をつけた小柄な人間が出てきて、

「血迷ったようだな、穴太の――」

と、笑った声をかけた。

「それじゃあ、とても伊勢で大親分なんかにゃなれねえぜ」

「またへんな野郎が出てきやがったな。何を――えらそうなことをぬかしゃがって――やい、面をとってものをいえ！」

「さよか」

相手は、ひょっとこのお面をとった。五十前後の、やせてはいるが眉ふとく、大眼玉の人物で、その眼がおどけたような、しかしすばらしい光をはなっていた。

「あっ」

穴太徳はさけんだ。

「こ、これァ……加島の大親分……」

と、驚きの声でいったが、

「ごあいさつしてるひまがござんせん。同じ渡世人の加島の親分ならわかって下さるはずだ。さっき荒神山で吉良・清水一家と一世一代の大デイリをやりやした。それに勝って、いま追っかける途中でござんす。そこを通しておくんなせえ！」

「大デイリに勝った？　飛道具や香具師まで使ってか！　おめえさんが血迷ったというのはそのことだ」

と、加島屋はいった。

「伊勢の穴太徳は、二十人ほどの相手に百三十人もかかって、その上、香具師、鉄砲まで使って荒神山をてめえのものにした――と、加島屋長次郎の名で、さっそく上方から東海道、山陽道、四国まで、親分衆に回状を出しておこう」

はて、荒神山のケンカの真相を、四日市のほうからやってきた加島屋長次郎がもう知っているとは？　もっともそのケンカは、始まってからもう二刻前後になるのだから、だれか荒神山から走っていって、告げたやつがあったと考えれば腑におちるが。

もっとも穴太徳は、この場合、そんなことを疑ったり、推量したりする余裕はなかった。

四国琴平にありながら、この加島屋長次郎という親分は、少し性質はちがうが関東における大前田の栄五郎親分にならべられるくらい、上方一円で特別視されている。

実はいま、顔を見てわかったように、数年前穴太徳は、まだ在世中の黒田屋勇蔵親分のお供

をして金毘羅さまに参詣したとき、そこの加島屋にわらじをぬいで、厚いもてなしを受けたことがあるが、そのおり宏大なその家に、侍が十数人ごろごろとしているのに眼を見張った。それが用心棒なんかじゃなくて、みんな客分だという。——

何でも讃岐切っての大地主で、かつ大質屋の家に生まれながら、仁俠の世界が好きでばくち打ちになり、それも身体は小さいのに胆っ玉はでっかく、四国はおろか上方でも名高い貸元になったが、一方じゃたいへんな学者で、詩というものを作り、そのほうの別名を、「日柳燕石（くさなぎえんせき）」とかいう。

勤皇の志士とやらの面倒を見すぎて、去年あたり藩の牢にいれられたとか、ちらっときいたことがあるが、それが、こんなところでひょっとこ面をかぶって、えじゃないか踊りを踊っていようとは。

ともあれ、そんな大親分に、めんと向かってやっつけられて——どうやらその口ぶりは、きょうの荒神山の一件のみならず、以前からのいきさつもある程度知っているらしい——穴太徳は絶句した。

その加島屋の親分が、いま痛烈無比の嘲罵を吐いたあとで、ふいにニコニコして、

「ま、何にしても、きょうのデイリは終わったそうでけっこうだ」

と、いう。

「しかし、せっかくお祭りだというのに、大変な血でけがれたそうで、荒神山の神さまも顔をしかめていなさるぜ。帰って、おがんで、その血を浄めりゃ、お前さんたちの罪も少しは薄まるだろ。——すぐ、ひき返しな」

そして、踊りの連中に手をふった。

「それ、このやくざ衆とごいっしょに、荒神山へ踊ってゆきな、ほれほれっ」

すこし静まっていた、えじゃないか踊りは、たちまち笛、鉦（かね）、太鼓とともに大合唱をあげはじめた。

「ええじゃないか、えじゃないか
さむらいさまは、えじゃないか
二本差すのは、なんのため
目差しを焼けば、えじゃないか
ええじゃないか、えじゃないか」

十七

反抗を許さぬ大親分の大眼玉と、この歌声の怒濤におしまくられて、穴太（あのう）一家はみるみる戦意を喪失して、荒神山のほうへひき返さざるを得なくなった。——そのうち、可笑（おか）しいことに、やけっぱちでもない顔で、中に手をヒラヒラさせ、腰をふり出したやつもある。

それほどこの歌と踊りは、人の心を魔法のように浮き立たせるものを持っていたのである。

ゆきすぎる踊りの行列を、加島屋長次郎と、もう一人、天狗面の男は、路傍に立って見送っている。どうやら穴太一家のやつが、逆に四日市のほうへ抜けるのを見張っているらしい。

と、その行列の大半がゆきすぎてまばらになり、二人がそのあとについて歩き出そうとしたとき、四日市のほうから一人やってくる浪人風の男が見えた。

まだ残る砂塵の中に、急ぎ足ながらどこかフラフラした足どりだ。

それを見て、天狗面がふと首をかしげた。

「どうなすった」

と、加島屋がきく。

「いや、どうやら知った人で」

と、天狗面は答え、その男が来かかると、ふいに、

「草堂先生」

と、呼んだ。

草堂万千代はけげんな顔をむけて、

「はて、どなたかな」

天狗はそのお面をぬいだ。まだ二十六、七の、りりしく活気にみちた青年の顔があらわれた。

草堂万千代はさけんだ。

「いよーっ、おはんは相楽総三じゃなかか！」

眼をまんまるくして、

「お久しぶりじゃのう」

「おととしの暮……天狗党脱走以来ですな」

相楽総三と呼ばれた青年の眼もかがやいている。

「おはん、いま天狗のお面をかぶっちょったが……」

「いや、こりゃ天狗党とは関係ありません。えじゃないか踊りの扮装です」

相楽は笑い、うす汚い相手の素浪人姿をしげしげと見まもって、

「あれから草堂さんはどこへゆかれたか……草堂さんほどの人の消息を、薩摩の人にきいてもだれも知らない。それが、こんなところでお逢いしようとは——あれ以来、何をしておられたのですか？」

「おはん、おぼえちょるかな。天狗党といや、あのとき、四、五人で天狗党を離れたが、あの中に千乗坊っちゅう若い坊主がおったじゃろ？」

「ああ、上州の遊俠国定忠治の遺児とかいう——」

「それそれ、その千乗坊の弟を探しちょるんじゃ」

「千乗坊の弟というと、あの、野州葛生の宿で天狗党の同志を斬った男ですか」

「それも知っちょるか」

「いや、あのとき私は歩哨に出てて、その光景は見なかったが、あとで千乗坊からいきさつをききました。……その男を探しておられるとは？」

「話せばながか話になるが、いまそれを話しちょるひまがなか。いま、いそいでそのゆくえをつきとめんけりゃならんのじゃ」

草堂万千代は、この人物には珍しい苦悶と焦燥の表情で、

「それを知っちょるのは四日市のばくち打ち穴太徳っちゅう男で……穴太はまだ荒神山におるじゃろか？」
「穴太徳は、たったいまそこまで来たのを、この日柳燕石先生が追い返されたところです」
「なに、日柳燕石先生？」
草堂万千代は、びっくりした眼で相楽総三の同伴者を見た。
「御雷名はきいちょった。いずれお会いしたかと思っちょったが……四国の大親分で、勤皇の大詩人でごわすな！」
「いや、そんなことをいわれちゃあ、このひょっとこのお面をかぶりてえ」
と加島屋長次郎はニガ笑いした。
「それより、国定忠治の息子どんがどうかしましたって？」

十八

同じころ、赤蛙の池のほとりの蛇蔵で、国定龍次とおりんは、身の毛もよだつ危地におちていた。
――赤蛙の凶兵衛一味と、祐天仙之助、犬神軍次郎らが帰ってきたのは一刻ばかり前だ。
暗い土蔵の土戸がひらいて、その連中がはいってきた――先頭に立った凶兵衛が、じろっとこちらに眼をむけ、
「まだ生きておったか」

と、うす笑いした。
「おい、荒神山はかたづいたぜ」
「なに？」
「どっちが勝った？」
龍次はさけんだ。
「おれたちが無事に帰ってきたことからわかるだろうが。吉良・清水はみな殺しよ」
そうはいったが、実は彼らは終局まで見とどけず、荒神山の下の別の山道をまわって先に帰ってきたのだが、しかし吉良の仁吉がたおされ、清水方も総撤退にかかったのはたしかに見たから、あの勝負はまちがいなく味方が勝ったと見ている。
「それに――」
と、凶兵衛は、いまあいた戸口のほうをふりかえった。
蔵の外に、一挺のかごがおかれ、そこから乾分(こぶん)たちが、中の人間をひきずり出すのが見えた。そのまま両腕とられて蔵の中へつれこまれてきた女を見て、
「お勢さん！」
と、龍次とおりんはさけんだ。
失神からさめたものの、なお夢遊状態にあったお勢は、蔵の暗さに一瞬盲目になって、何が何やらわからない風で、四、五歩歩いてきたが、連呼する二人に、やっと気づいたらしく、
「あっ、龍次さん……おりんちゃん！」

と、絶叫した。
「あんたたち、生きてたんだね！」
「お勢さん！　おまえも――」
かけ出そうとする龍次とおりんの前に、ぐいと抜身がつきつけられた。
「生きて逢わせることになったのが、こっちの慈悲だ」
祐天仙之助であった。
「ケンカの助ッ人をしてやったほうびの花嫁だ」
と、凶兵衛は笑った。
「いや、助ッ人の礼じゃあねえ。はじめからおれがお勢さんを花嫁にもらう約束をしてたんだよ」
頭上をあおいで、留守番をしていた乾分へ、
「おい、茶羅平、はしごを下ろせ！」
「へい、お帰んなさい」
二階から、声と同時にはしごが下りてきた。
一同、それをぞろぞろとのぼってゆく。――お勢をとりこんだままである。
それを血走った眼で眺め、肩で息をしながら、龍次はどうすることもできないのであった。
刀はない。のみならず、きのうから一粒一滴も与えられないどころか、昨夜一晩じゅう、蛇のうごめく床に寝るはおろか坐りもできず、竹杖一本でおりんをかかえて立ちすくんでいたので、身体はまるでからっぽの袋にでもなったようなのだ。

そして、みんなあがると、はしごは、すうっと上にあげられてしまった。
土戸はふたたびどんと閉じられ、外からかきがねをかける音がした。――かごをかついできた乾分のしたことで、彼らはかごといっしょにもう一つの土蔵のほうへゆく。
二階では、荒神山のデイリでへった腹を満たすために、食事を始めたらしい。きのう、出かける前も酒を飲んでいたようだが――やがてまた酒の匂いがただよってきて、にごった笑い声が落ちてくる。
「いや、親分が荒神山に肩入れするのを、少し肩の入れすぎだと思っていたが、この獲物を見ちゃあ、なるほど無理もねえと思う」
「しかし親分、ほんとにこれを花嫁にしなさるんですかい？」
「みればみるほど美人だが――」
「女房にして、そのあと蛇遊びをやらかすつもりなんで？」
そんな声が、とぎれとぎれに聞こえたが、あとは何をわめき合っているのかわからない。
そんな状態が一刻ほどつづいて、さて龍次とおりんが、身の毛もよだつ危地におちいったというのは。――
「イヤーッ」
突然、お勢の悲鳴がながれてきた。どっと笑い声があがった。
どうやら、酒盛りのなぶりものになっているらしい。

「何とかして」
おりんが龍次にしがみついた。
また悲鳴が聞こえた。
「ち、畜生」
龍次も身体をねじくらせたが、ただ二階の穴を見あげるばかりだ。昨夜もなんとか、蛇の檻を足場に壁から這いあがろうとしたが、竹の檻は踏みぬくおそれがあり、壁は蛇の這うせいかヌルヌルしていたし、かつ土蔵なので天井が高く、どうすることもできなかったのだ。
その二階の四角な穴のまわりに、異様などよめきがあがったかと思うと、三つ四つの顔といっしょに、ひしゃくが一本つき出された。
そして、次に女の顔が――お勢の顔が。――
「さあ、見ろ」
その上に、笑いにゆがんだ凶兵衛の蠟色の顔が見えた。
「いま、面白い見世物を見せてやる」
お勢は、強制的にそこから半身をつき出されているらしい。
実はいま凶兵衛は、乾分たちの車座の中に坐らせられていたお勢をひきずりよせ、ひざに抱きあげようとして、死に物狂いの――彼にとっては二度目の平手打ちをくって、こんどは勃然と残忍性を発揮し、彼女をとらえて強引にその穴から下をのぞきこませたのであった。
「おれに刃向かうやつがどんな目にあうか、とっくり見せてやるぜ。……おい、あいつらにマ

キスイをかけてやれ」
お勢を嫁にするといった凶兵衛だが、その女をこんな目にあわせて、いったい先々どうするつもりか。もっとも、この人間より蛇を愛する男は、そんな心配より異次元の世界に生きているのかも知れない。
「ま、待ってくれ」
祐天があわてたように声をかけた。
「いま、殺っちまうつもりかね？　おれはおれの手でたたッ斬ってやりてえんだが」
「斬るのは、いつでも斬れる。死ぬ前にこの世の地獄を味わわせてやるほうが、おめえさんの望みにかなうだろうが」
凶兵衛は笑い、
「おい、それじゃあ、なるべく男をよけて女のほうへかけてやれ」
と、ひしゃくを持った乾分にいった。
乾分がひしゃくを桶につっこんで、ぱあっと下にまいた。
おりんを抱いたまま、龍次はもつれ合うように通路を逃げた。それを追って、またマキスイの雨が散る。女のほうへ、と凶兵衛はいったが、二人は一体だ。その二人の背が竹檻にぶつかり、竹がへし折れて穴があいた。
そこから、マムシが数十匹あふれ出した。いや、その穴からばかりではない。あたるをさいわいぶちまかれるマキスイに狂乱して、十幾つかの檻の中のマムシはことごとくざわめき出し、

土蔵いっぱいにちょっと形容もできない異様な物音が満ちはじめた。

「そっちへ逃げたぞ！」

「そらこっちだ！」

「こっちの水は、ああまいぞ！」

どっと哄笑の滝もしぶきをあげる。

「見ろ、見ろ、どうだ？」

上からお勢の黒髪をひっつかみ、手にまきつけ、赤蛙の凶兵衛が陶酔したような笑い声をあげたとき、うしろから、

「はてな、だれかくるぞ。――三人だ」

と、声をあげた者がある。念のため窓に立たせてあった見張りの男だ。

凶兵衛がききとがめ、ふりむいて、

「だれかくる？　――香具師か穴太一家のだれかじゃあねえか」

「いや、浪人に、なんだか変なやつ二人――お面を首からぶら下げて、一人は両手に下駄を持って、ありゃ、えじゃないか踊りのやつかな？」

「おい、ちょっとこれをたのむ」

凶兵衛はお勢を乾分の一人にゆだね、そのほうへ走っていった。

十九

土蔵の二階にも小さいながら明かりとりの窓が二つあった。

土蔵だから、飛び下りれば足をくだくことはたしかな高い位置だが、その一つから五、六間はなれて大けやきが立ち、これが前に述べたようにこの一画同様、この晩春に奇妙な裸木で、その高い枝に刀が一本つき刺さっている。きのう国定龍次の投げあげたやつだが、凶兵衛が見たのはそんなものではない。それらの枝をすかして見える池畔の道であった。

三人の男が、そこを駈けてくる。それが、はじめからこの土蔵をめざしてくるような足どりだ。

「あっ……あいつじゃ！」

うしろからのぞいた犬神軍次郎が驚愕の声をあげた。

「厚井宝塔！」

「なに？　……ヒゲ万とか呼ばれている男か！」

と、こちらから祐天もさけんで、これも窓のほうへ走った。

「あれァ、吉良でこっちのマムシにかまれて、こんどのデイリにくる船に乗っちゃあいねえということだったが……」

そのほうをにらみつけていう。

吉良の浜辺で香具師の乾分が近づき、その夜、蛇を襲わせた結果、その人物を出動不能とさせたくらいだから、その厚井宝塔がヒゲ万先生、いや草堂万千代という薩摩浪人だということはすでに知っている。

「しかし、きゃつが……どうしてこの赤蛙の池を？」

と、凶兵衛がうめいた。この赤蛙の池の蛇蔵のことは、穴太（あのう）一家の者でさえほとんど知らないはずだが。——

「おい、みんな顔をひっこめろ」

といい、凶兵衛はその窓の外から下に下げてあった綱をひきあげた。すると、それにつながれている下の土戸のかきがねがはずれるしかけになっている。

「何にしても、生かしては帰せねえ」

「犬神先生、あんたの出番だ」

祐天がふりむいた。

「甲府で腕をヘシ折られたときの恨みをいまはらしておくんなせえ」

犬神軍次郎は、これも東国の用心棒界では有名な男だが、いささか恐慌をきたした顔で、

「きゃつの剣はまだ見たことはないが、あの腕っぷしから見ると、こちらも相当の覚悟を要するが」

「いや——あいつ、足がもつれてるぜ。あのようすじゃ——マムシにやられた痛みがまだなおっちゃあいねえ」

凶兵衛だけ窓の下側から頭の上半分をのぞかせて、そのほうの毒の「専門家」の眼で見ぬいたようだ。そうわかるほど、三人は土蔵の前に近づいていた。

「それに、荒神山のときと同様、こっちが手伝ってやるよ。おい——マキスイの残りをみんな

桶に入れろ——なに、いまみんな下にまいてしまった？」

凶兵衛は舌打ちして、

「それじゃ下の蛇玉を使う。——みんな、手伝え」

蔵の前では、呼ぶ声がした。

「龍次——国定龍次はおらんか？」

ヒゲ万先生の声は悲壮味をおびていた。

「国定龍次——おりん——いるなら、出てこい」

その声は、厚い土の壁にさえぎられて、一階の龍次とおりんには聞こえなかった。が、さっきまでのマキスイの散布が突然やんだので、二階に何か異変の起こったことがわかった。

——と、みるや、その二階からドヤドヤと一同が下りてきた。お勢の姿は見えない。

先頭の凶兵衛が、こがらしのような音をたてて口笛を吹いた。すると、狂乱していたマムシたちが、みんな死んだように動かなくなった。

数人の乾分たちが、いきなりバリバリと竹檻をひろげて、中に吊ってあった奇怪な玉をとり出す。マキスイとやらをしみこませた、西瓜（すいか）大の苔のかたまりだが、同時に蛇の玉だ。それをそれぞれ、合わせて七つ、八つぶら下げて歩き出す。

「……………？」

あっけにとられて、立ちすくんだままこれを見ていた龍次が、

「やい、何するんだ」
前へ出ようとすると、その前に長脇差(ながどす)の刀身がつきつけられた。またも祐天仙之助だ。
「親分、こいつ、やっぱりここで始末しておいたほうがよかねえか？」
と、ふりかえる。
「待て、それより、外が先だ。外のやつをかたづけてからにしろ」
凶兵衛はいった。
「もっとも、それまで命があればだが。……あけろ」
あごをしゃくると、乾分の一人が土戸をおしひらいた。
まず犬神軍次郎が――つづいて、乾分たち、祐天がこれは龍次を牽制しつつうしろずさりに出る。
最後の凶兵衛が、また口笛を吹くと、呪縛を解かれたようにいっせいにマムシが動きはじめ、裂けた檻からあふれ出した。……
あいた戸のかなたを眺めるいとまもなく、その夢魔的な光景に眼を奪われたままの龍次とおりんを残して、凶兵衛も外へ出て、土戸をしめ、かきがねをかけ、さて、きっと前方を見やった。

二十

三人の男は、土蔵の前の大けやきの下に凝然と立っている。

ヒゲ万先生と、加島屋長次郎親分と、相楽(さがら)総三である。――実は三人とも、これ以上ないほど驚いていたのだ。
吉良・清水組が四日市へむけて出立していったとき、ヒゲ万は蛇毒の熱と痛みとしびれで、実際に行を共にできない状態にあった。それに彼は、この縄張り争いにかんじんの神戸(かんべ)の長吉がへっぴり腰で、かつ清水の次郎長も気乗りうすらしいと見て、結局知恵者の大政が、デイリにまで至らず何とか話をまとめてひきあげてくることになるだろう、と考えていた。
しかし、やっぱり気がかりで――特に龍次とおりんが心配で、一日おくれて吉良を旅立ち、きょう午後になって四日市の港に着いたのだ。そしてたちまち、荒神山で大デイリがあり、どうやら吉良・清水組が負けて、四日市へ逃げてくる最中だという話をきいた。
すぐその足で荒神山へむかうと、なるほど吉良・清水組が惨澹(さんたん)たる状態でひきあげてくるのとゆき会った。
が、それを慰問しているいとまもない。龍次とおりんはどうなったのか。大政の話によると、きのう彼らは穴太徳(あのとく)からの迎えのかごで旅宿を出ていったらしいが、それっきり消息不明だという。
で、その穴太徳を求めて、ともかくもなお荒神山へむけて急いできて――途中でこんどは相楽総三と加島屋長次郎にゆき会ったわけだが、さてそこで彼が、穴太(あのう)方の香具師(やし)の使うマムシにやられて一足おくれた話をすると、ふと顔色を動かした加島屋が、そういえば穴太徳と親密な赤蛙の凶兵衛という香具師の巣が、ここから近い赤蛙の池というところにあるときいたこと

がある」と、いい出した。さすがに同じ渡世の親分だけあって、そんな情報を耳にしていたのである。そして、きょうの荒神山でも香具師の一団が穴太方の加勢をしていたらしい、ともいった。それはいまヒゲ万も、清水方の連中からきいたことだ。

荒神山のふもとの赤蛙の池のことは、以前、神戸の長吉からもきいたことがある。——すると、ふとその場をはなれた相楽総三が、沿道のだれかをつかまえて、一刻ほど前、荒神山のほうからきた香具師の一団が、一挺のかごをとりかこんで、横の山道へ——赤蛙の池のほうへ、風のようにはいっていった、という話をきいてきた。

「そりゃ、荒神山にいたっちゅうお勢さんじゃなかか！」

ヒゲ万先生は手を打った。

「お勢さんがそこへいったとすると、ひょっとしたら……」

お勢もまた穴太徳からの迎えのかごで出ていったが、それがきょうのデイリで香具師のむれの中にいたのを、清水方が目撃したというのだから、龍次とおりんもその香具師にどうかされたという可能性が強い。

——というわけで、三人はこの赤蛙の池へ足をむけたのだが、ヒゲ万先生はそのとき、まさかここに龍次とおりんがいるという確信まで持っていたわけではない。

が、春たけなわの雑木林の中の山道を走って、いつのまにか忽然と四界が冬のような枯木ばかりの一画にはいって、これはこの世かと眼を疑い、そして赤蛙のひしめき鳴く池のほとりにたどりついて、茫然とたたずんだ三人のうち、ふとあげたヒゲ万の眼を、ピカリと射た一点の

光芒があった。

それは池の向こう岸に立つ一本の裸の大けやきの上にひかって見えた。

あれは何だ？

それをめがけ、池をまわって走るうち、それがけやきの枝にまっすぐにつっ立った一本の刀であることがわかった。刀は、ちょうどななめとなった太陽を受けて、荒野の星のような赤い妖光をはなっているのであった。

その刀を怪しみながら、なお何の意味かわからず、七、八軒の集落の中の土蔵を見てもことさらの疑惑も感じなかったが——けやきの下からその刀をあおいだ刹那、草堂万千代の背に水のようなものが走った。

——あれは龍次の長脇差小松五郎だ！

その刀が、あんなところにあるとすると？——龍次はここで殺されたというのか？

かくて彼は、戦慄を感じつつ龍次とおりんの名を呼んだのである。

二十一

呼ばれて、魔法のように蔵の戸がひらき、あらわれたのは香具師風の男たちの大群であった。

その中に、ヒゲ万は思いがけず知った顔——甲府の猿屋楼で痛い目にあわせた祐天仙之助と犬神軍次郎の顔を認めた。

「——ほ？」

と、ひげの中で笑った。

「これは、異なところで、異な顔との再会でごわすな」

大きな半円をえがいた香具師たちの中から、その祐天と犬神が出てきた。

「甲府では、よくもよくも――」

胴ぶるいの音が聞こえそうなほど怒りの形相（ぎょうそう）で、犬神軍次郎がいった。ヒゲ万がきく。

「折れた腕はなおりもしたか」

「この通りじゃ！」

わめいて犬神は大刀をひきぬいた。

同時に、香具師たちもいっせいに匕首（あいくち）をぬいた。祐天ははじめから抜身だ。

ギャルル……ギャルル……ギャルル……まわりは赤蛙の声に満ちている。ここはすでに魔界であった。

犬神軍次郎の刀を前にして、ヒゲ万先生は刀のつかに手はかけたが、相手よりもその両側にならんだ数人の香具師を見ている。

これは、だれだって、ぎょっと眼を見ひらかずにはいられないだろう。網でつつんだ西瓜（すいか）大の球体だが、網ではなくて蛇なのだ。それがヌルヌルと波動している。背の暗褐色と腹の灰色がまじりあい、ぶきみな銭型の斑紋がテラテラとひかる。

ヒゲ万はそれに気をとられているようだが、なお数瞬、軍次郎は動けずにいる。本人が出来るだけに、相手に特別の何かを感得しているようだ。

「やらねえのか、先生」

背後のけやきの枝の下に立っていた凶兵衛がののしった。

「いま、蛇玉を投げてやるから、いっしょにかかんなせえ。いいかえ？――やれっ、蔵六っ」

わめきとともに、香具師の一人が蛇の玉を、ヒゲ万めがけてほうり投げ、同時に犬神は地を蹴った。

ふりかぶった大刀がふり下ろされる前に、犬神の顔面を打ったのは、味方の投げた蛇玉であった。

一閃、腰をひねって抜刀したとみるまに、ヒゲ万の刀は飛来した蛇玉を突き刺し、それを犬神の顔に衝突させたのだ。

蛇は血とともに散乱した。

「わっ」

犬神のほうがのけぞり、とびずさった。

が、ヒゲ万先生のほうもまたよろめいている。

蛇の玉そのものが恐るべきものだが、それがつつんでいる物質がいかなるものか――ヒゲ万先生は、蛇香苔（じゃこうたい）という苔のかたまりだなどとは知らない――つき刺した刀身に粘着して、容易に抜けないのだ。

刀のさきに、西瓜大の――西瓜よりもっと重いそんなものをくっつけていては、ヒゲ万先生、

お手あげだ。

「こりゃいかん、ウントコサ」

さすがに狼狽して、その刀を振ろうとするヒゲ万先生へ、

「くたばれっ」

咆哮して、ふたたび犬神が躍りかかる。

こんどはヒゲ万のほうが飛びずさった。が、蛇玉のくっついた刀は離している。

しかも、尻もちをついてしまったヒゲ万に、犬神の大刀がふり下ろされようとして、犬神の胴に凄まじい音響が立ち、大兵のその身体がねじれながらどうと倒れていった。

尻もちをついたままなぎあげたのは、ヒゲ万の小刀であった。

「わあっ」

香具師たちがどよめきをあげた。

――実に驚くべきことだが、この場合に犬神はみね打ちで倒されたのだが、それはとっさにはわからない。

香具師ながら彼らは、甲州の用心棒犬神軍次郎の雷名は以前から耳にしており、犬神のふだんの高言が決してホラでないことも知っていたので、それがいま地上に丸太ン棒みたいに動かなくなったのを見て、思わず動揺したのである。

「あぶなか、あぶなか」

舌を出して、その小刀を杖に立ちあがったヒゲ万先生は、自分がほうり出した大刀を、相楽

総三が拾って抜こうとしているのを見た。

なんと彼は、高足駄をはいた足をのばして蛇玉を踏んまえ、ついにそれを抜きとった。

こちらを見て、笑っていう。

「拝借します」

「そりゃよかもんを持っちょったな」

ヒゲ万先生が感心したようにいった。

相楽総三は、えじゃないか踊りには無用だろうと、刀を帯びていなかった。その代わり、五寸もある高足駄をはいて踊っていた。この赤蛙の池へ走ってくるときは、さすがにぬいで両手にぶら下げていたが、いまそれを利用したのである。

そうはいうものの、その蛇玉からは無数のマムシがカマクビをもたげ、危険きわまりない。そこからほどけたやつもむろんおびただしく、そのうち七匹か八匹か、敵味方を弁ずるわけもなく、たおれた犬神の頭やのどにくらいついて、のた打っている。

「相楽君、おいにもその下駄、一つ貸してもらおうか」

相楽総三が足駄の一つを投げると、それを片手に受けて、

「さあ、来い、卜伝の鍋ぶた試合ならぬヒゲ万の高下駄試合じゃ！」

と、ヒゲ万先生は向きなおった。

「蛇玉を投げろ、投げろっ」

赤蛙の凶兵衛がわめきさけんだ。

声に応じて、われにかえった香具師たちが、ヒゲ万と総三めがけて蛇玉をたたきつける。

それを両人は、片手の下駄で受けてはらいのけたが——そのたびに、無数の蛇が空中に散乱して頭上からふりかかり、かつ地上に落ちたやつで、一帯、足の踏み場もないありさまになった。

さすがにヒゲ万、総三ともに立ちすくんだ。

あら壁ながら、土蔵はもう一つあった。そこにもいた香具師たちが、この異変を知って十数人走ってくる。これはもともと穴太徳が雨天の際の鉄火場用に作ったものなので、なぐりこみにそなえて備蓄してあったものらしく、てんでに長脇差(ながどす)や竹槍をかかえこんでいる。

「よさねえか!」

と、ややうしろに立っていた加島屋がさけんだ。

「やい、おれは讃岐琴平の加島屋長次郎だぞ。うぬら香具師ども、これから金毘羅さまで商売しねえつもりか?」

あっという声が香具師の中からあがった。彼らははじめて、そこにいるもう一人の人物の顔を見たのだ。

香具師とて、四国金毘羅さま一帯を縄張りにしているその大親分の名を知らないものはない。いや、なんどもそこへいって、加島屋長次郎の顔を見たことのあるやつも少なくない。

「何を——」

凶兵衛がほえた。

「おれたちゃ、天下の香具師だ。やくざのおどしはきかねえ」

実は彼は、香具師になってまだ四、五年で、金毘羅さまのタカマチにはまだいったことがなく、加島屋の名はきいているが顔を見るのははじめてだ。

そりかえり、ふりかえって、

「こうなりゃ、こいつら、一人も生かして帰しちゃあ、かえってあとのさわりになるぞ。いいか、いまおれがマムシにかからせるから、あの野郎どもひっくりかえりゃがったら、みんな刺しちまえ!」

いうと、その口から、ビューッという異様な音が高鳴った。

例のこがらしに似た口笛であった。

と、そこにちらばっていたマムシはもとより、ころがっている七つ八つの蛇玉から、いっせいにマムシがはなれ、ザーッと動き出した。三人のほうへ。

マムシたちはことごとく三角形のカマクビをもたげて、明らかに凶念を見せて、めざす敵へ殺到する。下駄などではふせぎようもない魔の奔流だ。

凶兵衛はいちど笑い、そしてふたたび口笛を吹きはじめた。それが高潮した刹那(せつな)——突如、凄まじい声がその口から裂けはじけた。

彼は大地に串刺しになっていた。

二十二

肩から胴へ、長脇差(ながどす)に刺しつらぬかれ、むろん彼は瞬時にへたばったが、その経過を見た者

があったか、どうか。

そこに、地ひびきたてて、忽然とつっ立っているのは、国定龍次であった。

ましてやその龍次が、ちょうど凶兵衛の頭上にさし出したけやきの枝から飛び下りてきた姿を目撃したものはない。

みんな、先刻からのこの世のものならぬ地上の妖闘に眼をうばわれて、土蔵の二階の窓から長いはしごが出て、そのけやきの枝の一本にさしわたされ、それをわたってきた龍次が、さらに枝から枝をつたって、きのうからそこにつき刺さっていた自分の長脇差小松五郎をぬきとり、すぐ下の赤蛙の凶兵衛を大空の鷹のように狙っていたとは、見るはおろか、夢にも感づきようがない。

「ゆうどう……からくっ」

例の声は、この瞬間的な殺戮（さつりく）のあとから出た。

凶兵衛の口笛が止むと同時に、蛇のむれは死んだように動かなくなっていた。

「おれが相手だ！　みんな、覚悟しやがれっ」

絶叫する口のはたから、白いものが飛んだ。――飯つぶだ。口のはたのみならず、ほっぺたからあごにかけて、飯つぶがいっぱいくっついている。

とにかく腹ペコで、からっぽの袋みたいになっていた彼は、どこかで飯を食ったらしい。

そのわけもわからず、それどころか蛇蔵にとじこめてあったはずの男が、どうしてそこへ忽然と出現したのか、それもわからず、驚愕し、惑乱した祐天仙之助は、

「みんな――蔵の中のあの二人の女を人質にしろ――いや、殺せっ」

と、わめいて、そっちへ走ろうとしたが、

「おうっ、てめえ、そこにいたか！」

髪を吹きなびかせて、魔童子みたいに駈けてきた国定龍次に、うろたえて背を見せ、狂気のように池のほうへ逃げた。

「野郎、待て！」

その刃風（じんぷう）に吹かれるように、祐天は池へ飛びこみ、死に物狂いに泳ぎ出した。

龍次はタタラを踏んだ。池を泳いでゆく祐天仙之助のたてる水けぶりの中に、無数にはねあがる赤蛙を認めて、さすがに辟易（へきえき）したのだ。――祐天の頭は、池の向こうへ遠ざかってゆき、そのうち消えてしまった。

龍次はふりむいた。

そこにいた香具師（やし）たちは、土蔵の戸をあけて、中に逃げこみつつあった。

そのおしあい、へしあいのようすでは、いま祐天に指図された通り女を人質にするためではなく、ただ恐怖にかられた盲目的な逃げこみの態に見えた。その証拠に、まだ四、五人外に残っているのに、あわてて土戸をしめにかかっている。――

龍次は駈けもどって、とり残された連中を、大根のようにたたっ斬った。

しめられた戸に手をかけたが、土戸はひらかない。中で必死にささえているらしい。と、見るや、彼は自分のほうで外からかきがねをかけ、

「よしと。――おういっ」
と、二階の窓へ呼びかけた。
「おりん坊、樽の酒をかけてやれ！」
この大あばれが一段落して、やっと彼はヒゲ万先生のほうをふりかえり、そちらへ走った。
「先生……」
さけんで、ちょうど足もとに蛇だらけになって転がっている犬神軍次郎の身体へ、グサリと無造作（むぞうさ）に小松五郎を突き立てて、
「よくきておくんなすった！」
と、両手をひろげて、抱きついた。
満面、涙にぬれている。
「か、身体は大丈夫でござんすか？」
「大丈夫じゃなか。まだヒョロヒョロじゃて」
ヒゲ万先生は首をふった。
「いや、この化け物たちとの修羅場には往生した。おまえがあらわれてくれなんだら、こっちがやられたかも知れん」
「ど、どうして、ここへ？」
「おはんたちが心配になってな。あとから追っかけてきょう四日市へきたんじゃが、それより、お前こそどうしたか」

「いや、ひ、ひでえ目にあいやした」
と、龍次ニガ笑いした。
そして、どもりどもり、手短かに話した。
きのう四日市で、おりんのお供をして穴太徳（あのとく）の家へ乗りこもうとして、こんなところへおびき寄せられ、あの蛇蔵へとじこめられてなぶりものになったこと。
さっき、すんでのことでトドメを刺されようとして、突然香具師たちが二階からかけ下りてきて、外へ出ていったこと。
何事が起こったのかわからなかったが、とにかく彼らがあわてていたために、うっかり二階へのはしごの始末を忘れ、そのおかげで自分たちが二階へ逃げのぼることができたこと。
二階の窓からヒゲ万先生たちの到来を知ったこと。そのはしごを使って、外のけやきに移り、まんまと赤蛙の凶兵衛を仕止めたこと。――
「おりんちゃんは、無事でごわすか」
「へえ、よくがんばってくれやした」
「そして、お勢さんもおりもすか」
「へえ、どうやら無事のようで」
そして龍次は、蔵のほうをふりかえり、
「おうい、し、下はどうした？」
と、二階の窓へ呼びかけた。

すると、その窓から、おりんの笑った顔がのぞいて、
「下は大変、可哀そうだから、もう戸をあけてやって」
と、さけんだ。
「よしきた」
うなずいて、龍次が土蔵の外へかけもどり、かきがねをはずして土戸をあけると――中から、人間と蛇の洪水があふれ出した。

二十三

人間はすべて悲鳴をあげ、よろめき、倒れ、のたうちまわる。蛇の洪水には、強烈な酒の匂いがまじっている。
さっき、香具師たちは蔵にはいり、そこにいるはずの女の影はなく、二階にのぼるはしごもまた姿を消していることを知った。
はしごは、蛇がつたってくるのをふせぐ必要から、かんたんにかけたり、はずしたりすることができるようにしてあったのだ。
あわてて外へ出ようとしたが、外からはかきがねがかけられている。――彼らは、先刻までの国定龍次たちとそっくり同じ運命におかれたのである。
それどころか、みずからこわした竹檻からあふれ出したマムシは、蛇玉を持って出たあともなお数百匹残って、這いまわっている。――

そこへ、二階の穴から、どーっと落ちてきた滝がある。酒であった。
二階は彼らが、荒神山へ出陣する基地として、また蛇責めの光景の見物席として、きのうから酒もサカナも用意され、飯もあった。
さっき龍次たちが二階へかけ上ったとき、龍次がまずくらいついたのがその飯だ。彼はこの敵の糧食で腹をみたし、さて満身、復讐にふくれあがって、はしご渡りの曲芸という行動に出たのであった。
さて、それはともかくその酒だが、二階には以前から四斗樽が六つ七つもならべてあった。そいつを、龍次が出たあと残っていたお勢とおりんは、力を合わせてかたむけ、階段の上までころがし、どこかにあったナタでふたをたたき割ったのである。
かくて酒は滝となって階下へ落ちた。――
そしていま、おりんが「下は大変」といったも道理、先刻まで彼女と龍次を苦悶させたマキスイがまだ床に残っているところへ、この酒の奔流がまじって床上浸水のありさまになった。その直前から、そこには三十人を越える香具師たちが逃げこみ、騒ぎたててマムシを昂奮させ、はやくもかみつかれ、怒号と悲鳴の渦がうずまいていたのだ。
酒とマキスイと、ひしめく人間どもと――その中でマムシたちは完全に狂乱状態になり、もうメチャクチャのかみ放題となった。苦悶してたおれると、その顔を酒が洗う。その首にマムシが巻きつく。
かくて龍次がふたたび土戸をあけたときの惨状となったのである。――

――さて、この蛇蔵騒動の始末だ。

やがて、全面降伏した香具師たちに、蛇をことごとく池に追いこませ、清掃させ――また彼らのかしら赤蛙の凶兵衛が龍次たちを誘拐したいきさつ、それからの所業、蛇玉の正体などききただしたあと、加島屋長次郎がいいわたした。

「穴太徳とつるんで香具師として道にはずれた赤蛙の凶兵衛は、見る通り天誅を下した。これに不服なら、穴太徳一家をあげてここにこい。また天下の香具師をあげて来い。こっちも何人か手勢を呼ぶが、とにかくここで十日待つ。よろこんで相手になってやる」

香具師たちは、みな叩頭して、逃げていった。――

戸板に、赤蛙の凶兵衛の屍骸や、龍次に斬られ、あるいはマムシにかまれてその場で死んだか、動けなくなった仲間たちをのせて。

仲間でない犬神軍次郎の屍骸はおいてけぼりにしようとしたので、

「やいやい、それも持ってけ」

と、龍次があわてて命じた。

彼が無造作に犬神の身体に長脇差を突きたてる前に、犬神はヒゲ万先生のみね打ちとマムシのためにもう息絶えていたかも知れないが、あとで龍次たちの話をきくに及んで――いや、それよりおりんとお勢の惨澹たる姿を見たとたんに、龍次の怒りは無理もないとヒゲ万先生たちも納得せざるを得なかった。

「ま、とにかく、ひ、ひ、ひと眠りさせておくんなさい！」

龍次の哀願に、「おりん坊とお勢さんも寝ろ」とヒゲ万先生がいい、三人は土蔵の二階に、死んだように眠りこけた。

それがまだ薄暮の時刻であったのに、眼がさめたのはあくる日の朝であった。

二十四

夜の間に、相楽総三は四日市へいって、十人の仲間と食糧を仕入れてきていた。

この仲間が、いずれも若い屈強の浪人ばかりだ。あらためて、きのうヒゲ万先生たちがこの赤蛙の池へやってきたいきさつを詳しくきいたのだが、彼らは、えじゃないか踊りに混じっていて、加島屋長次郎の指図で、穴太徳一家がすぐに四日市へゆけないように、荒神山へ追い立てていったという。

そしてまた相楽は、四日市へのがれた清水一家が、荒神山での怪我人はもとより、マムシにやられていわし屋に残っていた連中もふくめ、きのうのうちに船で伊勢の海をひきあげていったという情報ももたらした。

「ああ、荒神山のデイリに混じれなかったのが、く、く、くやしいや！」

龍次は、小松五郎をなでさすって長嘆した。

「かんじんの大デイリをすっぽかして、こんなところでニョ、ニョ、ニョロニョロを相手にもがいてたなんて、おいらは何てえまぬけだろう。こ、これじゃ伊勢にきた甲斐がねえ！」

完全に精気と活気をとりもどしたらしい龍次を見て、ヒゲ万先生は、

「いや、おはんがおったら、荒神山でこっちが勝ったかも知れもさんな。後世の講談のために惜しかことをした」

と、破顔し、また、

「なに、そう無念がるにゃ及ばん。穴太（あのう）一家はここにまたおしかけてくるじゃろ。そのためにわれわれはここに待っちょるんじゃからな」

と、いった。

ところで、龍次にとって、加島屋長次郎と相楽総三は初対面だ。

もっとも、加島屋長次郎という名は、龍次も前から知っていた。なんどか栄五郎親分の口からきいたことがあるのだ。

たしか栄五郎親分は、「仲間でえれえやつだと思うのは、関東じゃ新門辰五郎、上方じゃ加島屋長次郎だな」といい、また「それがどっちも、おいらたちみてえにただのばくち打ちじゃあねえところが面白え。新門は火消しで、加島屋は学者だからな」ともいった。

べつに学者としての名も持っているときいたが——なるほどここでもヒゲ万先生は、「日柳（くさなぎ）燕石（えんせき）先生」と呼んで、ふつうのやくざの親分扱いをしていないようだ。

二人の対話からすると、どうやら日柳燕石先生は、四国琴平で長州の勤皇の志士とやらを次から次へとかくまい、去年高松の牢屋にいれられたのだが、それが牢奉行に鼻薬をきかせて牢をぬけ出し、どうやらいま伊勢の宇治に住んでいるらしい。

学者とか勤皇とか、そんなことは龍次にとって別世界の話だが、とにかくこの加島屋の親分

は話にきいた通り、小柄ながらきもったまのかたまりのようで、それが何気ない言葉や動作のはしばしにあらわれて、龍次は大いに尊敬した。

もう一人、相楽総三は、これも初対面にはちがいないが、自分とまったく無縁ではないことを知って龍次は驚いた。

なんでも下総（しもうさ）相馬の郷士の出身だそうだが、なんとあの天狗党に加わっていたというのだ。

龍次が大前田の栄五郎親分と野州葛生（くずう）の天狗党の本陣におしかけたとき、たまたま相楽は歩哨に出ていたというが、一党の中の千乗坊という快僧すなわち龍次の異母兄と仲がよく、あとで彼から龍次の武勇伝をきいたという。

しかも、その後天狗党が美濃から真冬の越前越えを試みたとき、その無意味さに呆（あき）れて、草堂（そうどう）万千代とともに党から脱走した四、五人の中に、千乗坊とこの相楽もまじっていたという。

「そ、それで兄貴は？」

と、龍次が、いつか草堂にきいたと同じ問いを投げると、

「いや、それが木曾で別れてバラバラになって、それからあとのことは知らん、何しろ当時は天下のお尋ね者だからね」

と、相楽は草堂と同じような答えをしたが、

「草堂先生にもいまここで再会して驚いたくらいじゃ。……しかし、あの千乗坊のことだ。無為に坊主暮らしをしておるとは思われん。必ず天下国家のために——」

と、いいかけて眼をかがやかせ、

「実はおれもある志のために働いておる。いまは荒神山の始末があるのでちょっと控えるが、そのうちお前さんに話したいことがある」

と、いった。

相楽総三、このとし二十七歳。野性と熱情にみち、ちょっぴり知性味もある好青年であった。

その荒神山のあと始末だ。

この赤蛙の池の穴太徳のねじろを占拠しているのだから、このまま穴太徳が手をつかねて黙っているはずがないと考えていたが、それが、こちらが通告した十日を経ても何のことも起こらなかった。

実はあとでわかったことだが、最初の数日は穴太徳も、ここにいるのが加島屋長次郎なのでちょっと手を出しかねていたのだが、そのうち、東海道筋から聞こえてくるもの怖ろしいうわさにすくみあがって、赤蛙の池どころではなくなっていたらしい。

それは、清水一家の逆襲であった。

まさか、駿河の清水から伊勢へ大がかりななぐりこみなどはやるまいと空だのみしていたのだが、その見込みを裏切って、うわさ通り清水一家が、次郎長みずから陣頭に立って襲来したのが、荒神山から十三日目の四月二十一日のことだ。

——その前に、荒神山で傷ついた吉良の仁吉は、四日市の港で、出船を前にして死んだ。胸と腹に受けた鉄砲玉が致命傷であった。

こときれる前に仁吉は、

「荒神山へゆくんだ。荒神山へ——」

と、身をもがき、最後に大政の腕の中で、

「お勢さん……」

と、つぶやいて、息絶えたという。

船頭が死人を乗せることをきらうので、仁吉のむくろはかごにのせて、怪我人のていによそおって船に乗せた。

清水方ではまた荒神山で法印の大五郎を失っている。ほかに重軽傷者はおびただしい。

報告をきいて、次郎長ははじめて猛然と立った。

そして、清水一家をはじめ、その勢力下にある東海一円の渡世人を、集めも集めたり実に四百数十人、これに鎖かたびらどころか、中にはヨロイ、カブトまでつけさせ、敵が使ったのだからといって鉄砲五十余挺、ほんものの槍百五十本、兵糧百俵を四そうの二百石船に乗せ、参州寺津から乗り出して四日市へ向かった。

まさに大遠征隊だ。

そのうわさに、風をくらって穴太一家は四散していた。次郎長がここまでやるとは、まったく予想の外であったのだ。

二十五

彼らを港に出迎えたのは、加島屋長次郎やヒゲ万先生や龍次たちであった。赤蛙の池で約束

の十日はすぎたが、そのころから、こんどは近く次郎長御大みずからくるらしい、といううわさがあって、それを待っていたのだ。

「来たっ、来た来たっ」

まさに雲霞のごとく上陸してくる渡世人の大部隊に、龍次は狂気乱舞した。

「凄えや、凄えなあ！　さすがは東海一の次郎長親分だ！」

龍次もさることながら、それよりよろこんだのは、彼が無事であることを知った大政以下、荒神山参加の清水・吉良一党で、そして大政さらに次郎長は、龍次が無事であることより、お勢が無事であったことをよろこんだかも知れない。

次郎長は、加島屋長次郎とも握手した。むろん彼らは旧知の仲であったのだ。かつて次郎長の乾分石松が金毘羅さまに代参にいったときも、加島屋にわらじをぬいだ縁があったことはいうまでもない。

そして次郎長は、加島屋とも相談の上、荒神山の縄張りの跡目はお勢が相続することにし、その後見は大政がつとめることにした。

これもそのとき龍次ははじめて知ったことだが、あの神戸の長吉は荒神山までは同行したものの、その後のデイリには姿が見えなかったが、実は近くの農家に逃げもどり、ケンカの終わるまで厠から出てこなかった――ということが判明していた。本人はあいにく猛烈な下痢をもよおしてどうにもならなかった、というのだが、そんな弁解は通るわけもなく、彼は黙殺された。だいいちその前に彼はまたどこかへ逃亡していた。――

こういうことをとりきめ、三日ののちに次郎長軍団は伊勢からひきあげていった。きたるや迅雷のごとく、去るや疾風のごとし。

その四そうの船が、初夏の青い波濤の中を去ってゆくのをこの日も見送って、

「どうも次郎長親分の計略、まんまと図にあたりもしたな」

と、ヒゲ万先生が嘆声を発した。

「何がです？」

と、相楽がきく。その場に、龍次とおりんはいたが、加島屋はいなかった。

「いっきに伊勢の荒神山をとっては、東海、上方一円の貸元衆が騒ぎたてる。で、一応小人数の助ッ人を出して案の定負けてから、こんどは大がかりに、コッパミジンにやっつけてしまう、っちゅうダンドリがな」

感にたえたように、ヒゲ万がいう。

「荒神山じゃ、名目人の神戸の長吉は逃げ、吉良の仁吉は殺され、結局縄張りはとれず清水方は総退却したんじゃから、あのデイリそのものは負けたっちゅうことになるが、二十人あまりで百三十人にかけ向かったことで、清水一家の勇猛ぶりをいかんなく世に知らせた。逆に穴太徳は、その人数に香具師を加え、鉄砲まで使ったことでてきめんに評判を落とした。で、いま次郎長が大挙して襲来し、あらためて荒神山を乗っとっても、だれも文句はいわん」

清水一家の船影は海の果てに消えたが、代わってそちらから別の船影があらわれた。

「このかけひき、やくざとは思えんわい。いま天下をあげてもみ合っちょる幕府対反幕府の侍

ども、大いに見習う必要があるな」
「だって、先生」
龍次が口を出した。
「ヘタすりゃ荒神山で、十三人の清水衆がみんな死んだところですぜ。あの乾分を可愛がる次郎長親分が——東海道沼津で、乾分が一人殺されたんで、何千人かのお侍にタンカを切った親分が——そんなむげえことを考えますかね」
「うん、その八方破れの熱血と、先の先まで読む遠謀を併せ持っちょるところ——」
ヒゲ万先生は相楽をふりかえって、
「ちょっとわが輩らの大将に似とらんか？」
「まさか？　——」
と、総三は苦笑を浮かべたようだ。
ヒゲ万先生の大将？　——龍次は首をひねったが、わからない。
ヒゲ万はまた首をもどして、
「ま、そのあたりはアウンの呼吸で、大政の采配にまかせたんじゃろ。大政は次郎長親分の意向を半分のみこんで、荒神山へ乗りこんできたんじゃろ。げんに、いいところで退却したじゃなかか。いや、細かかところは出たとこ勝負じゃろが、前々からの次郎長親分のようすを今にして考えると、おいはそれほど見当ちがいしちょるとは思えん」
「しかし、ほうっときゃ、荒神山は穴太徳に乗っとられ、お勢さんは赤蛙の凶兵衛のものになったんだから、清水方が勝ってよかったでしょう」
と、龍次はいい、単純な彼だが、ふっとお勢の顔を思い出し、可哀そうだなあ、と暗い気持ちになった。
荒神山はとり返したが、吉良の仁吉は死んだ。ここ数日、お勢さんの死人みたいな顔色は、仁吉の死によるものにちがいない、と、おりんがいったのだ。
それはそれとして、とにかくこれで、荒神山の一件は落着したものと見てよかろう。
雑踏する船着場を立ち去ろうとして、
「おんや？」
と、龍次はもういちど海のほうへ眼をむけた。

二十六

こちらに向かっている船が、もう乗っている人影の服装まで見えるほど近づいている。
それが——ふつうの十里の渡しの客ではないようだ。乗っている連中はみな白い手拭いを鳶(とび)のかたちに向こう鉢巻にし、そろいの紺の半被(はっぴ)に、同じく紺のももひきを整然とならべて、帆の下からへさきにかけてつめかけている。
——はてな、あの身なりはどこかで見たことがあるぞ。
龍次がそう考えたのみならず、ヒゲ万先生も、
「おい、ありゃ江戸の火消しじゃなかか。……」

と、ささやいた。
四人がそこにたたずんでいると、やがて船は着いて、続々とその江戸の火消し風の男たちが下りてくる。果たせるかな、みな鳶口をかついでいる。その数、百人ばかりか。——その中央あたりに、白布でくるんだ長さ一丈ばかりの細長い箱に棒を通したものをかつぎ、それをとりかこんで整々と行進してゆく。
それどころか、その中に、いつか見た江戸の火消しにちがいない。
まさに、いつか見た江戸の火消しにちがいない。
「あっ……新門の親分！」
と、龍次はさけんで、躍りあがり、かけ出した。
すると、その新門のみならず、そのうしろを歩いていた二人の火消しも、驚いた顔で足をとめ、それを見て龍次はさらに眼をまろくした。
「お前さんか！」
それは去年江戸で、いっしょに新門の娘——と呼びすてては悪い、一橋（ひとつばし）慶喜公の御愛妾を炎の中から助け出した浪人の河合宗之助であった。もう一人は、「を組」のマトイ持ちの卯之助だ。
行列から離れて、三人は立ちどまった。
「おめえさん……こんなところにいたのか」
と、辰五郎がいう。

「江戸じゃあ、おめえさんに申しわけねえことしたな」
「あの節は、いろいろと」
と、宗之助も卯之助も頭を下げる。
「お、親分はあのあと京へおのぼりになるってえことでしたが……」
あいさつもぬきで、龍次はいった。たしか娘を送って慶喜公のところへゆくという話であった。それがまた、いま東海道を東から来るとは？
「うん、あのときいちど京へいったんだ。しかし江戸の町火消しがいつまでも京にいるわけにもゆかねえ。それで、用をすませたあとすぐに江戸に帰ったんだが……こんどまた別の御用を申しつけられてよ。それでこの道中さ」
「なんだか……江戸の町火消しの、だ、大名行列のようじゃありませんか」
龍次は、いましがた通り過ぎた白い箱を見送っていった。
「町火消しの大名行列……面白えことをいうが、そういわれりゃ、そうだなあ」
辰五郎は苦笑したあと、声をひそめ、
「実は、むき出しに押したてて歩くと、当節浪士なんてものがうるせえからあの箱におさめてあるが、ありゃ徳川さま代々のおん馬じるしだ。一橋さまからその宰領を仰せつかったんだ」
「へえーっ、と、徳川さまのおん馬じるし。……」
眼をむいたが、
「いってえ、どんなしろものので？」

「まあさ、それよりおめえさん、こんなところで何してるんだ」
辰五郎は顔色をあらためて、
「その、旅にん修行ってえやつかい」
「ま、まあ、そういうこってす」
「何なら、おれといっしょに京へゆかねえかね？　この前のこちとらの不義理のわびもしてえし」
「京へ？」
龍次は鳩が豆鉄砲をくらったような表情で、
「京都に、ば、ばくち打ちの親分がいますかい？　きいたことがねえが」
「おれがゆくっていってるじゃあねえか。いや、おれはばくち打ちじゃあねえが……あのな、国定の、おめえを見込んで打ち明ける気になったが、おれァこのおん馬じるしを運ぶだけの御用をうけたまわってるんじゃあねえ。実は今後しばらく一橋さまのお護りも申しつかってるんだ。この人数はそのためよ。で、猫の手もかりてえところだ」
「へっ……おいら、ね、猫の手ですか」
「あっ、すまねえ、すまねえ。猫の手でも借りてえところに、おめえさんなら虎の手だ。いや、龍の牙だ。この前、おめえさんの勇ましいのには、ホトホト感心した。――」
「そうだ、是非いっしょにゆこう、京都でいっしょに働こう」
と、そばで河合宗之助が眼をかがやかしていうと、

「龍次あにい、おりゃあのときから、あにいにベタ惚れなんだ。どうか仲間になってくんねえ」
と、卯之助もすがりつくようにいう。
が、龍次はマジマジと宗之助を見つめて、
「いっしょに働くったって……その、と、殿さまのためだろ？　河合さん、じぶんの、い、い、色おんなをとった殿さまのために、まだ働こうってえのかね？」
「いや、それとこれとは……」
河合宗之助は眼を白黒させた。
龍次は困惑した顔を新門にむけて、
「親分、お、お志はありがとうござんすが……ど、どう考えても渡世人と都とは御縁がねえようです。おいらは渡世人の修行に出てきたんで。……」
「そうか」
辰五郎は残念そうに、
「御用の道中の路の上なんで、これ以上説得しているひまがねえ。とにかくその気になったら、おれを助けにきてくれ。おれは京の二条城にいるはずだ」
そういうと新門辰五郎は、河合たちをうながして、もうだいぶ先へいった鳶の行列を追っかけていった。
龍次が立ちもどると、

「辰五郎親分じゃな」

と、ヒゲ万先生がいった。新門の娘を誘拐した青木弥太郎の一党にいたくらいだから、むろん知っているのだろう。

「ありゃ、慶喜さんの御用でゆくのか」

それも見ぬいている。で、龍次はいま聞いた話をした。

「ふうん、一橋が徳川の馬じるしをとりよせるとは、いよいよ長州征伐に自分が乗り出すつもりですかな」

と、相楽総三が首をかしげると、

「そげなもんがいまごろ何の役に立つか。カカシにもならんわい」

と、ヒゲ万先生が笑った。

「それにこんどは長州のうしろに、薩摩藩っちゅう黒幕がひかえちょるんじゃ。わははは」

「だいいち、徳川家の馬じるしを、旗本じゃなくって町火消しに運ばせるとは――そのことだけでも、もう幕府が末期現象だというしるしではありませんか」

「それどころじゃなか。清水の次郎長なんてばくち打ちが、ヨロイカブトの乾分四百何十人をひきいて横行しても、だれもとがめる者のないていたらくじゃて」

「いや、いまの世の中、旗本や侍より、やくざや火消しのほうがしゃんとした骨を持っておるかも知れませんぞ」

と、相楽が哄笑し、龍次をふりかえって、

「さて、宿で支度して、そろそろ宇治へゆこうか」

と、いった。

実は龍次たちは、相楽総三から、彼と加島屋がアジトとしている宇治の某所へゆこうと誘われていたのである。

宇治とは京のそれではない。伊勢の宇治のことである。

二十七

赤蛙の池にいる間に、龍次はすっかり相楽総三という年長の青年に惚れてしまった。――何かのはずみで加島屋がもらしたところによると、相楽は下総相馬の大郷士の息子で、しかも江戸に大きな屋敷と美しい妻を持つ身分だというが、それがどうして天狗党などに参加したり、またいま伊勢で、あんなえじゃないか踊りを踊り狂ったりしているのか。いちどたずねてみたら、総三は、

「宇治へいったらいおう。いつかお前に話したいことがあるといったのはそのことだ」

と、微笑していった。

とにかく接触しているだけでも爽やかで、熱情的で、龍次は生まれてはじめて「あにい」と呼びたくなる思いがした。

その総三が、彼のほうもまた龍次が気にいったらしく、こんな風に宇治へゆこうという。そして、むろんおりんにも、いっしょにゆこうとすすめる。

おりんがあわてて、自分たちが上州を出た次第を打ち明けたが、
「だって、あの蛇蔵で二日一晩、力をあわせて蛇とたたかったというじゃないか。いまさら離ればなれの掟もあるまい」
と、総三は一笑してとりあわない。ヒゲ万先生も、「そうだそうだ」といいたげに笑ってうなずいていた。
まったくその通りで、ついに龍次も、
「おめえ、ここまできたら、やっぱり一応お伊勢さま参りをしてったほうがいいだろ」
と、いい出した。
「それになんだ、あの蛇蔵の一件は、思い出しても気色が悪くってよ、おいらもちょっとお伊勢さまで身を浄めたくなったよ」
こういうわけで、加島屋を加えた五人は、四日市をたって宇治に向かった。
いや、五人だけではない。相楽が赤蛙の池へ連れてきた十人の若い浪士のうち、五人が同行している。どうも相楽と同志のような──何の同志かわからないが──感じがする。
例の、えじゃないか踊りは、津でも見られた。松阪でも見られた。
「ええじゃないか、えじゃないか
町じゅう燃えたって、えじゃないか
焼けりゃ灰から草が出る
火つけ、泥棒、えじゃないか

ええじゃないか、えじゃないか」
その歌声をきいて、
「えらか物騒な歌を教えこんだものじゃな」
と、ヒゲ万先生が相楽たちをかえりみた。
「は、しかし歌ってるほうは踊りに酔っぱらって、歌の文句などあまり気にしてないようで、あははは」
と、相楽総三は笑う。
龍次も、そういわれてはじめて気がついた。いままで四日市できいた歌も、思い出せば、どこか物騒な文句だった。──
「歌は私どもが作ったものですが、踊りの振付けは加島屋の親分で──何でも四国でおとなりの阿波踊りを失敬したものなんだそうで」
どうやら、この伊勢路一帯にゆれる踊りは、この相楽総三やその仲間が教えこみ、そそのかし、煽っているらしい、と、ようやく龍次も察したが、さてそれが何のためかわからない。
四日市から十六里、外宮のある山田に着いたのは翌々日のひるごろだ。
近年ばかにおかげ参りがふえているらしいことは、東海道筋でも見てとれたが、なるほど雑踏といっていいにぎわいだ。ただ、みんな、御報謝を求めるひしゃくを持って、もの乞いみたいな連中が多かった。
そのくせ、山田をぬけて古市とかいう町を通ると、これが大女郎屋町で、けっこう繁昌して

いるらしいのがふしぎだ。
　そして、やがて宇治の町にはいる。内宮(ないくう)の門前町である。
「あれが宇治橋だ。あれを渡ると、大神宮だ」
　相楽は、蟻のように参詣者のつながる向こうの、天をおおうばかりの森のほうを指さしたが、
「お参りは、心身を浄めて、そのあとにしよう」
　と、横の路地にはいった。
　いわゆる社家という人々の家ばかりと見える一画である。どこからか、笙(しょう)、笛、ひちりきか、お神楽(かぐら)のひびきみたいな楽の音がながれてくるその路地を歩きながら、
「ここは、神主さんのお屋敷町ですかい」
　と、龍次がきく。
「まあ、そうだ」
「あれだけお参りする人があるのに、そ、そのみいりはないんですかい。みな、馬鹿に、び、貧乏たらしゅうござんすが」
「見る通り、お参りするのは、物乞い同然の連中ばかりだからな」
「しかし、いま通ってきた女郎屋町は、だ、大繁昌に見えやしたがね」
「金のあるやつは、あそこでありったけ、おさい銭をあげちまうのさ」
　と、相楽は笑った。
「とにかく、上も下も、狂い放題の世の中だ」

　と、加島屋長次郎がつぶやいた。ちょっと歎かわしそうな顔つきであった。
　そんな顔をしたって、狂い放題といえば、あのえじゃないか踊りこそ、べらぼうの狂い放題だが、それをやらせてるのァお前さんたちらしいじゃあねえか、と、龍次は首をひねった。
　そのうちに、黒ずんだ屋敷町をぬけて、森の中にはいった。
「どこへゆくのかしら？」
　と、おりんがささやいた。
「さあ、わからねえ」
　いつのまにか、笛、ひちりきはおろか、ここを歩く一行以外の人声はまったく聞こえなくなった。
　ただ左手に、青葉を溶かしたような川が、きれいな水音をたてて流れている。
「この川は、何てんですかい」
「これが有名な五十鈴(いすず)川じゃ」
　と、加島屋がうやうやしくいった。
　五十鈴川をさかのぼって、道ともいえぬ道を一里ちかくも歩いたであろうか。
　まわりは、千古の、と形容するしかない、ヒノキ、クス、カシ——中でも杉の巨木の多い大森林だが、その中に川に面してぽっかりと空地があって、そこに粗末な、が、大きな納屋風の建物があった。
　そこにたどりついたとき、ちょうど森にあいた大空の穴をみるみる暗くして、すさまじい羽

根の音をたてて、何百羽かの鳩が舞いおりてきた。

龍次とおりんが、眼をまろくしていると、家の中から浪士風の男が三人飛び出して、彼らと鳩を迎えた。

「お帰りなされ」

と、加島屋や相楽に、笑ってあいさつする。

いっしょにやってきた五人の浪士たちとも顔見知りらしい。そして、いっしょに鳩を、軒の下につんであったおびただしい竹のかごに収容しはじめた。

二十八

――この森の中のふしぎな隠れ家で、龍次とおりんは、ふしぎな生活をすごすことになる。

この納屋風の建物の中には、むしろの敷かれた大広間もあって、ここで浪士たちが毎日毎日おはらえを作ったり、お札を書いているのを知った。すでに出来あがって積まれているものも、眼を見張るばかりの量であった。

「お、お伊勢さまのお札ってえのは、こんなところで作ってるんですかい」

と、きくと、

「いや、それは神主さんの仕事だが、われわれはそのお手伝いをしているのだ」

と、相楽(さがら)が答える。

「あの鳩は？」

と、きくと、

「鳩は昔から神のお使いだからな、それをここで養ってるんだ」

と、答える。

何日かたって、緑の円筒の底のような空地で、餌をついばんでいる鳩のむれを眺めながら、龍次と相楽総三はこんな問答をした。

「先日の荒神山な、あとでいろいろきいたが、清水一家のたたかいぶり、何ともあっぱれなものだ。しかし……しょせん、馬鹿々々しいケンカだとは思わんかね？」

「へえーっ、あれが馬鹿々々しいケンカですか」

龍次は気色(けしき)ばんだ。

「ど、どこが馬鹿々々しいんでござんすかい？」

「あれだけ人を殺し、味方にも少なからぬ死傷者を出して、得たものは小さな荒神山の、やくざとしての縄張りだけだ。世になんの益するところもない。あれだけの勇気と働きがあれば、もっと世のため人のために役に立つことがありそうに思う」

「やくざとしての縄張りだけだといったって、やくざにとっちゃ、な、縄張りは天下と同じこってす。そのために、い、いのちをかけるのがやくざの道でさあ」

「その縄張りも……せっかくの次郎長親分の深謀も何にもなるまい。やがて世の中は、次郎長の縄張りなど吹き飛ばしてしまう」

「だ、だれが吹き飛ばすんで？」

「天下がだ。いまお前、やくざの縄張りは天下だといったな。その天下が変わってしまうのだ」

「わからねえ」

「その天下を変えるため、お前とさして変わらぬ若い連中が、いま血まみれになって働いておるのだ。同じこの慶応二年という年に、ちっぽけな山一つのばくち場を争って血まみれになっておるとは、何たる馬鹿者ども」

「なにをっ」

龍次の手が、思わず腰の長脇差（ながどす）にゆきかけたが、その眼のはしに、ちらっとヒゲ万先生とおりんの姿が見えた。

二人は、地面にむらがる鳩に餌をやっている。おりんが心配そうな顔をこちらにむけたところをみると、二人の問答は聞こえているにちがいない。

突然、龍次ははっと思い出した。はてな、ヒゲ万先生もいつか、いま相楽総三がいったようなことを口にしたことがあるぞ。――

が、ヒゲ万先生は、知らん顔をして、掌上の豆を鳩に食べさせている。

あやうく、長脇差から手を遠ざけて、

「ゆ、遊侠の道を知らねえ人間が――」

と、龍次はうなるようにいった。

「遊侠の道とはなんだ」

相楽総三は龍次の血相をまともに見ながら、平気でいう。

「ばくちか、なぐりこみか、縄張り争いか」

「それもあるが……そ、それだけじゃあねえ。弱いほうに味方する。おいらはそのつもりでさあ」

「よきかな、言や。――ところで、いまいちばん世の中で弱い者はだれか知ってるか」

「いま、よ、世の中で？」

「お前さんのことはいろいろ草堂（そうどう）先生からきいたが……お前、上州から旅をつづけてきたそうだな。その間、どこかで百姓のむしろ旗を見なかったか。一揆（いっき）の光景を見なかったか？」

「そ、そりゃ、見やした」

と、龍次は答えたが、狐につままれたような顔だ。

実は彼は、これまでの一年有余の股旅の間、どこかで――どころではない、至るところで街道の砂塵のかなたにけぶるむしろ旗、山河にこだまする一揆の悲叫を眼にし、耳にしてきたのである。

後年の史書によれば、慶応年間より明治二年までの連年の大凶作は、江戸期三大ききんの一つに当たるとされ、それに連動する苛政により、日本じゅうにわたって一揆、打ちこわしの暴動つづく、とある。古き世が崩壊してゆく必然の理由は、ただ黒船の威嚇や内戦の泥沼だけではなかったのだ。

が、そんなことは、むろん龍次の知ったことではない。彼の眼からすれば、一揆は昔から上

州にだってあったし、こんどの旅に出てあちこちでその光景を見ても、世の中はもともとそんなものだとしか判断できなかった。それはすべて天命であり、常態であり、従って特別の感情をひき起こすことはなかった。

それは彼の世界の外にあった。で、彼は狐につままれたような顔をしたのである。

「見やしたが、それがどうしたんでござんす。そ、そんなことァおいらと関係ねえ」

「あの哀れな百姓たちを見すごして、それで弱い者の味方をするといえるのか」

「そりゃ話の向けどころがちがう。おいらなんかにゃ、ど、どうしょうもねえこった」

龍次は勃然と顔を赤くしていった。

「そんなえらそうな話を持ち出して、そ、それじゃお侍は何してるんです。だ、代官も村役人も、ただ年貢のとりたてにシャカリキになってるし、一方侍同士はわけのわからねえ殺し合いに夢中になっているようだ。それにくらべりゃ、や、やくざのばくちや縄張り争いのほうが、よっぽど筋が通ってまさあ」

「そうだ、侍どもはまちがっとる」

相楽は大きくうなずいた。

「しかし、いまの日本はすなわち侍の世界だ、それに対して百姓ややくざは影の世界だ」

ふいにその眼が異様なかがやきをおびて、

「おい、お前のおやじの話は知っておるぞ。国定忠治は、百姓のために刃向かってはりつけになったんじゃろ。お前はいったい何をしとる?」

龍次は、横っ面を平手でひっぱたかれたような顔をした。

「いまの侍の世界は、いよいよ狂っとる。そいつをぶッ倒すために、ひとつお前、おれたちの助ッ人をしてくれる気はないか?」

いまおやじ云々といわれた衝撃からまださめず、ぼんやりした眼で、

「おいらに……な、何やれってんです?」

と、龍次がつぶやいたとき、向こうからヒゲ万先生がゆっくり歩いてくるのが見えた。

――わっ、こっちからもヤキをいれられるのか！

と、龍次が恐慌をきたしていると、

「相楽君」

と、ヒゲ万先生が声をかけてきた。

「どうやらおいの親分の思想改造中らしかが、親分にゃ、おいという男が一心同体でくっついとるのじゃからな、おいにことわりなしに何か約束をとりつけんでくれ」

「いや」

相楽はヘドモドした。

「どうも、この仁、使えるようで……」

「同感だ」

ヒゲ万先生はうなずいて、

「じゃから、おいも使おうと思っちょるんじゃから、そっちが勝手に先約されちゃ困る」

「おいらを使う？　先生が、おいらを、な、何に使おうと思ってるんで？」
龍次がけげんな顔をすると、ヒゲ万先生はいささかあわてた態(てい)で、
「いや、なに、使うなんて失礼でごわす。おいは、おはんの用心棒でごわすからな」
と、いって、空を仰いで哄笑した。その笑い声の大きさに驚いたのか、鳩がいっせいにぱっと飛び立った。
何かちょっとひっかかるものがあったが、それより龍次は、ヒゲ万先生も相楽といっしょに説教するのかと思ったら、相楽の説教を笑い飛ばしてくれたあんばいで、ひたすらうれしくなって、このときはわけもわからずいっしょになって、馬鹿みたいに笑った。
しかし相楽さんは、おいらを何に使おうと思ったんだろ？
いまの侍の世界をぶッ倒すために、助ッ人になれなんていったが、そんな大それたことがこちとらにできるわけはなし――まさか、えじゃないか踊りを踊れというんじゃあるめえな。あんなことで侍の世界がぶッ倒せるとは思えないが。
それからの森の生活で、相楽より龍次を悩ましたのは、加島屋長次郎親分だ。
いや、ばくち打ちの親分というより、依然として白丁にエボシなどつけて、龍次に訓戒ないし講義する。こういうときは、侠客加島屋長次郎ではない。まったく国学者日柳燕石(くさなぎえんせき)先生の威容だ。
杉の切株に腰うちかけ、前に龍次とおりんを坐らせ、
「この伊勢の大神宮の由来、ひいては日本のなりたち、ありようを教える、ありがたく、うけたまわりゃがれ」

といって、数日おきにおごそかに教えるのだが、何をいっているのか、さっぱりわからない。
「タカマガハラからニニギノミコトが降臨したまい……」
などやられているとき、龍次は、おりんの耳に口をよせて、
「茶釜の腹にゃ、ニ、ニギリメシのミコトのほうがいい、といってるのかね」
と、ささやき、また燕石先生が慨然と北の空を望んで、
「スメロギはナドテ倒幕の大号令を発したまわざる……」
と、沈痛な声をもらすと、
「コ、コオロギが土手で賭博してゴロゴロ鳴いたって？　お、面白えことをいうコオロギじゃござんせんかい」
と、ひとりごとをいい、またしきりに、ミカド、ミカドという言葉が燕石先生の口から発せられるのに首をひねって、
「はてな、江戸の赤坂に、そ、そんな名の縄のれんがありやしたぜ」
と、つぶやいた。
こういう説教や講義は、二度や三度ではない。それに悩まされながら、龍次にとってこの森の生活は快適であった。
だいいち、情熱的な相楽総三も、ひょうひょうとした日柳燕石先生も、彼は大好きであったのである。

それに、相楽も燕石も、ほかの浪士たちと同様、たえず外に出ていった。——どうやら、えじゃないか踊りの普及、指導のためらしい。

彼らは、いつしか龍次が大食漢であることを知って、帰ってくるときはいつも大量の、伊勢の赤福というアンコでくるんだ名物餅をみやげに持ってきて、龍次を満悦させ、子供みたいに口のまわりをアンコだらけにして、夢中になってそれをたいらげる龍次を見てうれしそうに笑った。

二十九

が、そのうち杉の林に梅雨らしい雨がふり出したのに、龍次はわれにかえった。それに、少々たいくつもしてきた。

で、ある日、ヒゲ万先生に、旅にん修行に出てきた身として、いつまでもここにはいられない、また旅に出たい、と申し出た。

「ははあ、それで、どこへゆきもすか」

「お、大坂から四国か中国路を通って、九州を回ってみてえと思ってるんですが」

「四国なら、四国切っての大親分加島屋の長次郎どんがここにおるじゃごわせんか」

「そ、それじゃあ、山陽道を——」

「それがな、おりあしく中国路じゃ、いくさが始まっちょるわ」

「へえ？」

浪士たちが外からきいてきた情報を、ヒゲ万先生は伝えた。

おととし、攘夷に熱狂して叛乱を起こした長州藩を幕府は鎮圧したが、その後も長州では抵抗の火だねは消えず、こんどは倒幕の炎となって燃えあがりそうになったため、幕府方ではふたたび兵を出し、かつ諸藩を動員して長州に攻めこもうとし、いま中国路のあちこちで戦争のまっさいちゅうだというのである。

「ところがな、こんどは前のようではなか。この二月、長州藩はおいのとこの薩摩藩と同盟を結んで、もう孤立しておらんし、諸藩も幕府のいうことをきかん」

と、ヒゲ万先生はいった。

「だいいち幕軍だって——それ、去年の秋、駿河で東海道を上る幕軍を見たじゃろ、あの連中がいままで京大坂でダラダラ滞陣しちょったんじゃからな。もうノビ切ったうどんみたいなもんで、まともに戦争する気などありゃせん。いくさをやるのか、やらんのか、長い間モタモタして、やっとこんど踏み切ったものの、どうやら幕府のほうの旗色がよくないらしか」

「へへえ」

龍次はキョトンとしている。

「やっぱり別の世界の話か」

ヒゲ万先生は笑った。

「別の世界の話といっても、そのおかげで現実に、お前さんいま九州へなんぞゆけんぞ。それに、これから夏じゃ、この涼しい森から出ることはなか、あはは」

なるほど、ゆこうとしている街道がいくさ騒ぎじゃ、どうしようもない。

ヒゲ万先生にいわれたからではないが、高い杉のあいだから暑そうな空を仰いで、つい森の底ですごしていると、八月のなかば、外に出ていた相楽(さがら)総三が、手をヒラヒラさせて例のえじゃないか踊りをやりながら帰ってきた。

「ええじゃないか、えじゃないか
葵が枯れても、えじゃないか
枯れりゃ次には菊が咲く
菊が咲いたら、えじゃないか
ええじゃないか、えじゃないか」

呆れたような顔でこれを迎えたヒゲ万先生が、

「相楽君、それを歌わせるつもりか。少し、早すぎやせんか」

と、苦笑した。

相楽は眼をかがやかせて、

「先生、将軍が死にましたよ」

「ほ、家茂(いえもち)が？」

「まだ幕府のほうじゃ隠してるが、この七月二十日、大坂城で病死したことはたしからしい。病死というより、長州戦争の敗北つづきで、気鬱の極に達して死んだようです」

「ふうむ。――で、あとは？」

「あと、十五代目をつぐのは、慶喜よりほかはありますまい。これが御存知のような、なかなかのやりてですから、こちらもそのつもりで、向こうが立ち直るひまを与えないようにひっかきまわし、ゆさぶってやる必要がありますな」

九月になって、長州の戦争は、幕軍総敗北のうちにやっと終結したらしい、という話をきいた。

龍次がついに決心して、

「先生、い、いくさが終わったってえじゃあありませんか。おいら、た、旅に出てえと思ってるんですが――」

と、いい出すと、ヒゲ万先生が、

「ちょっと待ってくれ」

と、いった。

「きのう、同志からの連絡で、おいと相楽君はこれから京へゆかんけりゃならん」

「えっ、京へ？」

「おいはどげんしても、おはんといっしょに股旅をしたか。――それで、おいが帰るまで、いましばらくここで待っちょってくれんじゃろか」

龍次はまごついた顔で、しかしそれ以上なお押し返す言葉を持たなかった。

彼はヒゲ万先生が好きであったし、正直なところをいうと、ヒゲ万先生がそばにいないと股旅が、迷子のように心細い――少なくとも面白くないような心理におちいっていたのである。

それはまあがまんするとしても、ヒゲ万先生にそういわれて、なおいま一人で——おりんをどうするかは別として——旅立ってゆく理由を見つけることができなかったので、

「へ、そ、それじゃあ、もう少し待ちやしょう」

と、龍次はうなずいた。

それどころか、相楽といっしょに京都へ出立するヒゲ万先生を見送って、

「先生、は、早く帰っておくんなさいよ」

と、いったとき、自分の旅への焦燥より、ここにとり残される心細さに、龍次の顔は、子供みたいにベソをかいていた。

さて、ヒゲ万先生と相楽総三はいなくなった。

結局相楽は、龍次を何に使うつもりだったかはわからなかったが、龍次も相楽に使われるつもりもなかったから、知らなくってもかまわない。

あとに残った日柳（くさなぎ）先生から、龍次は例によっての講義をきくことになる。浪士たちは、いよいよひんぱんに森に出入りする一方で、毎日のように鳩の世話とおはらえ作りとお札書きに精出している。

龍次も鳩の世話をし、おりんに至ってはおはらえ作りの手伝いまでするようになった。

が、秋が過ぎても、ヒゲ万先生は帰ってこない。

おりんが、故郷へ帰ろう、と龍次にいい出したのは、大みそかに近い冬のある日であった。

三十

冬とはいえ、風のないあたたかい日で、二人が坐っている場所のすぐ前をながれる五十鈴（いすず）川は、いつに変わらぬ清らかさで、この季節に足をひたしたくなるほどであった。

「ねえ、あにさん、大前田村に帰ろうよ」

——実は龍次は、そのとき白い河原にならんで坐っていて、突然おりんを抱きしめたい衝動にかられ、彼女のほうへぐいと顔をむけた瞬間であったから、そのでばなをくじかれてヘドモドした。

むろん以前から、何度もその思いにつきあげられながら、一つの掟（おきて）にしばられてその行為には至らなかったのだが、きょう珍しく二人だけになって、せせらぎと鳥の声はしているのに、この世のものではないような静寂と、外から隔絶された風景の中に坐っていて、あやうくその掟を忘れかけたのであった。

「へっ、帰るゥ？」

彼は反射的に、脳天から出るようなあらぬ声を出したが、すぐ自分をとり戻して、

「お、親分は、二年か三年股旅をして、い、一人前の渡世人になったと思ったら帰ってこい、といいなすった。じょ、上州を出たのァ、まだ、去年だぜ」

「でも、足かけでいえば二年、これから旅に出ても、上州に帰るのは来年になっちまうよ。足かけ三年にはなるわ」

「そりゃ無理な勘定だ。そ、それにおりゃ、まだ一人前の渡世人になったとは思っていねえ」
龍次は頭をかき、
「それであにさん、もともとこれからどこへゆこうと思ってたのさ？」
「だいいち、や、約束したヒゲ万先生がまだ帰ってこねえよ」
「さ、山陽から九州をまわってよ、こんどは山陰道から北陸道をぬけて上州へ帰るつもりでいたのさ。そ、そうすりゃ、正味、二、三年はたつだろう」
「その間、あたし、また離れてあにさんを追っかけるのかしら？」
龍次は、ただ口をモガモガさせた。
そんな馬鹿々々しいことはもうできない。いくたびか冒険を共にし、とくに荒神山では夢魔のような世界に投げこまれて、二人は死闘の夜と昼をすごしている。二人の魂は、夫婦よりもかたく結ばれ合っている。
そうかといって、いまいっしょに旅に出て、そのあげくノホホンと夫婦づらして上州に帰るわけにはゆかない。それじゃ何のために旅にん修行に出たのかわからないし、てきめんにみんなの笑いものだ。
おりんにしても父の栄五郎に、帰ってきたら祝言を許して、といって出てきた以上、その前に龍次と夫婦になることはできない、と思いこんでいる。
二人が、相結ばれることをタブーとしていた理由はこのことにあった。
いわんやここは清浄な巫女たちに護られるお伊勢さまの森だ。――その清浄な森の中で、こ

こ半歳ばかりひどく幸福そうに見えたおりんだが、それがいま、
「ね、あにさん、帰ろうよ」
と、突然あえぐようにいう。
「九州なんかやめて、ここから北陸をまわって上州に帰ろうよ。いますぐたっても、それでも来年になるわ。おとっつぁんもゆるしてくれるよ。……それに、あたい、このごろむしょうに赤城の山が見たくなっちゃった。あにさん、想い出さないかえ？」
「あ、赤城の山か。見てえ、そりゃ見てえが……」
おりんは龍次にしがみついて、
「それより、あたい、早くあにさんのお嫁さんになりたいんだ！」
「う、うん、お、おれもそうしてえよ」
龍次はおりんを抱きしめて、火のかたまりみたいに真っ赤な顔をして、
「しかし、ま、待ってくれ」
と、うめいた。
「どうして？」
「ヒゲ万先生を、あのままほうり出してゆくわけにゃゆかねえよ」
からくも、そのことを思い出したのだ。
「上州へ帰るんだったら、もう用心棒はいらないじゃないの？」
「そ、そりゃそうだが」

と、龍次はうなずいたが、
「しかし、おりゃあの先生が大好きなんだ。ど、どう考えたって何のトクもねえのに、ずうっとおいらの用心棒して歩いてくれてよ。思やあ一宿一飯どころじゃあねえ恩義がある。上州へ帰るにしたって、こ、このまま知らねえ顔しておさらばするわけにゃゆかねえ」
「そのことはあのチヤガマガハラの先生によくあやまって、あとで伝言してもらえばいいんじゃない？」
そのとき、
「こら」
と、遠くからどなる声がした。
びっくり仰天して、二人は飛び離れた。
ふりむくと、森のはずれに、チヤガマガハラの先生、すなわち日柳燕石（くさなぎえんせき）先生が立っている。
ふつうの声ならとどかない距離だが、先生はこちらを見て、ニヤニヤしている。
「せっかくチョーチョーナンナンとしとるところへ、相すまんがねえ」
燕石先生は大声でいった。
「いま浪士方の一人が、京から草堂（そうどう）先生の御伝言を持ち帰ったんでねえ」
燕石先生の声に、二人は顔見合わせた。
「おい、御伝言はあっちから来た」
龍次はつぶやいて、大声でどなりかえした。

「えっ、ヒゲ万先生は帰ってこねえんですか？」
「うん、いまちょっとよんどころねえ用があって、京を離れられねえらしいや。何でも国定の、是非助ッ人（すけっと）を頼みてえことがある。すぐに京へ来てもらえんじゃろか、ってえ伝言さ。――それに、おりんちゃんもごいっしょに、ってえことだ」
「おれたちが、京へ？」
「そうよ、京は伏見の薩摩屋敷とかへ――」
龍次は顔色をぱっとかがやかせ、足もとにころがしてあった小松五郎義兼（よしかね）をとりあげて、
「ヒゲ万先生がおいらに――す、す、助ッ人にきてくれって？」
と、いいながら、おりんの顔も見ず、スタスタと燕石先生の方へ歩き出し、
「ありがてえ、しばらく動かねえから、か、身体がスッパクなりかけてたんだ」
と、つぶやいて、長脇差をカタカタ鳴らしながら腰にぶちこんだ。
十歩ばかり歩いて、おりんがくっついてこないのに気がついて、ふりむいた。おりんは、もとの五十鈴川のほとりに、うなだれて立ちつくしたままだ。
龍次はいちど燕石先生のほうを見たあと、つかつかと戻っていった。
「ど、どうしたんだ」
「あにさん」
顔をあげて、おりんはいった。
「京へいって、旅にんの修行になるの？」

龍次はまごついた。
「あそこは、オサムライさんばかりがケンカしてるところじゃあないの？」
「う、うん、そ、そうかも知れねえが……」
「そんなところへ、渡世人の旅がらすが一羽飛んでって、何するのさ？」
おりんは龍次の手をとって、身もだえして、
「あたい、あにさんがそこへゆくと、こんどこそはとり返しのつかないたいへんな目にあうって気がしてならないの。——ね、やめてよ、あにさん、ことわって、このまま赤城山のふもとの村へ帰ろうよ、ね、ね」
龍次はおりんの手をもぎはなし、そっくり返って首をふった。
「やだ、おいらの用心棒が助ッ人を頼んできたとありゃあ、遊侠一匹、何がなんでも京へゆかなくちゃあならねえんだ！」
「あにさん、おまえ——死んでもいいのかえ？」
「何いってやがる、何が起こったって、女子供の知ったことじゃあねえ、黙ってろ！」
またスタスタと歩き出した。数歩歩いて、ふりかえると、こんどはおりんがついてくる。
おりんは、きっと龍次をにらみつけていた。
「あたいの勝手だよ。——いえ、ヒゲ万先生は、あたいにも来いといったというじゃないか！」

京洛

一

「ううっ、ふりゃがる、ふりゃがる」
三度笠に手をかけて、空をあおいで、龍次は子供のような声をあげた。
「おいらたちがくるというので、きょ、京もお化粧して迎えてくれるのかなあ」
「お正月だからよ」
と、菅笠（すげがさ）の下で、おりんは笑った。
粟田口のあたりからふり出したこんこん粉雪（こなゆき）であった。
伊勢の宇治から四日市まで十六里余、ここで東海道にはいって京まで二十六里余、合わせて四十二、三里の道中をつづけてきたら、ちょうど元日にぶつかってしまったのだ。昨晩泊まった大津の宿で、二人ははじめてきのうが大みそかであることを知った。
けさ、まだ暗いうちから大津のはたごを出て、しばらく歩いてから、
「おりん、おめえ、い、いくつになった？」
「十九。……」

「それでも十九か」
「それでも十九かって……どういう意味さ？」
「その、まだ、こ、子供だってえことよ」
そうはいったが、おととし上州を出たときから、ずいぶんおとなになりゃがった、と龍次は眼を見張っている。この道中の宿々で、おりんの色っぽくなったことは、息苦しいほど思い知らされたことだ。
「あにさんは？」
「おいら、いくつになったっけ？」
「二十二になったんじゃない？」
「そうか。と、年とったもんだ」
おりんは笑った。しかし、あたいはずいぶんふけたのに、このあにさんは上州を出たときとおんなじだ、それどころか、ほっぺたの色なんか、あかん坊みたい、と心の中で感心している。
こんな問答をかわしているうちに、慶応三年元日の朝は明けたのだ。
そしていま、夕暮ちかい雪の京へはいろうとして、
「橋があるな」
「あれが、道中スゴロクにある三条大橋っていうんでしょ、きっと」
「ところで、ふ、伏見へはどうゆくのかな」
「さあ？　……あ、あそこにだれかいる。あのひとにききましょう」

道中スゴロクにも出ている三条大橋というのに、雪のせいか、橋の上にはだれもいない。ただ、その橋のこちら側のたもとに、女の影がけぶって見えた。
雪がふっているのに、お高祖頭巾（こそずきん）をかぶっただけで、それが橋を渡るようすもなく、こっちにくるようすもなく、そこで二、三歩ずつ、ゆきつもどりつしている。
近づいて、龍次は声をかけた。
「ちょっと、うかがいやすが……ふ、伏見にゃ、どうゆきゃいいんでござんしょうか？」
「伏見？」
お高祖頭巾の中にも、女の眼が大きくなって、
「伏見のどこへゆきはります？」
「薩摩屋敷ってんですが」
女はしばらく黙っていた。知らないのか、と思っていると、
「うちがこれから連れてってあげましょう」
と、いった。
「へえ？」
「うちは薩摩屋敷のじきそばどす」
「へえ？」
龍次とおりんは顔見合わせた。こりゃ話があんまり好都合すぎるようだが、助かったことにまちがいはない。

「あんたはんら、どこからおいでやしたえ？」
「あの、伊勢から」
「お名前は何といやはります？」
「へ、その、く、国定龍次とおりんと申しやすが」
相手の急迫した感じにつりこまれて、つい答えてしまったが、この訊問に何とも不審な眼をむける二人に、女はやっとわれにかえった風で、
「えらいすんまへん。実はうち、ある人をここで待っていやしたのどすが、その人がまだきやはりまへん。ところが、悪いやつに見つかって……ほれ、あそこに見えますやろ？」
かすかにふりかえる、はるかかなたの向こうの橋のたもとあたりに、なるほど灰色の影が一つ見える。
「ほやさかい、ここから帰るにも帰れず、困りはてていたのどす。どうぞいっしょにいってくれはりません？」
「おいらたちがいっしょにゆきゃ、だ、大丈夫なんでござんすか」
「え、あんたはんらを迎えにきたといえば、うちがここにいた名目が立つのどす。あんたはんらと知り合いいうことにして——あ、あの男がくるようどす」
いかにも、橋の向こうの影がいそぎ足で近づいてくる。
「さ、ゆきまほ」
うながされて、歩き出しながら、

「あれは、何者で？」
「目明し——」
「えっ、め、目明し？」
「いえ、そういうても、うち、怪しいもんじゃおへん。伏見の船宿寺田屋の娘、お龍いう女で——あちらが狙うとるのは、うちの待っていたお人で、うちじゃおへん」
まだよく事情がのみこめないが、頼んだのが、女だ。しかもお高祖頭巾だから顔は見えないけれど、眼だけ見ても美しく、声からすると年は二十七、八らしい。こういう場合、素知らぬ顔をすることのできないのが龍次の気性だ。
ちらっとおりんを見る。
おりんも眼で、ゆけ、といった。
「うちが話しますさかい、あんたはんら、黙っていておくれやす」
お龍がささやいた。まだ雪はうす白く橋を覆っているくらいで、彼女の下駄のさわりになるほどではない。
——と、橋のなかばあたりまできたとき、頬かぶりに尻っからげという相手の男が、三、四間の距離から、じいっとこちらを見て、
「あっ」
という大声を走らせた。片頬に虫のようなあざが浮かんで見えた。
「祐天か！」

と、龍次もびっくり仰天した。相手を祐天仙之助と知ったのだ。

と、みるや、祐天仙之助は反射的にぱっと背をむけ、脱兎（だっと）のごとくもと来たほうへ——京の町のほうへ逃げていった。

去年の春、龍次の長脇差（ながどす）からのがれて、勢州荒神山のふもと赤蛙の池へ飛びこんだ祐天仙之助、ひょっとしたらあのまま溺れ死んだのじゃないかと思っていたのだが、なんと生きのびて、いまきくところによると、京で目明しになっているとは？

「ま、お知り合いどすか？」

お龍は意外な顔をした。あたりまえだ。

「あの野郎、悪党でござんす」

と、龍次はうなって、前方を見やった。

「ほんなら、うちのごまかし、通らんわ」

お龍はあわてて、

「いまのお話、やめときまさ。うちは別のお人を探して頼みますさかい、あんたはんら、知らない顔してこのままいっとくれやす」

「な、なんだかよくわからねえが、あの男がこわいなら、その心配はいりませんぜ」

龍次はいった。

「おいらの顔を見りゃ、あいつ、き、肝っ玉をひっくりけえして逃げまさあ。こちとら、あんたにとってこれ以上無え、ま、守り神となるはずでござんすがね」

お龍はしばらく、じっとこちらを見ていたが、

「そうどすか」

と、うなずいて、

「ほんなら、やっぱりごいっしょに伏見へゆきまほか」

と、いった。

三人は三条大橋を渡って、京の町にはいった。

「ここらを中島町いうて宿屋町ですけど、やはり伏見へいにまひょう。かご探してきます」

と、お龍がいった。

「かご？　おいらにゃいりませんぜ」

「でも、伏見までまだ三里もおますさかい」

「へえ？　三里——そんなら、あんたと、この娘だけのかごを頼んでおくんなさい」

お龍が向こうの辻へ歩いてゆく間、龍次はいま来た三条大橋から東のかたをふりあおいだ。それが比叡、東山などいう名の山々であったことはのちに知る。

雪はますますはげしくふりしきっている。依然として、橋の上にも、そこから見る町にも人影はない。雪のせいか、町はいよいよ墨色に沈んで、慶応三年元日の京は暗澹（あんたん）とした印象であった。

二

——と、向こうの辻へいったお龍が、泳ぐようにかけ戻ってきた。

「たいへん！」

「ど、どうしたんでござんす？」

お龍はものもいわず、おりんの手をひいて橋のほうへひき返す。つられて龍次も、二、三間、大橋の上に戻ったが、すぐうしろから一団の男たちが足早に追ってくる地ひびきをきくと、そこに立ちどまった。

「逃げたって、だめだ」

怖ろしい声をたてたのは、祐天仙之助であった。

その背後に従えているのは、袖口を山形に白く染めたそろいの羽織をつけ、笠をかぶっている者もあるが、鉢巻をしめた者もある。みるからに剣気たちこめる侍の一団だ。

「うめえところで、巡邏中のこの旦那方にぶつかったもんだ。もういけねえぜ」

祐天はニヤリとして、

「寺田屋の娘さん、おめえさん、伏見から出てきて、この三条大橋でだれを待っていなすった？」

と、声をかけてきた。

「おれの見るところじゃあ、西から淀川を上ってきた人間が、そのままのほほんと寺田屋に泊

まっちゃあ、いつかの騒動の二の舞いになるから、すぐその足で伏見から、大津の追分へまわる山科(やましな)道を通って東海道に出る。そして東から京へはいって、市中の宿屋でしっぽり逢瀬(おうせ)をたのしもうってえこんたんだったろう」

お龍は答えない。

「その出迎えに三条大橋まで出たのを、おれにつけられたと気がついて、逃げ口上を作るためにべつの旅人をワラ人形に仕立てようとしたが——そいつが、おれの知ってるチンピラやくざだったとァ、天網カイカイ、疎にしてもらさずってえのはこのことだ」

笑いながら、出てきた。

「たとえおめえが白状しなくったって、ここで待ってりゃ、やがてそいつはやってくるだろうが」

「それはおいらだ」

と、突然龍次がどなった。

「お龍さんは、おいらたちを迎えに出てくれたんだ」

「おめえを？」

祐天はちょっと毒気をぬかれた顔をし、すぐに、

「てめえ、国定忠治のせがれだろ？　いままでどこにいたのか知らねえが、てめえ、伊勢からきたんだろ？　伊勢からきた国定忠治のせがれを、伏見の船宿の娘がどうして出迎えるんだ。すッとんきょうなことをいうのもいいかげんにしやがれ」

と、歯をむいてあざ笑った。

「去年、お伊勢参りにきたお龍さんと、妙な縁で知り合ったんだ」

と、龍次も笑いながらいった。

「どうだ、納得いったか」

口から出放題のデタラメだが、あっといったきり祐天はとっさに二の句もつげなかったが、たちまちうしろをふりかえり、

「おききの通り、人をコケにする図太え野郎でござんす。さっき申しあげたように、御大法にそむいてはりつけになった上州国定忠治ってえあばれ者のせがれ、あっちこっちで大根みてえに人を斬ってきた若僧、こんど何しに京都へきたか、寺田屋の娘同様、こいつもお取り調べになったほうがいいと存じやすが」

と、いった。

すると、そろいの羽織集団の中の一人の男がうなずいて、

「それでは、お前、縄をかけて屯所へ連れてこい」

と、あごをしゃくった。

祐天はちょっとあてがはずれたような顔をしたが、すぐにふところから十手をとり出して、

「やいっ」

と、ひっ裂けんばかりの声をあげた。

「ここに出張っておられる衆は、京で泣く子も黙る新選組の旦那衆だぞ。刃向かえば容赦なく

斬る。神妙にすればお慈悲もある。おとなしく、お縄にかかれ！」

と、龍次の前に立ちはだかった。

仁王立ちになっていた龍次のひざが、柔らかくちょっと折れて、

「ゆうどう……」

という声が、三度笠の下からもれた。

その一瞬、腰から銀光とともにほとばしった長脇差(ながどす)は、うなりをたてて祐天仙之助の右脇腹から左肩へかけてなぎあげられていた。

「からくっ」

なんたる凄絶さ、これでもかつては甲斐で聞こえた祐天仙之助は、ななめに上半身を切断され、白雪に樽を割ったように血しぶきをぶちまけ、その上に二つになった身体を重ねていた。

数瞬、地上に動いているのは、霏々(ひひ)としてふりつづけている粉雪だけであった。

が、一息おいて、名状しがたいうなり声があがり、どっと新選組が動こうとした。

「やるかっ」

けもののように飛びずさって、

「この野郎、やくざのくせに十手なんか持ち出しゃがって、やくざの風上にもおけねえから斬った！　来るなら、来い！」

と、龍次は血にぬれた長脇差をかまえた。

実は、半年ぶりに小松五郎をふるって、彼の全身の血は歓喜にどよもしている。

「待て」
集団の前で、うしろざまに片手で制したのは、さっき祐天に、お前が縛れと命じた人物だ。
そのまま、黙って、じいっと龍次を見すえている。感にたえた、といった風でもある。
「待て待て、わが新選組は、やくざ同士の刃傷沙汰に介入する余裕はない」
「しかし、隊長、新選組のために働いていた目明しを斬られて――」
そばの若い隊士が、せいかんきわまる顔をふりむけると、
「いや、われわれのために働いていたといっても、この祐天なる男、どうもうさんくさいやつだった。いまの一件も、きゃつ、虎の威をかりて何やら私怨をはらそうとしたにおいがある」
みずから虎の威といったが、なるほどあたりをはらう威風がある。その顔を見て、龍次は、あれれ、ちょっと次郎長親分に似たところがあるぞ、と、まばたきした。
張り出した頬骨、怖ろしく大きな口、全体として重厚きわまるいかつい顔が。――もっとも年配は次郎長よりずっと若く、三十前半だろう。
「それに、土方（ひじかた）君、国定忠治という名は知らんか」
「聞いております。わが関東の大侠ですな」
「その息子とは面白いが、何にしてもわれわれ新選組の任務とは関係がありそうもない」
にっと破顔して、
「もう一つ、いまの手並み、気にいった！」
と、いった。

「わけは知らんが、なるほど祐天がこわがってわれわれを連れてきたのもむりはない。あれはまさに人斬り剣法だ。相手にすればこっちにも相当手負いが出るぞ」
と、うなずき、やおら呼びかけた。
「おい、若い衆、ちょっとこっちの屯所へこんか。いや、取り調べるのではない。――」
「やだ」
と、龍次は依然殺気をみなぎらせてにらんでいる。こちらの会話は低い声であったから、聞こえなかったのだろう。
「そうか。それではやむを得ん」
苦笑した声が、ちょっとあらたまって、
「これ、お前はこちらと無縁の者と認めて、いまの殺生（せっしょう）は見のがしてやるが、われわれは京の治安を任とする新選組だ。万一、この先、お前がそれを乱すようなことがあれば、こんどはまちがいなく始末するぞ」
と、いった。そして、左右の隊士にあごをしゃくった。
「おい、目明しの屍骸を鴨川に投げこんでゆけ」
「隊長」
土方がささやいた。
「あの男はともかく、寺田屋の娘の待っていた男、そいつを待ち伏せする必要はないのですか」

隊長はちょっと考えて、

「いや、坂本という男は、こっちの待ち伏せにひっかかるような鈍な男じゃない」

と、一笑し、

「ゆこう」

と、一同をうながした。

やがて新選組は、けぶる雪の中へ、魔のような影のむれを消してゆく。

凝然と立ちすくんでいた龍次とおりん、お龍は顔見合わせた。

「ああ、あのひとはまだきやはらん。八ツ半（午後三時ごろ）にここで待ってるいうたのに……もう一刻ちかくたってるのに、まだきやはらん」

と、つぶやいた。橋には依然として人影はない。

が、すぐに気をとりなおしたように、

「やっぱり伏見へいにましょ。ここでうちがウロウロしてると、かえってまた狙われるかもわからへんさかい」

そして、あらためて龍次を見やって、

「あんた子供はんみたいな顔して、みかけによらずほんまにおとろしおひとやなあ」

と、身ぶるいした。

「お正月いうのに、あんな大殺生して」

しばらくして、お龍、おりんは二ちょうのかごにのり、京の町を南へ走っていた。

店のかけあんどんや常夜灯はぽつんぽつんとあるが、町は四日市などよりまだ暗く、寒い。

そばに龍次がついて、駈けながらきく。

「京はいつもこんなに、さ、寂しいんでござんすかい」

「いま、ごりょうあんやさかい」

「ごりょうあん？」

「暮の二十五日、天子さまがお亡くなりにならはって、ことしの正月は年始も松飾りも鳴物も、ごちょうじになってるのどすえ」

「へへえ？」

それとは別の話だろうが、龍次はふっと、去年の夏公方（くぼう）さまが大坂で亡くなった、ということを聞いたのを思い出した。

漠然と、一つの時代が終わろうとしているのを龍次も感じた。まことに彼は、夜明け前のひときわ暗い「最後の一年」の京都にはいってきたのであった。

三

だいぶ夜もふけてから、伏見に着いた。——はずだが、ここは夜か。

その時刻、くわっとかがり火が燃えあがり、ちょうちんがつらなり、この一画だけは真昼のようであった。粉雪（こなゆき）はやんでいたが、ここは雪のふったあともない。

伏見の船着場だ。河面に大小の船がひしめき、岸や往来に、旅人、船頭、女たちが忙しそうにゆききしている。

この河は宇治川の支流だが、ながれてやがて淀川となり、そこを上下する三十石船、高瀬舟など、それこそ盆も正月もなく、また昼も夜もない。

お龍たちは、そこで、かごから出た。

その船着場から往来をへだてて、船宿らしい大きな建物がならんでいるが、その船宿の前もちょっとした広場になっていて、この時刻に船着場の光景を見物している連中も少なくなかった。

「おい、お龍」

その一人から呼びかけられて、お龍はふりむき、眼を見ひらいた。

「まあ！」

と、さけんでお龍はかけより、その男にむしゃぶりついた。その男は、両手をふところにいれていたので、もろに縁台の上にころがった。

それにお龍はのしかかって、

「こんなところにノホホンと――うちがわざわざ三条大橋のほうで待ってるいうてやったのに」

白い手で、二、三度、ピシャピシャと相手の頬をぶった。

「雪のふる中で、一刻も待って、そのあげくあんなおとろしい目にあったいうのに――」

「ゆるせ、ゆるせ、元日に山科（やましな）越えするのがおっくうになったんだ」

男は、頬をたたかれながら笑っていう。

「一刻もはやくチクとやりたくってね。この通り、ここにおっても大丈夫じゃないか」

なるほど縁台の上には朱塗りの大盃があって――大きな徳利はころがって、酒がながれおちている。お節料理を半分残した重箱も見える。

お龍は、まわりの縁台でびっくり顔をしている他の客たちに気がついて、

「ま、起きなはれ」

お高祖頭巾（こそずきん）の中の顔を赤くして、相手の胸ぐらをつかんで、ひき起こした。そうされても、男はふところ手のままで、まるで大きな起き上がり小法師のようだから、みんな笑い出した。

「あんなおそろしい目にあったとは何だね」

と、きく。そして、いぶかしそうに龍次とおりんのほうを見た。

年は三十二、三というところか。髪はマゲというよりうしろへなでつけるようなかたちにして、黒紋付だが、この元日の夜に、羽織も着ず、はかまはヨレヨレだ。身なりはかまわないたちと見えるが、ふしぎに颯爽（さっそう）とした感じがある。

「何かあったのか」

そういいながら、横着に縁台から立とうともしない男を、

「こっちへおいでやす」

と、お龍はその袖をひっぱって、灯の影のとどかない小暗い場所へ連れていった。

そこでお龍は、何か話しているようだ。――三条大橋の事件をしゃべったのだろう。

やがて二人はひきかえしてきて、龍次の前に立った。

「いやあ、大変なことがあったそうで、ありがとう」

と、男は頭を下げた。

「礼もこれではすまん。いろいろ話したいが、ここじゃ寒い。うちへゆかんか。うちといっても、女房の家、それ、あそこの軒あんどんに寺田屋とある船宿だが」

と、すぐうしろの大きな建物を指さした。

「へ、ありがとうござんすが」

龍次はおじぎして、

「おいら、薩摩屋敷ってえところに用があってきたんで。――さ、薩摩屋敷って、ここから遠いんですかい？」

「なに、五町ばかりだが……しかし、おぬしとは是非話したいなあ。おぬし、国定忠治の息子でりゅう次ってんだってね。りゅうとは、どう書くんだ」

「龍虎の龍でござんす」

それくらいは龍次も知っている。

「そうか、それは珍しいめぐり逢いだ。おれが坂本龍馬、女房がお龍、そこへおぬしが国定龍次っていうとは――どうか、三匹の龍同士で話したいもんだ。だめか」

お龍が口を出した。

「なんなら、あんたが送っていってあげはったら？」

「いや、それがな、おれがここにいるのは、もう着く上り船で同志がくるはずで、実はそれを待ってるんだ。三条大橋でお前さんに待ちぼうけをくわせたのはそのためもあるのさ」

「いや、道さえききゃ、ひとりでゆけまさ。教えておくんなさい」

道を教えたあと、龍馬はくりかえし、礼をいい、

「あした、ことによったらおれも薩摩屋敷に顔を出すかも知れん、そうなったら、そのとき話をきかせてくれ」

と、いった。

闊達な笑顔が大変魅力的で、この人物は龍次にも、ただこれだけのゆきずりの縁とは思われないなつかしい印象を残した。

四

が、むろん龍次は、いまは一刻もはやくヒゲ万先生や相楽（さがら）総三に会いたい。

浪人のヒゲ万先生が藩邸にいるというのはおかしいが、このごろの浪士というやつは昔の浪人とはちとちがうようだし、もともとヒゲ万をただの浪人とは思っていなかったから、龍次はふしぎには思わない。

伏見の薩摩屋敷の門は、荒けずりながら、夜目にも豪壮なものであった。

門番に告げると、すぐに急ぎ足でヒゲ万先生が出てきた。龍次は抱きついた。

さて、それから屋敷の一室に通されて、晩飯を供される。

それを、例によって大食しながら、龍次が、三条大橋での出来事や、そこで逢った寺田屋のお龍に案内されてこの伏見まできた話をすると、ヒゲ万先生は眼をむき出した。

「ふうむ、祐天仙之助を斬ったか」

と、驚き、さらに、

「おはん、すんでのことで新選組とやり合うところじゃったな」

と、呆れ声を出した。

「し、新選組って、何ですかい？」

龍次はキョトンとしている。

ヒゲ万先生は、それがここ四、五年来、京にあるいわゆる勤皇の志士たちに鬼神のごとく怖れられている幕府方の殺し屋集団であることを説明し、その眼前で、こちらと因縁のあるやつとはいえ、いま新選組お抱えの目明しを斬ったとは、無謀といおうか、怖さ知らずといおうか、実に破天荒の所業であった、と、嘆声を発した。

「どうやらおはんを見のがしたのは、隊長の近藤勇らしかが、さしもの近藤もおはんのムチャクチャぶりには、どぎもをぬかれたんじゃろ」

「こんどあばれたら、ま、まちがいなく始末するぞっていいやした。へっ、エラそうなことをぬかしやがって！」

いい気なもので、龍次はまだいきまいている。

次に寺田屋の件だが――ヒゲ万先生は、お龍もその夫の坂本龍馬という男もよく知っていた。

「ほ、寺田屋に龍馬どんが来ちょったか。あれは長崎へいっちょるときいちょったが、まことに神出鬼没の仁じゃな。しかし、それにしても事もなげに寺田屋に泊まるとは大胆不敵」

そしてヒゲ万先生は、こんな話をした。

坂本は土佐出身の浪士だが、なんどもこの薩摩屋敷に出入りしている。

寺田屋は薩摩藩の定宿にもなっていて、五年ばかり前、薩摩の侍同士の骨肉相はむいわゆる「寺田屋事変」の惨劇を演じたことがあるが、自家用の三十石船も持っているような大きな船宿だ。

そこへ龍馬が、自分の惚れた京の町医者の娘を連れてきて養女とさせ、かつ自分の女房とした。お龍である。

そして、去年の一月末のことだ。龍馬が同志とともにここにきていると知って、深夜新選組と目明しのむれが忍びよった。その気配を、ちょうど風呂にはいっていたお龍がききつけ、まっぱだかのまま龍馬に急報した。

凄まじい斬り合いの中で、龍馬は傷つきながら短銃で敵数人をたおして、やっと逃げ出し、五町離れた薩摩屋敷に走って九死に一生を得た。

それはヒゲ万先生や龍次がまだ参州吉良にいたころの事件であったが、ヒゲ万先生はあとでこの話をきいたのである。――その前に龍馬は、それまで不仲であった薩摩と長州を握手させるという大業を成功させていたのだが、そんなことは龍次に話したってわからないにきまって

いるから、省略した。

「それから一年もたたんのに、またしゃあしゃあと寺田屋に泊まるんじゃからな。――お龍さんが怒るのもむりはなか」

「な、何だか、ひどくほっぺたをたたいてましたぜ」

「あはは、そうか。またあのお龍さんっちゅう女が、ああ見えて、まっぱだかで走って急を告げるほど気の強か女じゃからな」

「へへえ？」

「それはともかくあの龍馬どんは、西郷先生が百年に一度出る人物じゃと感心しちょられるほどなのに、気楽すぎ無警戒すぎるところがある。いちどよくよく注意してやらんけりゃならんな」

「こ、事によったら、あしたここにくるかも知れねえっていってましたぜ」

「ほう、そうか、それならよかが」

「ところで」

龍次はまわりを見まわして、

「相楽さんはいねえんですかい？」

「ああ、相楽君は、暮に江戸へいった。くれぐれもおはんらによろしくっちゅう事じゃった」

「江戸へ？」

「あの仁はな、おはんも知っちょるように薩摩人じゃなかが、天狗党騒ぎのときおいと別れて

からこっちへ来て、ある縁で西郷先生に逢ってから非常に心服し、いまじゃ薩摩人よりも西郷先生の信者となっちょる。で、西郷先生のおさしずで、ある用を果たすために江戸へいったんじゃ」

「ちょ、ちょ、ちょっと待っておくんなさい。さ、西郷先生ってだれですかい？」

「おはん、西郷隆盛先生を知らんのか」

「し、知りませんねえ」

龍次はそらうそぶいた。

「飯のタカモリどんなら知ってますが」

ヒゲ万先生は呆れ顔をしたが、これはヒゲ万先生ともあろうものが客観的判断を失ったからで、龍次が西郷隆盛先生も新選組も知らないのはふしぎではない。

「西郷先生はおいどんらの総大将だ」

「へえ、さ、薩摩の殿様でござんすか」

「殿様より、まだえらか。……あしたでもお目にかかってみるか」

おりんが、突然声をあげた。

「あらっ……いつか四日市の港で、先生が清水の次郎長親分と似てるっていったのは、そのひとですか？」

「なんじゃと？　西郷先生が次郎長親分と似ちょるって？　ぷっ、そげな馬鹿なことをいうわけはなか」

「そういや、おいらも思い出した。次郎長親分が、ちょ、ちょ、ちょっとわが輩らの大将に似とらんか、とかいいやしたぜ。あれれ、せ、先生にも大将があるのかなってふしぎだったから、おぼえていまさあ」

「そげなこと、いったかな。……そういわれりゃ、八方破れの熱血と、先の先まで読む遠謀を併せ持っちょるところ――その点だけは、一脈の相似がなかでもなかかな」

「先生」

と、龍次は顔色をあらためて、

「そんなええひとに、おいらが逢ったってしょうがねえ。それは願い下げにしてもれえてえんですが」

助ッ人をたのむ、といわれて勇躍して伊勢の森を出てきたが、この伏見の薩摩屋敷の豪壮さ、そしていままでもかいま見たいかつい侍たちの姿に、だんだん心細くなって、何となく口を切りかねていたのだが、

「おいらに、す、す、助ッ人をたのむってえ話でござんしたが……」

と、龍次は小声でいい出した。

「こ、こんなにお侍衆がたくさんいなすって、おいらにできることがありますかえ？」

「ある、ある、おはんの力をかりりんけりゃならんことじゃ」

ヒゲ万先生は笑ってうなずいた。

「それは、あした話そう。今夜はもうおそか。まず、ゆっくり休め」

五

「お客人、お客人」

呼ばれて、龍次は眼をあけた。

若い、武骨な顔がのぞいていた。

「御熟睡のところを相すまんが、草堂どんが、そろそろ起こせと申してこられもしたで」

龍次はがばとはね起きた。

「いま、なんどきでござんす」

「五ツでごわす」

午前八時ごろだ。

「いけねえ。ヒゲ万――じゃない、そ、草堂先生は？」

「もうかれこれ一刻も前から、馬場のほうへいっちょられもす」

「ババ――って、馬の――？」

「さようでごわす。起きたら、そっちへ連れてこいとのことで」

「お、おいらの連れの女はどうしました？」

「それも、そっちへいっちょられもす」

龍次は赤面しながら、床を出て、顔を洗い、大いそぎで朝飯をちょうだいした。それでも、大きな餅が三個はいった雑煮を五椀も食って、若侍に連れられて、その馬場とやらへ出かけた。

昼間なので気がつくと、この屋敷の中は廊下の壁から玄関まで西洋銃がギッシリと横にかけならべてあった。

外は、雪さえ見たきのうにくらべて、きょうは凛冽と晴れあがった蒼空だ。

馬場は、屋敷に隣接して作られていた。馬場というより、河に面し、東西の両側を柵でかこったただけの河原だが、十数頭の馬が白い息を吐き、大きな輪をえがいてかけまわっているのが見える。ひづめの音にまじって、銃声らしい音も聞こえた。

柵をはいると、すぐに龍次は、その銃声のもとがヒゲ万先生であることを知った。

柵の内側で、先生が短銃をかまえているのだ。遠く河のふちに弓のマトのようなものが立てられて、それに向かって、またパーンという音が大気の氷を割った。

ふりかえって、

「やっと、お目ざめか」

と、ひげの中から白い歯を見せた。案内人は一礼してひき返してゆく。

「も、申しわけござんせん。ば、馬鹿によく寝ちゃったもんで」

龍次が頭をかくと、

「ハツギリしたからの。安らかに眠れたんじゃろ」

と、いう。

「ハツギリ？」

「それ、きのう元旦に、祐天を斬ったじゃなかか」

龍次は笑いもせず間の悪そうな顔もしなかった。それより、憤然とした眼でヒゲ万先生の短銃をにらみつけて、

「そ、そりゃ何でござんす」

「西洋の短づつじゃよ。ピストルという」

「先生が……そんなものを修行していなさるんでござんすか」

「その通り」

ヒゲ万先生は、またマトに狙いを定めた。

「日本のサ、サ、サムレエが、毛唐のそんな飛道具を使おうってんですかい？」

「その通り」

轟然（ごうぜん）たる音とともに、向こうのマトのまんなかにぱっと穴があいた。

龍次は眼をむいたが、たちまちじだんだふんで、

「そ、そんなことをしてると……先生、そのうちおいらの長脇差（ながどす）に負けますぜ！」

と、いった。

「そうかも知れんな」

ヒゲ万は蛙のつらに水の顔つきで、

「しかしな、そうはいうが、だんだんと、ばくち打ちもこげなものを使うようになりゃせんか。だいいち例の穴太徳（あのとく）も次郎長親分も鉄砲を持ち出したじゃなかか」

と、笑った。

「あの龍馬どんも、あれも北辰一刀流のなかなかの使い手っちゅうことだが、ピストルのおかげで助かっちょる。ケンカやいくさは、勝たねばならん。勝つためにより好都合な道具がありゃ、それを使ったほうが利口っちゅうもんじゃ」

ヒゲ万先生はピストルをふところにしまいこみ、

「そげなことより、あっちを見い」

と、指さした。

向こうで、駈けめぐっている数十の馬影に対してである。

「あっちのほうが、よっぽどたまげたみものじゃて」

龍次もはじめて気がついた。

馬はもちろん馬術の調練をやっているのだろう。乗っているのは薩摩の侍ばかりと見えたが――その中に、よく見ると一人異風の乗り手があった。笠をかぶり、馬乗りばかまという姿だが――まぎれもなくおりんだ。

「ちょっと乗って見たか、っちゅうから、屋敷におる稚児(ちご)さんの着物を着せてやったが――よう似合う。あはは」

「お侍にまじって、な、なんてことをしやがるんだ」

「勇ましか娘さんじゃっちゅうことは、よくよく知っちょったが、あげなみごとな乗り手とはなあ。上州じゃ、おなごもみなあげに馬に乗るのか」

そのこと自体には龍次は驚かない。前から知っているからだ。

「いや、あれはべつで……赤城近辺にゃ牧場(まきば)で馬や牛を飼う家が多いんで、あれなんか、裸馬でも乗りやす」

「おはんはどうじゃな」

「それが」

龍次は赤面した。

「おいらは馬はヘタで……ガ、ガキのころ、二、三度落ちて眼をまわしてから、もういけねえ」

ヒゲ万は眼をほそめて、

「あのおりんな、おいは西郷先生のハシタ女(め)に推薦しようと思っちょった。お身のまわりのお世話をする女じゃな。西郷先生はそげなことはおきらいのたちじゃが、見ちょると、常人以上にそげなお世話役が要(い)る方で」

「おりんが、えれえひとの身のまわりのお世話？　そ、そんなことのできる娘じゃありませんよ。馬の世話ならできるかも知れねえが」

「同じようなもんじゃ。いまの女騎士ぶりを見せたら、西郷先生もぞっこんお気に入りじゃろ、あはは」

ヒゲ万先生は笑ったあと、眼を動かして、

「お。……呼んであったやつが来た」

と、いった。

「おはんを助ッ人（すけっと）につけてやりたか男がな」
龍次はふりむいて、息をのみ、数秒たって、「おおっ」という声を出した。

六

いま彼らが通ってきた柵の木戸をあけて、四人のやくざ風の男がはいってきたが、そのまんなかの男の顔を見て、思わずさけんだのだ。
「こ、これァ、黒駒の……親分」
それはまぎれもなく黒駒の勝蔵であった。ほか三人の乾分（こぶん）の中の、八代（やつしろ）の玉五郎という名もおぼえているし、あと二人も名は忘れたが顔には記憶がある。
「やあ、お久しぶりだな、国定の――」
と、勝蔵は笑いかけてきた。
龍次は笑わない。
もうおととしの初冬になるか、清水の次郎長からつきつけられたケンカ状に応じて、富士の裾野に赴く途中、同行した神官の娘お雪を追って青木ケ原の大樹海に姿をくらました黒駒一家のめんめんだ。
あれからどうしたろう？　と、ときに、ふっと思い出すこともあったが、ありゃ清水一家とのデイリから逃げたんじゃ、というヒゲ万の見解がやはりほんとに思われてきて、正直なところあまり面白くない感情をいだいてきたのだが、それが――いま、京のこんな場所にあらわれ

出ようとは。
「あのときは、申しわけねえことをした。甲州育ちのおれだが、あの青木ケ原の森にゃ参ったよ。ケンカの間に合わねえとあせりゃあせるほど迷いこんでよ、お前さん方にゃ、まったく面目しでえもねえ始末になった」
と、勝蔵は頭を下げた。
あいさつを返すより前に、まず龍次は気になっていたことをきいた。
「あ、あの娘さんはどうしやした」
「あのときとうとうつかまえられなくってよ、ありゃ、風の便りにきくと、黒駒村に帰ってるそうだ」
「ふうん」
そのことはまず一安心だが――勝蔵はいう。
「三井の卯吉はお前さんたちが片づけてくれたものの、面目玉をつぶしたこちとらは、あれっきり甲州へ顔出しできなくなってよ。そのうち甲州は、清水の次郎長野郎の縄張りにはいっちまった。おれは上方を流れ歩いたあげく、ひょんな縁で、いまじゃあ京の岩倉ってえお公卿さまの中間（ちゅうげん）だ」
「勝蔵親分がトンズラしたあと、富士でおいがいったろが。――黒駒の親分は何ともハヤ煮ても焼いても食えなか人物で、やくざの親分にゃもったいいなか。トンズラしてもありゃ、必ずまた生き返ってきもすぞ、と」

と、ヒゲ万先生が口を出す。

口を出したのはいいが、ほめたんだか、悪口なんだか、これには勝蔵も眼を白黒させた。

そんなことをいいながら、この男をここに呼びよせるとは——と、さすがののんきな龍次も心中呆れている。

さて、二人はこもごも話した。

「岩倉卿の中間にゃちがいなかが、同時にいまじゃ京のばくち界の旗頭じゃて」

「旗頭か何か知らねえが……まあ、そんなかたちになった」

「京都にばくち打ちがそんなにいるんですかい？」

と、龍次がふしぎそうにきいた。

「いや、いねえ。いなかった。少なくとも、たいしたばくち打ちの貸元はいなかったようだ。……ところがよ、ここ数年、京にはたくさんの人足のあにい連が集まってよ」

「諸藩がやとったものじゃ。京にはいまや、将軍はもとより、各藩がほとんどこちらに藩邸を作っておたがいに探り合い、もみ合っちょる。これらが暮らすにも移動するにも、何につけても人足っちゅうもんが要る。その数はおそらく数千……侍よりゃ多いかも知れん」

「ふうん。……」

「それが、ひまなときは小人不善をなすものでな、みんなばくちに目がないそうじゃ。……で、いつのまにやら黒駒は、その闇のばくち界の親分になって……そりゃまあわかるが、なみのばくち打ちとちがうところは、黒駒はなんと、そのアガリを、主人の岩倉卿へ献上しとるっちゅうことじゃて」

「へーっ？」

「黒駒は勤皇の心に目ざめたんじゃ。それにしても、その額をきいたが、ばくちの胴元のテラ銭も馬鹿にならんな。ヘタな大名のみいりより多いかも知れん」

田村栄太郎『やくざの生活』に、

「公家の非違をただすのは、幕府の京都所司代の役目であったが、幕末には公家を押える力はなくなっていた。公家は浪人を隠したりしたが、博徒に賭場を貸したりした。五摂家などの身分の高い者までが、門に高張りちょうちんを立てて博徒に家を貸したが、その邸宅へ踏み込むには、朝廷の伝奏の手を経なければならず、とうてい不可能のことであった。当時、盛んに賭場として自邸を開放した者は、岩倉具視などの下級公家であった」

とある。

「まさか、イカサマ・サイを使ってるんじゃあねえでしょうね」

と、龍次がいった。

勝蔵はまた眼を白黒させて手をふり、

「こちらじゃ、ばくちにかけちゃみなシロウト衆だからな」

と、いった。なんだか返事があいまいである。

「とにかく目的は勤皇のための資金かせぎじゃからな。目的は手段を正当化するわい」

ヒゲ万も、妙なことをいう。この豪傑は、意外にマキャベリストのところがあるようだ。

こんな風にいわれると、龍次は口がきけなくなる。
「さて、京のばくち界はいっとき勝蔵親分の独壇場じゃったのじゃが、ここに一大強敵があらわれた」
と、ヒゲ万先生がつづける、
「会津の小鉄じゃ」
「えっ、会津の小鉄。――」
龍次は声をあげた。
「そういや、京都にも、す、す、凄えのがいやしたね。その名は大前田村でもききやしたよ、なんでも身体じゅう刀傷で埋まってるとかいう――」
「その通り、右手も左手も、指は三本しかねえやつだ。もともと人入れ稼業だが、ここ四、五年会津さまのお抱えになってから、会津屋敷の鉄五郎、小男だから人呼んで会津の小鉄といわれるようになったやつだ」
と、勝蔵がいった。
「そいつが去年の夏ごろから、ばかにおれを目のかたきにしやがってよ。こちとらのひらいた鉄火場というと、しつこく賭場荒らしをかけてきやがる。おまけに新門一家のやつらも加勢してるようだ」
「えっ、新門一家が？」
龍次は眼をまろくした。

そういえば、去年の初夏、徳川家の馬じるしを捧げて京に上る新門一家を見かけたのだ。
「どうやら、おれが岩倉さまに縁のある人間だってえことをかぎつけたからしい。新門は将軍さまをお守りするために京都へきた連中、小鉄は京都守護職会津さまのお抱えだからな。いわば兄弟分だ。――くやしいが、ケンカとなりゃあ、歯が立たねえ」
「一方、この黒駒は勤皇派のやくざっちゅうことになる」
と、ヒゲ万がいう。
「黒駒からのミイリが悪くなって、さああわてたのが岩倉卿じゃて。あれはえらかおひとじゃが、名だたる貧乏公卿でな。それがいろいろ活動されるについて、その資金のもとは黒駒の献上金じゃったっちゅうから閉口されもした」
遠く近く、ひづめの音はつづいている。
ふと龍次は、おりんの乗った馬が、五間ばかり離れたところに近づいているのに気がついた。おりんはその距離で、右へ左へ馬をゆきつ戻りつさせながら、心配そうな顔を、ちらっちらっとこっちへ向けているようだ。
「それで師走に岩倉卿がこの伏見の屋敷へこられて、西郷先生に相談をもちかけられた。なんとかこっちから適当な用心棒を貸してもらえんじゃろか、っちゅうことじゃ。それで岩倉卿がお帰りになったあと、西郷先生がいちどおいを呼ばれて、お前どうじゃといわれて、おいはその役うけたまわって、ひき下がったがの」
「………」

「すぐにまたおいを呼ばれて、お前じゃやはりいかん、お前にはほかにやってもらわんけりゃならん用がある。それより諸国の街道筋なら知らず、京のやくざの賭場争いに薩摩侍を出しちゃやはりまずか。それを敵方が知りゃ、必ず新選組が介入してくる。また別に京都見廻組っちゅうもんもある。——」

「…………」

「いま薩摩の侍が、それらと京で公然たる争いを起こすのは時期尚早じゃ。お前だれか、適当なやくざを知らんか、との仰せじゃ」

龍次はよそをむいている。またおりんと、眼を合わせたのだ。

「ああ、それならドンピシャリ恰好な男がおりもす、と、おいは手を打った。それがおはんじゃ」

ヒゲ万は、ぎろっとふりむいた。

三間くらい近づいていたおりんは、馬に鞭をあて、かけ去った。

「おはんに京へ来てもらったのは、こげな次第じゃて」

ヒゲ万はいった。

「これならおはんの世界じゃろ。龍次親分、どうかこの黒駒の助ッ人になってやってくれんか」

七

龍次はちょっと反応のにぶい表情をしていた。

ヒゲ万先生の助ッ人と聞いて勇んで京へやってきたが、何てえこった、この黒駒の勝蔵の助ッ人であったのか、と、少なからずめんくらったのだ。まさに渡世人の世界の助ッ人にはちがいないが、助ける相手が、かつて何度か自分に一杯くわせた黒駒の勝蔵だとは。——

その龍次の顔色をどう解釈したか、

「こりゃ、黒駒の勝蔵対会津の小鉄の賭場の縄張り争いじゃなか。——それに勝ったほうが、いま京におる人足たちを掌握することになる。いま京におる数千の人足がどっちの支配におかれるかは、いつか事が起こったさいに——大ゲサにいや、天下の勝敗につながる」

「先生、そ、そんな大それたことァ、おいらにゃ……」

龍次の眼には、いましがたのおりんの眼が残っている。耳には、伊勢の森で訴えたおりんの声が残っている。

——京はオサムライさんばかりがケンカしてるところじゃあないの？　あにさんがそこへゆくと、こんどこそたいへんな目にあうって気がしてならないの。……

「いや、この件についておはんの名を持ち出したら、黒駒は、国定のに来てもらや百人力だが、しかしこの前の始末を思うと、来てくれるかどうか心配じゃっちゅう。じゃからおいは、なに、龍次っちゅう男は、弱いほうが何もかもぶちまけて頼みゃ、小松五郎一本抱いて、笑って死地に赴く遊侠じゃと受け合った。——」

おだてる調子ではない。これはほんとうにそう信じているとしか思えない声であった。龍次

は湧きあがるものを抑えようとして、かすかに胴ぶるいした。

「なに、そういっておだてりゃ、たちまち胴ぶるいしてすッ飛んで来る男だと黒駒にいったんじゃ」

ヌケヌケといわれても、龍次は腹を立てない。まったくその通りだと自分でも思う。ただ。

——

「もっとも、正直いっておはんが一人助ッ人になってくれても、どの程度の支えになるか。……おいとしては、せめてことし一杯、どっちもつばぜり合いの形勢にもちこたえてくれりゃいいんじゃが」

「先生」

龍次はうなされたような眼つきをむけた。

ヒゲ万先生にこうまでいわれて、ことわれるだろうか。

「む、向こうは、そんなに強いんですかい？」

「そりゃ強か。なにしろいまいった通り、会津の小鉄は新門一家を友軍としちょる。のみならず、長州で負けたとはいえ、新将軍慶喜は二条城にあって京ににらみをきかせ、それを背にしょって、新選組、見廻組はなお威をほしいままにしちょる。彼らの職分は勤皇方の志士の掃滅じゃが、京の治安取り締まりもかねておるところから、ひょっとするとそれらをみな敵とすることになるかもしれん。……」

こうまでおどされて、ひっこめるだろうか。

「わ、わかりやした。やってもよござんす」

と、眼を燃やして龍次はうめいた。彼は自分でもわけのわからない激情にとらえられたのだ。

「むずかしいことァわからねえが、と、とにかくおいら、弱えほうの助ッ人になりやしょう。ただ、いちおう……そ、その前に話しておきてえ人間が……」

みなまできかず、

「ありがてえ！」

黒駒の勝蔵は顔の前に片手をあげておがむかたちをした。三人の乾分(こぶん)たちは、両手を合わせた。

「よく承知してくれた。礼をいうぜ」

そのとき、突然背後で、けたたましい犬のほえ声が起こった。

ヒゲ万先生はそのほうをふりむいて、

「や」

と、眼をむき、柵のほうへいそいでいった。

柵の木戸をあけて、犬をひもで曳いた一人の男がはいってくるのを龍次は見た。犬は、かけまわる馬群を見て、いよいよはげしくほえた。

黒駒の勝蔵もちょっとうろたえた眼をしたが、そのまま龍次のそばに近づいて、

「しかし、国定の——こりゃ、おめえさんにとっても迷惑な話じゃあねえぜ。ここで一旗あげりゃ、おれたちが日本の渡世人の総元締になれるとおれは見ている。そもそも清水の次郎長を

やっつけるにゃァ、これしかねえ」
「へ、なんのこってす？」
龍次はけげんな顔をした。
勝蔵は歯をむき出して、龍次の考えもしなかった言葉を吐いた。
「おめえさんも、おめえのおやじをはりつけにした幕府ってえやつを、長脇差で斬るも同様なことをすることにならあな」
「馬鹿野郎」
龍次はわれを忘れてどなりつけた。
――かりにも甲州で親分だった黒駒の勝蔵に、そんな口をきいたのは龍次もはじめてだ。
「おいら、そ、そんなつもりでてめえの助ッ人を引き受けたんじゃあねえや。てめえのほうが弱えというから引き受けたんだ。それだけだ。そんなエラそうなことをぬかしゃがるなら、す、す、助ッ人をやめるぞ！」
勝蔵はびっくりした顔で、首をちぢめた。
「こらこら、何をケンカしとるか」
ひき返してきたヒゲ万が、半分心配そうに叱りつけ、
「こちらが西郷先生じゃ」
と、龍次にいい、
「例の岩倉卿お抱えの博徒の件、この国定忠治のせがれが引き受けてくれもした」

と、うしろの大男にいった。
その人物は、まさしく大男であった。この真冬に、羽織もつけず、つんつるてんの着物に白いへこ帯をまきつけ、素足にぞうりをつっかけている。――後年の人は、上野の西郷さんの銅像をもうちょっと若くして、あれにチョンマゲをつけた姿を想像すればいい。
「それは、ありがとうごわす」
と、西郷は龍次にていねいに頭を下げた。
龍次は棒立ちになって、ヘドモドしている。黒駒の勝蔵たちは初対面ではないと見えて、地べたに頭がくっつかんばかりにおじぎをしている。
「何かやっかいなことらしかが、岩倉さんは大事な人じゃて、どうぞあの人を助けてやって下され。この西郷からもよろしゅうお頼み申します」
「へ、は」
と、龍次は妙な声を出した。
ヒゲ万先生は、薩摩の殿さまより、えらいといったが、それでちぢみあがったわけではない。龍次はこれがどんな人か、全然知らない。それにもかかわらず、まったく未知の人間にも、相対しただけで、このひとはただの人ではない、と直感させる巨大さと魅力を放射している大眼玉と大肉体であった。
「国定忠治ってえ人は、お名前はきいちょりもす」
西郷はいった。

「えらか人でごわしたそうで」
「へ、は」
「実は、おいどんもばくちは大好きじゃて」
「へ、は」
「そのうち、ひとつ大ばくち場をひらきたか、と思っちょりもすで、その節は、これもよろしゅうお頼み申します」
笑うと、大きな童子のような顔になる。
もういけねえ、この人に頼まれた以上、おれは助ッ人をことわるわけにゃゆかねえ、と龍次はやっと覚悟をきめた。
西郷の耳にヒゲ万は口をよせ、なおかけめぐっている馬群のほうを指さした。
「ほう、あの娘御か」
西郷は、眼をほそめてそのほうを見やって、
「よか、よか。勇ましか娘のごたる。あれなら、よか」
と、うなずいた。

八

さて、これからの龍次の京における一春秋は、小松五郎義兼血笑録である。

数日後、龍次は今出川上ル室町頭の柳の図子というところに移った。小路のことを京都では図子という。ここに黒駒の勝蔵と三人の乾分が住んでいたのである。

その小路には、下級の公卿侍たちの家がならんでいた。——実は、これが「柳の図子党」と呼ばれる岩倉具視の秘密機関であったのだ。

岩倉卿自身は、五、六年前からテロの目標となり、朝廷からもしりぞけられて京都北郊の岩倉村に潜居していたが、ひそかに柳の図子党を使って、情報を収集したり、志を同じくする人々といろいろ画策したりしていたのである。

黒駒の勝蔵たちは、この柳の図子党と岩倉村の連絡役を申しつかっていた。

まあ中間にはちがいないが、これが小さいながら一軒借りていたのは、それ以外に彼が京のばくち界の闇の大親分たる地位を占め、かつそのアガリを岩倉卿に献金している功績を認められたからだ。

その後、何かのはずみで、龍次も岩倉村に連れてゆかれたことがある。

勝蔵の献金のことをきいて、「ばくち打ちのくせに変なことをする野郎だ」と首をかしげていたが、岩倉卿を実際に見て、「勝蔵をよろしく頼む」というお言葉をたまわっただけだが、龍次は、なるほどこれでは献金したくなる人物だ、と感じた。

龍次などにたいした人物鑑識眼があるわけではないが、とにかく大人物だ、ということはわかったのである。

印象はまるでちがうが、その点だけは薩摩屋敷で会った西郷先生に似ている。印象がちがう

というのは、西郷が茫洋としてあたたかみがあるのに対し、これはその名の通り岩みたいに頑強な、煮ても焼いても食えない感じで、とてもいわゆるお公卿さまといわれる人のようではない。だいたい、ばくち打ちを家来にして、そのアガリを召しあげるということだけでタダモノではない。

さて、黒駒の勝蔵と会津の小鉄との争いだが、勝蔵の話では、彼がひらく賭場を、会津の小鉄一家が荒らすようなことをいっていたが、やがて知ったところによると、勝蔵のほうからチョッカイをかけたのが始まりらしい。

京都へきて、どういう手づるでか、岩倉家の中間にはいりこんだものの、おのれの力を発揮するのはやはりばくちだと考え、一方、京都に人足があふれて、それぞれ手なぐさみで日をつぶしているのを見て、たちまちその方面の親分となった手ぎわは、さすがに俊敏な勝蔵だ。かつて甲州と駿河にかけて、清水の次郎長と張り合った度胸の持ち主だけのことはある。

実は、江戸で貧乏旗本たちが、取り締まりの手のはいらない自分の屋敷を賭場に貸していたように、京都でも貧乏公卿が以前から同様の所業をしていて、黒駒の勝蔵もはじめその目的で岩倉にとりいったのだが、近来京にも人足が急増し、その需要がふえたと見て、たちまちこれを大々的に企業化したのは、ひとえに勝蔵の才覚と岩倉卿の大胆不敵のなせるところであった。

その人足の世界に、会津の小鉄なる親分があって、ようやく勝蔵の存在に気づき、急に敵視しはじめたのは、勝蔵にとって意外であったかも知れないが、公平にみればあたりまえであっ

たといえる。小鉄はただの人入れ稼業ではなく、みずから侠客をもって任ずる男であったからだ。

で、その黒駒の用心棒となった国定龍次だが。——

「親分、助ッ人は引き受けやしたが」

と、はじめに彼はいった。

「あっちの賭場になぐりこみをかけるのァ気がすすまねえ。この前のことでコリやした」

東海道の岩淵で、勝蔵にイカサマ・サイを使わせられた騒動のことをいっているのだ。

「いや、あのときはすまねえことをした。あはは」

勝蔵はあやまったが、あはは、は余計だ。

「会津の小鉄の名はきいていたが、あれほど乱暴なやつとは思わなんだ。とにかく京都守護職会津さまをしょってるんだから、おもても向けられねえ威勢だ。あっちの賭場を荒らすなんてとてもじゃねえ。ただ、こっちの賭場を守ってくれりゃそれでいい。それも、この一年もってくれりゃいいと、岩倉さまはおっしゃる」

どういう計算か、ヒゲ万先生もそんなことをいったようだ。

「承知いたしてござんす」

決して、イヤイヤ一点張りで引き受けたわけではない。

龍次の血は、争闘を欲して海鳴りのようなどよめきをあげていたのだ。

で、龍次は、こんなことまでいった。

「親分はでえじな身体だ。賭場荒らしにゃ、親分は手を出さねえでおくんなさい」

彼が乗り出すと、いつもツイこういうことになる。

さて、それから。――

黒駒の勝蔵は、京のあちこちで賭場をひらいた。場末の寺を使うこともあったが、安宿が多かった。

集まる人足は、注意して会津の小鉄の息のかからない連中ばかりえらんだつもりだが、どこで嗅ぎつけるのか、中に必ず数人の賭場荒らしが混じっていた。

そいつらが、ばくちのまっ最中、ふいにいんねんをつけてゆすりはじめる。はてはテラ銭の箱をひっかかえて立ち去ろうとする。

そのとき、

「やい、待て」

と、龍次が立ちあがる。

テラ銭箱をかかえたやつが、相手のずんぐりむっくりした体形と、湯上がりみたいな色をした童顔に、

「てめえ、なんだ」

と、馬鹿にしたような笑いを浮かべて、

「京の賭場はみんな会津の小鉄一家の縄張りだってことを知らねえのかよ！」

「ゆうどう……」

という低い声が相手の口からもれても何も気づかず、逆に寄っていって顔をつき出し、

「やい、若僧のくせに、文句あるのか」

「からくっ」

さけびとともに、銀光一閃、その男は脳天から胸まで斬り下げられ、銭と血の海の中へ崩れ落ちる。

あまりの凄まじさに、賭場にいた者すべて、あっけにとられたように立ちすくみ、次の瞬間、賭場荒らしの連中はこけつまろびつ逃げ出す。――

冬から春へ、こんな光景が何回かくり返された。

「黒駒の勝蔵にゃ、凄え助ッ人がついている。――」

「国定忠治のせがれだそうな。――」

「ゆうどう、からくって、わめいて人を斬りやがる。――」

「そりゃ、忠治の戒名だっていうぜ。――」

そんなうわさが立って、黒駒の開帳した賭場を荒らすやつはなくなった。

その代わり、龍次のゆくところ、やくざ風の男たちがヒタヒタとつけてくるようになった。

この賭場荒らしには、親分の会津の小鉄は姿を見せなかったが、むろんこのことを知らないわけではない。それどころか、

「その野郎、賭場とは別に片づけてしまえ」

と、乾分に命じ、しかも歯がみの音をたてて、

「いいか、そうはいうものの、盆ゴザの上のかたきだ。必ずおれ一家の手で首にしろ。まちがっても会津のお侍衆の手をかりちゃあ、こっちの恥だぞ」
と、きびしくいい渡していたのだ。
会津の小鉄、このころ三十半ば。顔にも頬、ひたい二ヵ所に傷があるが、全身傷痕で埋まり、左右の手の指は三本ずつしかないという、小柄だが、けもののようにひょうかんな男であった。
いま黒谷の金戒光明寺にあって威をふるう京都守護職松平容保の本陣に、わざわざ中間部屋までもらっている身分だ。
これが、ある春の夕方、みずから七、八人の乾分をひきいて、西陣のある路地の奥から往来のほうをうかがっていた。
すでにひっこぬいた長脇差を背にまわしている者もある。

九

そこは西陣の織屋の倉がならんでいる一画で、めざす人間は、堀川に沿う道ばたの常夜灯のかげに、三度笠をしゃがませて、水をのぞきこんでいる。
何を見ているのか、そこには春の雲か、散ってきた花びらくらいが浮かんでいるとしか思えないが。
その男は、つけ狙われていることを、知るや知らずや不敵にも、京では目立つ三度笠の股旅姿で、毎日のように京の町や寺々を見物に出歩いているのであった。

その男の住んでいる場所はわかっているが、公卿侍の家ばかりの一画なので、そこへなぐりこみをかけて騒動になっては、公卿の鼻息とみに荒い当世うるさく、またその男はこんな風にひるま出歩いていることが多いのだが、物情騒然とはいえ人出もけっこうある春の京の町中や、あるいは神社仏閣での刃傷沙汰はためらわれて、いままでついに手を出す機会がなかったのだ。
それが、いま来た。まわりは倉で、いまいっとき、往来に人影はない。——
と、見て、
——よし、やれ！
と、会津の小鉄が、凄い眼で乾分たちをうながしたとき、うしろから、
「待て」
という低い声がかかった。
彼らはふりむいて、そこに近藤勇をはじめとする新選組のめんめんを見た。もっとも、近藤についているのは五、六人という人数であったが、小鉄も知っている沖田総司、永倉新八などの顔も見えた。
「おい、あの国定龍次という男を狙っておるのか」
と、近藤がいった。
「あ、近藤さま。——」
まごつきながら、小鉄がうなずく。
新選組と小鉄一家は友軍だといったら近藤はむっとするだろうが、同じ体制側に棲息する集

団にはちがいない。
「ちょっと待て」
「なんでござんす？」
「あいつの待っておるのは、女だ。いっしょに京へ来た女だ」
と、近藤はいった。
「それがいままでは、女のほうは伏見の薩摩屋敷に住んでおる。しかも、使者として、あちこち往来しておる。それが最近、しきりに西陣の織屋、錦屋伊兵衛のところへ出入りする。調べてみると、このごろおびただしい錦を織っておる。薩摩さまの御用命で、という。錦屋は古来より御寮織物師六家の筆頭、それ以上は調べられぬ」
近藤は妙なことをいい出した。
「しかし、この時節、薩摩藩が大量の錦を注文するとは、何やらひっかかる。――で、その使者となってくる女を取り調べたいのだが、これが女だてらにれいれいしく、薩摩の紋章丸に十の字を浮かせた陣羽織などをつけておる。いまさしあたって、それを屯所へ連れてくるわけにはゆかん」
「へへえ」
「その女と国定龍次は知り合いなのだ。おそらく夫婦だろう。調べるなら、そいつだ。お前のほうの事情も知っておるが、斬ってはいかん。あれが一人になったとき、ひっとらえてこちらのききたいことを白状させたあとでなけりゃ、斬ってはいかん。しばらく待て」

会津の小鉄は、でばなをくじかれた表情で、
「それじゃ、ひっくくりゃいいんですね？」
「それも一人のときだ。女に知られりゃ、面倒なことになる」
蒼白い顔をした若い沖田総司が、
「隊長、それにしてもきゃつらが京にはいったとき、あそこでみすみす見すごしたのは失敗でしたな」
「今になればそう思う。しかしあのときは、まさか国定忠治のせがれが薩摩屋敷にかかわりを持とうとは想像もせなんだのだ」
と、近藤勇は苦笑した。

十

その通り、龍次が待っていたのは、おりんであった。
数日前、黒駒の勝蔵が、神秘不可思議な顔をしていったのだ。
「――おい、国定の――おめえさんの色おんなが、黒姿で白い馬に乗って西陣を歩いてるのを、玉五郎が見たっていうぜ。あんまり変わってるから、そっとあとをつけたら、錦屋伊兵衛って店へはいっちまった。しばらく外で待ってたが、どうやら新選組の影が近くに見えたようなんで、あわてて離れちまったが――ということだ」
勝蔵たちはこの正月、伏見の薩摩屋敷の馬場でおりんを見ているのだ。

龍次は、そのあとおりんを薩摩屋敷に残して柳の図子(ずし)にきて以来、おりんに逢っていない。そこで不審と不安にかられて、毎日この西陣をうろついて、さっきその錦屋の店先の柳の木に、白馬が一頭つながれているのを見た。——

あれだ！

と、眼を見ひらいたあと、そこにしゃがんで半刻近く待っていたのだが——やがて、まさしくおりんが、その店ののれんをわけて出てきた。

編笠をつけ、かろやかにその白馬にまたがる。

それが——聞いてはいたが、なんと、男装なのだ。

編笠こそつけたものの、いまちらっと見えたところでは、あきらかに前髪つけた若衆姿で、黒紋付ながら大振袖、それに金キラキンの、それこそ錦の陣羽織をつけ、精好(せいごう)のはかまに小刀一本横たえて、雲を踏むように馬を歩ませてくる。

常夜灯のかげから出ていった龍次は、馬上のおりんを見あげたが、しばらく声も出なかった。そのけんらんたる衣裳も人をくっているが、編笠をかぶってはいるものの、下からその顔はまる見えで、その颯爽(さっそう)清麗の容姿は、野の花のようなおりんとは別人としか思われない。

「……たまげたなあ」

やっといった。

「西郷先生のお申しつけで、こんな風にされちゃったのさ」

と、おりんはいった。この姿で、この口調は、妖しくも可笑(おか)しい。

「身のまわりにおんなの姿があると目ざわりだし、どこかへお使いに、馬でゆくときもこのほうがいいからって」

堀川に沿って、人馬ゆるやかに歩きながら、

「ずいぶん会わないね。このまま伏見の薩摩屋敷にこない？」

「おめえの馬の口取りみてえな、そ、そんな恰好のわるいことができるか」

「それじゃ、相乗りで。……話したいこともあるわ」

「相乗り？」

「あにさんを、この鞍に乗せて、あたいがうしろから抱っこして、それで大丈夫乗ってけるよ」

「ば、馬鹿野郎、赤ん坊じゃああるめえし、それじゃいよいよおいらの、か、恰好がつかねえじゃあねえか」

おりんは笑った。

花びらがどこからか風に乗ってくる。

「ここは、織屋の町だね。な、何しにこんなところに使いにくるんだ」

「薩摩さまがたくさんの錦を御注文になって、その仕事のはかどり具合を見にくるのさ」

「のんきな御用だな。……おいらのほうは、さ、殺風景なもんだ」

「あ、ずいぶんあばれてるんだってね。ヒゲ万先生が、龍次のおかげで、黒駒の勝蔵の賭場荒らしをやるやつらがいなくなったらしか。えらかもんじゃ、と感心していなすったよ」

うれしそうに、おりんはいう。
それはいいが、そのおりんが伊勢を出るとき、あにさんが京へゆくと、こんどこそとり返しのつかないたいへんな目にあうって気がしてならない、と、さけんだことをふっと思い出して、
「おめえ、おいらがしんぺえじゃあねえのかね」
と、龍次は、馬上のおりんに上眼づかいした。
「そりゃ心配よ。でも、あにさんのやってることは、結局天朝さまのおためになることだから――って、西郷先生もおっしゃったよ」
「へ、会津の小鉄一家の賭場荒らしをぶッた斬ることが、て、天朝さまの」
「西郷先生が笑いながらそうおっしゃるんだもの、そりゃまちがいないよ。だって、それは大事なお公卿さまをお助けすることになるんでしょ？」
龍次はまたちらっとおりんを見つめ、
「さ、西郷先生って、そんなにえれえひとかね」
えれえ人らしい、ということは彼にもわかっていたのだが、それでもきいてみた。
「えらいわ、あたい、あのお方のためなら、いつ死んでもいいと思ってるよ！」
もういちど見あげると、おりんはうっとりと春の雲を、これも見あげている。何だかそのまま、天馬に乗ってあの雲のかなたへ翔け去ってゆくようだ。
「おいらも、し、死んでもいいのかね」
やや皮肉っぽくいうと、

「よか、よか」
と、おりんはうなずいた。
「ようごわす。天朝さまのおためなら！」
龍次は二の句がつげなくなった。
こいつ、西郷のタカモリどんとやらにイカれちまやがった！　姿ばかりじゃなく、頭の中まで。――
ヒゲ万先生の遠まわしの教示はもとより、相楽総三（さがら）の情熱的な煽動、日柳燕石（くさなぎえんせき）のおごそかな講義を、それほど身にしみて感じなかった龍次も、このおりんの目覚めぶり変身ぶりにはショックを受けた。
が、黙りこんだ彼を、おりんは馬の上からちらと見て、われにかえったように、
「でも、ほんとうはね」
と、哀しそうな眼になって、
「何より早く赤城に帰りたいの！」
と、いったけれど。――
やがて、人通りの多い大路に出たが、龍次は鼻くそをほじりながら――伏見へゆく気なんかないけれど、別れを告げるのも忘れて、ただ黙々としておりんの馬のそばにくっついていった。
……
それを軒ぞいに、こうもりのむれのように追いながら、

「やはり、きょうはいかん」
と、近藤勇は首をふった。
「小鉄、そのうちきゃつは必ず新選組がひっくくって、吐かせるだけ吐かせてからお前のほうにひきわたしてやるから、それまで待て」
「いえ、せっかく旦那方のほうでそうおっしゃって下さるのになんでござんすが、いままでこっぴでえ目にあわされたのは会津一家、やくざとして手も足も出せなかったとあっては、小鉄末代までの名にかかわりやす」
と、小鉄は胴ぶるいして、
「こっちで必ずひっくくって、こっちで吐かせて、お望みならボロキレになったやつを、旦那方にお渡し申しやす」
それ以前から、もう賭場のことはそっちのけになっている。

十一

龍次は、自分がどこへいっても、背後に迫る足音と影のあるのを知った。で、おびえたかというと、おびえない。警戒したかというと、警戒しない。人通りの少ない場所、夕ぐれ、夜などに敵が襲ってくることを知ると、むしろ好んでさびしい寺、暗い坂などをぶらつくのである。
かくて、春から夏へかけて——水ひかる鴨の河原、月明蒼き三年坂、草吹きなびく真葛ヶ原、

竹藪うなる嵯峨野、夕立けぶる渡月橋、また知恩院の石段、妙覚寺の境内、青蓮院前の辻、南禅寺の山門の下、苔寺の土塀の外——などで、無数といっていい殺陣がくりひろげられた。
そこへ赴くとき、龍次は侍のヨロイのように、必ず三度笠に手甲（てっこう）きゃはんという股旅姿のコスチュームをつける。これは彼の渡世人としての美学からであった。
「ゆうどう……からくっ」
それはまさに、小松五郎義兼（よしかね）の鋼鉄のうたう血笑の声であった。
人を斬るとき、彼のからだじゅうの血は、潮鳴りのようにどよめく。——これは遺伝だろう。
もっとも龍次は、そんなことは考えない。ただ、向こうからしかけてきやがるからしょうがねえんだ、と思い、最初助ッ人（すけっと）を依頼したくせに、だんだんうす気味悪そうな顔をし出した黒駒の勝蔵にも、そういう。
が、それ以上に、いつしか彼は、これは天朝さまのためだ、という内部からの声にとらえられていた。
あるいは、それは血に酔う彼にして、やはりのがれがたい自己正当化の論理であったかも知れないが。——
かつて阿呆陀羅経みたいにきいていた、ヒゲ万先生や相楽（さがら）総三や日柳燕石（くさなぎえんせき）の言葉が、いまになって大まじめなお経のように体内に鳴りひびきはじめたのだ。そして、最も美しい旋律をかなでるのは、むろんおりんの声であった。
「あたい、あのお方のためなら、いつ死んでもいいと思ってるよ！」

「よか、よか、天朝さまのおためなら！」

——おいらも、死んでもいいのかね？

そしてまた、シャクにさわることに、いまになって、いつかの勝蔵のおだての言葉さえ、呪文のように鼓膜によみがえるのだ。

「おめえさんも、おめえのおやじをはりつけにした幕府ってえやつを、長脇差で斬るも同様なことをすることにならあな」

あのときは、何をすっとんきょうなことをいやがる、と怒ったが、もともと龍次は、おやじは百姓のためにお上に刃向かってはりつけになった、と信じているのだから、これは、あとで効いてくる魔のうま酒のような言葉であった。

つまり国定龍次はいつのまにか、彼なりに警戒していた——おいらの知ったことじゃあねえ、と、そらうそぶいていた——この世の侍たちの大争闘の渦にまきこまれてしまっていたのである。

というより、あのなりゆきでは、みずから飛びこんだ、といったほうがいいかも知れない。

そして。——

以上のチャンバラは、ときによって相手は四、五人以下、多いときは十数人の場合があったが、みんな斬り伏せるわけではなく、何人かをたおすと、つむじ風のごとく、あるいは一見悠々と立ち去るのを常とした。が、とにかく慶応三年の京都で、いちばんたくさん人を斬ったのは国定龍次であったかも知れない。

とはいえ、龍次だって大剣豪ではないのだから、相手は会津の小鉄一家のやくざたちにしても、むろん彼自身あっちこっち傷を受けることはふせげない。

いや、ふつうの人間なら、全治十日くらいの傷でも、彼は二、三日のちには平然として三度笠をかぶって立ち出でたのだが、事はついにそれではすまなくなった。

夏の終わりと見えるある日、勝蔵がいった。

「おい、こんど大賭場をひらかなきゃならねえことになった」

「えっ、例の献上金ですかい」

「そうだ、いそぎ三千両ほど工面できねえかとのことだ。……それでこのごろ、おめえのおかげで会津の小鉄一家もひるんだようだから、場末の寺なんかじゃあねえ、三条小橋の池田屋ってえはたごでやることにした」

勝蔵はじろっと龍次の顔を見たが、

「へえ、そうですか」

と、龍次はけろりとした顔をしている。

実はその三条小橋の池田屋という旅人宿は、三年前の夏、そこに集まっていた志士たちを新選組が襲撃し、志士の十数人を殺傷し、二十余人を逮捕した、有名な「池田屋騒動」の場所なのだが、そんなことは龍次は知らない。

それ以来、池田屋に泊まる客が少なくなって、ここで黒駒一家が賭場を開帳したいと申しこんだのを引き受けたのは、その窮状のためもあった。

「小鉄一家ばかりじゃあねえ、このごろ幕府方もいよいよ旗色が悪くなって、新選組なんかもおとなしくなったようだ。ま、新選組が鉄火場荒らしをやることァねえと思うが、念のため、また用心棒をたのむ」
「合点（がってん）でござんす」
龍次はあっさり承知した。
龍次が「池田屋騒動」のことを知らないと見て、勝蔵は特にそのことを話すのはやめにした。
ただ新選組の名を口にしたのは、半ばはそんなものが賭場を狙うわけはないという見込みからだが、半分は逆に虫の知らせの不安からでもあった。

十二

その日の夕刻、三条小橋一帯はおりからの大夕立にけぶっていた。
そして、池田屋で、朝からの大ばくちが、それもよそに、いよいよ最高潮に達しようとしたとき——往来にふりしぶく雨音を通して、
「市中改めである」
と、いったような声を、宿の中できいた者があったか、どうか。
すぐに、
「あっ、……手入れだっ」
入り口あたりからの絶叫は、これはだれにも聞こえた。つづいて、

「新選組だぞっ……来たのは、新選組だっ」
わめいたのは、あきらかに黒駒の乾分（こぶん）の八代（やつしろ）の玉五郎だ。
「なに、新選組？」
驚愕の声とともに、勝蔵は二階の盆ゴザの貸元席からとび上がった。
「そんな、馬鹿な！」
勝蔵が足を宙にして階段からかけ下りてきたとき、もうあさぎの袖口を山形に白く染めた、新選組独特の姿が、白刃をひっこぬいて入り口からなだれこもうとしていた。
「御大法にそむく博徒ども、神妙にせよ！」
「手向かう者は斬るぞ！」
あたかも、三年前の池田屋襲撃の再現のごとき勢いだ。
しかし、あれは反幕志士を掃討するためであったが、きょうの乱入はこはそもいかに。なるほど京市中の取り締まりも新選組の任務の一つかも知れないが、まさかばくち打ちの検挙にまで乗り出すとは意外も意外。
とはいえ、事実は岩倉卿への献金のための鉄火場だから、いわばすねに傷持つ心で、黒駒の勝蔵は階段下から裏口へ、死に物狂いで逃げた。
二階も総立ちになって、騒然としている。下女の悲鳴も聞こえる。はやくもふすま、障子の倒れる音もする。
まるで逆雪崩（さかなだれ）のように新選組のはせのぼる階段の上からなんと笑いをおびた絶叫が降ってき

た。

「きやがれ新選組！　待ってやした！」

　刃と刃の打ち合うひびきが起こった。

　盆ゴザをかこんでいた連中は、みんな奥座敷のほうへ逃げ、ただ一人、そこに残っていた国定龍次のたたかいが始まったのだ。

「おおっ、そいつだ、そいつをとらえろ！」

　階段の下からふりあおいで、隊長近藤勇が刀でさしてさけんだ。

　彼はきょうのこの賭場が岩倉卿につながることをうすうす探知していたが、ほんとうの目的は国定龍次の逮捕にあった。

　その男のことは気にかかりつつ、会津の小鉄が面目にかけて自分のほうの手でとらえる、といったのに、しばらくゆだねていたのである。それにこの春から夏へかけて、新選組内部に動揺が起こって、裏切者が続出したので、そのほうのしめつけに力を奪われていたこともあった。

　が、西陣で大量に作っている錦の件がいよいよ気にかかり、かつきょうの賭場の件も見のがしがたいこともあって、ついに新選組みずから検挙に乗り出したのだ。

　この新選組に対し、ただ一人、立ちふさがった国定龍次は、これを勇敢というべきか、無謀というべきか。

「えい」

「やあっ」

　凄まじい声とともに、ド、ド、ド、と相ついで階段からころがり落ちてきたのは——斬られたのではなく、相手の刀を避けたはずみに足踏みはずしたことはすぐにわかったが——なんと、副長の土方歳三と、隊中妖剣で知られた沖田総司。

　血こそ見えなかったが、どこかの骨でも折れたのかこの猛者の二人が、苦鳴をあげてころがりまわっている。

　いかにヒゲ万先生にシゴかれたとはいえ、元来が上州の無頼剣法、ふつうならこういう事態は起こり得なかったろう。それはおそらく術ではなく、龍次の怖さ知らず、むしろ斬り合いに歓喜する異常な血と、そして他方、土方や沖田が、斬り殺してはならぬという近藤の命令で縛られていたせいであったろう。

　それは知らず、この前の斬り込みのとき、志士たちの何人かを斬り落とした池田屋の階段で、たかがやくざ者一匹のために、副長土方らがこの醜態を見せようとは！

「ううぬ、チョコザイなり、山家の猿！」

　近藤勇は満身憤怒にあふれ、嵐のように階段をかけのぼった。

十三

　二階はもとより一大修羅場だ。

　ふすま、障子はすべて蹴たおされて大広間と化したたたみの上に、はや四、五人つっ伏して、これがすべて新選組の隊士だ。まだもがいている者もあるが、もう動かない者もある。

ここで賭博をやっていた連中は、もう逃げようもないと知って、大広間の隅にひとかたまりになって、頭をかかえてうずくまり——ただひとり、十数人の新選組のつらねる刃の放射線の中心にいるのは、あの国定忠治の伜(せがれ)とかいう若者であった。

と、見たとたん。

「おうりゃあーっ」

のどもひっ裂けるような掛け声とともに、隊士の一人が突進した。

両人の身体が激突したと見える寸前、一本の腕が刀をつかんだまま宙に飛び、鮮血をたたみにひきつつ、そのまま隊士は窓障子につっこんでいって、三尺ほど高くなっているしきいにひっかかって、二つに折れて動かなくなった。

障子ははね飛んで、路地をへだてた向こうの屋根瓦に水煙を巻いてゆく雨あしが見えた。

「また一丁あがりィ——」

龍次は歯をむき出して、

「次っ、来いっ」

と、絶叫した。

いっせいに叫喚して殺到しようとする隊士たちの背後で、

「待てっ」

と、近藤はさけんだ。

「おれにまかせろ。——殺してはならんのだ」

と、いいながら、隊士たちの半円の剣陣を割って前へ出る。刀をひっさげたまま、

「国定龍次とやら——いつぞや、ただの無頼と見て、ふっとうぬを見のがしたのは、とんだ手ぬかりだった。うぬはいかなる縁で薩摩屋敷と結び、うぬの女房はいかなる用で西陣へかようのか、それを申せ！」

「うるせえ」

龍次はわめき、

「おいらはきょうの、て、鉄火場の用心棒だ。と、賭場荒らしは渡世人の仁義にかけて守る。それだけだい。おめえが隊長だな、面白え、ここで片づけてやろう、さあ、かかってこい！」

と、足ぶみした。

「それではゆくが——まず、うぬの眼をつぶす。それでも言わねば、片腕ずつ斬り落とす。覚悟せい！」

ずいと、近藤勇の刀が青眼にあがった。

むしろ、歓喜に燃えて、龍次はこれまた長脇差(ながどす)をかまえ、

「ゆうどう……」

という例のうなりを発した。

が——それきりだ。あと、声が出ない。

いけねえ、ヒゲ万と向かい合ったときとおんなじだ！　と気づくと同時に、まわりの空気が凍ってゆく水のように重くなった。腕さえ動かない。

そのとき、重い水のような空気のかなたから。——
「……あにさあん」
と、呼ぶ声が聞こえた。
「あにさあん」
はっとした刹那、眼前の近藤の刀が、これは軽々とあがって、まっこうからなぐり落とされた。
鏘然！　青火花をちらして長曾禰虎徹と小松五郎義兼はかみ合った。
夢中で受けとめたが、軽々とふり下ろされた虎徹は凄まじい重さを持っていて、龍次は鞠のように窓際まではね飛ばされている。
「そうれ、眼だ！」
息もつがせぬ虎徹の第二撃の下に、龍次の顔から、ぱあっと血が噴いた。
反射的に半回転しつつ、うしろになぎはらった小松五郎に、なお大刀をふりかぶって踏みこんできた近藤の右腕から、これまた血しぶきが飛んだ。
半回転した龍次は、その刹那——さっき彼の斬った隊士がはね倒した障子の間から、路地で笠をあげてふりあおいでいるおりんの顔を見た。
前髪を吹きみだして、おりんはさけんだ。
「あっ……あにさあん！」
「おうっ」

ほえたのは、龍次か、新選組か。
隊長近藤が、あろうことか虎徹をとり落として立ちすくんだのを見て、隊士たちがおめいて駈けよったとき、龍次は二階のその窓から路地をめがけて飛び下りている。
ふつうなら、足を折る高さであったが、そこには白馬がいた。——おりんはそれに乗っていたのだ。
からくも馬の首のつけねに、龍次がしがみついた衝撃をはずみとして、その馬は二本の前足を高くあげたのも一瞬、そのまま疾風のごとく走り出している。
いや、そもそもが、はげしい雨の中を、池田屋の前の往来から疾駆してきて、宿をとりまいていた捕方たちを蹴破って、その路地へ突入してきた白馬と騎士であったのだ。
「あっ、待て！」
その突入時から、あわてて追ってきた二、三人の捕方は、おりんのふり下ろす鞭で顔面をたたかれもんどり打っている。
「逃がすな！」
つづいて二階から飛び下りてきた、これも二、三人の新選組があったが、さすがにことごとく足か腰をくじいて、地上にへたばった。

十四

馬にしがみついていた龍次が、やっと鞍に身を立てなおしたのは、馬が小路から小路をかけ

ぬけて、河原町通りへ出てからだ。

ここでやっと血刀をさやにおさめたが、落下のときからこれまで、抜身でおりんも馬も傷つけなかったのは奇蹟的偶然であったろうが、龍次が飛び下りてくる刹那、鞍から身をずらして、その身体を馬上に受けいれたのは、裸馬さえ乗りこなすおりんならではの芸当だろう。

「いやあ、あ、あぶねえところで命びろいした。おいらがあそこにいることをよく知ってたな」

「きょう黒駒の親分が、三条小橋の池田屋で大賭場をひらく話は、ヒゲ万先生からきいてたわ。でも、あんな騒動が起こってるなんて」

「ど、どうして知った」

「西陣からの帰り、夕立にあって蛸薬師通りの空也堂ってお寺の門の下で雨やどりしてたら、往来を新選組が例の姿で、血相変えてゆくじゃないか」

馬を南へ――小降りになった雨の中を、伏見へ向かって駈けさせながらの馬上の会話であった。

「それで何となく虫が知らせて追ってきたら、池田屋で大変な斬り合いが始まった。もうてっきり相手はあにさんにきまってる、と思って――」

「し、新選組がくるたァ思わなかったが……さ、さすがにてえしたやつだ、あの隊長は」

龍次は片手を眼にあてて、

「いけねえ、あいつに右眼を、つ、つ、つぶされたようだ！」

と、さけんだ。

「えっ、眼を？」

うしろにいるおりんには、龍次の顔は見えない。

いまは見えないが、さっき池田屋の二階から飛び下りてきたとき、まるで頭から朱をかぶったように見えた龍次を思い出して、おりんは心配そうに、

「あにさん、だいじょうぶ？」

と、うしろからのぞきこもうとする。

実は龍次は、それまで麻痺していた顔や頭に、ようやく熱鉄のような激痛をおぼえはじめていた。血はなおドクドクとあふれて、雨にぬれた上半身をぬらしてゆく。

「だいじょうぶだい」

と、彼は肩をゆすった。

「それより、し、新選組の賭場荒らしを、つまるところ、ふ、ふ、ふせいでやれなかったのが、用心棒として情けねえ」

突然彼は笑い出した。

「エヘヘヘ！」

「どうしたのさ？」

「いつかおめえに抱っこされて馬に乗るなんて恰好悪いことができるもんかといったっけが、何てこったい、やっぱりそんなことになっちまったじゃあねえか、エヘヘヘ！」

国定龍次の泣き笑いであった。
　血まみれの龍次を抱いて走るおりんは、これは恰好いいことおびただしい——清爽無比の若衆姿だ。
　なんど馬の上で、意識がうすれかかったことか。——ひどい流血のためだ。さくら色の龍次の頰は、暗灰色に変わっていた。
　伏見の薩摩屋敷の門をはいると同時に、彼は馬からずり落ちて気を失った。
　呼ばれて出てきたヒゲ万先生も、この凄惨きわまる龍次の姿には仰天したようだ。
　おりんが、知るかぎりの事情を説明すると、
「なに、新選組の近藤と一騎打ちしたっちゅうのか！」
と、ヒゲ万先生は眼をむき出して、あらためて血まみれの龍次を見下ろした。
「そりゃ、まあ、なんちゅうえらかことを。……」
　身体じゅう浅傷は無数であったが、いちばん深いのは面上に受けたものであった。彼自身が「右眼をつぶされた」といったように、ひたいの中央から右眼をななめに、右頰にかけて刀痕が走っている。——

十五

　さすがの龍次も、一と月近く寝こんだ。
　なんどか高熱さえ発して、うつらうつらしている日々が繰り返された。ヒゲ万先生が、大坂

から高名な外科の医者を呼んでくれたが、それでもおりんの狂気のような看護がなかったら、どうなったかわからない。
　龍次が気にしていたその後の賭場の始末もわかった。
　あのとき新選組は、一人残らず池田屋を飛び出して龍次を追っかけたそうで、あとで気がついたら、現場に残っていたやくざたちはむろん、賭け金の千両箱もきれいに消えていたという。

——

　それは黒駒の勝蔵のさしずだろう、と龍次は考えてニヤリとした。
　そしてまた、新選組の隊長近藤勇は、あれ以来、右腕を布で吊って歩いているという。——けっこう、おいらもやったらしい、と、これにも龍次はニヤリとした。
　また、治療の床についている間、龍次は河のほうからふしぎな歌声をきいた。
「ええじゃないか、ええじゃないか
　葵が枯れても、えじゃないか
　枯れりゃ次には菊が咲く
　菊が咲いたら、えじゃないか
　ええじゃないか　えじゃないか」
　去年、伊勢路できいた歌だ。——あとで考えると、それはたしか神宮の森の隠れ家で、相楽（さがら）総三が歌ったものであったが、あんな文句の歌が、いまこの京の伏見で聞こえるとは？
　はじめ、右眼を覆って頭部をななめに、耳から頰へかけて布がまかれていたので、そのおか

げで耳がどうかしたのじゃないかと思ったが、それはまちがいなく現実の歌声であった。
そんな歌に耳をすませて、片目をパチクリさせている龍次に気づいた枕頭(ちんとう)のヒゲ万先生が、うすく笑った。
「このごろな、東海道じゃ、怒濤のような例の歌と踊りで、夜も日もなか、っちゅうぞ」
「へえ、東海道で――」
「その歌の文句の中にはな、こげなやつもあるっちゅう」
ヒゲ万先生は、両手をあげてヒラヒラさせながら、
「ええじゃないか、えじゃないか
狂い踊りは、えじゃないか
とめてとまらぬ東海道
世直し踊りは、えじゃないか
ええじゃないか、えじゃないか」
おどけて、口ずさんだ。
「歌ばかりじゃなか、天から伊勢のお札やおはらえが、いたるところ雪のごと、ふってくるっちゅう」
「お札やおはらえが、天から――」
龍次は卒然として、あの森の中の隠れ家で、相楽総三やその同志たちが、おびただしいお札やおはらえを作っていたのを思い出した。

いったい何のためだと首をひねっていたが――あれだ、あれがいま東海道にふってるというやつにちがいない。そして、天からふってくるというのは――あのとき飼いならしていた鳩に何かしかけをしたにちがいない！
「さ、相楽さんたちのしわざでござんすね」
「ま、そうじゃろ」
「相楽さんは、江戸へいったってえことでしたが――」
「江戸へは、いったが、江戸にじっとしちょる男じゃなか。それにたくさんの同志もおる」
龍次は首をかしげて、
「そ、それで、そんなお札や、えじゃないか踊りが、何の役に立つんですかい？」
「あれはじゃ、世直しを望む世の民の声じゃが、それは当面の武家同士のスッタモンダ、外からの黒船のおどしより、もっと足もとから幕府をゆさぶる。……あの妖しか歌声が、いま二条城に将軍慶喜が住む京のおひざもとまで、あの通り聞こえはじめたんじゃ」
ヒゲ万先生は微笑していった。
このころの京の「えじゃないか踊り」について、『岩倉卿実記』にこう書かれている。
「――あたかもこのときにあたり、京師(けいし)に一大怪事あり。空中より神符へんぺんと飛び降り処々の人家に落つ。……都下の士女は老少の別なく綺羅(きら)を着て、男は女装し女は男装す。群をなし、隊をなす。ことごとく俚歌(りか)をうたい太鼓をうち、もって節奏をなす。その歌声は、エイジャナイカ、エジャナイカ、クサイモノニ紙ハレ、破レタラマタハレ、エイジャナイカ、エジ

ャナイカという。衆みな狂奔酔舞し、一群去れば一隊またきたる。街頭織るが如し」云々。

去年の伊勢路の光景が、いま京に再現されはじめたのだ。

そして、洛北の一寒村に監視されていた岩倉具視（ともみ）は、この騒ぎにまぎれて活動をほしいままにしたというのである。

ヒゲ万先生に説明されても、龍次にはよくわからなかったが、秋にはいってまさしく幕府は急調にゆらぎはじめていた。

そして、はからずも時の潮の大渦巻に巻きこまれた、木の葉のような小さな渡世人の運命も急調を加える。

龍次の眼を覆っていた布が、医者の手で最終的にとりはらわれたのが、十月十五日のことだ。が、その右眼はとじられたままで、ひたいから右頬にかけてななめに走る刀痕もそのままであった。

しかも、一眼だけの龍次は、たちまち決死の出撃という運命を迎えることになる。

十六

その日の午後、医者が去ったあと、与えられた手鏡で自分の顔を見て、さすがに龍次が憮然（ぶぜん）たる表情をしているところへ、ヒゲ万先生がはいってきて、

「お」

と、いったきり、あと声もなく棒立ちになって見まもっていたが、すぐに、

「きのどくなことになったが、なぐさめておるひまもなか。心配なことが起きた」

と、いった。

「な、何でござんす」

「いま、シロヤマが帰ってきた。馬だけ一頭」

「えっ？」

シロヤマは、ふだんおりんが乗っている白馬の名だ。

「けさからおりんは、西陣の錦屋へ出かけたんじゃ。それが馬だけ帰ってきた。しかも……その横腹に、ちょっぴりとじゃが、ひと吹きしたような血のあとがある。――」

「や！」

龍次は、口をあけてヒゲ万先生を見た。

「おりんがおはんに、どこまで告げておるか知らんが、実は錦屋に大量の錦を織らせておったのは、錦旗を作らせるためじゃった」

「キンキ？」

「錦の御旗、天子さまの旗じゃ。それはまだほとんど布のままじゃが――岩倉卿の考案になる日月をあしらった錦旗の見本が二、三りゅう、いよいよきょう出来ちょるはず――で、おりんはそれを受け取りに出かけたのじゃが、それがいましがた馬だけ帰ってきたとは、何か異変が起こったに相違なか」

ヒゲ万先生の顔は、ただならぬ憂色につつまれている。

「本来なら、おいがようすを見にゆかんけりゃならんのじゃが、天なり命なり、おりあしくおいは、これから天下の大事で、伏見から船にのって薩摩へ帰らんけりゃならん」
そういえば珍しくヒゲ万先生は、ちゃんとした衣服を着て、それもあきらかに旅姿であった。
さっきこの日を、わざわざ十月十五日としるしたのは意味がある。実は前日、同じ薩摩藩の実力者大久保一蔵が朝廷から、歴史的な倒幕の密勅をせしめて、ひそかに薩摩屋敷に持ち帰ったのだ。大久保一蔵はのちの利通だ。
そして、草堂（そうどう）万千代は、この密勅の写しをたずさえて、本国薩摩へ急行することを西郷から命じられたのであった。
――余談だが、岩倉卿の命を受けてこの密勅を手ずから下した公卿正親町（おおぎまち）三条実愛（さねなる）がのちにしるしている。
「勅書を渡す節は実に心配せり。余が大久保に渡せしときは、幕府の近藤勇が七、八名召し連れ、余が門前に待ちいたり。よりて大久保にそのことを話し、いかがすべきといいければ、大久保曰く何も恐ろしきことはなしといいて出でゆきしが、実に心配せり」云々。
しかし、こんなことを龍次に話しても無益の沙汰だから、ヒゲ万はただ、
「何事が起こったのかわからんが……とにかくこのことをおはんに告げておく」
といった。
「いってみやす！」
なおくわしくきくこともせず、愛刀小松五郎をひっつかみ、龍次は立ちあがった。

「こりゃ、おいの想像じゃが、例の新選組がからんじょるおそれがある。……四、五人、侍をつけてやろうか」
「いや、そんなことをしてちゃ、かえって手間ひまがかかりやす。おいら一人のほうがいい。ただ、そのシロヤマを貸しておくんなさい」
「おはん、馬はだめといったじゃなかか」
「そんなことをいってる場合じゃあねえ。それじゃ」
この問答も焦燥の火にながして、龍次はかけ出していった。
さすがに例の股旅姿ではなく、尻っからげに長脇差（ながどす）一本ぶちこんで、ただ一眼を炎のように燃やし、秋風に髪吹きみだして彼は馬を駆った。
この前は、おりんが馬で救いにきてくれた。こんどはこっちが馬で助けにゆくのだ！
ただし、おりんがどうなったかわからないが。――
都大路には、なるほど例のえじゃないか踊りが乱舞していたが、それも意識の外にある。
馬の首にしがみついているような姿で、しかも心も空に、よくまあまちがいなく伏見から西陣へたどりつけたものだ。もっとも馬が、ひとりでも帰ってくるシロヤマであったせいかも知れないが。
「あっ……きゃつだ！」
西陣紋屋町あたりのどこかの路地で、そんな声が走った。
「きゃつが来た。国定龍次が来たぞっ」

そして、あちこちの路地から、袖を山形に白く染めた羽織姿があらわれた。果たせるかな、新選組だ。
それに眼もくれず、龍次は立ちならぶ倉と堀川のあいだの道を、この前見た錦屋のほうへいそいだ。
――と、前方に一群の新選組がかたまって道をふさいでいるのを見て、彼はやっと馬から飛び下りた。手づなを堀のふちの一本の柳の木につないで、彼はそのほうへ歩き出した。――
いつぞやの池田屋での猛闘ぶりを思えば、いかな新選組といえども素破(すわ)とばかりいろめきたたずにはいられない。
秋の白い光が氷と化したかのような殺気にみちた。
すると、そばの倉の中から何かきく声がして、
「は、例の国定龍次が推参したようです」
と、だれか答えた。

十七

すぐに倉の入り口にあらわれたのは近藤勇であった。
こちらを見て、
「お……眼がつぶれたか」

と、いい、にたっと笑った。龍次の右眼を縫う傷痕をみとめたのだ。
これは冷笑ではない。近藤にすればべつの心理状態からきた笑いであったが、外から見ればぶきみな笑いであった。
たとえ冷笑と見ても、かっとなる前に、その笑いなど眼にもはいらないほど、龍次の頭は熱狂している。おりんの運命に関してだ。
彼は絶叫した。
「やいっ、おりんをどうした？」
「来い、来い」
と、近藤はうなずいた。しかし、刀は抜こうともせず、
「来て、まず見ろ」
と、倉のほうへあごをしゃくった。
龍次はつんのめるようにそこへ走って――あいている戸口から倉の中をのぞきこんで、かっと眼をむき出した。
倉だから屋根の裏は高い。そこからふとい綱で、うしろ手に縛られて吊り下げられているのは、一人の美少年――いや、まがうかたなきおりんの姿であった。それが、ゆらゆらと空中高くまわっている。
「あっ、おりん！」
かけよろうとすると、その下に円陣を作っていた十人余りの新選組がどっと動いて、こちら

に向きなおった。
　輪の中につっ伏している町人風の老人が一人見えたが、そんなものは龍次の意識にはいらない。
　それより、龍次の足にタタラを踏ませたのは、その中の一人が、槍をあげてピタリとおりんにくっつけたことだ。
「あにさん」
　おりんが声を出した。
「これはあにさんとかかわりないことだよ、帰っておくれ」
「ば、馬鹿いっちゃいけねえ。これでおいらが逃げられるかってんだ。おれはおめえを助けに来たんだ。やい、どけ！」
　と、新選組をどなりつけた。
「国定のせがれ」
　槍を持った男が声をかけた。
　新選組ではない。小柄だが、やくざの親分風の男だ。その槍は、いまそばの新選組の一人からひったくったものだが、全身猛気を発散している。
　それは、いままで京での斬り合いで、二、三度は乾分（こぶん）を叱咤（しった）している姿を見たことのある会津の小鉄であった。
「よく来やがった！　よくもいままで、でっけえつらして、あばれ放題にあばれやがった。

――きょうこそは、飛んで火にいる夏の虫だ。その前に、見ろ！」
　これまでさんざん一家をやられた男としてむりもないが、怒りのためにもう正気を失ったような形相（ぎょうそう）で槍をとりなおした。
「ひ、卑怯だぞっ」
　龍次は声をしぼった。
「女を縛って槍で刺すなんて――それでも遊侠の一匹か。あ、会津の小鉄として世間にも知られた男のやることか！」
「やりたかあねえが、てめえのつらを見たら、やりたくなった！」
「何を！」
　龍次が長脇差（ながどす）に手をかけると同時に、新選組がいっせいに抜刀した。
　その中から、一足前に踏み出した二人が、
「隊長、こんどは斬ってもいいでしょうな」
「いや、おれにやらせて下さい！」
　地だんだ踏んでさけんだが、これはこの前、池田屋の階段から落ちた土方（ひじかた）歳三と沖田総司だ。
　あれから二人は、半月ほど動けないで、うなっていたのだ。
　近藤が何かいいかけたとき、ふいに龍次は長脇差を鞘（さや）ごめに抜き出して、
「やるのァいいが、その前にあの女を下ろせ！　し、新選組ともあろう者が、お、女を責め道具にして斬り合いしたといわれちゃ、あとの名にさわるだろうが。――女を下ろすまで、こっ

ちは手を出さねえ」
と、いうや、その刀を床にほうり出した。
みんな、どよめいた。
「よし、女は下ろせ」
と、近藤がやっと口を切った。
「その若僧を斬るのはあとでいい。ききたいことは、そいつからきこう。永倉、女を下ろせ！」
名ざしで命じられて、隊士の一人永倉新八が、しぶしぶ壁ぎわに歩いていった。
その壁ぎわには、どういうわけか戸板とか古だたみとか破れ障子などが一面たてかけてあったが、おりんを高い屋根裏から吊るした綱のもう一方のはしは、そのあたりに結びつけてあったと見える。
床に下ろされて、そのまま崩折れてしまったおりんに、
「おりん！　大丈夫か」
と、龍次ははせ寄って、抱きあげた。
「だいじょうぶよ」
おりんが首をふって立ちあがったとき、近藤が声をかけた。
「それでよいか。よいなら、女はどけ。――若僧、刀をとれ」
龍次は片ひざついたまま、きっと新選組のほうを見あげたが、
「よし、おめえはゆけ」

と、おりんにいった。
おりんはかぶりをふって、
「帰らない！」
と、さけんだ。
「む、向こうはおいらのいうことをきいてくれたんだ。こんどはこっちがきいてやらなくっちゃならねえ。シ、シロヤマは外につないである。帰れ。――ゆかねえか！」
龍次はおりんをつき飛ばした。
近藤はその身体を受けて、
「おい、こいつをつかまえておいてくれ」
と、そばの大男――大力で知られた隊士島田魁におしやった。
おりんは抱きすくめられた。
「おやあ？　お、女を帰さねえのか？」
「それはお前の早合点だ。こっちは帰すとはいっておらん」
「なにいっ、こ、この野郎。――」
と、血相変えて龍次が、床に投げ出した長脇差に眼をやったとたん、沖田総司がその刀を蹴飛ばした。
「そんな必要はなかったが――国定龍次、答えろ」
と、近藤はいった。

「いつぞやもきいたことだが——うぬの女房は何のために西陣の錦屋にかようのか。いや、それはきょうわかった。錦旗を作らせるためだ。では、薩摩がなぜ大量の錦旗を作らせるのか、それをいえ！」

無手となって、じいっと近藤をにらんでいた龍次は、そのとたん、いきなり床にあおむけにひっくり返り、大の字になってさけんだ。

「いわねえ。さあ、煮るも焼くもどうなとしろ。そ、それでおいらが口をきいたら面白え。……もうこうなったら、八つ裂きになったって口をきいてやらねえぞ！」

近藤はもとより、新選組のめんめんも、数瞬鼻白んだ。

十八

——近藤勇が知ることを焦っていたのは、そのことであった。

薩摩の幕府に対する敵対行動は、ここ一年ばかり目立って露骨になった。それに対する新将軍慶喜の隠忍ぶりは、近藤から見るといらだたしく、不可解に思われるほどだ。

しかも、いろいろな徴候から、ここ数日、いよいよ急迫したものをかぎとって、彼は前日、正親町(おおぎまち)三条卿の屋敷から出てきた薩摩藩士大久保一蔵を待ち伏せし、尾行した。

それでも、まさか大久保が討幕の密勅を受けとったとは思わず、ついに直接行動に出ることは自制したが、それだけに虫の知らせの焦燥おさえがたく、かねてから気にかかっていた西陣の錦屋にあらためて手入れすることを思いついた。

で、きょう、錦屋伊兵衛方を急襲して——先刻、例の薩摩屋敷からの女使者が、伊兵衛から錦旗らしきものを受けとっている現場をまんまとおさえたのであった。

馬でのがれようとするおりんもとらえた。その馬はかけ去ったが、それについた一痕の血は、その騒ぎの際、彼女の鞭で打たれた一隊士の鼻からはね飛んだものであった。

が——錦屋伊兵衛はいう。

「錦は薩摩さまからの御注文で織ったもので、それ以上のことは何も存じませぬ」

おりんはいう。

「あたいも、お屋敷のおえら方からのお申しつけで来ただけで、そのほか何も知らないよ」

その場でおさえたのは、二、三りゅうの錦旗らしきものだけだが、まだほかに大量の錦を織っておるはず——と、伊兵衛を責めて、この倉に案内させ、古だたみや破れ障子などで覆ってはあるが、何百反とも知れぬ錦が壁際に積んであるのを発見した。

やがて近藤は、自分の責任で、これをぜんぶこの場で焼き捨ててしまうことを決断した。その錦にたてかけてある破れ障子などを見ての、反射的な思いつきであったかも知れない。

ところで、この日は少し風があった。万一、その火が大火を呼んでは不本意なので一思案した近藤は、江戸の新門一家が二条城にいることを思い出し、防火用に彼らに来てもらうことを思いついて、さっき幹部の山崎烝という男をそこへ走らせた。

すると、たまたま新門のところへ会津の小鉄が何かかけあいがあっていっていたそうで、新門一家が支度をととのえて出動してくるのに先立って、話をきいて小鉄がまずすッ飛んで来た

——というのが、これまでのことのいきさつだ。

さて、あらためてこの倉で、おりんと伊兵衛を再訊問したが、返事は変わらない。

伊兵衛は、いま見るように床につっ伏したきりで、ほんとうに返答以上のことは知らないようだが、おりんはあまり悪態をつくので、隊のめんめんが激昂して天井に吊り下げる羽目にまでなったが、可愛い顔をしているのに、強情がまんの娘で、知らぬ存ぜぬをおしとおす。

女が若衆姿をしているのさえ妖しいのに、これがまた伝法なタンカを切るのが、隊士たちを名状しがたい嗜虐趣味にかりたてた。——

その光景を見つつ、近藤は実は困惑していた。

錦は焼き捨ててしまうことを決断したのだが、さてこの娘はこれからいかがすべき。

かりにも薩摩屋敷の使いとなっている女を殺すわけにもゆかず、ここまでやって、生かして帰すわけにもゆかない。

そのときに、国定龍次がかけつけてきたのだ。

彼がきたと知って、これを迎えた近藤がいちどにたっとしたのは、相手が自分の虎徹で隻眼になっていることを知った満足のためばかりではなく、この無鉄砲な男を手中にして、事態を解決する方途ができた、と、ひざをたたいたからだ。

はじめ、女をなお責めて、こやつの口から吐かせよう——と考え、次に、いや、こやつを痛めつけて、女の口から吐かせよう——と考えた。

痛めつけるのは虎徹に物いわせるつもりであったが、相手の反応は狂的で、何かくいちがって、自分から刀を投げ出し、大の字にひっくり返るというなりゆきになった。

で、さしもの近藤たちも虚をつかれた思いで、一瞬、顔を見合わせたとき、

「野郎、これでも口をきかねえか！」

手の槍を回転させて持ちなおし、わめいたのは会津の小鉄だ。

いうや、指三本しかない手を逆手にし、その槍を龍次のふとももへ、ケラクビまで通れとまっすぐに突き立てた。

「あーっ」

たまぎるような悲鳴をあげたのはおりんだ。

「あにさん！」

さけんで、かけよろうとする身体を、島田魁が抱きかかえて離さない。

その刹那、龍次は弓のようにそり返ったが、うなり声ひとつあげなかった。

まさか小鉄が、いきなりそんな行動に出ようとは思わなかったので、近藤も驚いた顔をし、ついで龍次の無反応に感嘆の眼をひろげたが、すぐに岩みたいにきびしい表情にもどって、

「待て、槍はそのまま——」

と、小鉄に命じて、おりんのほうをふり返り、

「これ、薩摩が何のために錦旗を作るか、うぬが知らぬはずはない。答えなければ、この男のもう一方の足も槍で刺すぞ。よしや命があっても、こやつは二度と歩けぬ身体となる。——」

と、いった。

「それでもお前は黙って見殺しにするか？」

島田に抱きすくめられていたおりんは、唇をわななかせたが、なお声を発しなかった。

それが床の上の若者の血いろの眼の命令によるものだと知り、かつその片目の凄まじさに近藤もぞっとなり、よし、この男だけはこの場で死に至らせてもやむを得ぬと、覚悟して、

「小鉄、もう一本の足も刺せ！」

と、ほえた。

小鉄は刺した槍を持ちなおした。抜けば血潮が奔騰し、あるいはそのまま犠牲者は絶息するだろう。

十九

そのとき、

「お待ちなせえ」

という声がかかった。

ふりむいて、

「おう、新門の親分、来てくれたか！」

と、近藤がいった。

倉の入り口に立っているのは、紺のはんてんを着、江戸火消し特有の鳶のかたちに手ぬぐいを頭にまいた老人で——まさに新門辰五郎だ。

「お呼びによって、を組の鳶一同をひきつれてきやしたが——こりゃ、何でござんす？」

と、彼は床の上に槍を突き立てられている龍次を見やっていった。さすがにただならぬ驚きの眼を見張っている。

背後には、彼と同様の装束をつけた若い連中の顔が重なっていた。

「来てもらったわけは、山崎からきいたろうが」

「ききやしたが、新選組が西陣の織屋に火をつけるってえのがどうも腑に落ちねえ。腑に落ちねえが、ともかくも来ることは来やした。……が、それより、こりゃどういうことでござんす」

と、床にあごをしゃくった。

「こいつァ、渡世人のくせに公儀に刃向かうふてえ野郎だからいま仕置してるんだ」

と、龍次を刺しとめた槍を握ったまま、会津の小鉄がいった。

「公儀に刃向かう？　おれのきいてるのァ、おめえさんのしかける賭場荒らしを、助ッ人としてふせごうとしたことだけだが」

と、辰五郎はじろっと小鉄を見て、

「おめえさん、賭場の恨みを、新選組の旦那方の力を借りてはらそうってえのかね？」

「な、なんだと？」

近藤が口を出した。

「いや待て、新門の。——これにはいろいろ仔細のあることだ。わけはあとでいうが、この男

のことはお前に関係ない。これからここに火をかけるから、お前たちはその火がひろがらないように働いてくれ」

「この男に、あっしは関係あるんでさあ」

「な、なに？」

「この国定忠治のせがれは、あっしの知り合いなんでさあ」

辰五郎はいった。

「おれは知ってるが、こいつは公儀に刃向かうなんて大それたことをやるわけがねえ。何をしたか知らねえが、おそらく遊侠の道をたてようとしただけにちげえねえ。それはともかく、あっしはこの場を見すごしはできねえ」

「おい、新門の、お前、新選組と張り合おうというのか」

と、土方(ひじかた)歳三がかんばしった声をかけた。

「なりゆき次第では」

と、辰五郎は答えた。

「あっしらは、二条城のお守り役として、将軍さまじきじきの火消し組だが、新選組はそのマトイをぶッ倒すお覚悟がござんすかね？」

近藤をはじめ、一同、うっと息のつまった顔をした。――みんな、新門一家が現将軍のお声がかりで江戸から呼ばれたこと、さらに、辰五郎の娘が将軍の御愛妾であることも知っているのだ。

「新門の親分さん」

おりんが声をかけた。

いつのまにか、島田の腕から離れている。のみならず、さっき龍次の投げ出した長脇差(ながどす)さえ拾って片手に下げている。

「お江戸ではかけちがいまして、ごあいさつもいたしませんでしたけれど、国定龍次の女房……やがて女房になる女として、厚くお礼を申しあげますでござんす」

辰五郎は、あっけにとられた顔をした。何より、その若衆姿に眼を奪われたのだ。

「お前さん、どういう――？」

おりんは腰をかがめて仁義を切る姿勢になり、

「お初にお目にかかります。手前、生国は上州勢多郡(せたごおり)、大前田村と発します。大前田の栄五郎の娘おりんと申します」

あっ……というさけびをあげたのは、新門一家もさることながら、近藤、土方や会津の小鉄であった。

むろん近藤たちはやくざではなく、多摩の百姓の出身だが、同じ関東の人間として、八州に鳴りひびく現存の大遊侠大前田の栄五郎の雷名はきいていたのだ。上方の小鉄といえども同様だ。

「おめえさんが……ああ、そういや、大前田のに養女が一人あるときいたことがあるが、それがおめえさんかい」

辰五郎は笑いかけたが、すぐ白髪頭をふりたてて、
「いまは話しているひまがねえ。おい、会津の――そのむげえ槍を抜きねえ。ちょっと待った。その前に、卯之、槍を抜いたら、すぐにおめえの手ぬぐいで傷を縛んな」
と、命じ、また壁ぎわに眼をやって、
「おい、だれか四、五人、あそこに立てかけてある戸板で、国定のを町医者のところへ運びな」
と、指図した。
頭から気おされた態で、小鉄が槍をひき抜くと同時に、新門の乾分たちがてきぱきと動く。すぐに龍次が戸板にのせられて運び出され、それにおりんがつきそって出てゆくのを、なすすべもなく茫然と見送っている新選組に、やおら新門辰五郎はむきなおり、近藤に、
「さて、旦那……火事の御用を承わりやしょうか」
と、何事もなかったかのようにいった。
戸板は外に出る。堀川に沿う道は、新門一家の鳶の者でいっぱいだ。江戸での龍次をおぼえている者もあるらしく、いくつか心配そうにのぞきこむ顔もあった。
「医者はどこがいい？」
「ここなら、堀川二条の伊良子（いらこ）さんがいいんじゃあねえか」
そんな声が聞こえた。火消しという商売柄、京の有名な外科の名はたいていおぼえたのだ。
その中を、馬をひいたおりんといっしょに、を組のマトイ持ちの卯之助と、元一橋浪人でいまは鳶姿の宗之助がつきそって走りながら、

「龍次あにい、事情はよくわからねえが、これで江戸での借りをちっとァ返した。辰五郎親分はそのつもりにちげえねえ。……それにしても残念なのァ、おめえさんがどうやら、こっちから見りゃ敵側の助ッ人になったってことよ」
と、卯之助がいえば、
「四日市の港で逢ったとき、親分がいっしょに京へゆこうといいなすったが、あのときそうしてりゃ、こんなことにはならなかったろう。かけちがって、惜しいことをしたもんだ！」
と、宗之助がいう。
「いや、相手が黒駒だけのときは、同じ幕府方のよしみで会津一家の加勢をしたやつもあったようだが、ことしになっておめえさんが黒駒の助ッ人になったときいて、親分は一切手をひかせなすったんだが。……」
と、卯之助はつづけ、ふいに、
「おいっ、龍次あにい、眠っちゃいけねえ！　眠ったら、死ぬぜ、おいっ」
と、どなって、戸板の上の龍次のほっぺたを平手でなぐりつけた。ふとももは、手ぬぐいでしばったが、血はそれを真っ赤にひたしつくして、戸板の下の路上へすじをひいてゆく。……

二十

――こうして龍次はまた倒れた。

もよりの町医者で応急の手当てを受けたのち、彼はまた伏見の薩摩屋敷へ運ばれたが、麻酔も消毒の薬もない時代で、うなりながらほとんど自然治癒にまかせる状態であった。槍はふとももを貫通していた。

その孔が肉でふさがれるまで二タ月くらいかかったが、むしろその期間ですんだのは、龍次の持つ自然児的生命力のおかげであったといえるかも知れない。

日とともに、薩摩屋敷の騒然とした空気は緊迫を加え、とうていふつうの部屋に寝ていられる状態ではないので、彼は厩（うまや）のそばの別当小屋に横たわっておりんの介抱を受けていたのだが、それでも天下の雲ゆきのあわただしさは伝わってきた。

なかでも、彼に関係あることで、その血を逆流させるような思いをさせた事件が二つほどある。

むろんおりんが知らせてくれたことだが、一つは、西陣の錦屋の例の錦が――新門辰五郎の意見によるものか、近藤勇はついにそれを焼きはらうという暴挙には出なかったようだが、代わりに会津がぜんぶ買いあげたという話だ。金はいくらか出したかも知れないが、事実上は没収にちかいものであったらしい。とにかく、これまでのおりんの労力はすべて水の泡となってしまったのだ。

「ちくしょう……」

と、龍次はうめいた。

もう一つは、十一月の半ば、あの坂本龍馬が殺（や）られたという知らせだ。

その人物には、正月以来ふたたび逢ったことはない。あのとき、ひょっとしたらおれも薩摩屋敷に顔を出すかも知れん、とか何とかいったようだが、それっきり彼は姿を見せなかったのだ。あとでお龍にきいたら、その夜おそく訪ねてきた同志たちといっしょに、翌朝早くどこかへ出かけていったという。

が、その後なんどか船着場を見物にいって、あらためてお龍と親しくなったのだが、そのお龍が身もだえして、十一月十五日の夜の龍馬の遭難についておりんに話したのであった。

なんでも、何やら使命を果たすためにいった越前から、その十日ほど前に帰ってきた龍馬は、かねてからお龍に忠告されていたこともあってか、伏見の寺田屋に泊まらず、河原町三条下ル蛸薬師（たこやくし）の近江屋という醤油屋の二階を宿としていたのだが、その夜、魔風（まふう）のように襲ってきた暗殺者たちによって、一撃のもとに倒されたという。

たったいちど、それもほんの一瞥だけの縁ではあったが、なぜか好感のもてた男であり、かつその妻のお龍と親しくなったせいもあって、この知らせをきいたときも、

「ちくしょう。……」

と、龍次はうめいた。

「そいつらは、新選組だな。……ううぬ、いまに見てろ！」

――龍次の直感だけではない。坂本龍馬を暗殺したのが、旗本を主軸とする幕府方のもう一つの刺客集団、「京都見廻組」の手によるものだということが明らかになったのはずっと後のことで、当時はだれもが凶行者は新選組だと考えたのである。

薩摩にいっていたヒゲ万先生が帰ってきたのは、それから七、八日後であった。

一人ではない。彼はなんと薩軍ともいうべき大兵（たいへい）を連れてきたのだ。その数は三千といわれ、薩摩兵たちは、上京の相国寺に屯営したという。

ヒゲ万先生は伏見の薩摩屋敷に帰ってきたが、かつての、のんきでどこかダラシのない浪人風の印象はどこへやら、別人のようにこわい顔をして、忙しげに邸内を往来しているのであった。

龍次がようやく床を離れたのは、十二月なかばのことだ。

が、床を離れたとはいえ。——四足、五足、歩く龍次をあらためて眺めて、おりんの眼には涙が浮かんだ。——龍次は、ガックリ、ガックリ、左足をひきずっているのだ。

「ああ、大変なことになっちまった！」

と、いまさらのように、そんな嘆声が出た。

「あにさん、帰ろう」

「どこへ？」

「上州へ」

と、いってから、

「でもその足で、上州まで歩けるかしら？」

「上州へ帰るウ？」

龍次は、片目をひからせた。

「何いってやがる。し、新選組と、あ、会津の小鉄をやっつけなきゃ、おいら、上州へなんか帰らねえよ！」

と、おりんをにらみつけて、

「おめえ……いつか、さ、西郷先生のためなら死んでもいい、おいらも死んでもいいっていったじゃあねえか」

「そりゃ、そのときはそう思ってたけれど……もう、これだけやりゃいいと思うよ。あにさん、その上、片眼になって、身体じゅう傷だらけで……」

おりんはあえぐように、

「それに、ヒゲ万先生もこのごろはあたいたちどころじゃないようで……もうあたいたちなんかの出る幕じゃないよ！」

おりんは、ふりむいて黙りこんだ。

そのヒゲ万先生が、ぶらりとはいってきたからだ。

「きょうごろ床あげっちゅうそうで、見に来た。……お、立っとるな」

ひげの中の笑顔がなつかしいほどだ。忘れてはいなかったらしい。

「歩いて見い」

「へえ」

五、六歩、歩く龍次の姿を見て、ヒゲ万先生はさすがにショックを受けた表情になった。

しばらく黙っていたが、

「申しわけなかことをした」
深い声でいって、頭を下げた。
「こうまでやってくれるとは思わなんだ」
「先生。……もう上州へ帰しておくんなさい」
と、おりんが涙の眼をあげていった。
ヒゲ万先生はゆっくりと首を横にふった。
「このままじゃ、帰せん」
「えっ？」
「一つには、ただこの姿で帰しちゃ、大前田の栄五郎親分に合わせる顔がなか。おいの見込みじゃ、やがて大前田村はおろか上州一円、あっと驚くような男の晴れ姿で帰れる日がくる。つぎに、おいは龍次どんに、もう一つ頼みたか用があるんじゃ。いや、その用を果たしてくれることが、上州へ晴れ姿で帰れることになる。——」
二人は、狐につままれたような顔でヒゲ万先生を見ている。
「なに、いまこういってもわからんじゃろが、やがてわかる。もうちょっと待ってくれ」
ヒゲ万は笑って、
「それに、その眼、その足——おいから見りゃ、天朝さまの助ッ人の名誉の向こう傷っちゅう、すでに男の晴れ姿じゃ！」
「て、天朝さまの助ッ人——」

龍次はくり返して、これも白い歯を見せた。
「おりん、おいらはそのつもりだ。新選組や会津の小鉄にひと泡もふた泡も吹かせなきゃ、おいら上州へ帰らねえぞ！」
と、いい、まわりを見まわして、
「おい、な、な、長脇差はどこにある？」
「待て待て、新選組も、小鉄も、もう京にはおらん」
「えっ、京にいねえ？」
龍次は片眼をむいた。
「きゃつら、ど、ど、どこへ？」
「おはんら知らんかったか？　きのう、二条城の将軍は大坂城へ移り、それを守って徳川勢も会津勢も新選組も、みんな大坂へ下った。むろん会津勢にくっついて、小鉄も京を退散したろう」
「へーっ」
「ここは伏見の船着場から五町もあるし、それに何しろ万を越す人数じゃから、船じゃ間に合わんで、大方は陸路山崎街道を下ったので、おはんたちは知らんかったんじゃろ」

二十一

将軍慶喜が京から大坂へ移動したのは、十二月十二日のことであった。

京へは、三千の薩摩軍が新たにはいってきたのみならず、これが先年来幕府と戦ってきた長州軍二千五百を公然迎えいれるに及んで、在京の徳川、会津、桑名らの佐幕軍と一触即発の形勢になった。

これがぶつかり合う寸前に、慶喜が急遽大坂へ引きあげたことについて、あとになって慶喜は、幼帝（明治天皇）のおわす京を戦火のちまたにすることは忍びなかったとか、かりに戦うにしても小さな二条城より堅固な大坂城のほうを有利と考えたからだ、など理由づけたけれど、ほんとうのところは、元来貴公子である彼が、この土壇場になって、たけだけしい薩長の戦意にのまれたせいであったろう。

が、その一方で慶喜は、三百諸侯で薩長の天下を望む者はほとんどないと見られる以上、いましばらく戦いを避けて持久していれば形勢は逆転するという成算もたしかに持っていたのである。

それを薩長軍は――というより、西郷、大久保、岩倉の三指導者はたしかに読んでいた。彼らの鉄石の方針は、この際明確に武力によって天下をとり、面倒なあとくされを残さないということであった。

で、事態がくすぶっているばかりで、発火しないと困る。――

果然、西郷らにとっての朗報が東からきた。

ことしの春ごろから、江戸でも騒ぎがつづいていた。御用盗と称する大がかりな強盗集団が市中横行し、それが秋以来いよいよ傍若無人をきわめるのみならず、江戸以外の下野の出流山

をはじめ関東各地で浪士たちが暴動の狼火をあげるに至った。

その元凶は江戸の三田の薩摩屋敷にある、と知った江戸の留守幕府は、ついにがまんの緒を切って、この十二月二十五日、薩摩屋敷を焼き打ちにするという行動に出たのだ。

その急報が京・大坂に達したのが十二月二十八日のことで、これがくすぶっていた幕府方に火となった。もともと薩長方の三倍にのぼる一万五千の幕軍・会津軍は、将軍が大坂にしりぞいたことにも悲憤慷慨していたのである。

薩長を討て！　その狂乱の声はついに慶喜もおさえられなくなって、幕軍が京へむけて進撃を開始し、鳥羽伏見で迎え撃つ薩長軍と戦闘状態にはいった。

慶応四年一月三日のことである。

これが、三倍の幕軍のほうが敗れたのである。戦争は四日間にわたったが、結果から見れば意外にもろいというしかない崩れ方であった。

勝敗を分けた最大の原因は、武器のちがいにあった。

幕府方の大半が旧式銃で、それさえ持たずただ刀槍にたよる部隊が多かったのに対し、薩長軍は大砲や新式銃を豊富に持っていた。

幕軍の中で精強をもって聞こえていた会津兵もこれでやられた。新選組もやられた。近藤勇は、これはこの鳥羽伏見の戦争の半月ほど前に、元新選組の脱落者で近藤に恨みをいだいていたやつに狙撃されて、右肩に負傷していたので、副長の土方歳三が指揮をとったが、これも大砲の前にはいかんともしがたかった。坂本龍馬をたおした京都見廻組の隊長佐々木只三郎も銃

丸にたおれた。

幕軍は六日、全面的に大坂へ潰走した。

ところで、三日にいくさが始まったとき、

「この屋敷は敵のにくしみの目標じゃから、無事にはすまんかも知れん。新選組が襲ってくるかも知れんぞ。二、三日、避難しちょってくれ」

と、ヒゲ万先生にいわれて、

「えっ？　新選組がくる？　そ、それこそおいらの望むところでさあ。……おいら天朝さまの助ッ人ですぜ、に、逃げるなんて、とんでもねえ！」

と、龍次は闘志にふくれあがったが、

「いや、それは冗談じゃが、鉄砲玉の飛び交う修羅場となるおそれは充分あるから、おりん坊を連れて、しばらく寺田屋にでもいっててくれ、たのむ」

それで少々心細くなって、

「先生、いくさになって、大丈夫なんですか？」

と、きいたら、

「大丈夫、まちがいなく勝つ」

と、ヒゲ万先生は笑って、大きくうなずいた。

そのとき西郷先生は、薩摩勢の本陣となっている京の東寺のほうへいっているということであったが、その伏見の屋敷を出るときに見たら、各座敷の壁や廊下にギッシリならべてあった

西洋銃は一ちょう残らず消えていた。

さて、いくさが始まってみると、いくら「天朝さまの助ッ人」でも、これほど大がかりになると、場ちがいの眼をパチクリさせているよりほかはない。

三夜四日、遠く近く、銃声と大砲の音はとどろいた。いつかヒゲ万先生に、「日本のサムレエが毛唐の飛道具を使ってどうするんだ」と抗議した龍次だが、そのひびきを聞いていると、天然自然に血わき肉おどるのを禁じ得なかったから可笑しい。

さて、七日の朝だ。

淀川に沿う町や村はいたるところ焼け、いっときは伏見の町も市街戦の渦中におかれた。

さいわい寺田屋のある一画は、いちじは延焼であぶないところを何とか無事ですみ、そこへ船が着いたというので、龍次とおりんは船着場に出て見た。いくさが終わっての一番船だ。

まだ黒煙がただよっている淀川を第一番に上ってきたのは、どんな連中か——と、のぞいてみると、さすがに武士の風態をした者はなく、商人風か浮浪者たちばかりだ。

が、その浮浪者の中の一人の顔を見て、龍次はあっとさけんだ。

二十二

「さ、相楽さんじゃあねえですか！」

呼ばれて、うすよごれた手ぬぐいを頬かぶりしたその男はふりむき、龍次を見て、

「ああ、しばらくぶりだな」

と、にやっと白い歯を見せて、おりんのほうにも目礼した。だいぶやせ、疲労しきった顔だが、なつかしい笑顔だ。

龍次はかけよって、抱きつかんばかりになって、

「相楽さんは……え、江戸にいるってえ話でしたが……」

「江戸から船で来て、この三日、摂津の西宮に上陸したんだ」

相楽総三は鋭い眼でまわりを見まわして、

「ここらに幕府方はおらんか？」

「いや、いくさに負けて、ば、幕府方はみんな大坂へ逃げてゆきましたよ」

「そうか、うん、大坂も蜂の巣をつついたような混乱状態だった。とんだところへ、と驚いたが、一方ありがたい、うまいところへ帰ってきたとよろこんだ。——ところで、伏見屋敷に西郷先生はおいでになるかな」

「さ、それは知らねえが……実はおいらも、し、心配してたところです。いっしょにいって見やしょう」

歩き出すと、相楽のほかに、五、六人の同じような風態をした男たちもついてくる。その中に龍次は、神宮の森で見た浪士の顔を、二つ三つ認めて、いよいよ眼をまろくした。

一方、龍次の片足ひきずる姿を見て、相楽のほうも眼を見張って、

「龍次どん、お前、その足は？——それに眼も一つつぶれてるようだが」

「へ、ま、し、新選組とやり合いましてね」

「なに、新選組と？——お前さん、いつ京にきたんだ」

「去年のはじめからでさあ、ヒゲ万先生に呼ばれてきたんで——ちょ、ちょうど相楽さんが江戸へゆかれたあとでした」

龍次は一つ眼をかがやかせて、

「ヒゲ万先生からききやしたぜ、相楽さん、江戸で大変な働きをなすったそうでござんすね。それから、東海道でお札をふらせたのも相楽さんとか」

江戸の薩摩屋敷が幕府方の焼き打ちを受けたのは、そこを根城とする浪士たちの大あばれのせいで、そのさしずをしているのが相楽総三だという話は、龍次もすでにきいていたのだ。

「うん、実はあれやこれや、お前さんにも手伝ってもらうつもりだったんだが……いつか草堂(そうどう)先生にことわられたな。あはは」

「そ、そんなことがありやしたね」

「新選組とやり合ったというのも、草堂先生にたのまれてのことか」

「へ、へえ？　ま、まあそうだといっていいか、おいらの勝手といっていいか。——」

歩きながらの会話だ。

「新選組を相手にしたなら、そんな身体になるのもむりはない。それじゃあ、やっぱりおれといっしょに江戸にいったほうがましだった」

と、相楽総三はいたましそうにいってから、ふいに、

「おおっ」

と、奇妙な声をあげた。
「そんな大きな口はきけぬ。おれはお前の兄貴を殺した！」
「な、なんですって？」
「江戸でな、われわれは幕府をゆさぶるためにあばれたが、江戸以外の関八州でもいろいろ騒ぎをひき起こした。その中でいちばん大がかりなものが、野州出流山の蜂起だった。出流山の千手院満願寺といえば、お前の兄貴千乗坊の育った寺」
「や」
「千乗坊とおれは天狗党以来の知り合いだ。そこで千乗坊が出流山に帰っておることを知って、おれが蜂起をそそのかしたのだ。その結果三百の同志が集まって討幕の旗をあげたのが、暮の十二月十一日から十二日へかけてのこと。鎮圧に出動した幕軍との戦いで、アシュラのごとく千乗坊は奮戦したが、傷ついて捕らえられ、首を斬られた。——」
——のちの記録になるが、千乗坊はこのとき母の旧姓と、父親の名をちぢめたものを一つにして、大谷国次と改名していたが、彼のことは宮内省蔵版『殉難録稿』という書や、長谷川伸『相楽総三とその同志』に、その名と右の事歴を残している。
「へーっ」
龍次は、野州葛生の天狗党の本陣で逢った、自分とそっくりの千乗坊の豪快な姿を思い出した。あのとき兄は、
「はじめてめぐりあって、このまま一生別れる弟に、これをやろう。わしは遠からずこの行軍の果てに死ぬことになろう。どことも知れぬ山や野でこの刀を朽ちさせるのは惜しい」

といって、父のかたみ小松五郎義兼をくれたのであった。
思わずそのつかを握りしめた小松五郎が、カタカタと鳴った。そのつか糸は変色した血で黒ずみ、鞘の中の刀身は何ヵ所か刃こぼれしている。
いま、寒風の中にもその兄の声がよみがえる。
「龍次、もはややくざで一生を終わってよい時勢ではないぞ。世は一変するのだ。——さらばだ、ゆけ」
龍次の頬にひかるものが落ちた。たったいちどめぐりあい、すぐに別れ去った兄ではあったが、それだけに哀切の感がつきあげてくる。
「志士としての壮烈な死だ」
相楽はいった。
「一方、弟のお前も、朝敵新選組と戦って、いま見れば満身創痍のていだ。……おやじの忠治どんはいい息子たちを持ったと満足してるだろう」
「へ、へい」
相楽は、龍次とならんで小走りのおりんに眼を移し、
「それはそうと、おりん坊のその姿はどうしたんだ」
「西郷先生のお申しつけでござんす」
と、おりんが答えた。

「西郷先生のお申しつけ？　よくわからんが、よく似合う。……あっ、薩摩屋敷もやられたな！」
と、相楽はさけんだ。
ゆくてに薩摩屋敷が見えてきたのだ。
「よし、よもやま話はあとできこう」

二十三

龍次も眼をむいた。
例の豪壮な門は、左半分焼け落ちている。その向こうに、これは前半分焼け崩れた屋敷が見える。――
「こ、ここもこんなにやられるとは知らなんだ。は、は、早く見にくるんだったなあ！」
と、龍次は胸とどろかせて、おりんにささやいた。もっとも、伏見で市街戦が行われた日には、寺田屋付近も大火事で、延焼をふせぐために龍次たちは必死に飛びまわっていたのだが。
――
ただし、焼け残った半分の門の上の蒼空高く、宇治川から吹きあげる風に、三りゅうの旗が――あきらかに錦旗というやつが音たててはためいていた。
「だれか！」
ばらばらと飛び出してきた薩摩兵が、われ鐘（がね）のような声でとがめたが、すぐに相楽（さがら）を知った

顔と見た者があったらしく、
「おう、相楽どんか。――しばらく、待っちょくれ！」
と、一人、奥へかけこんでいった。
相楽や龍次たちは、門の焼け跡を踏んで、中へはいる。
すぐに、焼け残った屋敷の奥から、いそいで五、六人の人間が現れた。その中に、ヒゲ万先生と――そして西郷先生の顔が見えた。
「おおっ――相楽どん、よう帰ってきた！」
と、ヒゲ万先生がさけんだ。
「じゃが、どげな風にして、まあ？」
相楽総三とその同志たちは、西郷におじぎして、江戸の薩摩屋敷の一件を報告しはじめた。
暮の二十五日に、三田の屋敷が数千の幕兵に包囲され、砲撃までされて焼き打ちを受けたこと。はげしい戦闘ののち、敵を斬り破ってのがれたが、品川に待つ薩艦翔鳳丸にぶじたどりついたのは三十余人であったこと。そこでも幕艦と海戦を交えたあと、何とか江戸湾を脱出し、途中暴風の難に悩まされつつ、この一月三日、やっと西宮に上陸したこと。行を共にした三十余人が一団となって動いては危険だと思い、ひとまず一番船で自分たちが淀川を上ってきたが、あとの連中もやがてここへ参着する予定であること。――
「それはそれは、御苦労なことでごわした」
西郷は笑いながらうなずいた。

「おはんらの働きで幕府方が暴発してくれ、おかげでこっちの大ばくちが当たりもした。江戸の薩摩屋敷に撃ちこんだ敵の大砲は、江戸城に撃ちこんだも同様でごわした。そのひきがねをひかせたのは、おはんらの手柄でごわす。隆盛から厚く礼を申しもす」

西郷に頭を下げられて、相楽たちは感泣せんばかりの表情になった。

しかし、もとはみんな西郷どんの命令なのである。

「いや、ここも会津の決死隊に襲われもしてな、火をつけられてこげなありさまになったが、さいわい奥のほうにあった風呂場も酒樽もぶじでごわした」

西郷は一笑して、

「これから風呂にはいって、酒をのんで下され、あらためて、そこで武勇伝をききもそ」

西郷が奥へはいったあと、ヒゲ万先生はなおそこに残って、何か考えている風であった。

「相楽どん、おはんらくたびれちょるか？」

と、きいた。

「いや、いや、いまの西郷先生のお言葉を承っただけで、元気は江戸であばれているときの倍くらいになりました」

と、相楽総三は笑って答えた。

「事はいそぐので、それじゃここでいいもそ。実は龍次親分、黒駒の親分もこれから呼んで頼もうと思っちょった用件じゃ。そこへ龍次どんがやってきて、おまけに相楽どんが帰ってきてくれたので、いま頼みたか」

と、ヒゲ万はいい出した。

鳥羽伏見のいくさはともかくも勝った。しかし、まだ幕府そのものが倒れたわけではない。本来なら勝ちに乗じてただちに追い討ちをかけ、大坂城を攻め落とすべきだが、残念ながらいま味方にそんな余力はない。

それに、先刻はいった情報によると、正確なものではないが、どうやら将軍慶喜は幕艦に投じて江戸へ帰ろうとしているらしい。

それがこんどの敗軍の衝撃による逃亡か、あるいは関東に帰って態勢を立てなおすつもりなのかよくわからないが、何にしてもこちらは一息いれたあと、ただちに江戸へ進撃してその息の根をとめんけりゃならぬ。

時をおいては敵のほうが息を吹き返すおそれがあるので、こちらは一日をも争って官軍を進発させんけりゃならんが、相当規模の大軍を編制する必要から、その進発には若干の日がかかる。

のみならず、自分がここ数年探索してきた諸国の実状から見るに、その東征の途にいちばん気にかかるのは、諸大名よりむしろ一般庶民の反応——とくに、百姓と法外の徒の向背だ。

「農民は旧習から離れがたく、法外の徒はもともと法外の徒じゃから、天下が一変するといっても分別がつかず、無意味頑固に抵抗するおそれがある」

と、ヒゲ万先生はいった。

相楽がきいた。

「法外の徒というと、ばくち打ちのたぐいですか」
「その通り――つまり、夜の世界の連中じゃな」
ヒゲ万が、龍次を見て微笑したのは、かつて何度か龍次にこの言葉を聞かせたことを思い出したからにちがいない。
「夜の世界、別世界の人間とはいうものの、これが近年おびただしい数となり、その力が馬鹿にならんことはおはんも知っとるじゃろ。例の天狗党も無頼の徒に支えられておった。上州じゃ大前田の栄五郎が、まかりまちがえば勢力下のやくざ者をけしかけるっちゅうて、天狗党の進路を変えさせおった。東海道じゃ清水の次郎長が幕軍をにらみたおし、かつまた四百数十人の乾分にヨロイカブトまでつけさせて横行カッポするのを、だれもとがめる者もなかった。――おはんだって、東海道のお札まきや関東での蜂起に無頼の徒を大いに使ったじゃろが」
「いかにも」
相楽は快然と笑った。
ヒゲ万はつづける。
そこで官軍の進発に先立って、東海道、中仙道、北陸道へ、農民とやくざ宣撫の先鋒隊を派遣したい。
それがうまくゆけば、道程の諸藩も盲動をひかえ、官軍の通行が迅速にゆき、結果として江戸幕府に立ちなおりの余裕を失わせることになる。
しかもこの任務は、お国なまりが強く武骨一点張りの薩長の侍たちは不適で、かえって浪士、

遊侠の徒のほうが効果的だと思う。
「どうじゃ？」
と、ヒゲ万先生はいった。
「すばらしい着想です」
相楽は眼をかがやかせていった。
「かねてからこの策を、進言したら西郷先生も、そりゃ面白かと、ひざをたたきもされたよ」
愉快そうにヒゲ万も笑い、
「それでおいは、東海道を国定、中仙道を黒駒、北陸道を加島屋に分担してもらおうと思っちょったんじゃが、いまおはんが帰還してきたとあれば、おはんこそこの役に大適任じゃと思う。で、東海道は清水の次郎長などというばくち打ちの大物がおるから、国定・黒駒の両人が協力してこれにあたり、農民の多い中仙道はおはんにやってもらいたかと思うが、どうじゃ？」
「結構です」
「いまいったように、これは一日も早かほうがよか。二、三日中にも立てるか？」
「承知つかまつってござる！」
相楽は大きくうなずき、ふと焼けた門の上にひるがえっている三本の錦旗に眼をやって、
「このお役にゃ、是非ともあれが欲しいですな」
と、いった。

「錦旗か」

「さよう」

「なるほど。――持ってゆくがよか。いや、あれは惜しかことをした」

ヒゲ万先生は苦笑して、

「こんどのいくさにな、味方に錦旗を何百りゅうか持たせ、隊長連にゃ、それ、いまおりん坊がつけちょるような錦の陣羽織を着せて戦わせようと思って、西陣に織らせたんじゃが、新選組の近藤にかぎつけられて、没収されてしもた。あと、わずかに残ったもので作ったのがあれじゃて」

「ちくしょう」

と、龍次もその錦旗を見あげてつぶやいた。彼はあの錦旗のために片足をひきずる姿になりはてたのである。

「そうじゃ」

ヒゲ万先生は突然思い出したように、

「龍次親分。……親分に頼みたか役目はいまいった通りじゃが、その前におはんに、もう一つ頼みたか用がある」

「な、なんでござんす」

「こりゃ、おはんにやってみる気があったら、やってもらいたかことじゃが――こっちの錦旗をとりあげられたで思いついたことじゃ。それにまた、大坂じゃ将軍が逃げ出そうとしちょる

っちゅう話をきいて思いついたことじゃ。――おととし、四日市の港で、新門辰五郎が運んでる箱を見たじゃろ？」

ヒゲ万先生は、どうも妙なことを記憶していたものだ。

「あれは、たしか徳川家の馬じるしときいた」

「あ、そ、そうでござんしたね」

「できたら、あれを取ってきてもらいたいか」

「徳川の、う、う、馬じるし？」

「それがどうなっちょるか、むろんおいも知らんが、ひょっとしたらドサクサまぎれに取ってこれやせんかと思う」

ヒゲ万はいたずらっぽく笑った。

「こりゃこっちの錦旗のもとを取られたから思いついたんじゃが、しかし、考えてみると、ここで徳川の馬じるしを取りゃ、敵はこれから――かりに将軍が江戸に帰っても、てきめんに戦意を失う。そうは思わんかね。相楽君？」

「そりゃ、うまく取れりゃ、そうなるでしょうが……」

と、相楽は首をかしげた。これはしかし、冒険だ。

が、ヒゲ万は信頼にみちた眼で龍次を見つめて、

「それは、こっちが軍勢をひきいていっては、かえって取れん。たった一人、電光石火の働きをするやつのほうがかえって見込みがある。――それを龍次どんに頼みたか。どうじゃね？」

「や、や、やりやしょう」
と、龍次はうなずいた。
が、どこか一抹吹っ切れない顔で、
「ちょ、ちょっとうかがいやすが……先生」
と、呼んだ。
「なんじゃ？」
「先生は、と、渡世人が好きで、おいらと股旅してたわけじゃあねえんですね？」
ヒゲ万は狐につままれたような顔をした。
「突然、なぜそげなことをきく？」
「それは……」
龍次は口ごもった。なぜそんなことをきいたのか、自分でもわからない。
しいて、外から彼のために助けてやれば、いまヒゲ万先生がいろいろしゃべった話や依頼の中の――「自分がここ数年探索してきた諸国の実状」などいう言葉が、彼の疑問の核となったものだろうが、龍次自身はむろんこの言葉そのものを耳から忘れている。
それより、いまのヒゲ万の話ぜんたい、それどころかこの薩摩屋敷にきて以来、あの二人だけの股旅をまるで忘れたようなヒゲ万のようすに、やはりこの人は「別世界のオサムライだ」というさびしさにとらえられていた龍次が、はしなくも発した愚問であったろう。
ひょっとしたら、龍次の一種の甘えからきた怨み言であったかも知れない。それは、口ごも

ったあとで出た、
「いや、先生は、お、おいらが好きで、いっしょに旅をしたんじゃあねえんですかい？」
という子供みたいな言葉が証明した。
「あはは、何をいう」
ヒゲ万先生は笑い飛ばした。
「おいはおはんが好きじゃ。好きでのうて、だれが二年も三年もいっしょに野山の旅ができるものか。おはんの勇猛さ、おはんの義侠心、おはんの純情熱血――おいは、男として惚れたんじゃ。そして、この男、使える、と――」
と、いいかけて、ヒゲ万は頭をかき、
「ははあ、おいがあんまり次から次へおはんに頼みごとをするから、おはんにそげな疑いが出てきたんじゃろな。こりゃ相すまん、何ならいまの徳川の馬じるしの件はひっこめてもよかぞ」
「いや、ゆきまさ」
と、龍次は決然といった。
「いま聞きゃ、そ、そいつを取りゃ幕府がへこたれるにちげえねえとか――それも天朝さまの、す、す、助ッ人の仕事じゃあござんせんか――おい、おりん、おいらこれから、て、寺田屋で支度して、大坂へゆくぜ！」
一礼して、スタコラと――といいたいが、ガックリ、ガックリ片足ひきずって歩き出す龍次

を、おりんは追っかけた。

「あにさん……」

と、小声で呼んで、

「黙ってろ、あっちにゃ新選組も小鉄もいるはずだ。錦旗をメチャクチャにされ、こ、この片眼片足をやられたシッペ返しは、き、きっとやらずにゃいられねえ！　錦旗のうらみはおめえだって同じだろうが」

龍次は笑った。

「それより、またあばれられるのが、おいらうれしいや！　それじゃ、ゆくぜ！」

二十四

将軍慶喜は、すでに六日の夜に大坂城から逃げ出していた。

幕に、納得できないまま京から大坂へひっぱってこられた京都守護職、会津の松平容保（かたもり）と、その弟にあたる京都所司代、桑名の松平定敬（さだあき）は、鳥羽伏見では不覚の一敗を喫したとはいえ、なお敵の三倍の兵力はある。天下一の大坂城には武器もある。兵糧もある、大坂湾には幕府の艦隊もある、と戦闘継続を主張したが、慶喜はこの際一刻も早く江戸に帰って、そちらで態勢をたてなおすべきだ、といってきかなかった。

――実は彼は、鳥羽伏見の一撃で戦意を完全に喪失して、もはや江戸でも戦う気はなかった

のである。水戸烈公の血を受けているはずだが、ギリギリ土壇場になっての突然の崩れから彼もまたまぬがれることができなかったのだ。

しかも彼が、その強硬派の会津と桑名の二大名に自分と同行することを厳命したのは、あとで自分だけが逃げたと目されることを避けようとしたのである。

六日の夜おそく、慶喜は、その両人、ほか七、八人の侍臣だけ連れて、ひそかに大坂城の裏門から、天保山沖に碇泊している四隻の幕艦めざして逃げ落ちた。

そして七日朝に旗艦の開陽丸に乗り、たまたま上陸して軍情偵察中の艦長榎本武揚（たけあき）をおきざりにして、八日の昼前に江戸へむけて出航させた。

のちの話になるが、おいてけぼりにされた榎本武揚は、傷ついた近藤勇ら新選組とともに、まだ大坂沖に残っていた富士山艦に収容されて、十二日、そのあとを追うことになる。

一方、大将に夜逃げされた大坂城の幕軍の、七日以降の衝撃と混乱はいうをまたない。

「なに、上様が大坂城を見捨てられた？」

「そんな、馬鹿な！」

みんな唖然となり、ついで悲憤の声は城の内外に渦を巻いた。

最初はまだ信じない人間のほうが多かったが、それが事実だということが明らかになると、煮えくりかえるような悲憤の渦は急速に冷えていった。

それまで城にひしめいて気勢をあげていた幕軍は、まもなくクモの子をちらすように、南へ、また西へ、雪崩（なだれ）をうって逃亡しはじめた。てんでに城中の財貨を背負い、中には大八車で持ち

出すやからもあった。このあたり、昭和の敗戦時における帝国陸軍の醜態を思わせる。

さて、慶喜一行は幕艦に乗りこんだのに、それがそのまま、まる一昼夜天保山沖に浮かんだままであったのは、わけがある。

ここにきて、徳川家の馬じるしと、愛妾お鳥の方を城に残してきたことが判明したのだ。いや、いまさらわかったことではないが、そのときに至ってこれが問題になったのである。

開陽丸の艦長榎本武揚は上陸中で不在なので、艦の指揮をとっていたのは副長の沢太郎左衛門であったが、将軍についてきた老中の板倉伊賀守からこの事実をきいて、

「なるほどこれでは、いくさに負けるのもむりはござらぬ」

と、呆(あき)れかえり、

「しかし、大坂城ではなお抗戦派がいきまいておるでござろうに、そこへ、メカケを置き忘れたから受け取りにきたといいにゆけますか」

この翌年、箱館戦争にも参加することになる沢太郎左衛門は、慶喜が自分の船に逃げこんできたことさえにがり切っていた豪傑だけに、吐き出すようにいった。

「それももっともじゃが、しかしお部屋さまはともかくおん馬じるしを、狼狽(ろうばい)のあまりあとに残してきたとは、徳川家の命運にかかわるほどの恥辱となろう」

苦渋に顔ひんまげて板倉はいった。

その馬じるしは、かつては征長の役に慶喜自身が使おうとして、わざわざ江戸城からとりよせたもので、結局慶喜が出馬することがなかったので使用されなかったとはいえ、家康公以来

徳川名代の馬じるしに相違なかった。

「いや見ようによっては——万一それらが敵の手中に入ってみよ——お部屋さまを忘れたことも、馬じるしに匹敵する恥辱となる。その双方、いかなる犠牲を払っても急ぎここへ収容したい」

こうして七日朝、徳川家の馬じるしと慶喜公の御愛妾を求めて、開陽丸船方の中から選ばれた侍十人が大坂城へ向かい、そのあいだ開陽丸は波にゆられて待つというなりゆきになったのだ。

その挺身隊が大坂城へたどりついたのが午後おそくになってからであったが、曇天の下の町を逃げ走る群衆の中を泳ぐように近づくに従って、彼らは絶望的になった。

敵影はまだ見えないのに、城の方角から流れてくる落武者のだれかれをつかまえて、馬じるしやお部屋さまの安否をきいても、みんな心ここにあらずだ。だいいちそんなことを問いただしている雰囲気ではない。

しかるに彼らは、この惨状の中にあって、すでに門番もいない大手門の内側に、粛然とひかえている一つの大集団を見た。

二十五

それは武士ではなかった。鳶(とび)のかたちに手ぬぐいで頭をつつみ、紺のはんてん、紺の股引、手に手に鳶口を突き、片膝立てて坐って、その数、百人ばかり——その中に、「を組」のマト

イを高々と立てている。

粛然、と一見はそう見えたが、実は彼らは茫然としていたのだ。

将軍が逃げた、という噂が城を走り、やがて侍たちが落城さながらに四散する光景が展開されても、

「じょうだんいっちゃいけねえ。将軍さまが家来を捨てて逃げなさるはずがねえ」

と、新門辰五郎は一笑していた。

すぐにそれがじょうだんではないらしいことが明らかになっても、

「腰ぬけ侍どもは知らねえ。何がどうあろうと、将軍さまの御下知で江戸からきたおれたちだ。将軍さまの御下知がなけりゃ、この城から一足も動けねえ」

と、首をふったきり、口をへの字にしてテコでも動かない辰五郎にねじ伏せられて、ここにがんばっていた「を組」のめんめんだが——眼前に見る侍たちの醜態に、茫然と眼を見張っていたところへ、城内西の丸あたりから黒煙があがり出した。

「親分、火消しにゆかなきゃならねえんじゃねえですか！」

さけんだのは乾分（こぶん）の一人、河合宗之助だ。元は一橋（ひとつばし）浪人のはずだが、いまは完全に新門一家の鳶になっている。

「おうっ」

反射的に答えたが、さしもの辰五郎も息をつめたきり、次の声が出ない。

なるほど火消し役もかねて江戸から呼ばれたにはちがいないが、大坂城の火事まで町火消しの手におえるか——と、とっさには立ちすくんだのだ。

そのときに、開陽丸からの挺身隊がかけつけたのだ。

「やあ、あれは新門一家ではないか」

と、彼らはすぐに気がついた。

幕艦の乗組員とはいえ江戸侍でもある彼らは、将軍が江戸から呼んだ鳶の者の話は以前から耳にしていたと見える。

「おう、お前が辰五郎か」

かけよってきて、その一人がさけんだ。

「お前——お鳥のお方さまはどうしておわすか、知っておるか！」

それが辰五郎の娘であることも周知のことだ。

実はそれこそは、口には出さないが、新門一家の者すべての胸に、暗雲のごとくかかり、かつ親分の胸に大暗雲となってかかっているだろう、と先刻から気にしていたことなのであった。

マトイ持ちの卯之助がきいた。

「お鳥のお方さまは、将軍さまとごいっしょなんじゃあござんせんかい？」

「いや、お部屋さまは船に乗ってはおられぬ。——われわれは船方の者だが、それをお救いにきたのだ！」

みな騒然となるのに、

「まだ取りに来た物がある。徳川家のおん馬じるしだ！　それも置き忘れた。それをお運び申

さねばならん！」

新門一家の頭上に、見えない雷電のようなものがはためきわたった。

徳川家の馬じるし――それは彼らにとって、無縁のお道具ではない。それこそは新門一家が、おとし江戸からものものしく運んできたものだからだ。あのときは運搬役だけで、さすがに二条城以後は、彼らの手のとどかない場所へ祭りこまれてしまったが。――

「それはどこにあるのでござんす？」

「西の丸の大広間の床の間に飾ってあるときいた。そして、お鳥のお方さまは、その西の丸にすぐ近い化粧やぐらにおわすはず――だと」

「どっちでござんす」

「あっちだ」

と、侍は指さして、

「おう、西の丸が燃えておる！」

と、絶叫した。

そちらに煙ばかりでなく、陰暗たる空に赤い炎が舞いあがるのが見えた。

「よし、ゆけっ」

卯之助がマトイをふりたてた。

新門一家が躍りあがってかけ出そうとしたとき、

「やい、待て」

と、辰五郎がほえた。朱面に白髪をふりたてて、

「お部屋さまより、おん馬じるしの方が先だぞ。何が何でも、そのほうを先にかつぎ出すのだぞ。――いいかっ」

「合点（がってん）でござんす！」

侍たちとともに、「を組」の鳶たちは西の丸めがけて殺到した。

一帯には、刀槍はもとより、道具や衣類、あらゆるものが散乱している。

火の手はあちこちからあがっていた。ただの朱火、ただの延焼ではない、火元がいくつかあるとしか思えない炎上ぶりであった。

その方角から、おびただしい人間が、悲鳴をあげ、こけつまろびつ逃げてくる。女が多い。城兵たちの多くが逃げたのに、女たちがいままでこれだけ残っていたのは、逃げるにもどこへ逃げていいのかわからないせいであったが、この火にたまらず追い出されたものにちがいなかった。

「おい、卯之助あにい」

マトイ持ちの――火消しが目的ではないので、マトイは辰五郎のところに置いてきたが――卯之助と、それとならんで走っていた河合宗之助は、呼ばれて眼をむいた。

「国定の――」

二十六

三度笠の下から片眼を笑わせているのは、あの国定龍次であった。
「いつぞやは、きょ、京の西陣で助けてもらってありがとう」
卯之助は、龍次が片足をひきずりながら走っているのに気がついた。——礼はいわれたが、龍次がこうなることを助けられなかったのだ、
「おめえさん、どうしてここへ？」
ヒゲ万から密命を受けた龍次は、伏見から高瀬舟でさっき大坂へ着いたばかりであったが、その用件はいわず、
「さっき、お侍さんの話をきいたよ」
と、龍次はいった。
船方の侍の知らせに驚倒していたのと、とにかくまわりが混乱状態なので、いままで卯之助たちは三度笠の出現など眼にもはいらなかったのだ。
「いっしょにお鳥さんを助けにゆこう」
龍次はこんどは宗之助のほうへ顔をむけて、
「へ、変な縁だなあ、同じ火の中を——あのとき熱いのァ、コ、コ、コリゴリしたはずなのに、また同じ女を二人で助けにゆくとァ……」
と、いった。——江戸の入谷、小倉庵での火中の救出劇を思い出したらしい。

「どうやら将軍さまは逃げちまったようだね。そ、それにしてもオメカケを忘れてゆくとァひでえ野郎だ。河合さん、お鳥さんを助け出したら、もう返しちゃあいけねえ。こ、こんどこそ、とってしまいな、いいかえ？」
「いや、拙者は」
江戸火消しの装束をつけているのに、河合宗之助はそんな言葉を使って、血ばしった眼を、前方から断続して逃げてくる男女に投げながら走っている。
「あの中にいねえか」
「まだ——」
龍次は次にまた宗之助をふりかえって、
「さっきお侍が、おん馬じるしは西の丸の大広間にあるっていったようだが——そ、そのおん馬じるしってどんなもんだい？　おめえさん、運んだのだから知ってるだろ」
「いや、おれァ箱を見ただけだが……何でも長さが七尺もある、馬鹿でっけえ金の扇子だってえことだ」
「へえ。——」
龍次は、四日市の港でちらっと見たとき、新門の鳶（とび）がかついでいた箱が一丈くらいあったことを思い出した。
そこへ、船方の侍が二、三人追いすがってきて、
「異形（いぎょう）のやつ——なんだ、うぬは」

と、三度笠の龍次をいぶかしんだ。
「あ、そいつァあっしたちの知り合いで——新門一家同様のもんでさ」
と、卯之助が弁明した。
と、そのとき、横のやぐらの窓から、どうっと火と煙が噴き出し、龍次たちも思わず顔を覆って立ちすくんだ。
「わっ、こりゃ、じょうだんじゃねえ！」
龍次はさけんだ。
「そ、そのオメカケさまのほうも、まだ逃げねえとしたらこれもじょうだんじゃねえぜ！」
いつのまにか、まわりは卯之助、宗之助ら十人ばかりの火消しと、二、三人の侍だけになっていた。あれだけの鳶たちがみんなひるんだわけではなく、別の通路へまわったのだろう。
——あとでわかったことだが、大坂城はこの日、全城が炎上したわけではなく、西の丸の一部が焼けただけであったが、それでもとにかく城が燃えているのだ。周囲に炎は怒濤のようなひびきをたてていた。
「あれが西の丸だ！」
と、侍の一人が右を指さすと、もう一人が、
「こっちが化粧やぐらだ！」
と、左のほうを指さした。
また火の粉と燃えかすと灰が、灼熱の吹雪みたいに吹きつけてきた。

「もういけねえ。これ以上いっても、死ぬばかりだあ」
と、「を組」名代（なだい）の卯之助が背を見せると、
「たのむ、やれるなら、おん馬じるしとお部屋さまを——」
侍たちも虫のいい悲鳴をあげて、四つン這いに地を這いながら退却していった。
龍次と河合宗之助は、火ぶくれしたような顔を見合わせた。
「ゆくかね？」
「ゆこう！」
二人は焦熱地獄の道をまたかけ出した。
「こっちが西の丸、そっちが化粧やぐら——」
その地点で、さっきの侍の指さした通り、龍次はさけんだ。
「お前さんは、け、化粧やぐらのほうにゆきねえ。おいらは、に、西の丸へいって馬じるしをとってくる！」
「いや、拙者は」
と、また、何やらふんぎりのつかない宗之助に、
「とんちきっ、まだそんなことをいってるのか、お鳥さんは将軍に捨てられたんだ。それを助けてやる者がお前さん以外にだれがある？ ゆかねえか、こ、このウスノロ野郎！」
と、龍次はどなりつけた。
二人は別れた。

二十七

龍次が、西の丸の大広間らしいところに突入したのは数分ののちであった。

百畳敷きくらいはあったろうか、ここに火の手はまだ見えないが、黒煙が満ちていてよくわからない。が、熔鉱炉のような熱気がゆらめくなかに――正面の床の間に、何やらうすびかる巨大なものが見えた。

かけつけて見ると、それは台にとりつけられた大金扇であった。扇はひらかれていた。骨の長さはたしかに七尺はある。

金箔は青さびているが、それこそは徳川重代の――かつて豊臣のころの大坂城が落城したとき、茶臼山の大御所さまの本陣につっ立てられていた馬じるしにちがいなかった。

それとならんで、黒うるしをかけた太い竹筒が三本、やはり台に立てかけてある。いずれも六尺くらいあるが、これをつぎ足せば二丈ちかい旗竿となるはずだ。

しかし、龍次はそんなものには眼もくれない。

馬じるしにとびついて、台からとりはずし、これを折りたたんだ。が、すでに熔鉱炉のような熱さにカナメの釘か骨かがどうかしたのか、先が三尺ばかり巨大な朝顔みたいにひらいたまま閉じない。

そのまま、こわきにひっかかえて、大広間から走り出す。

いま来た道は火炎でふさがれて、もう帰れない、と見て、ただ火の気のないほうへ、ゆくえ

も知らずかけ出した。

一方が白壁の塀、一方が三間ばかりの細いが深い堀になっている通路にきた。

そこにも散らばっている品々の中から、紅白だんだらのふとい紐をひろいあげると、彼は不完全にたたんだ大扇を、その紐で十文字に背にしばりつけた。

なにしろ彼の背より大きい扇子だから、先のひろい尖端は、ななめに高くにゅっと右肩からつき出している。

と、そのとき塀の内側の建物からも、ぐゎうっと炎が噴き出して、そこからばらばらと五、六人の影が夜がらすみたいに飛び出すと、ぎょっとしたようにこちらを見て、

「あっ……きゃつだ！」

と、驚きの声が走った。

こんなところにまだ人間がいたらしい、と、馬鹿な話だが人なつかしい思いがし、龍次はのぞきこんで、

「おう、会津の小鉄一家か！」

と、さけんだ。

その五、六人はみんなやくざ風で、その中にたしかに会津の小鉄の姿を認めたのだ。彼らは手に手に、たいまつのように、燃える薪ざっぽうを持っていた。――

「そうか！　火をつけたのはてめえらだな？」

と、龍次はさけんだ。

「このお城は、薩摩のイモ侍や長州のフグ侍にゃ渡せねえ」
と、悪鬼のような形相（ぎょうそう）で小鉄は歯をむき出した。
「それに、てめえ、まだ生きてこんなところに現れやがったか。何にしても、ここで城といっしょに焼いてくれる、それっ」
乾分（こぶん）たちが動くより、龍次の猛然たる跳躍のほうが早かった。
長脇差（ながどす）がほとばしると、龍次の姿は——扇を背負い片足不自由なだけに、いっそう怪奇な魔鳥が羽ばたくように飛んでいた。
「ゆうどう……からくっ……からく……からくっ……」
どちらがあげたのか、人間の声とは思われない声とともに、そこに腕が飛ぶ。足が飛ぶ。首が飛ぶ。
横から噴き出す黒煙がたちまち血けむりに真っ赤になって渦まく中に、会津一家の乾分たちはことごとくのけぞり返り、もんどり打って地を嚙んでいる。
「ば、化け物野郎っ」
さすがに恐怖の相に変わった小鉄の顔だけが残った。と見るや、ぱっと背を見せて逃れようとする。
その肩に小松五郎がふり下ろされたとき、また一団の火炎がのびて灼熱の団塊となり、さすがの龍次もタタラを踏んだ。
が、それも一足二足、たちまちその火炎を突っ切って飛んでいる。

その扇子がぶじであったことこそ天祐、彼のかぶっていた三度笠は燃えあがっていた。
「やっ？」
彼は、けげんそうに見まわした。会津の小鉄の姿がそこに見えなかったからだ。
「野郎、どこへいった？」
まだ十歩も逃げのびられないはず——と片側の塀を見下ろした龍次は、そこに大きな波紋がひろがりつつあり、しかも浮かんでくる物の影もないのを認めた。
「熱っ」
はじめて彼は、あわてて三度笠をぬいで火をたたき消した。
半分無くなった笠をまたかぶると、何思ったかしゃがみこんで、そこに落ちてくすぶっている薪ざっぽうを一本拾った。
さて彼は、きっと前方をにらむと、また疾駆しはじめた。ゆくても燃えており、ここに立ちどまってミエを切っているひまなんかないのだ。
どこを、どう走ったのかわからない。——
やがて焦熱地獄をやっとのがれて、メチャクチャにかけまわり、龍次が出ていったのは、ふしぎなことにもとの大手門内の広場であった。
そして彼は、そこに新門辰五郎やその乾分たちが——半分ほどにへっていたが——最初に見たときと同じように、粛然とひかえているのを見た。

二十八

粛然と——一瞥にはそう見えた。

それがこちらを見て、ふいに波打った。

波打つのもむりはない。そちらから見れば、まさに異形の怪物だ。

夕暮れとなった広場は、黒煙に覆われ、火光に照らされて冥府のようだ。そのかなたに——三度笠は半分焼け、左の袖は燃えおちて、むき出しになった肩や腕は真っ赤だ。顔もまた半面朱色とも煤色ともつかぬ色に染まった中から、片眼だけ銀光を発している。右手には長脇差の抜身をひっさげ、左手には燃える薪ざっぽうをぶらさげている。そして、その背にななめに背負っているのは、巨大な扇子ようのものであった。

「龍次あにい——生きてたか！」

さけんでかけ出したのは、さっき途中から退却していったマトイ持ちの卯之助と、それから船方の侍たちだ。

「おうっ、あれはまさしくおん馬じるしだ！」

「よく持ち出してくれた！」

「それをわたせ」

手をさしのばす侍たちに、龍次は立ちどまり、

「近づくなっ」

と、大喝した。

「そ、それより、河合さんはどうした？」

炎の中で自分と別れて、化粧やぐらに向かった河合宗之助の顔が見えないのに彼は気がついたのだ。

みな、しいんとした。——やおら、

「宗之助はここにいる」

と、新門辰五郎の声が聞こえた。

龍次は、辰五郎のそばにうずくまって両手で顔を覆っている女人——あきらかに、江戸で見たあのお鳥の方と、その足もとにつっ伏している鳶姿の男を見た。その下から血がひろがっていた。

「宗之助は、お鳥をたしかに救い出してきてくれた」

辰五郎はいった。

「それをおれはどなりつけた。娘を救えとだれがたのんだ。なぜ徳川さまのおん馬じるしを持ち出してこねえ、と。——」

熱鉄をのむような声、とはこのことだろう。

「そしたら、こいつ、申しわけねえことをしたと、あやまったかと思うと、そばに落ちてた刀を拾って、いきなり腹を切っちまやがったんだ。……」

龍次は立ちすくんで、もういちどしげしげと河合宗之助の屍骸を見やった。

――もう四周、炎の海鳴りの聞こえる化粧やぐらで、慶喜に捨てられたと知って、ここで死ぬといって動かないお鳥の方を、むりむたいに背負って、河合宗之助は、本人は大火傷を受けながら、坂崎出羽守のごとくこの広場まで救い出した。そのお鳥は以前彼の恋人で、慶喜は以前彼の主君であった。

それがこういう行動をとったには、河合宗之助だけでも一編の小説をなすほどの心理的葛藤があったにちがいない。また、その行為を責めたのが、お鳥の父親の町火消し新門辰五郎というのだから、これもそれに劣らぬ心の狂瀾をなめたにちがいない。

そのすべてを、龍次に理解できたか、どうか。――

彼の片眼が、ぎらっとひかった。

「河合さんは、サ、サムレエじゃねえんだぜ」

と、龍次はいった。

「鳶になっていたじゃあねえか。ま、町火消しが切腹することがあるもんか」

「を組の鳶はただの町火消しじゃあねえ。将軍さまの火消しだ、何よりも先におん馬じるしを持ち出さなきゃあならねえ」

「その将軍さまは、し、城もあんたの娘さんも捨てて逃げちまってるじゃあねえか。――え、江戸のあの火事騒ぎのときとおんなじだ。おいらにゃ、おめえさんたちの気持ちがわからねえ。……けっ」

龍次は、そっくり返った。

「そ、そっちはそっちだ。勝手にしやがれ。おいらはこの馬じるしはわたさねえぞ。おいらがもらってゆく」

「な、なにっ」

侍たちは愕然となり、刀のつかに手をかけてつめよった。

「た、たわけっ」

「おん馬じるしをわたさぬと？」

「うぬはそれを何にする――」

龍次はぱっとうしろへはね飛んで、

「来るか！」

と、ほえた。

「やるなら、この馬じるし、も、燃してしまうからそう思え！」

そして、左手にぶら下げていた薪ざっぽうを肩の上にあげた。炎が扇子に近づいたのを見て、

「あっ、待て！」

侍たちは狼狽(ろうばい)し、立ちすくんだ。

「こんなこともあるだろうと用意してたんだ。いいか、近づきゃがると、こうだぞ」

龍次は、火をかざしたまま、ジリジリと、二間、三間とあとずさりに大手門のほうへ歩いていって――あとは、背を見せ、ガックリ、ガックリ歩き出した。

侍たちは青くなり、赤くなり、なすすべもなくそれを見送っている。

と、もう数十歩も離れ去った龍次が、ふいに立ちどまり、一息思案している風であったが、くるっとふりむいて、またひき返してきた。

「け、けえしてやらあ」

と、いった。

「おれが河合さんを、こ、殺したかも知れねえ」

燃える薪ざっぽうを投げ出し、長脇差を鞘(さや)におさめ、十文字の紐をときながら、

「切腹した鳶ザムレエに免じて、こ、こいつァけえしてやることにするよ。ただし、将軍にじゃあねえ、おいらの気持ちじゃ、し、新門の親分にだ」

背中の大金扇を前にまわすと、辰五郎の前に投げ出した。

「西陣のおりの恩義の礼もござんす。お、親分、いろいろありやしたが……おさらばでござんす」

凄惨きわまる顔貌の中から、にいっと白い歯を見せて一礼すると、例の片足をひきずりながら、遠ざかってゆく。

あと侍たちも新門一家も、茫然として見送るばかりであった。

が、やおら侍たちがわれに返って、その馬じるしをとりあげようとした。

すると、

「お待ち下せえ」

と、辰五郎が声をかけた。

「そいつは、わたせねえ」

「何と申す」

「このお鳥もわたせねえ」

辰五郎はいった。

「船に帰ったら将軍さまにいっておくんなせえ。おん馬じるしもお部屋さまもたしかに救い出したが、思うところあって、ここじゃあおわたしできねえ。双方とも……いや、お鳥はこのままひきとるつもりだが、おん馬じるしのほうは、新門辰五郎が意地をかけて、運んできたときと同様、自分の手で東海道を、たしかに江戸城へおとどけいたしやす、と」

侍たちは口をぽかんとあけている。

「どうしても持ってくとおっしゃるなら、恐れ多くも新門一家、その名にかけてお相手いたしやす。それがいやなら相すまねえが、このまま船へ帰っておくんなせえ」

——その翌朝、一月八日に将軍慶喜を乗せた開陽丸は空しく出航した。

かくて——史書にも、

「明治元年正月の鳥羽伏見の戦いに敗れた慶喜が開陽艦に乗って江戸へ逃げ帰る際、大坂城中に大金扇の馬印を置き忘れ、辰五郎は命を受け取り戻したが、慶喜は出船した後なので、止むなく馬印を陸路東海道を持ち下った」(日本史学会編『明治維新人名辞典』)——「新門辰五郎」

と、明記されるような事態となる。

二十九

それから二日目の夕方だ。

二日目ということさえ、あとになってわかったことである。淀川のほとり、枯芦の中に龍次は横たわっていた。

頭上の大空は、魚のはらわたのような色をした雲の波濤であった。――すぐ南方の大坂城はもう燃え落ちたと思われるのに、その火照（ほて）りはなお雲を焦がしているのだ。

前々日の七日から燃えつづけているというわけではない。あれは西の丸の一区画を焼いただけですんだのだ。火はまた、この九日の朝に起こった。

この城は元和の夏の陣の落城後、それから時をおかず徳川の手によって再建されたものだ。その後、四代将軍のころ万治元年、落雷によって天守閣が焼けてそのまま今に至っているが、その宏壮さに変わりはない。

この九日の出火が、やはり会津の小鉄一家の――七日、彼らとて勝手に放火したものではあるまいが――手によるものであったかどうかは不明だが、当時の記録に、「城中石の間の方位に一大爆音あり、また南方二ヵ所に声あり、俄然三方より火を発し、一瞬間に四面猛火のおうところとなる」とあるから、ただの失火でないことはたしかだ。

ただし、これは龍次には関係ない。

彼は二日前からこの淀川の岸に、半分水につかって横たわっている。

城を出てから、京へ上る船を求めてここへ歩いたものだろうか、それとも火傷した身体が、本能的に水を欲してさまよってきたものだろうか。――まったくおぼえがない。

そこへきて、腹這（はらば）って河の水をごくごく飲んだきり、龍次は気を失った。顔を半分水につけたまま、気がついたのは翌朝のことだ。しかし、身体はまだ動かなかった。

火傷の難は、ただ皮膚だけではない。その火熱によって血液や体組織にまで異常をもたらす。さすがの龍次が、さらに一昼夜そこに打ちたおれたままであったのは、そのせいであったのだ。が、寒中、三日二夜、そこにころがって、しかも水に顔をひたしたきりであったのは、火傷にはかえってよかったのかも知れない。左頰の半分、ただ暗褐色に染められただけですんだのはそのせいにちがいない。左腕から脇腹にかけてのただれはどうしようもなかったが、ともかくもその程度ですんだのもそのおかげにちがいない。

とにかく、龍次は生きていた。

しかし、すぐそばの大坂城が九日にまた炎上し、遠雷のような叫喚の声をききつつ、その日も動けなかった。

さすがにまた意識がうすれかかったとき、彼の片眼に、妖麗な雲を背にのぞきこんでいる白い顔が映った。

おりんだ。

「どんなに探したか――」

おりんは白馬から飛び下りた。

この二日間、おりんは蜂の巣をつついたような大坂城の周囲をシロヤマで馳せまわって、龍次を探しつづけてきたのだ。

「こんなところにいたの！」

おりんはしがみついて、ゆさぶった。

「こんなひどい姿になって……あんな頼まれごとなんて、どうでもいいのに！」

「いちどは、と、徳川の馬じるしは取ったよ。しかし、か、可哀そうだから、けえしてやった」

虫のような声で、

「おいら、な、何してるんだか、自分でもわからねえ」

といって、にやっと白い歯を見せた。

「そ、それより、な、何か食うものはねえか？　おいら、この二日、何も食ってねえんだ。……」

「ああ、そんなこともあるだろうと、京ずしを買ってきたよ！」

おりんはシロヤマにかけより、鞍につけた三つ重ねの箱をとり下ろした。

顔を横にして見ると、いままで半死の状態にあった龍次は、がばと起きなおった。

そして、鯛やえび、さば、さわら、卵焼きなどの押しずしや太巻きを、両手を使って、息もつかずに食い出した。

「ああ、飯岡の助五郎親分を思い出すなあ。……」

自分でも笑いながら、いっきに三箱食い終わると、また淀川に口をつけて水をのみ、

「ああ、生き返った！」

どんと胸をたたき、

「さあ、ゆこう」

「どこへ？」

「伏見へだ。も、もひとつ、ヒゲ万先生から頼まれたことがあったっけ」

おりんは呆(あき)れはてた顔で、龍次を見つめた。

「そうだ、官軍の、つ、つ、露払いだったな。いや、そっちのほうが本来の用だ。さあ、帰(けえ)ろう！」

三十

――龍次とおりんが伏見に帰ってきたのは、一月十一日の午後であった。シロヤマに乗って十里の山崎街道を歩いてきたので、二日がかりになったのだ。

龍次が自嘲したように、彼の大坂決死行は、結局何しにいったのかわからないてんまつになったのだが、しかしこれに費した五日間ばかりの日時は、あとになってみれば彼にとって重大以上の運命のくいちがいをもたらすことになる。

将軍江戸へ逃亡す――ということが明らかになって、いよいよ凱歌どよもす伏見の薩摩屋敷の、焼け残った奥座敷で、西郷先生とヒゲ万と相楽(さがら)総三は何やら談合中のていであったが、こ

こに帰還してきた龍次とおりんを迎えて——とくに地獄から帰ってきたような龍次の姿を見て、三人とも口をあけたまま、しばらく一語も発しられないありさまであった。

龍次は頭の左半分は髪も焼けこげてマゲも結べない状態となり、物凄まじいザンバラ髪になっていた。

龍次は頭をかきかき、大坂城の炎の中で、徳川家の馬じるしを奪取したものの、新門辰五郎とその乾分への仁義のためにそれを返してやったことを報告した。

「よかよか」

うなずく西郷の大きな眼は、涙でいっぱいであった。

「そのほうがよか——どころじゃなか、よう返してくれた」

と、ヒゲ万先生は頭を下げたほどであった。

さて、それから、

「龍次親分、おはんにゃ、黒駒の親分といっしょに東海道の官軍先鋒をやってもらうつもりじゃったが、黒駒のほうは一刻も早かほうがよかっちゅうて、おととい、乾分や人足百人余りを連れて出立してしまった」

と、ヒゲ万はいった。

「追っかけりゃ追いつけるじゃろが、その身体じゃむりじゃな。ここしばらくここで療養しちょったほうがよかぞ」

「へえ、おいらは、大丈夫でござんすが」

と龍次が心外な顔をすると、そばの相楽総三が、

「それならいっそ、おれといっしょに東山道——中仙道じゃな——そっちの官軍先鋒となってゆかんか？」

と、いい出した。

「黒駒のように手持ちの乾分がおらんので、おれのほうは準備に時がかかって十五日に出立することになっておる」

「おいらをお供にしておくんなさい。さ、相楽さんのほうへ」

思わず、龍次はさけんでいた。

同じやくざながら、黒駒の勝蔵とはどうもピッタリこない感じがある反面、ふしぎに郷士のこの相楽総三には親近感を禁じ得ない龍次であったのだ。——おそらくそれは、腹に一物ありげな勝蔵にくらべ、この青年の純粋性にひかれるものがあったからだろう。

「それじゃ、龍次親分は相楽君といっしょにゆくか」

と、ヒゲ万先生はいい、

「あ、ありがとうござんす！」

と、龍次はおじぎした。

なんぞ知らん、このとき彼は「死神」と同行する途をえらんだとは。——大坂行が運命を狂わせたといったゆえんだ。

「国定のが中仙道を同行してくれるとすれば」

相楽は眼をかがやかして、

「何もかもうまくいったとしての話だが、上州高崎あたりで道草して、ちょっと大前田村へ寄れるかも知れんぞ」

「あたいもゆく！」

おりんはさけんだ。

「先生、あたいもいっしょにいっていいんでしょ？」

「ちょっと待て」

ヒゲ万先生は苦笑して、

「気持ちは諒とするが、おりん坊はちょっと待ってくれ」

「ど、どうしてでござんす」

「言っちゃ悪かが、小人数の先鋒隊中に女がまじっちょれば、宣撫すべき地方の民がまじめに受けとらんおそれがある。また相楽君が連れてゆく同志がみな虎おおかみの豪傑連じゃから、ヤキモチやいて仲間割れするおそれもある。いや、牙をむく心配もないとはいえん。じょうだんじゃなかぞ」

ヒゲ万先生はおりんに慰撫の眼をそそいで、

「もうちょっと辛抱せい。おりん坊は、やがて出立する西郷先生やおいといっしょに正規の官軍として江戸へゆこう。うん、龍次親分と江戸で待ち合わせて、それからいっしょに大前田村へゆこうじゃなかか。――おいも、もういっぺん栄五郎親分に逢ってみたか。そのころは赤城

山もちょうど春たけなわになっちょるじゃろ」

龍次とおりんは、子供のようにうなずいた。おりんは涙ぐんでさえいた。

「龍次親分、おはんにこないだ、やがて大前田村はおろか上州一円、あっと驚くような男の晴れ姿で帰れる日がくる、と、おいがいったのはそのこっちゃ」

「男の晴れ姿にしちゃ、だいぶひどか姿になりもしたなあ」

と、西郷先生がからかった。

この人はさっきから黙ってニコニコして、山のように坐っているだけなのだが、それでいて周囲のものを、春の海にひたっているような気持ちにさせる。何か口の悪いことをいっても、聞く者をふしぎに愉快にさせずにはおかないのである。――で、みな笑った。

「ところで、さっきの話のつづきですが」

と、相楽総三はひざをすすめて、

「近年いたるところむしろ旗を立てて苦悶しておる百姓の心をとらえるために、ゆくさきざきで、世が天朝方に一変したあかつきは年貢（ねんぐ）は半減すると布告することはよろしゅうござりましょうな」

と、西郷とヒゲ万を見つめていった。

「よか」

西郷はうなずいた。

「そうは申しても、疑いぶかい百姓に、それを信じさせるものが欲しゅうござるが」

と、相楽がいうと、ヒゲ万先生が、

「それなら先鋒隊に錦旗を持たせ、また太政官の高札用の布告を持たせよう。……よろしゅうございましょうな」

と、西郷のほうをふりむいた。

西郷はまた大きくうなずいた。

「よか！」

「ありがてえ！」

と、龍次はさけんだ。

「年貢が半分になりゃ、百姓でやくざになるやつァいなくなる。……あ！　そうなるとおいらは困るが、ま、そんな心配はあとでいいでしょう。さあ、相楽さん、出かけやしょう」

「待て待て、官軍先鋒といいや、それなりに支度が要(い)るのだ。……それにしても、お前さんはまったく不死身の男だな」

相楽総三は、かえりみて快笑した。

三十一

さて、東山道官軍先鋒隊が伏見薩摩屋敷に参集し、出兵したのは一月十五日の朝であった。半焼した門の前に、錦旗一りゅうのほかに、「東山道官軍先鋒」の旗、さらに「赤報隊」と大書した旗も風に鳴っている。相楽(さがら)総三みずからがつけた隊名で、赤心報国の意味だ。

隊士は、江戸の薩摩屋敷からのがれてきた浪士たちを主軸とし、相楽が伊勢路にひそんでいたころの同志の浪人など、合わせて百人ばかり、馬も四、五頭いる。

それに、民心を動かすのは歌がいちばんだが、まさか官軍先鋒隊が手をヒラヒラさせて、えじゃないか踊りを踊ってゆくわけにもいかんが——という相楽の意見に、ヒゲ万先生が、それじゃ長州の志士品川弥二郎どんの作った歌を歌わせりゃよかろ、といって、かねてから養成してあった薩軍軍楽隊から、三人の少年鼓笛隊をくっつけてくれた。

さて、その赤報隊の中に、むろん国定龍次がいた。

龍次から見ると、浪士のめんめんはいつかの天狗党の再現としか思われないが、ただひとり隊長の相楽総三だけは、黒い洋服に白帯をしめ、赤い陣羽織をつけ、それに真っ赤なシャグマのカツラをかぶっていた。

この日からまもなく、本格的に出陣した官軍の隊長連にはこのコスチュームをつけた連中が多かったが、このときはまだ製造が間にあわなかったのである。

実は、龍次も相楽から、お前は副隊長格だからといって、同じ服装で白毛のハグマと称するカツラをすすめられたのだが、いや、おいらは渡世人で、と彼は受けつけなかった。

その三度笠の姿に、彼を知らない隊士で、あれが官軍先鋒とはと、ちょっと異論を出した連中もあったが、やがて龍次の惨烈な戦歴をきき、さらに何とも物凄まじい肉体から放射される妖気に打たれ、二度と文句をつける者はなかった。

「それでは御苦労じゃが、よろしゅう頼みもす」

と、西郷が相楽にいった。

「いずれ、江戸で逢おう」

と、ヒゲ万が龍次にいった。

「あにさん、それまで死なないように、ね」

と、おりんがいった。笑いながらの言葉だが、半分は本気だ。

赤毛の相楽総三は馬に打ち乗った。そのそばに、喜々として錦旗の竿をかついでいるのは、国定龍次であった。

鼓笛隊の少年たちが、西洋式の笛を口にあて、西洋式の太鼓をバチで打ちはじめた。隊士たちは朗々と歌い出した。

「宮さん宮さん、おん馬の前に
ヒラヒラするのは何じゃいな
トコトンヤレ、トンヤレナ
あれは朝敵征伐せよとの
錦の御旗じゃ知らないか
トコトンヤレ、トンヤレナ……」

冬の蒼空の下を、東山道官軍先鋒・赤報隊は躍々として進発を開始した。

――赤報隊を送り出したあとも、伏見の薩摩の本営は、眼のまわるような忙しさであった。続々と薩摩や長州の本国から兵士が送られてくる上に、鳥羽伏見の戦争まで洞ガ峠をきめこ

んでいた諸藩が、雪崩を打って倒幕の陣営に加わってきて、これを官軍に編制して東へ送り出そうという準備に夜も昼もなかったのだ。

が、ともかく「官軍東征」の姿がととのって、西郷隆盛みずからも東へ向かう日がきまった。それは二月二十五日ということになった。むろん、草堂万千代もおりんもこれに加わることになる。

しかるにその前日、彼らを震駭させる人物が薩摩屋敷にかごで乗りつけた。

岩倉具視卿である。

三十二

いや、彼自体の出現は驚くにあたらないが、談じこんできた用件が容易ならぬものであったのだ。

応接したのは西郷と草堂万千代であったが、これに対して岩倉卿は切り出した。

こちらで先般、官軍先鋒なるものを、東海、東山、北陸へ派遣されたと承わった。いや、ばくち打ち黒駒の勝蔵が東海道へ派遣されたことは、麿も勝蔵自身から事前に報告を受けている。その使命は、海道筋の博徒懐柔のためで、御一新後は博徒にかぎりばくち公認などいう約束を与えることにしたとか聞いた。

「そのことにも麿は異存があるが、それはまあ法外の世界のことであるから、まあ、よろし。しかるに、東山道に送られた赤報隊なるものは、ゆく先々で百姓に、世変わり後は年貢半減と

布告を出しておるげな」
　そのとき、美少年の小姓がお茶をささげてはいってきたが、岩倉卿はかえりみもせず、
「世がどう変わろうと、年貢半減などいうたわけたことはあり得べくもないことは御承知のはず、さような布告をこちらで許可なされたとは、いかがな次第でござる？」
　ほほっ、といった顔で草堂は答えた。
「いや、あれは太政官のお許しを得て――」
「太政官にかけあって、さような布告を出させたのはこちらでござろうが」
「は――なにぶんにも、赤報隊の隊長の懇望もだしがたく――」
「黙らっしゃい！」
　岩倉は叱りつけた。千度くらいに熱された岩みたいな顔色だ。
　お茶を運んできた小姓までが、たたみにひたいをつけたきり、とっさにはあげられない風であった。
「薩摩の武家なら、あれこれと男らしゅうない逃げ口上を申されるな。さような実行不可能な約束を与えて、あとでどうなさる？」
「怖れいってごわす。じゃが、何と申しても官軍が、なるべく早くなるべく悶着なく東下せねばならぬこの際、その先鋒隊としては、嘘も方便、と申そうか、えびで鯛をつる、と申そうか、ある程度のホラはやむを得んのではごわすまいか」
　草堂はこのとき、はっと、あることに気づいたようだ。

「あ！　そう申せば、近日御出立の東山道鎮撫総督は岩倉具定(ともさだ)卿でごわしたな。それで御心配でごわすか」
　岩倉具定は、具視の一子だ。
「無礼者っ」
　岩倉は大喝した。
「さような私事にかまけて、麿が文句をつけにきたと思うてか。下司のかんぐりとはまさにこのこと」
「はっ。――」
「そのほうは、このたびの王政復古を何と心得ておる。この日本をスメロギのしろしめしたもう神国に返すのじゃぞ。それを、その手始めから民をあざむき、愚弄(ぐろう)し、さてそのあとのまつりごとを何とする？」
「はっ」
　さすがの草堂も、思わず両手をついて、首をたれてしまった。
「さらに東山道からの報告によれば、赤報隊なるもの、至るところで強請(きょうせい)、掠奪、暴行等の悪業をほしいままにしておると聞く」
　岩倉は、西郷を見て、
「西郷どん、これをどうお考えか」
「……申しわけなかことをいたしもした」

西郷は巨体をちぢませて、
「おいどんも、ついウッカリしておりもした。これは大しくじりでごわす」
「ただあやまっただけですむことではござらぬ。こうしておるあいだにも、東山道では禍害が進んでおる。すぐに処置して下され」
「拙者、参りもそ」
草堂は頭をあげた。
「そして、いそぎ赤報隊を呼び戻してきもそ」
「そんなことですむと考えておるか」
岩倉はたたみをたたいた。
「その乱暴者どもは、錦旗をかかげ、太政官の布告をまきちらしつつ進軍しておるのでござるぞ。それを途中から呼び戻したとて、それまでに流した罪科と汚名は消えぬ」
「それでは、いかように――？」
「きゃつらは、ニセ官軍じゃ、ニセ官軍として処刑するよりほかはない。その誅戮（ちゅうりく）の刑を公開して、新政府の正義の裁きをひろく民に見せつけてやるよりほかはない！」
数分の沈黙があった。
「相わかりもした」
西郷が、決然とうなずいた。
「お心の通りにいたしもす。赤報隊は西郷の責任において処断いたしもそ」

「さよか。あんたを信じましょう。きついことをいいにきたが、天朝さまのまつりごとの正しさを通すにはそれよりほかに道はないと思うて下され」
岩倉具視は立った。
これを送って、西郷らは玄関に出る。
そのかごが、門を出るまで見送って、廊下を戻ってくる途中、さっきの小姓が頭を伏せたまま小走りにすれちがっていった。
座敷に帰って、
「いや、参りもした。ああ真っ向上段からやりつけられちゃ、ウヘーでごわす」
と、草堂万千代が、ほんとにへこたれた表情でいえば、
「おいは、あの岩倉っちゅうお公卿さんだけにゃかなわん」
と、西郷も頭をかかえた。
「しかし、すぐに拙者中仙道へ参りもそ。……御東征のお供はできもさんが、おゆるし下され」
「それにしても、何ちゅうこっちゃ、相楽を処分せんけりゃならんとは！」
西郷は、天を仰いで長嘆した。
「泣いてバショクを斬る、やむを得んでごわす。相楽と幹部連中には因果をふくめもそ」
「草堂どん、あの……国定忠治の息子はどげんするか」
「さよう」

草堂は打ち案じ、すぐに、

「副隊長っちゅうことにはしもしたが、しょせんはばくち打ち……こりゃ、除外してやってもよかでごわしょう」

と、いって、ふと何か虫の知らせを耳にしたように、

「ちょっと、ごめん下され」

と、おじぎして、あわてて座敷を出ていった。

急ぎ足で玄関に出る。

門の内側――右のほうに、杭が十数本、地面に打ちこんであった。この屋敷に馬で往来する人々のための臨時の馬のつなぎ場だ。

その中の一頭の白馬のたづなをといて、いま乗ったばかりの小姓の姿が見えた。シロヤマとおりんだ。いまヒゲ万の胸をかすめすぎたのは、さっき廊下ですれちがったおりんの影であったのだ。

「こら、おりん」

彼は外へ飛び出した。

「どこへゆくか？　待て！」

馬上でおりんはちらっとふりむいたが、返事もせず、そのまま馬に声をかけて、門のほうへ出てゆこうとする。

異常を感じて、侍たちがかけ集まってきた。

「こりゃいかん」

ヒゲ万はうめいた。

「あれをやってはならん！」

みずからにさけぶ声を発し、彼はあわててふところをまさぐり、短銃をとり出した。

「とまらぬと、撃つぞ！」

さけんだが、白馬と小姓姿は遠ざかる。

ヒゲ万の顔がひきゆがんだ。眼をつぶって、ひきがねをひく。

銃声とともに、小姓姿が馬上にのけぞるのが見えた。「しまった」とヒゲ万が口走ったのは、威嚇の手もとが狂って命中したのか。

しかし、次の瞬間おりんは前につっ伏した姿勢になり、そのまま半焼けの門の下を疾風のようにかけぬけていった。……

「あれを中仙道にやってはならん。追え……追うぞ……馬だ、五、六頭、馬の用意をせい！」

ヒゲ万は両手をふりまわし、狼狽（ろうばい）の極の相を示した。

信州

一

二月下旬といえば、後の暦では三月末だが、「夜明け前」の木曾路はまだ冬であった。京を飛び出してから幾日を経たか、幾夜を重ねたか、それも知らない。道さえも、人にきいて木曾街道と知ったばかりである。

両側にせまる山岳の上には、まだ雪がひかっていた。シロヤマの駈ける道にはさすがにもう雪はないが、屋根に石ころをならべた民家のかげ、カラスのむれが何かをついばんでいる畑のかげなどには、まだあちこち残雪のかたまりが見える。

上州ではだか馬に乗って育ったおりんは、馬ははやく駈けるけれど、長路の疾走にはたえぬことを承知している。が、自分の乗り馴れたシロヤマは捨てられなかった。だいいち薩摩屋敷を飛び出すとき、一応路銀（ろぎん）は持ち出したが、馬を新しく買う金まではない。

その薩摩屋敷を出るとき、彼女は遠い背後に、

——あれをやってはならん！　追え、追うぞ……馬だ、五、六頭、馬の用意をせい！

というヒゲ万の声をきいている。

その通り、薩摩侍たちは追ってくるだろう。

——走っておくれ！　シロヤマ、たのむよ！

とはいえ、人も馬も、何日間も食わず飲まず眠らずというわけにはゆかない。特に馬は。

——沿道、馬を飼っている農家と見れば水とかいばを求め、シロヤマに眠りをとらせている間に、軒下などに彼女も横たわった。

雨のふるときもあった。みぞれのふる日もあった。

数日のうちに、馬もおりんもみるみる衰えた。

それに彼女は、背を撃たれているのだ。

弾は左のかいがら骨の下に命中したが、手当てのいとまもなくそのままだ。ながれつづけた血は、やがて凍りついてしまったのか。——が、それよりも、

——急を知らすべき赤報隊はどこにいる？

おりんは馬にかいばを与えるため、農家に立ちよるたびにそれをきいた。

それによると、一月十五日に出陣した赤報隊は、むろんずっと以前にそこを通過していた。しかし、おりんのゆくに従って、その日数は短くなってくる。——それはともかく、赤報隊のことをきくたびに、相手がいやな顔つきになるのにおりんは気がついた。

もっとも、そんなことをきく前に、彼女と馬を見ただけで、だれも妖怪を見たような表情になる。それはそうだろう、白馬でゆく小姓の顔は、凄艶（せいえん）を超えて屍蠟（しろう）のような色をしているのだから。

そんなことを気にはしていられない。

幾日かを経て、木曾路をぬけた。

寒風吹きすさび、枯葉みだれ飛ぶ山峡の街道をかける人と馬は、すでになかば冥府を翔ぶ幻の人馬のようであった。

珍しく塩尻でははたごに泊まって――おりんが錦旗を見たのは、その翌日の三月二日のひるごろ、湖を背にして湯けむりをあげている宿場町であった。

塩尻峠では、物怖ろしいほど鮮やかに、天空にそびえる雪の連峰が見えたのに、湖の上にはひくく灰色の雲がたれ下がっていた。

信州下の諏訪。

京から八十里余。

おりんは二月二十四日に京を出たのだから、一日約十一里余ずつ駈けたことになる。人が馬をひいて上らなければならない山坂の多い街道だからこうなったのだが、それにしても彼女とシロヤマの疲労こんぱいぶりを見るべきだ。いや、おりんが生きていることさえふしぎだろう。

二

寒雲にはためいている錦旗や赤報隊の旗をめあてにたどりつくと、それは松葉屋という脇本陣であった。

馬で近づいたおりんを見て、宿の周囲にむらがっていた軍装の浪士たちも驚愕し、知らせを

きいて出てきた相楽総三も、それ以上に驚愕したことはいうまでもない。

「国定のあにさんは？」

というのが、おりんの最初の言葉で、

「おぬしはどうしたのだ？」

というのが、相楽の第一語であった。

ついで相楽が、国定龍次はこの先鋒隊のさらに先鋒として、きのう数人の同志とともに東へ偵察に出かけた、といい、おりんが、京に発生した大異変を告げた。

岩倉卿が薩摩屋敷へきて、赤報隊の年貢半減の布告は許せないといい、また進軍中、乱暴をきわめているという噂も官軍の名をけがすもので、みせしめのためいそぎ仕置をする必要があるといい、西郷先生とヒゲ万先生はこれを受けて、自分のすぐあとから、討っ手として草堂先生らが急行しつつあるはずだ、と話した。

「そんな馬鹿な！」

相楽総三は眼をむいた。

「年貢半減のことは、西郷先生も草堂先生も御了承のことではないか。また軍律のことはきびしく申しわたしてある。乱暴を働くのは一部の分子だ。それにわれわれは進発のときからして一文の軍費も受領しておらん。それはゆく先々の諸藩から徴発せよ、という御意向ではなかったか。……」

ただし、この後者の件に関しては、相楽にも内心動揺するものがないではなかった。

事情は右の通りにちがいなかったが、何しろ赤報隊の主軸は江戸の御用盗の生き残りの豪傑連だ。
道程の諸藩の家老を呼びつけて、
「御藩は勤皇か佐幕か」
と詰問する。——やむを得ず、
「勤皇で」
と、答えると、
「それなら、そのあかしを拝見したい」
といって、何千両とか鉄砲などの武器類を強請する。
しかし、相楽をふくめて幹部連は、この徴発にはそのこと自体の必要もさることながら、諸藩の向背の打診、もし敵意あればその抵抗力の剝奪（はくだつ）等の意味があると考えて恥じなかった。
ただ、たしかに困ったのは、配下の連中の乱暴だ。
京都を出るとき百人余りだった隊士は、ここへくるまでに途中参加の浪士や、人足としてやとった中にあやしげなやつが加わってきて三百人を越え、これがあちこち一般民衆を相手に掠奪、強姦などをやった。何人か制裁したが、それでも追いつかない。で、いままであちこちで諸藩の武士の抵抗や農民の反撃による騒ぎがたしかにあった。——
実は赤報隊は、この下の諏訪には二月六日に到着している。京都からは一月十五日に進発したのだから、おりんが六、七日で走破した距離に二十日前後費したわけだが、それは主として

これらのイザコザのためであった。
そして二月六日以来、きょう、月が三月と変わってもなおここに滞陣しているのは、この下の諏訪の東、和田峠のかなたに、諏訪高島藩、上田藩、小諸藩、安中藩などに天領の諸兵、農兵などが加わって敵対の意を示しているからであった。二月十八日には追分でちょっとした戦闘が交えられて、赤報隊にも多少の死傷者が出たほどである。
「われわれは戦っておる。むらがる敵中を突破し、慴伏（しょうふく）させようとけんめいの力をしぼっておる。それに何ぞや、いまごろ突拍子もない難クセをつけて、背中にアイクチを突き刺そうとは！」
相楽総三はうめき、すぐに首をふって、
「そもそも西郷先生や草堂先生が、おれを処刑しようなど考えられるわけがない。それはお前の何かのききちがい、かんちがいではないか」
と、にらみつけた。
「あたい、そのことをこちらに知らせようと馬で逃げ出して、草堂先生に短銃で撃たれたんですよ！」
と、おりんはいった。
冥界からの使者としか思えないおりんの姿に、相楽は息をのんで絶句した。やおら、
「お前は気がふれたのではないか。……」
それしか判断のしようがない、といった表情でつぶやく相楽に、

「それじゃ、あたいはゆきます。あにさんは、この東の峠の向こうにいるんですね？」
と、うなずいておりんは、また飛び出した。
これ以上、相楽さんを説得しているいとまはない。それに、危急を告げにきたのは相楽さんではなく、龍次あにさんなのだ。
相楽総三は、それでも二、三歩追っかけて、
「それじゃ、おりん坊、案内人をつけてやろう」
と、声をかけたが、おりんは馬に乗りながらふりかえり、
「いらないよ！」
と、首をふった。
赤報隊の侍などつけられては、龍次がまたここへ連れ戻されるかも知れない、と、とっさに考えたのだ。彼女のこの判断は、一応は正しかったのだが。……
数刻ののち、おりんは馬をひいて、ひとりで和田峠をのぼっていった。
和田峠は、標高において中仙道でいちばん高く（一五三一メートル）下の諏訪から三里、下って和田宿まで二里半、この街道随一の難所だ。
しかし、その頂上が雲につつまれているように見えたのは、高さのゆえではない。暗澹（あんたん）たる空から舞いはじめた雪片のせいであった。
その四界の様相も眼中にないかのごとく、女と馬はゆらめきのぼってゆく。……が、あやういところでおりんは追手からのがれたのである。ただし、これも一応の話だが。

三

おりんが下の諏訪から離れてから数刻、日没の早い早春で、しかも曇り日であったので、はやくも夕方に思われる時刻、かごかきが嵐のように白い息を吐いて、八ちょうのかごが西から下の諏訪にはいってきて、本陣の岩波屋にはいった。
そこから脇本陣の松葉屋に、東征軍参謀草堂（そうどう）万千代の名をもって、赤報隊隊長相楽（さがら）総三以下八人の幹部に、問い糺（ただ）したきことあり、至急出頭せよ、という使者が走ったのは、半刻ばかり後のことであった。
彼らも伏見屋敷を馬で飛び出し、一日で馬を乗り換えたが、三日目からはかごにした。武士の彼らも、それ以上馬に乗りつづけるというわけにはゆかなかったのだ。いかにおりんの騎馬行が難行苦行であったかがわかる。
「なに、草堂先生がこられた？」
相楽たちは顔見合わせた。いっせいに、先刻のおりんの急報を思い出したのである。
してみると、おりんの知らせは、彼女のかんちがいや乱心によるものではなかったのか。
「まさか？」
しかし、総三は一笑した。
「ともかくも、呼ばれた以上、ゆかずばなるまい、ゆこう」
こうして赤報隊の幹部たち八人は、身支度をととのえて、本陣の岩波屋に出かけていった。

軍中であることを示すため、みな陣羽織を着、中には鉢巻までしめた者もあった。

ちなみにこの下の諏訪の本陣の主人は岩波太郎左衛門という人であったが、後年岩波書店を起こした岩波茂雄は、上の諏訪に近い中洲村の農家の生まれである。おそらく縁戚か、少なくとも古くは同族の家筋であったのではあるまいか。

本陣だけに、門があり前庭まである作りである。その広場に、雪はハラハラ散っていた。まだつもるほどではなく、地はぬれている。

彼らが参着を告げると、奥から草堂万千代と七人の武士が玄関に出てきた。その中には相楽と顔見知りの男もあった。みな薩摩侍であることはいうまでもない。

「やあ、草堂先生、これは思いもよらぬ急な御出張で――」

相楽はいきさつも忘れて、なつかしそうに笑いかけた。

が、草堂万千代はこの人物には珍しく陰気な表情で、

「国定龍次の姿は見えんな」

と、のっけからいった。その名は、指定してきた幹部連の名の中にはなかったが。――

相楽は答えた。

「国定のは、きのうから偵察のため、和田峠の東方方面に出動しておりますが」

「おりん坊はきたかな」

「は、きょう昼ごろ参って、龍次を探してこれも和田峠のほうへゆきました」

「そうか」

と、草堂は曇天の日のうすら日のような笑みを走らせて、

「外で話そう」

と、あごをしゃくって、まばらに雪のふる広場に出た。彼は左手に、一たばだが重げなほどの縄の輪をぶら下げていた。

いつもの草堂とはちがう異常なものを感じつつ、相楽は尋ねた。

「お呼びによって参上しましたが、いかなる御用です」

「おりんから、きいたろう」

と、草堂はいった。

「あのことでしたか！」

相楽はあらためて愕然として、

「あれはほんとの話だったのですか！　ば、ば、馬鹿々々しい。赤報隊のしたことが、あれやこれや罪にあたると――あれは、みんな西郷先生も御承知のことで――」

相手をにらみつつ、

「しかもそれは、草堂さん、あなたもお立ち会いのことではなかったですか！」

「弁解はせん」

恬然（てんぜん）と草堂はいう。

「ともあれ、おはんらのしたことは、ニセ官軍の所業として断罪せんけりゃ、天朝御一新の趣旨が立ちゆかんことになったんじゃ」

半円形にとりかこんだ赤報隊の幹部連から、いっせいに怒りの鼻嵐が吹いた。
「われわれが、ニセ官軍？」
「これまで、官軍東征の露はらいとして悪戦苦闘して参ったものを――」
「狂気の沙汰というしかない！」
相楽がみなを制して、
「草堂先生、われらをみな断罪とは、いったいどうなさろうという御所存か」
と、きいた。
「うん、ここでおはんらをみなひっくくってな、明日でもこの土地で公開処刑しようと思う」
と、草堂万千代は、分厚い無表情で答えた。そして、冗談ではない証拠のように、片手の縄のたばをさしつけて見せた。
「では、これからつかまえるぞ」
同時に、七人の薩摩侍が走って、背後の門の下をふさいだ。
「やむを得ぬ！　こんな理不尽なことで断罪されてたまるか！」
髪逆立てて、相楽がさけんだ。
「やれっ」
相楽が下知するより早く、三人の赤報隊が抜きつれて、
「このイカサマヒゲ！」
「ペテン師め！」

「にせものはどっちだ！」
躍りかかる三本の刀身に、凄まじい勢いで縄のたばがたたきつけられ、思わずおもてをそむけてよろめく三人の肩や胴に、草堂万千代の豪刀が二閃三閃したかと思うと、三人とも虫みたいに身体をまろくしてころがった。
「草堂さん、あんたに刃向かうのではない」
血走った眼で、これも抜刀した相楽総三はしぼり出すように、
「あんたの権道を斬る、何が天朝御一新だ！」
絶叫とともに真っ向うから斬りつけた。
世におびただしい浪士の中でも猛烈をもって知られ、それゆえに御用盗や赤報隊の首領となった相楽総三の鉄をも断つ一撃であったが、その刀はむなしくながれて、彼もまた胴をなぎはらわれ、つんのめっていって地に伏した。
雪の舞いちる中の激闘であった。――いや、激闘ともいえぬ、ほんのまたたきするあいだの斬り合いで、そこに隊長をはじめ四人が手もなく横たわったのを見て、あと四人の赤報隊の荒武者は、われにもあらず逃げようとして、そこに七人の薩摩侍が立ちふさがっているのを見ると、もう争闘の意志を失って棒立ちになった。
「みんなそこに坐れ」
と、その薩摩侍の一人にいわれて、彼らはヘナヘナと雪のとけた地べたに尻をついてしまった。

べつの薩摩侍が、さっき放り出された縄のたばを解きはじめた。

四人をたおして、血は一滴もながれていない。ことごとくみね打ちだ。――そもそも草堂万千代は、この物語のはじめから一人も血をながさせてはいないのである。

薩摩侍たちが、坐ったり倒れたりしている男たちを丸太ン棒みたいに縛りあげるのを見ながら、

「大義親を滅す。……」

はじめて、歎くがごとく草堂万千代はつぶやいた。

四

ちょうど同じ時刻。

和田峠の頂上なので、風があって枯草は吹きなびき、雪はななめにふっている。

その草原に、三人の男がのけぞってたおれていった。いずれも陣笠をかぶり、二人は刀だが、槍を持ったやつも一人いる。

彼らが草の中に沈んだあと、ぬうと立っている三度笠の影に、

「……いや、おそれいった！」

と、少し離れたところで眺めていた浪士風の男がいった。彼は両手に高札らしいものと縄をぶら下げていた。

三度笠は、長脇差(ながどす)の血をぬぐって鞘(さや)におさめ、草の中から掛矢と杭らしい棒をとりあげて、

「さあ、その高札を持ってきておくんなさい」

と、何事もなかったかのように声をかけた。

やがて彼は、道ばたにその杭を掛矢で打ちこみ、高札を縛りつけた。

「布告。

このたび王政復古に相成り、すべて天朝御領と相成り候上は、これまで徳川不仁により百姓どもの難儀少なからざることをふびんにおぼしめされ、以後永代年貢半減と致すべきにつき、天朝の御仁徳をありがたく相心得、安心申すべき事。

太政官」

墨痕りんりと書かれている。

三度笠はいうまでもなく国定龍次だ。山上の雪風に吹かれて、まるで風神(ふうじん)のような姿であった。

太政官の文案を出先で高札に書き替え、これを諸所に立ててまわるのが、偵察や、土地々々のやくざたちの制圧以外に龍次たちが請けおった仕事で、あることで相楽の指図を仰ぎたいことがあって諏訪に帰るべく、先刻この和田峠にさしかかった。そのとき余っていた高札の一本をここに立てようとして、たまたまあらわれた敵が――どこの藩兵か不明だが――これを腕ずくで妨害しようとしたので、龍次が斬りすてた、というなりゆきだ。

「……おや？」

高札を立てておえた龍次は、ふと峠の諏訪湖側の下り坂を見下ろして、片眼をパチパチさせた

が、

「おおっ……おりんじゃあねえか！」

さけんで、かけ出した。片足不自由なので、躍るような姿だ。

彼は、雪にけぶる和田峠を、白馬をたづなでひいた娘がのぼってくるのを見たのだ。

ころがるようにかけ下りてきた龍次を見て、

「あにさん！」

おりんは、シロヤマの足もとに崩折れた。

それを抱きあげて、

「ど、どうしたんだ、おりん！　どうしてここへ？」

と、龍次はゆさぶった。

おりんは眼をあけ、しがみついた。

「あにさん、上州へ帰ろう」

「な、なんだと？」

「あにさんたちはニセ官軍ということになったんだよ！」

「ニセ官軍？」

「いままで赤報隊が中仙道でやってきたことは官軍の名をけがし、ことさら、年貢を半分にする布告なんて許せないとかで……」

「ゆ、許せねえったって……そりゃ、おいらもきいたことだ。あのとき西郷先生は、よか！

って、どなったぜ。……」

「それがいけないんだって……で、相楽（さがら）さんやあにさんを征伐しに、ヒゲ万先生がやってくるんだよ！」

いちど笑おうとして、

「おれを、せ、征伐？」

龍次はすッとんきょうな声をはりあげた。

「うッそお！」

「うそじゃないよ。そのことを知らせようとして、あたい、ヒゲ万先生に短銃で撃たれて、その弾はまだこの左肩の背中に残ってるはずよ！」

こんどは、うッそお、とさけばなかった。龍次はおりんのこの世のものとは思われない顔色から、それがほんとうのことだと直感した。

ものもいわず――雪の中に、また同志の侍がそばに寄ってきたにもかかわらず――彼は、自分の手でおりんの片肌をぬがせ、背中をのぞいて、

「ああ！　こりゃ、ひでえや！」

と、大声をあげた。

「おめえ、こ、この身体で京から信州へ走ってきたのか。……それを、ヒゲ万先生がやったって？　し、し、信じられねえが、こ、この傷を見りゃ信じねえわけにゃゆかねえ」

ふるえ声でいった。

「そ、そのヒゲ万が追っかけてくるってんだな」
「そう」
「もう諏訪まできたか」
「それはわからないけれど……いままで追いつかれなかったのがふしぎみたい」
龍次はがばと立ちあがろうとした。
「あっちへいっちゃいけない！」
おりんは、その手をつかんでひきとめた。
「だって、ヒ、ヒゲ万先生に会ってきかなきゃならねえ。……」
「いいえ、きいてもダメ。そっちへゆきゃ死ぬばかりだよ。……あたいがこの身体で、何のために馬でかけてきたのかわからないのかえ？」
「しかし」
と、いったとき、眼を見張っていた浪士が、
「国定の、何にしてもこのおりん坊を手当てせずばなるまいが」
と、口を出した。彼は川崎忠兵衛といい、神宮の森でもいっしょに住んだことのある男であった。
「おりん坊は虫の息じゃないか。とにかく和田宿へひき返そう、あそこには陣中膏薬もおいてあり――おう、そうだ、医者あがりの同志関本外記もおる。……」
「それじゃ」

龍次はうなずいて、
「おりん、し、しっかりしろ、では、ともかく峠の宿場へ戻るぜ。……」
龍次は、さっき高札を杭に縛った縄の残りを探し出してきて、おりんを背負い、くくりつけた。そして川崎にシロヤマをひかせて、和田宿のほうへ下りていった。……
和田宿は、峠を東へ下りる途中の山中の村落だが、それでもはたごは大小合わせて三十軒ある。
その中の、一応本陣としたいちばん大きなはたごに龍次たちは帰った。
元医者だったという浪士に、手当てともいえない手当てをさせる。これまでの中仙道で、いちどもうめきをもらさなかったおりんが、はじめて苦痛の声をあげはじめた。
「あにさん、抱いてて……」
虫のような声でいうおりんを、龍次は坐ったまま抱いた。
気丈なおりんが、童女のように彼の手をつかんで、
「いっちゃあ、いやだよ、どこにもゆかないで……」
と、あえぐ。
「だ、大丈夫だ。安心しな、も、もう離しゃあしねえ」
まんじりともしない一夜がすぎて、白い朝がきた。
夜じゅう、うめいていたおりんも、明け方から眠りに落ちた。
朝。――そのなかば冷たいような身体をそっとはずし、龍次は立ちあがり、手甲きゃはんを

つけ、長脇差と三度笠をつかんで部屋を出ようとした。
「あにさん……」
おりんの声が背後から聞こえた。
「やっぱり、ゆくの？」
「ああ」
龍次はうろたえて、
「ど、どうもヒゲ万先生のことが気になるからさ」
「とめたって、あにさんはゆくだろ。いままでだって、いつもそうだった。もうとめやしないよ」
と、おりんはいった。
「でも、決して死なないで……」
「馬鹿いっちゃあいけねえ。おいらが死ぬいわれがねえ」
龍次は笑った。
「それより、おめえこそ元気出して待っててくんな。おいら、下の諏訪へいって、ようすを探ってすぐに帰ってくる。下の諏訪まで五里半、往復十一里。……馬はヘタだが、シロヤマを借りてゆく。峠があっても、夕方までにゃ帰ってくらあ」
「うん」
おりんは、可憐に、素直にこっくりして、

「そして、こんどこそは、いっしょに上州へ帰ろうね」
「上州へ？　へへっ、大前田村へ帰ったら、親分は驚くだろうな。なにしろ、片眼でこの足、顔半分はやけどで、髪はマゲもゆえねえザンバラ髪だ。……いってえ、何てえことになったんだろう、と、おいらでも首をひねらあ」
「いいえ、話をきいたら、おとっつぁんはほめてくれるよ、それこそ渡世人の晴れ姿だって。……あたいも、そう思ってるよ――」
「ありがとう、おめえにそういってもらや、おいらもありがてえ。……それじゃ、ちょっくら、いってくるぜ！」
龍次はその場で、三度笠をかぶって、出ていった。

五

「布告。
偽官軍。赤報隊相楽総三以下八名。
右の者ら、御一新の時節に乗じ、官軍先鋒と偽り、東山道において諸藩に強請し良民に狼藉に及び、あまつさえ年貢半減などあらぬ空言をもって百姓をあざむき、その悪業数うるにいとまあらず。よってみせしめのため、三月三日巳の刻、信州下の諏訪磔田において誅戮すべきにつき、東山道あまねく諸民に知らしむるもの也。
大総督府」

この高札はここばかりではなく、きのうの夕方から、諏訪湖をめぐる村々に突っ立てられた。

で、そこに住む人々は、この三月三日、右に書かれている下の諏訪の郊外、友之町矢木崎という湖畔のこの場所に集まって、一帯泥んこの沼と化していた。

昔ここに仕置場があったので、磔田と呼ぶ。——

ここに粗末な竹矢来が組まれた。組んだのは、その布告を読んだ四周の松本、高島、上田、小諸などの藩兵たちで、このときに至ってやっと真の官軍のために協力したいと申し出てきて、草堂に許されたのである。群衆たちを警戒して番人として立っているのも彼らであった。

竹矢来の中は、きのうの夕方降って薄くつもったままの雪が、ここは踏み荒らされないで、昨夜来の寒さに凍りついて、巨大な銀盤をなしている。

いま、雪こそ降っていないが、依然として暗い雲が、冷たい湖の上に重なっていた。

巳の刻——午前十時。

「天地に正気あり
雑然として流形を賦さる
下はすなわち河岳となり
上はすなわち日星となる。……」

こうだれか吟じている声は、はじめしかし聞いている者もなかった。

銀盤の中央あたりに、八人ならんで坐らせられている赤報隊の幹部たちが次々に斬首されるのを見て、群衆のあげるどよめきが、それをかき消したのだ。

が、三人目あたりからそのどよめきは鎮まり、次第に凍りついていった。

彼らはきのうひそかに殺されてはならなかった。天朝の正義を知らせるため、その処刑は民衆の目の前でなければならなかった。

「あるいは遼東の帽となり
清操は氷雪よりもきびし
あるいは出師の表となり
鬼神も壮烈に泣く。……」

吟じているのは、一番はしに坐っている相楽総三だ。

相楽は、かつて彼も従軍したことのある水戸天狗党の若き首領藤田小四郎が、万里の行軍の果てに志破れて斬首されたときに歌ったという、南宋の忠臣文天祥の「正気の歌」を、朗々と吟じつづけているのであった。

斬り手は、八人の薩摩侍であった。

一人一人、銀盤に鮮血をまいて首がころがり、胴体がつっ伏してゆき——そして、最後に相楽総三の番がきた。

ひげの能面みたいな顔で、床机から草堂万千代が立ち、相楽のうしろに歩いていった。

鞘をはらった刀身に、すでに自分の分担を終えた薩摩侍がひしゃくで桶の冷水をかける。

ちらっとそれを見たが、すでに別世界にいる人間と見たらしく、何の語も吐かず、相楽は歌う。——

「悠々としてわが心は悲しきも
蒼天いずくんぞきわまりあらん。……」
「チェストー！」
鉄のごとき声とともに、草堂の刀はひらめき、詩の声と相楽総三の首は断たれた。
人は知らず、この草堂万千代の刀が血ぬられたのはこれが始めてであった。――おそらく彼としては、これはせめてもの武士の礼のつもりであったろう。
処刑者の声のみならず、四界すべての物音が絶えたのも一息――突如、その一角で、ざっと水音があがった。

六

刑場は湖に沿うて作られてあったので、竹矢来のない一面があった。――その冬に張った氷がまだ浮かんでいるようなその湖の方角から、一頭の白馬が、矢来のふちをまわって刑場にはいってきたのを人々は見た。
白馬には三度笠の男が乗っていた。
それが、刑場のまんなかあたりまで進んでゆくのを見ながら、群衆はもとより警護の藩兵、斬り手の薩摩侍たちまで、しいんとして眼も口も凝固させているばかりであったのは、闖入してきたものの方角があまりに意外で、かつその白馬と三度笠という組み合わせがあまりに異風であったばかりでなく、その人馬そのものの発する凄惨の気が、すでにこの世のものならぬ

幻妖の感を起こさせたからであろう。
彼は馬から飛び下り、片足をひきずって歩き出した。
「やっぱり、そうだったか。……」
という、風の吐息のような声をきいたものがあったか、どうか。――
数十秒、彼はそこに、身と首を異にして横たわった八つの屍骸をながめてゆき、相楽総三の皮肉に笑っているようなふしぎな首にしばらくとめた眼を、草堂万千代に移して、
「ヒゲ万、だましたな」
と、いった。
低い、嗄れた声であったが、これはだれにも聞こえた。
「龍次、おはんはやはりきたか」
さすがに草堂万千代の声は沈痛であった。
「お前に説明は難しいが、これは大義のためにやむをえんことじゃった」
「な、なにをいってやがる、てめえは――相楽さんだけじゃあねえ、おいらも――はじめからおいらを道具あつかいにしてたんだ」
一声の反論も許さない満身の怒りの声であった。
「その上、よくもおりんを撃ちやがった！」
草堂万千代の眼がピカリとひかったが、その光はかすかにゆれていた。あきらかに心を刺されたのである。

が、次に草堂はだだッ子をなだめるようなふてぶてしい笑いを浮かべて、

「それではおはんにも弁解せん。ただ……こんどのことは、やくざ者のおはんにゃ関係なか。たのむ、どこかへいってくれ」

と、いった。

「関係はある。おいらはおめえよりほんものの、て、天朝さまの助ッ人だい」

龍次は絶叫した。

「ヒゲ万っ、てめえは人間の仁義にはずれたやつだ。と、渡世人の仁義にかけてたたッ斬る！」

その腰から、小松五郎義兼がほとばしった。一方、草堂の豪刀は、相楽斬首のあと血ぬられたままその手にぶら下げられている。

吹きなびくザンバラ髪の半顔は、火風のため暗褐色に染まって、その中にひかる一つ眼を見て、湖からの風のせいではなく、草堂万千代の髪もそそけ立ち、

「そこまでいうなら、やむを得ん。龍次……こんどこそは草堂万千代、本気で相手になってやるぞ」

と、いった。

かくて二人の刀は相対した。……

思え。――だれがこのような終局を予測したろうか。

が、天地のだれよりもこれを大意外事としたのは、国定龍次自身であったろう。

人は死ぬにあたって、おのれの全生涯を一瞬によみがえらせるという。龍次の頭にも、ふしぎにこのとき、なつかしいヒゲ万先生との同行二人旅の光景のいくつかが明滅した。……

ただ一つの眼から、涙が滝のようにながれ落ちている。眼だけではない。鼻も口も耳もわなないている。いや、全身がわなないている。彼は全身全霊で哭いているのであった。

「ゆうどう……」

それは声というより、カタカタとあごが鳴る音であった。

が、たとえこの呪文を発したとて、彼はいままでこの師に勝ったことはない。利根の河原で、また犬吠埼の断崖の上で――いや、その後の甲州、駿遠参、さらに伊勢の森の中で、無数に稽古をつけてもらうたびに、いつも犬ころのごとくたたき伏せられてきた弟子であった。

ましてやいま、龍次の片眼はつぶれ、片足は傷つき、半身のやけどは完全に癒えてはいないのだ。

「からくっ」

号泣としか思えない声とともに、龍次はつんのめるように片足だけで地を蹴って突撃していた。

二人の身体は飛びちがった。

ばさ！　という音がした。

二間も先で、血しぶきをあげて、龍次はまるくなってころがっている。

ああ無惨、身体のみならず、龍次の左腕は肘の先から離れて、さらに一間も遠くの地上へ飛

んでいた。
が、彼は、地上で一回転したあと猛然とはね起きて、もとの位置に立っている草堂万千代のほうをふりむいて、
「まだだっ……来いっ」
と、わめいた。
草堂万千代は、たしかにもとの位置に立っていた。しかし、ふりむかなかった。その両腕とその先の刀身は、その直前の龍次のいた方角へ、ながく空中にのびたままであった。
数秒おいて、その脇腹から、ザ、ザーッと鮮血が奔騰し、身体をねじって、どうと彼は倒れた。
龍次もまた片腕から血の滝を落としつつ、そこに棒みたいにつっ立って、じいっと地に伏した相手を見つめていた。
草堂万千代がかすかに首をあげるのが見えた。
「先生、す、すまねえ。え、えれえことになっちゃった」
と、龍次が声をかけた。
みるみる顔を藍色に変えつつ、草堂はニタリと笑って、
「チェストー！　……龍次、おはんのほうが強か」
と、いった。
彼は故意に斬られたのではない。龍次の片腕を斬り落としたくらいだから、彼はまさしく本

気だったのである。彼をそこまで本気にさせたのは龍次の怒りに対する恐怖からであったが、同時に彼を破綻させたのも同じ心因から発する動揺のゆえであった。
「いいから、早くゆけ。……」
それまで、まるで呪縛（じゅばく）されたように沈黙して眺めていた四周から、そのときはじめて波濤のようなうなり声があがった。
七人の薩摩侍がかけ出した。
龍次はシロヤマのあぶみに足をかけていた。
「追うな……追っちゃいかん！」
と、地上から首をもちあげて、ヒゲ万が声をかけた。
ふりむいて四人が立ちどまったが、三度笠が馬を走らせ出すのを見ると、三人が抜刀してなお追いすがった。
銃声が三発相つぎ、三人はもんどり打って倒れた。
地上から短銃をあげているのは、草堂万千代であった。そして彼は、龍次をのせた白馬が、竹矢来の向こうの湖を、しぶきをあげつつ横にかける影を見送ると、ガクリとまた首を落とし、そのまま動かなくなった。……

七

切られた左腕は、肘の上から布で縛ったが、和田峠を越えて和田宿に帰ってきた国定龍次の

凄まじい姿を迎えて、赤報隊のめんめんは、そのわけをきく余裕も失って、ただ茫然と見まもった。

「おりんはどうしましたえ？」

龍次はまずきいた。一息おいて、

「死んだ」

と、一人が答えた。

「巳(み)の刻に」

——半刻ほどのち、龍次はおりんの身体をシロヤマの鞍に乗せ、綱で縛りつけて、はたごを出た。その間、一語も口をきかない。

下の諏訪で何が起こったのか、赤報隊はこれからどうなるのか、尋ねたいにもその口を凍りつかせるような龍次の顔色であったが、それでも一人が、やっとわれにかえって、

「これから、どこへ？」

と、きいた。

「上州へ帰(けえ)る」

と、龍次は答えた。

「上州へ？」

「その身体で？」

「それまでに、まだ敵はおるぞ。……」

口々に浪士たちはいったが、龍次はそれっきり、また口を結んでしまった。

暗い雲は、とうとうまた雪片を落しはじめた。

龍次は馬をひいて、ガックリ、ガックリ、和田峠を下りてゆく。——山はもう夕暮れだ。

白樺の林に雪は舞う。カラ松の林に雪は乱れる。白い鵞毛(がもう)は天をうずめ、地をうずめてゆく。

……真っ白な世界の中で、彼はぶつぶつつぶやいていた。

「し、死んじゃあいねえ。ひとの死ぬことばかり心配(しんぺえ)してたおりんが、自分がこんなところで死ぬものか。……上州へ帰(けえ)りゃ、き、き、きっと生き返る。……」

口が、幼児の泣く顔そっくりに、四角になって、わなないている。

「おめえ、上州へ帰(けえ)ろう、帰ろうと、なんどもいったっけなあ。帰(けえ)りゃ、まもなく赤城山は春だ。……」

風が吹き、片側の雪をかぶっている大竹藪の数本が、雪をはねのけて立ちあがり、あざやかな緑をゆすった。

ふっと、おりんの声が耳たぶをながれてゆく。——

「あにさん、あにさん、ごらんよ、いま掘ったばかりだというのに、タケノコに花びらが、もう雪のよう」

赤城山の見える大竹藪の中で春光にゆれる、明るいおりんの顔と声が浮かんだ。

龍次はふりかえった。馬の鞍にダラリと垂れたおりんは、白く冷たく、凍った花のように黙ってゆれている。

「おいらのこんな恰好を、おめえは、渡世人の、は、は、晴れ姿だといってくれたなあ。その渡世人の花嫁の晴れ姿も、きっと栄五郎の親分に見せてやるぜ。み、見せてやらずにおくものか。……」

龍次の一つ眼は、燐光のようにまた光り出した。

道はまた上りにかかった。和田峠は次の宿場まで下り一方ではない。いくつかの坂が起伏しているのだ。そして、そのはるかかなたには信濃と上州をへだてる重畳（ちょうじょう）たる山々がある。越えてゆくべきは幾山河（やまかわ）か。

が、半顔を焼かれ、片眼で片腕、片足をひきずり、ひきずり、「晴れ姿」の遊侠児は、ものいわぬ恋人を乗せた白馬を曳いて、霏々（ひひ）としてふりしきる春の雪の中を、一歩、一歩、赤城山へ向かって、けんめいに歩いてゆくのであった。

（完）

解説

細谷正充（ほそやまさみつ）（文芸評論家）

いきなり問題提起をしてしまおう。なぜ、山田風太郎の時代小説には、渡世人を扱った作品が少ないのだろうか？

いやはや、これが本当に少ないのだ。長篇では『忍法笑い陰陽師』に国定忠治が、また『武蔵野水滸伝』では国定一家を筆頭に博徒の面々が重要な役所を占めるが、あくまでも脇役。短篇に目を転じても、本書の原型ともいえる「大谷刑部は幕末に死ぬ」（本書にも、ちらりと顔を見せる千乗坊が主人公）と、既に本文庫に収められた「長脇差枯野抄」ぐらいしか思いつかない。正史が斬り捨てた歴史の影の部分を伝奇的手法で描く風太郎作品の住人として、アウトローである世渡人がもっと大きな地位を占めても良かったのではないか。だが、作者は渡世人に目を向けなかった。なぜだろうか。ひとつの答えとして考えられるのが、作者のオリジナリティと作品世界へのこだわりだ。

時代小説の中で、渡世人を主人公として物語を俗に〝股旅物〟と呼ぶが、これは「瞼の母」「一本刀土俵入り」「沓掛時次郎」などにより長谷川伸が開拓したジャンルだ。股旅物などというと古臭く感じる人もいるかと思うが、これらの物語は単純な勧善懲悪ではなく、さまざまな

感情に苦悩する人間たちのドラマとなっていて、現在でも読みごたえがある。だが、こうして造りだされた股旅の世界はやがて形骸化し、義理と人情が幅をきかす、日本の風土に根差したきわめてドメスティックなものへと変貌していくのであった。

この義理と人情に彩られた世界は、どちらかといえば作者が嫌悪するものである。だから、作者が渡世人を主人公とするならば「長脇差枯野抄」のように、日本人好みの風景に疑問を投げかける役割を担うためだけの存在となるのは当然といえよう。そして何よりも〝股旅物〟なる名称までついた、先人の切り開いたジャンルを追随することを、作者の矜持が許さなかったのではないだろうか。なんといっても忍法帖や明治物という、それまでなかった作品世界をたったひとりで造り上げてきた作者だ。オリジナリティに対するこだわりが、半端ではないことは間違いない。

だがしかし、デビューから約四十年を経て、作者は渡世人を主人公にした長篇を書き始めた。そこにどのような意味が込められているか。それを考察する前に、まずは本書の内容について触れておきたい。

昭和五十九年八月三日から六十年九月一日まで地方新聞で連載された、この長大な物語は、上洛を目指す水戸の攘夷集団・天狗党の眼前で、主人公が天狗のひとりをぶった斬るところから始まる。行軍の道程を変えてくれと頼み、叩かれそうになった親分の大侠客大前田栄五郎を守るためであったが、なんとも無謀な行動だ。この命知らずの若者こそ国定龍次。やくざ者の鑑として偶像視される、国定忠治の忘れ形見である。兄の千乗坊、そして薩摩浪人の草堂万千

代との出会いにより、天狗党とのいざこざは丸く収まった。だが、その平穏もつかの間、村に帰った龍次は栄五郎を縛ろうとした八州取締出役を斬り、ついに草鞋を履くこととなる。

修行の旅だと勇躍飛び出す龍次。そして栄五郎の養女で龍次と恋仲のおりんも、彼を見守るべく旅立った。そんなこととは、つゆ知らぬ龍次。江戸の町火消し新門辰五郎の元に草鞋を脱ごうとして、旗本強盗青木弥太郎一味とのいざこざに巻き込まれてしまう。この時、青木一味にいた万千代と再会。一件がかたづいた後、青木を見限った万千代は龍次の用心棒を買って出る。かくして龍次とヒゲ万先生こと万千代、そしておりんの三人による道中が始まるのだった。

その道中で遭遇する事件も、総州で二代目飯岡の助五郎から嫌がらせを受け、おりんの機転に助けられたり、甲州で黒駒の勝蔵に利用され、たった二人で清水の次郎長一家に立ち向かうはめになるといった具合に、ムチャクチャなもの。無軌道無鉄砲な龍次の活躍が、なんとも痛快だ。

だが、龍次の旅はヒゲ万先生に呼ばれて京の地を踏んだときから、しだいに様相を変える。天朝の助っ人として、任侠を貫こうとする龍次。その行動の果てに思いもよらぬ悲劇が待ち受けていることを、彼はまだ知らなかった。

さて、ここで再びいっておく。なぜ、作者はそれまでほとんど扱わなかった渡世人を主人公としたのか。その謎を読み解く鍵となる長篇として『魔群の通過』を挙げたい。

本書の冒頭は水戸天狗党の場面から始まるが『魔群の通過』は、その天狗党の筑波山での決起から、上洛寸前の敦賀で壊滅するまでの行程を描いた作品だ。水戸天狗党の悲劇を正面から

見据えた、風太郎作品としては異質の内容だが、幕末という時代を俯瞰するために必要な時間と空間を描くのに、天狗党という存在は、打ってつけだったのではないだろうか。

　昨日勤王、明日は佐幕ではないが、幕末はほんのわずかの間に、人々の思想や立場がコロコロ変わっていった。こうした状況を描くには、ある程度のタイム・スパンが必要不可欠である。さらにこの当時の日本は、藩によっても、それぞれの政策や行動がまったく違っていたのである。だから日本の全般的な動向を浮き彫りにするためには、幾つかの藩に登場してもらわなければならない。こうした日本の幕末を全体的に捉えようとしたとき、筑波山から京都の手前までの空間を時間をかけて縦走（迷走？）した天狗党は、まさに格好の題材だったのである。

　だが、扱うテーマの性質上、この物語は武士階級の話に終始してしまった。もちろん作者はラストにちょっとした仕掛けを加え、武士のドラマから人間のドラマへと変転させて締めくくってはいる。しかし、それでも庶民の視点が抜け落ちてしまった感はいなめない。誤解のないようにいっておくが、これはないものねだり。そんなことは、作者がもっとも良く承知しているだろう。それでもあえて、侍の視点に絞って、幕末という時代を捉えたのである。だがそれでも、市民の立場から幕末を俯瞰したいと思う思いが残ったのではないだろうか。そこで改めて書かれたのが、この作品なのである。

　しかし、いくら崩壊しつつあるとはいえ、まだ厳格な身分制度が存在している時代だ。普通の庶民が時間と空間を丸ごと捉えるような旅をすることは不可能といえよう。この問題点をクリアするために登場したのが旅人国定龍次なのだ。渡世人ならば、さまざまなくびきに捕らわ

れることなく、日本を歩き回ることができる。そんな身分制度の埒外にいる渡世人こそ、まさに侍の対極にいる存在なのだ。だからこそ、作者は渡世人を本書の主人公に据えたのであろう。

　もっともこの当時、時代を動かしていたのは、まぎれもなく侍たちである。侍とは住む世界の違うはずの龍次たちも、いつしか時代のうねりに引きずり込まれていく。その流れの水先案内人となるのが草堂万千代だ。天狗党の一員。旗本強盗の一味。やくざの用心棒と、さまざまな顔をもつ万千代だが、物語の後半で真の姿を明らかにするや、龍次とおりんを、思いもよらぬ運命へと導くのだ。

　ささいなことだが、草堂万千代という名前に注目。作者はよく皮肉の効いた名前を登場人物に付ける（万千代が使う偽名の厚井宝塔など爆笑ものだ）が、そうした洒落っ気を抜きにしても、興味深い点がある。まずこの名前、騒動は千万の代までと読めなくもない。なかなか意味深長だ。さらに草堂を草動――草が動く――としてみれば、幕末を駆け抜けた〝草奔〟を連想させられるだろう。この名前から草堂万千代という男のいる立場と思想が見えてくるのではないだろうか。

　万千代は何度も、侍を昼の世界の住人、やくざを夜の世界の住人だと龍次に語る。そして長州征伐に赴く幕軍を見て、

「これは昼の世界の戦いじゃて。（中略）おはんたち遊侠の徒も、だましっこしたり、なぐりこみをかけたり、死に物狂いのいくさをやっちょる。これは夜の世界の争いじゃて。――慶応

元年、同じ地上でな、虚々実々、似たようなことをやって、しかも両者まったく関係なかとこが面白か——」

という。しかし万千代自身は、龍次の気性を愛し彼の用心棒を買って出た。龍次が天朝の助っ人を引き受けたのも、そんな万千代を慕えばこそのことだ。この二人の関係は、本来交わるはずのない昼の世界と夜の世界が手を取りあった、幸福な奇跡といえるだろう。昼と夜が交じりあった薄明こそが、真の夜明け前の姿であるべきなのだ。だが、夜の世界の住人でありながら、昼の世界に身を投じた龍次をまっていたものは、いったい何だったのだろうか。

本書は、旅人という名の庶民によって綴られた、哀切きわまりない幕末史なのだ。読者の心に龍次の旅の足跡が、いつまでも残ることを期待しつつ、この解説の筆をおくことにしたい。

本作品は、講談社文庫（平成元年五月刊）を底本としました。

〔お断り〕

本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。（編集部）

特選時代小説

旅人（たびにん） 国定龍次（下）

著　者　山田風太郎

発行者　櫻井道弘

発行所　廣済堂出版

〒105　東京都港区芝3-4-12

電話　03(5445)1202(営業)

03(5445)1204(編集)

振替　00180-0-164137

印刷所　廣済堂印刷株式会社

〈編集担当〉伊藤秋夫

ISBN4-331-60608-2 C0193